

冬雷二〇二二

作品年鑑・合同歌集

冬雷短歌会



冬雷二〇二二

作品年鑑・合同歌集



冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集 目次

## 冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集

## 〈冬雷集〉

|          |    |         |     |
|----------|----|---------|-----|
| 青木 初子……  | 8  | 櫻井 一江…… | 61  |
| 赤羽 佳年……  | 12 | 桜井美保子…… | 65  |
| 赤間 洋子……  | 17 | 嶋田 正之…… | 70  |
| 天野 克彦……  | 22 | 高橋 説子…… | 75  |
| 有泉 泰子……  | 26 | 高松美智子…… | 80  |
| 故池亀 節子…… | 30 | 橘 美千代…… | 84  |
| 江波戸愛子……  | 34 | 中村 晴美…… | 89  |
| 大塚 亮子……  | 39 | 橋本 文子…… | 93  |
| 大山 敏夫……  | 43 | 水谷慶一朗…… | 97  |
| 黒田江美子……  | 48 | 森藤 ふみ…… | 101 |
| 兼目 久……   | 52 | 山口 嵩……  | 106 |
| 小林 芳枝……  | 57 | 山崎 英子…… | 110 |

吉田 綾子…… 114

## 〈作品一〉

|         |     |           |     |
|---------|-----|-----------|-----|
| 姉川素枝子…… | 120 | 田中 祐子……   | 169 |
| 飯嶋 久子…… | 124 | 田端五百子……   | 173 |
| 飯塚 澄子…… | 128 | 長尾 弘子……   | 177 |
| 糸賀 浩子…… | 132 | 永光 徳子……   | 181 |
| 稲田 正康…… | 136 | 野村 灑子……   | 185 |
| 井上 菅子…… | 140 | 浜田はるみ……   | 189 |
| 樗木 紀子…… | 145 | 林 美智子……   | 193 |
| 倉浪 ゆみ…… | 149 | 古嶋せい子……   | 197 |
| 齊藤トミ子…… | 153 | ブレイクあずさ…… | 202 |
| 正田フミエ…… | 157 | 本郷 歌子……   | 206 |
| 鈴木やよい…… | 161 | 町田 勝男……   | 210 |
| 高橋 耀子…… | 165 | 村中 美江……   | 215 |
|         |     | 松中 賀代……   | 219 |
|         |     | 伊澤 直子……   | 224 |

## 〈作品二〉

伊澤 直子…… 224

塚本 節子…… 401

谷田 律子…… 397

立石 節子…… 393

高藤 朱美…… 389

佐藤 幸子…… 385

梶尾 栄子…… 380

笠岡 文子…… 376

奥山 清子…… 372

井上 鈴子…… 368

吉村 昌子…… 362

横田 晴美…… 359

山本 述子…… 355

三好 規子…… 351

松本 英夫…… 347

〈作品三〉

津田美知子…… 405

藤田 英輔…… 409

牧 恂子…… 413

水澤タカ子…… 417

三村 幸男…… 421

安川 敏子…… 424

山崎 猛…… 428

作品から観る「冬雷」の一年  
桜井美保子…… 432

特別作品・今月の30首  
…… 438

スマホの写真一葉・短歌二首  
…… 444

あとがき  
…… 大山敏夫

〈表紙絵／柿・嶋田正之〉

石渡 静夫…… 228

稲津 孝子…… 233

井上 法子…… 237

井上 槿子…… 240

卯嶋 貴子…… 244

内垣 米子…… 248

大塚 照美…… 252

大野 茜…… 256

小嶋 知葉…… 260

川上美智子…… 264

川俣美治子…… 268

神津早智子…… 272

児玉 孝子…… 275

小林 貞子…… 279

齋鹿ミヤコ…… 283

早乙女イチ…… 287

佐藤 靖子…… 290

鈴木 計子…… 294

須藤 紀子…… 298

高田 和子…… 302

戸部田とくえ…… 306

豊田 伸一…… 310

永野 雅子…… 314

中村 哲也…… 318

西村 邦子…… 322

早坂富美子…… 326

藤田 夏見…… 330

本間志津子…… 334

益坂 順子…… 338

松居 光子…… 343

冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集  
〈冬雷集〉

## コロナ禍

コロナ禍に会へざるままの二年半友らも老いて生活変はる  
 病名はそれぞれなれど同級の友らも夫の体調憂ふ  
 義父看取り肩の荷降りたる義妹の何悩みしか眠れぬ眠れぬと  
 愛犬の死して間のなしペットロスと考へたくなし義妹の自死  
 天袋の三十年分の家計簿の処分を決める開かぬままに  
 若き日はこまごま書きたる家計簿の一冊重し生活の証  
 ペンタスの季を過ぎポツポツ芽をだせど花は望めぬ日の暮早し  
 時を過ぎ芽を出すペンタスひとつ鉢に纏め育てる日向に置きて  
 秋に向かひペンタスの苗は育たざり寒き朝は葉の萎えてをり  
 妻吾の顔を見つつも笑みのなし面会の後ドドド疲れる  
 独り身に子の無きあなたの逝くを知る甥の方よりの喪中欠礼に  
 コロナ禍にOB会の開かれず会へざるままに同期逝きたり  
 OB会の発展に人脈生かしつつ幹事勤めしあなたありがたう  
 手術後の二年目検査CTに異常のあらずひとまづ安心  
 三月前の血液検査の結果より数値よくなる食欲の出で

あおき はつこ  
 青木初子 (神奈川県)

独り居に部屋のなかなか温もらず朝の陽の射す九時待ち遠し  
 この年の寒さは暖房手放せず灯油の減りの早さに驚く  
 配達を頼む度ごと灯油の値激しく上がる春の早や来よ  
 花鉢の底より太き根を伸ばす庭に似合はぬナナカマドの木  
 姑の鉢に植ゑにしナナカマド新芽を摘みても摘みても育つ  
 ナナカマドの鉢より出でし根を切りぬ動かぬ鉢の底見えぬまま  
 鉢底より庭土に伸ばす根を切りて小さき鉢に移すナナカマド  
 腹部大動脈瘤の弟の気のつかぬまま身の内に育つ  
 腎臓の検査画像に予想せぬ腹部大動脈瘤写ると  
 知らぬ間に育ちてゐたる腹部動脈瘤の手術を優先  
 三回忌の父の法事の予定ありて動脈瘤の手術を急ぐ  
 爆弾を日にち抱へるやうと動脈瘤のあるを知りしより  
 弟の動脈瘤の手術の日コロナ禍により付き添ひは一人と  
 日にちに感染者減り幼どちと三年振りの待ち合せする  
 外国人観光客の来る前にと急ぎ決めたり十日後のランチ

感染者日毎に増える面会の今なら叶ふ予約を急ぐ  
 介護五の夫との会話は成り立たず我のみ喋る一方方向  
 談話室の天井のみを見つめある夫はそれでも面会に来てと  
 我のみが喋る面会途切れたる会話の合間夫は寝てゐる  
 迷惑をかけてはならぬ好物を食べさせたいけど誤嚥が怖い  
 超音波の肝臓検査も無事終はり次の検査まで心のやすし  
 月刊誌の購読料を振り込みぬ三年程は生きる気ありて  
 月づきに届く冬雷と月刊誌読むを楽しむと月早し  
 巣を守り飛びてゐるらし木屋の木に近づけば蜂の寄り来る  
 ホバリングしつつ威嚇をする蜂より身を低くしてその場離れる  
 第七波コロナウイルス流行りみて夫との面会長く叶はず  
 筋肉はどンドン委縮するらしく飲み込む力も急に弱まる  
 スムーズに形あるもの飲み込めずとろみ食へといふ指示を諾ふ  
 コロナ禍に面会叶はず七十八歳の夫の生日我が家に一人  
 介護五に施設の夫の意志確認手だてのあらずコロナ禍の中

長雨に寒きこの夏繰返し三度目ひらく玉すだれの花  
 一周忌采配したる義妹の二か月経ぬ間に自死を選びぬ  
 庭隅の葉を落したる白木蓮隣の二階の灯り明るし  
 下枝を昨年落したる柃に艶ある新芽の緑の光る  
 春先の新芽の虫に食はれざる柃に久の白き花咲く  
 植木屋の手入れの進む隣庭今年は檸檬の生り年らしい  
 五十年暮らしし妻との認識のあるのかないのか瞳に読めず  
 都心より積雪少なき朝なれど車道凍てをりきらきら光る  
 自動車の通過の後も轍あと融けずに光る今朝の寒さは  
 検査予約朝九時までに病院へ足を信じて自転車を引き  
 順調に葉の育ちあるプロッコリー寒さを凌ぐ袋を掛ける  
 味噌汁の具に丁度良きはうれん草一夜にあらざ根のみを残し  
 プランターの異常な寒さに凍てる土掘りて根まで喰ふはうれ  
 ん草の  
 ニセンチの編目のネットの掛けてある小かぶ日にち数の減りゆく  
 食害の吾の防戦追ひつかずチューリップの球根掘られ皮散る  
 薩摩芋に隠す殺鼠剤食べたるらし四、五日の後静かさ戻る  
 食べるもの寒さに足らぬか庭に置きしネズミの骸ひと日経ず消ゆ  
 雪積る予報に花の開きある庭の水仙八本を切る  
 水仙の香りの居間に満ち満ちてストーブを消す湯も沸きてゐる  
 九つのクッションを八つに減らしみて一つ中身に歪を直す  
 クッションの中身のパンヤ色変はり弾力あらねど八つに詰め込む  
 ハクビシンの忌避剤扉の際に撒く臭ひ半日家の中まで  
 三日ほど心おきなく留守をするハクビシン避けの忌避剤撒きて  
 小き鉢に移されすぐにナナカマド新芽出したり盆栽にせむ

麻酔より目を覚ましたる弟を確かめ妹の役目の終はる  
 退院の七日遅れてひと月に気候の変わり暑き日続く  
 銀座にも行きたいけれど感染のリスクを負ふを強くためらふ  
 同じ日に植ゑたる茄子の苗二本育つ早さの違ふそれぞれ  
 種の同じ茄子苗植ゑしがプランターに目に見えて育つ一本のみが  
 プランターの茄子苗一本育ち早く共に植ゑたる苗を弱らす  
 グロリオサ今年はまだかと家の前を散歩に通る人が聞きをり  
 細きまま丈高くなる百合の莖蕾の育ち弧を描きをり  
 バス電車思ふにまかせず自転車に施設に向かふ晴れの日選りて  
 友よりのスマホの動画に顔と名を直ぐには想ひ出せざり夫は  
 一片の雲のあらざる夏の今朝日射しの強く刺すと痛し  
 免許証持たざる我の頼るのは自転車漕ぐ丈夫なる足  
 夕方まで気温の下がる気配なく午後の練習行くをためらふ  
 冷房の設備あらざる体育館慣れてはをれど別格酷暑は  
 片道に四十分のバドミントン練習休む酷暑の今日は  
 台風と雪の日の他は休みしこと記憶にあらざバドミントンは  
 高齢者は外でのスポーツ中止せよ酷暑日の今日テレビラジオに  
 庭に生る茄子の育ちを待ちながら献立決める二日の後の  
 繁りたる金木犀の何処かに巣のあるらしく蜂の出で入る  
 やみくもに攻撃はせず蜂の羽震はす音の高まり怖し  
 殺虫剤回りに撒きつつミニマトを手早く摘み取る蜂の来ぬ間に  
 手術より二年半過ぎ三月毎の血液検査にまだ異変なし  
 「青木さん幸運ですね」二年の間に再発多しと我の病は  
 本人にあらずと夫の銀行の預金下ろせず我は妻なり

## 四季をりをりの歌

朝一番パソコン記載の予定表開き確かむ通院日時  
 衰への脚おぼつかぬ日日にしてカートを押してスパー廻る  
 軽トラに豆腐を売りにくる声かときをり聞え呼ぶ声のする  
 病院の待合室に退屈せずになげん観察の時間に当てる  
 蒸し暑き宵のあかりに右往左往羽虫は開ける書のへに落ちる  
 膝頭冷ゆる夜更けの椅子にみて入り繰り歌を物にせんとす  
 めのまへの青葉かへるで深緑輝き梅雨の前の陽をあぶ  
 どりざりと暑き陽さして目のまへの楓は揺れず無風快晴  
 楓の秀枝より朱に染まりゆく日日の変化を朝窓に見つ  
 起き抜けにガラス戸の外見る慣ひ秋になりたる楓の変化  
 小止みなき風が楓の枝を揺らし人影もなくゆふぐれきたり  
 若萌えもみぢも見たり枯れ枝も見たり楓の一年があり  
 働けぬ老人となり幾年か籠りて居ても腹はよく空く  
 万物の死は必然のことながら人の死はいつも突然にして  
 昨日今日風呂に入らず足冷えて寝付けずにゐて年あらたまる

あかばねよしとし  
 赤羽佳年 (東京都)

好奇心が先づ先に来て苦しまず経鼻内視鏡受け清清し  
 帰るより早く着きたり頼みたる買物の荷は玄関にあり  
 歯科医院待合室の熱帯魚時計回りに岩間を泳ぐ  
 米の酒しばしば飲みて八十を超ゆそれなりの酒飲めばたのしき  
 暖房の風に慣らされてゐる肌の外気厳しくひりひりとする  
 忘れ雪などの言葉も奥床し最後の雪にならんか小雪  
 旧職の同僚の名もうすれつつともに働きしおもひのみ残る  
 おとろへゆくからだ医薬に頼りつつ今年も桜の下を歩みぬ  
 あけぼのを肩の痛みに覚まされて八十一歳のいのち頼りなし  
 今の世のウクライナに見る戦事離れ見てゐる何もできずに  
 他所事と見聞きしてゐるテレビラジオ愈々迫りくる食糧の危機  
 早起きに早寝も多くなほ眠し健康睡眠も難しきもの  
 はづむこゑ駆け出す音の窓下に聞こえ昼すぎ雨が降り出す  
 真夏日は直射に來りハイビスカスの花も葉も蒸散頻り  
 風なきに木が揺れてゐるゆさゆさと植栽業者が木の上にある



ほしいまま雨たたきつけ雷の雨熱気去らしめ夕を迎へる  
 昼の雷轟き即ち雨来りアスファルト路に飛沫をあぐる  
 昼日中蚊遣り点せば漂へる煙の毒に羽虫落ちくる  
 暗闇に蚊遣の灯りがぼつとありベッドの裾にけむり漂ふ  
 賜物のさうめん食ひて喉涼しガラス戸の外に雷の雨打つ  
 のど越しを愉しみ昼にはさうめんを常食とするわが消夏法  
 群鳥が飛び立つ羽音激しきに面向けたれば日暮れが来てる  
 一時のこころ鎮めにのむ酒の効果のありやなしや果て無し  
 これほどの出不精になるものかコロナ禍のあり衰へもあり  
 パソコンに向ひおとろへてくる視力実感として電灯の下  
 とりとめも無き思ひにて道を行ききのふもけふも試歩のあゆみに  
 街歩くことも稀にて今日くればふらふらとして人酔ひにをり  
 服薬は日時指定の指示あれば忘れずにのむ起床後直ぐに  
 うすぎむき今日このごろの秋の日の下を歩めば馬追のこゑ  
 黄の花をもたげ勢ふ菊芋の花の見事さ今日も見上ぐる

ゆつくりと駅の階段あがるとき急ぎゆく人の靴裏がみゆ  
 降車して直ぐ駆け上がる女人みて羨しと見上ぐ脹脛の張り  
 デパ地下の食品売り場に揚げ物のほひするなかにんげんの首  
 人工がのさばりてゐる街に視る侵されてゆく緑また木木  
 一冊の歌集読むさへ息切れて長く続かず老いのいりぐち  
 この後もうるほはぬだらうわが暮し思ひ思ひて今夜も眠る  
 故郷といふ地をもてず八十過ぎて従弟住める地に親の墓  
 検血は左腕と決め早八年右乳癌にリンパも採りき  
 スーパーの入口塞ぎ立話する女人みて肩のぶつかる  
 チョコレートを食ふ度母を思ひいづ帰省の折はおのづ包みき  
 降りそそぐ雨に楓の青き葉が光りて揺るる朝にかがやき  
 ひと茎にひと花散るは潔し一昨日のチューリップの花  
 然りげ無くひとりのをんなを見てをればバッグ引き寄せ化粧  
 を始む  
 宗教を超えて生きたる師の歌のおほどかにして自然のすがた  
 木島茂夫の歌にむんむんとする言葉は人間そのものの姿を見せる  
 引き寄せて落ち着き再読出来ずめて『死と足る』は机に半年  
 を伏す

牡丹園の入場料の五百円茂夫の歌にあり昭和六十三年  
 森下町二丁目二十九ノ三の発行所に大蒜荘の由来がありぬ  
 集中の鴉の歌を期待して読めど少なく意外に思ふ  
 徒長枝が四五本揺れて楓の朱が極まり冬に入りゆく  
 楓の葉散り頻りなる冬の入り眼の端が捉へ雪と見まがふ  
 幾日も雨ふらざれば散り残るかへるでの葉が皺みてしまふ  
 深深とどく冬日に背を温め椅子に凭れてほぼ一時間

日を置かず訃報の incoming の暮れ愈迫りくる気配がありぬ  
 わが足に踏まれて地球の皮膚が鳴る水のこぼれるコンクリート道  
 足蹙ぎますます籠る日日にして凍れる道の感触久し  
 新しきをさなの声はいま聞けず住びと老いて福祉の車  
 歩む足ふらつくゆゑに右腕はつね空けておく日日の買物  
 靴下のゴムの緩みを気にしつつ歩む如くの脚の衰へ  
 外出はマスクに隠す顔すべっておろそかにする髭も剃らずに  
 八十ひとつ越えたる身にはコロナ禍の日日は厳しく籠りてゐても  
 寝る前に今日の手洗ひ回数と時間と場所に思ひ巡らす  
 幾つかの小さき石鹸網に入れ洗面台の蛇口に下がる  
 暖房の部屋に閉ぢこもりいちじつを公孫樹の裸木眺めてゐたり  
 編集室の空気と水を吸ひきたる月下美人の差し穂萎らす  
 ベランダの寒気に当てて鉢植ゑの月下美人の平葉を枯らす  
 暮方に降りたる雨のそののちを知らず目覚めて雪積もる見ゆ  
 残酷なる老の兆しの日日にして歩けなくなる不安が募る  
 このところ膝に違和感おぼえつつ歩幅少しく狭まるらしも  
 おとろへゆくからだいたはり活き活きと生きて行きたく思ふ  
 も難し

たのまれたる原稿ひとつことわりてこころ落ち着かず夜の床  
 にあり  
 モノレル延伸アンケートは署名せず回覧板を一夜泊め置く  
 禍は世に尽きるなく今の世のウクライナ情勢コロナ禍然り  
 酒飲まず眠れるやうになりたるは老いまさりきて寝つきははやし  
 雷のあめコンクリート壁に打ち付けて一時熱気を去らしめてゆく  
 新聞を読まなくなりて幾月か世に遅れても差障りなし

夜に入り蚊遣りを点す一時にひとつふたつと蚊が落ちてくる  
 七月の半ばの昼に来年のカレンダー申込書に名を記したり  
 歯科医まで急ぎゆかんとバス待てるわれに吹きつける雷の雨激し  
 かみなりの雨容赦なく吹き付けて買物の荷に音を立てをり  
 棕櫚の木の下に縄縷ふ父と叔母写真に遺る選り分ける手に  
 更け渡る夜もむしあつく汗のシャツ取替へてをり二時をうつとき  
 呼び声に振り返るときふらつきてかかる動作もぎこちなくして  
 菊芋のなだりに咲けば愉しみに今日はながめて坂のぼり来し

## 国分寺に転居して

あかまようこ  
 赤間洋子 (東京都)

五十二年住み慣れしマンション建替への話出できて転居を決意す  
 老人の一人暮らしに賃貸のマンションは無く買ふことにする  
 息子と娘の住居に近きマンションを選びて国分寺市民となりぬ  
 転居先にて新生活をはじめてみてわが年齢が引越しの限界と思ふ  
 新聞販売店ネットで探し電話すればカレンダー、タオル、トイレットペーパー持ち来  
 精神的余裕出てきて買物のついでに訪ぬ武蔵国分寺跡  
 まだ歩けるさう思ひつつ昨日とは別の道行き新しき発見あり  
 七十余年住みたる墨田・江東区道路は凡そ碁盤目をなす  
 国分寺市内歩きて気付くこと道路に起伏多くくねくね曲がる  
 風がなく穏やかな日差しの午後歩く五千歩ほどで学芸大正門前に  
 休講の時友らと散策せし雑木林ほとんど消えて住宅が建つ  
 ウクライナ関心なかつた国名が繰り返し出で来る新聞テレヴィに  
 ウクライナの美しき街並み次々と爆撃されて失はれゆく  
 空爆の映像を見るたび思ひ出す七十余年前の日本の姿  
 現代は戦争の惨禍の映像をリアルタイムで見せつけられる

ロシア兵ロシア国民の大方もこの戦争を望まぬと思ふ  
泣き叫ぶ子泣くことも叶はぬ子供らの映像を見てゐる無力な我は  
酒向さんに誘はれて行く国立の桜並木に目を奪はれる  
冬雷の吟行会のこと思ひ出すあの時桜は期待外れなりき  
三月より更紗染教室再開す目標できて友にも会へる  
白き布に型紙置きて色を重ね次第に模様が出来上がりゆく  
週に一度二時間ほどの稽古なれど独居の我には貴重な交流  
酒向さんに誘はれて入会した健康クラブ転居後初の体操をする  
指導者の動作が全て見えるやう前の方に居て体動かす  
体操が終れば皆で歌うたふ一曲なれど疲れ吹飛ぶ  
転居前に壊れたミシン処分して買ひたくなりぬ新しきミシン  
念願のミシンを買ひてその足で娘と巡る井の頭公園  
届きたるミシン取り出し試し縫ひメーカー同じでも進化してゐる  
新作の更紗の布で何を縫ふか考へるだけでひととき楽し  
体操で汗を流して帰る道鶯の声で疲れ吹き飛ぶ

下町にては椋鳥の声に悩まされ今聴く鶯に心癒さる  
期日前投票に行けば長き列間隔開けてゆつくり進む  
この投票で世の中変はると思はねど無駄にしたくない我の一票  
帰宅してテレビ点ければ安倍元総理銃で撃たれて心肺停止とぞ  
短歌も文字も素敵な山崎英子様にも百歳祝ふ手紙を書きぬ  
転居疲れて怠けて居たる包丁研ぎ再開すれば料理が楽し  
挨拶は暑いですの一言でマスクしたまま会釈を交はす  
暑さ故運動不足になり勝ちで時には買ひ物遠回りして行く  
同じ型紙用ひて染めたる更紗染め昔と今では仕上がり違ふ  
染めることが好きで始めて二十七年藍染も更紗染めもまだまだ続く  
定例の公募展開催の通知来て三年ぶりに応募してみる  
自信なく審査発表の日を待ちてネット上に見出づ我の名前を  
買込みし布がまだまだ家にある入選を機に意欲湧きくる  
来年はグループ展の予定もあり目標できて心が躍る  
グループ展の話合ひはZOOMにて若き会員が設定してくれる

友と行く一年半ぶりの展覧会上野は人の往来多し  
 展覧会二箇所見たるが会場には人が少なくゆつたり過ごす  
 芸大教授の退官記念展は友禅染めのアート作品  
 アート作品パソコン駆使して創るらし我が更紗染めと異なる世界  
 鮮やかなる色使ひは新感覚更紗染めにも生かしてみたり  
 久々の友と二人の会食はアクリル板へだて会話少なく  
 小雨降る上野公園歩きたれば健脚の友が足痛しと言ふ  
 帰宅して歩数計見れば一万歩余り足の痛みを納得したり  
 実際の再建はいつか分からねば我が部屋購入希望の人あり  
 転出と転入手続き諸々の申請書記人もひとりでなしぬ  
 積み上がる段ボール開き夜となれば寝る場所確保しひたすら眠る  
 近くにあるスーパー毎日変へてみて食品の質と値段確かむ  
 食べること先づ大切と思ひても疲労激しく食欲がなし  
 ふと置いた物を探して右往左往見つからず居て泣きたくなりぬ  
 オール電化便利なやうで不便なり老いたる我はアナログ恋し  
 銀行の窓口手続きは予約制アプリでせよとは不人情なり  
 引越しの前日にテレビ壊れたゆゑ情報無き日が十日ほど続く  
 息子に頼みやうやくテレビを購入すテーブルに載る小さきものを  
 国分寺・国立市の地図見れば境界線複雑を知る地形の故か  
 母校なれど校門潜ることはなく過ぎし日思ひつつ帰路に着きたり  
 帰宅して大学の友に電話する今日の散策と思ひ出話を  
 化学科の女子学生は六名なるが会話できるは一人となりぬ  
 幼子も二本の杖つく老人も黙々歩む寒さうな道を  
 プーチン自身は傷負ふことなく頑なに己の主張押し付けてくる  
 病院を爆撃するとは人間の心を持つのかプーチン大統領よ

螺旋階段登つたところでシャッターを押してくれる人あり桜  
 をバックに  
 駅前より続く並木と交差する若き桜の道を進みぬ  
 ランチの後酒向さん宅に招かれてつい長々と喋り続ける  
 視力衰へ失敗多くなりたるも世界に一つの更紗染めの布  
 コーチの説明は極めて丁寧で鍛へる箇所を示してくれる  
 年長と思ひ居る我に九十余歳の会員数名居るといはれる  
 再開後初めて仕上がる更紗染めの布を身に掛け鏡をのぞく  
 五月十三日誕生祝ふメールが届き教へ子からは電話が掛かる  
 曇りから晴れへと変り公園は人・人・人が皆葉しげに  
 散策の後は一杯のコーヒートケーキで休憩心満ち足り  
 転居後の段ボール箱から洋服の型紙探す汗拭ひつつ  
 転居して瞬く間に過ぐ六か月体操教室にて友達できる  
 帰り道声かけられて自己紹介我より若き理科系の女子  
 新聞を広げてすぐ見る患者数コロナに振り回されたこの二年余は  
 こんもりと樹が生ひ繁る研究所の前通る時間える鶯の声  
 鶯の声を一声聴きて後耳を疑ひまた声を聞く  
 二声三声聞こえてくるは本物の鶯の声心昂る  
 投票結果は自民圧勝なれど国民の未来には疑問符がつく  
 届きたる手紙に返事書きたれば野村さんより電話がかかる  
 互ひに独居であれば遠慮なく思ふ存分話が弾む  
 ベランダに打水すると忽ちに干上がり何度も風呂水を撒く  
 四度目のコロナワクチン接種済み仕事を一つ為したる気持  
 日本人は原爆投下を忘れぬがアメリカ人は真珠湾攻撃を忘れ  
 ぬといふ

空襲が無くなりし夏防空壕は壊されて野菜を作る畑になつた  
 スーパーでメモになきもの買ひ足して欲しき牛乳忘れて帰る  
 ガラス戸に映る姿が前屈み背筋を伸ばし胸張りて歩く  
 左眼の加齢黄斑変性の進行止めるため高価な注射チクリと射しぬ  
 左眼では線が歪んで見えるため細かい作業は右眼のみ使ふ  
 コロナ禍と転居と老いが重なりて公募展挑戦に迷ひがありぬ  
 我が作品の展示法につき役員よりアドヴァイスあり指示に従ふ  
 前回の大賞受賞者が今回は落選すと聞く厳しき公募展

## 令和四年

すすめにも沈思の刻があるらしきじつと動かず十分あまり  
 ひ孫らとLINEを交はしあそぶなどこの世あの世の往き来の如し  
 茶畑の花を愛でつつけふもゆく日課の散歩の日のあたる丘  
 枕ならべ君と宿りし京の宿大和の宿を想ひてゐたり（悼・関口正道君）  
 いつか逝く人の命と思へどもきのふ今日とは思はざりしよ  
 わが在の鎮守の森の大公孫樹拾ふひとなし散りしく銀杏  
 小流れの淀みの底にもろもろの落葉沈ませ冬さりにけり  
 この朝の落合川に浮く影は渡りて来たる鴨の群れらし  
 銃使用禁止区域の看板の下に憩ひて鴨を見てゐつ  
 散歩にと出でて来てのぼる川堤もぐらの塚の多なる連なり  
 わが足に纏はるごとく右ひだり背黒せきれい飛ばずにあゆむ  
 夕寒き日差しとなりて立ちあがり読みさし本に落葉を挿む  
 わが住まふ辺りの子等はみな良き子遇へば必ず挨拶をする  
 わがめぐり親しき人は多けれど君しあらねば寂しくてならぬ  
 わが好む荷風の記事の切り抜きを送りくれしは半月前ぞ

あまのかつひこ  
 天野克彦（東京都）

いつの日の想ひ出ならん杖を突きあとよりつき来る君のまぼろし  
 たまきはる命ふたたび甦れ「子も孫も連れ合ひもなき」身軽の君よ  
 この蒼空そらの下いづこにも君はなし哀しみをれば鳶の啼くこゑ  
 山肌のあらはに見えて冬の山枝しろじろと白ほねのごと  
 葉隠りのつばきの花に取りつきて薬むしりをり逆さひよどり  
 固かりし冬木の枝も緩びみせ木の芽膨らむ頃としなりぬ  
 春山はほのかにあかくいろづけり鴉かうかう鳴き交はしゆく  
 杉山はやうやくみどりに入れ替はり一栄一落この眼にも見ゆ  
 金目川の並木のさくらこころあらば今年ばかりは薄墨に咲け  
 るなくなる皆あなくなるわが内にわんさかとある透明の友  
 ゆきやなぎはやも咲きそめ川辺には紋白蝶の嬉々たる遊戯  
 花移る蝶の様子にしばらくをわが目あそばす歓びの蝶  
 音もなく暮れゆく山に対ひをり人にはあらぬ山のしづけさ  
 凡庸の人より生まれ凡庸のままに朽ちゆくわが命かな  
 山黙しわれも黙してゐたるとき不幸を運ぶサイレンの音

羽虫とぶ頃としなりてつばくろの疾風のごとき生の営み  
 恥多きこの身をここに埋めんとさだめし「青梅」を離りて来たり  
 東国あづまなる青梅の里に四半世紀くらしの恩を忘れてならじ  
 さまざまの人との出逢ひありしかど歩を進むべし振りかへるなく  
 せがまれて還りてきたるふるさとの山越す風の涼しきに坐す  
 ふるさとはここといへども水江の浦の島子のごときかなしみ  
 眉のごと連なる生駒山系の稜線けふるを窓は嵌めをり  
 国見山かうや交野の山に妙見山飯盛山とつづく山なみ（生駒山地）  
 あの山の向かうはやまとまほろばぞなほ走るべし夢ふくらませ  
 幾たびも嘗てのぼりしこの山を懐かしみつつもの思ひをり  
 のぼりきたる山のまなかに君が颯つ帽子をかぶる君がまほろし  
 みまかりし関口正道今いづこ君に見せたやわが故郷を  
 向つ峰に比叡の山見え足もとに木津川・宇治川・桂川みゆ  
 年老いて歌を作りて生きるとは希求けくと緊張保たん為ぞ  
 三十年離り帰りてふるさとを子供ほっこのごとく吾は彷徨ふ

雑木々をみどりに濡らし朝よりの雨はしづかに降り続きをり  
 いたはりの心を予らはもつらしき人生幕切れ醜く老いつ  
 年老いて登りて来たる男山この八幡さまに無沙汰を託びる  
 ものみなほ遙かにみえるが美しく手近に見ゆるはみな醜くかり  
 人ゆかぬ裏参道を下り来つつつくつく法師しき鳴く中を

まだ若さ残してあるぞと四階を一気にのぼる手荷物持ちて  
 飛ぶ鳥の明日香恋ひしと思へども老い痴の身は行き難きかな  
 高円山に拾ひて来たる松かさはおつてのなごり机に有りて  
 香具山よりみたる畝傍の山かすみしぐれの雨にもみづりみたり  
 暮れそむる小川の岸の冬木より鳥啼き飛べり歩みてくれば  
 夜のふけの静かになりたるわが部屋に小川ながるる水の音きこゆ  
 さやさやと流るる川に沿ふ道の落葉踏みゆく愉しくもあるか  
 水涸れの川に沿ひつつわがくれば舞ひ立つ一羽の青鷺みたり  
 風の来ぬ山蔭こは暖かく人に内緒の休らひどころ  
 落葉焚くけむりの青くのぼり立ち夕べ寒む道もどりてきたる  
 放し飼ふ農家の庭にはとりのこゑにおどろく通りすがひに  
 君なくてさびしさつこの日ごろ消さずに残す君のアドレス  
 いつまでも何をなげくや嘆けどもこころまどひのつきせぬものを  
 もの思ひやるせなきとき部屋を出で冬田の畝に野蒜を探す  
 起き出でて寒しと言ひてみづからの声に驚く春のしののめ  
 暁の空に残れる月の下ひとり歩めば遇ふ人もなし  
 一本の河原のつばき枯草を抜きて立ちをりてらてらひかり  
 鳴くこゑは鶴ならん咲き盛るつばきに寄れるわが上に鳴く  
 空を指し尖る公孫樹の枝に若芽の萌えのはつかないぶき  
 真向かひの山に昇る日うらうらと春のひかりがわが部屋に差す  
 わが内より徐々に消えゆく友どちを胸に浮かべつその面影を  
 老いわれも夢なきにあらざ今一度八十八ヶ所巡りてみだし  
 ペランダの蜘蛛の巣ゆらしもがきあし足長蜂は遁れたるらし  
 人疲れしやすき体質もつわれの帰りて見放く多摩の山々  
 わがめぐり若葉に朝の日をうけて透きとほる葉の青のかがやき

## 柿の木

吾が庭に四季を彩る柿の木の葉の風に落ち眠らむとす  
 総体にて優勝したよと弾む声弓道しをる高二の女孫の  
 望み持ち努力かかさぬ孫娘泣くも笑ふも見守つてゐます  
 返り咲くキンモクセイの木の陰に黄の花鮮やか石路の咲く  
 念願の墓参りへと誘ひくれ娘と二人一日をすごす  
 子と二人外出するは初めてや島倉千代子の歌秘め歩む  
 なにくれと氣遣ひくるる優しさに己の老を自覚し寂しむ  
 新しくなりたる墓石に残心と銘刻まれて従弟の優し  
 カニ鍋で共に過ごさうと箱根より新年早々娘の来たり  
 酒飲むと饒舌となる娘なり子どもの時の悲しみ訴ふ  
 母として気づかぬことの多くあり黙りて聞きやる元日の夜  
 雪被く山々の姿鮮けしこの地に住みて何十年経つも  
 山梨の地にも感染広がりて通りのホテルは医療病棟とぞ  
 沈丁花の香りただよひ懐しき受験勉強に勤しみし日々  
 子と孫と明日は父母の墓参り雨との予報に晴を祈り眠る

ありいづみやすこ  
 有泉泰子 (山梨県)

車での移動に馴染む大凱<sup>たいが</sup>くん電車に乗るのを楽しみに待ちをり  
 草を抜き落葉を掃いて墓碑みがき喜々と働く大凱の勇まし  
 本棚の整理をしようと紙袋取出しみれば歌稿の束あり  
 赤ペンの小さな文字でぎつしりと添削されたる短歌の原稿  
 子の巣立ち親との別れ孫誕生生ききし月日歌稿にうかぶ  
 歌稿の間色あせたる葉書一枚あり小さな文字は母の筆跡  
 虫メガネかざして読みぬ母の文父との旅行の喜びあふる  
 子が巣立ち我には生き甲斐必要と短歌勧めてくれし父をり  
 隣家の取り壊し工事はじまりぬ分別されたる荷外に出されて  
 バリバリと地響きたてて解体さるる隣家みるは辛く切なし  
 地響きに耐へられぬとの夫誘ひバラの庭園、湯に寛ぎぬ  
 故郷のなくなり寂しと挨拶し媼去り行く涙ぐみて  
 九十歳の媼折りたる黄と青の五羽の鶴止まる吾が家の鴨居に  
 吾が病信じられない会ひたいと共に学びし友より便り  
 初めての冒険するごと胸はづむ明日はいよいよ友に会ふ日ぞ

改札口に手を上げ笑まふ友のみゆ馳け寄り握手コロナ忘れて  
この笑顔高知訛りのこの言葉ゆたかに過ぎせりこの友のゐて  
友は高知吾は名古屋ゆ編入し二年を共にす都立富士高校  
空赤く染まるを一人見てゐしと小三の夫甲府空襲の日

疎開先リヤカー引いての買出しは長男の夫の仕事でありきと  
村の子の姿をみれば回り道苛められぬかびくびくしてゐしと  
ラグビー部寮生活より帰省せる孫のみやげはコロナウイルス  
咳続き三週間を休職の娘復帰す体力案じつつ

緑葉を戦がせ風を送りくる柿の葉の異変枯れ落ちはじめ

柿の木の枝葉にぎつしり白きもの凶鑑たしかめ消毒したり

柿の木の老いてきたりや虫に敗け枝葉の枯れて収穫あきらむ

川沿ひの葦群のなか一輪の彼岸花咲きトンボ飛び交ふ

「大丈夫ほら見てみて」と歌流るる「明日は今日よりいい日になる」と  
くつきりと雲間に色染む月のみゆ雨戸をしめむと空見上げれば

朝日受け染まる山かげ透けさうな満月静かに消えてゆきたり

柿の実の色濃くなると竿を手に腰綱つけて夫腕取りくれし  
百目柿もぎとる夫も老いたりや腰のあがらず鳥のついでむ  
若き日に父も弓道してゐしと何処かで何か撃かりをるや  
朝ドラの主人公の名「やすこちゃん」吾呼ぶ叔母等の声の懐かし  
やすこちゃんやつちゃんと呼びくる人今は四人や大事に生きむ  
懸命に生きてる父母を思ひつつ吾も歩まむ老いといふ道  
柿の葉のみな落ち日ざしはあたたかし廊下の鉢花色増しあざやか  
赤黄と染まる柿の葉みな落ちて枝の高きに赤き実一つ  
柿の木の幹に寄り添ふ南天の赤き実みれば心明るむ  
宿題の書き初めすると大凱来る二時間集中また明日くると  
葉の陰に透き通るほど赤き実の大き粒みせ南天の映ゆ  
楽しみにしてゐし会合中止とす老いの会話の減りいくは寂し  
買物の途のホテルの裏口にブレハブ建ちて物々しき人影  
強風に荒き波立つ川の中バレーボールの球流れいく  
川に落ち流るるボール追ひかけて三人の子の連携みごと  
暖かな日ざしにたつぶり水注ぎ金のなる木の鉢しまひ忘るる  
零下二度の寒さに堪へてつややかな黄の健在なり金のなる木の  
転居したる勉強部屋の窓下に沈丁花香り迎へくれたり  
書も短歌も続けて行かうと書の師より葉書いっぱい太き墨書で  
二ヶ月を床の間飾りし南天を土に返せば鳥来て啄む  
昨年の夏休みの課題「世界平和」入選したるが戻ってきたと  
つながれる国旗のはじめに青と黄ウクライナ描かれぬる偶然や  
実家より移し植ゑたる水仙の株増え咲きぬ父母の香のせて  
「難民の命守るは武器でなく」との中村哲氏の声今強く沁みをり  
師の揮毫力強くて堂々と訴ふるものあり客の離れず

映されるウクライナの街と重なりて武器を憎みぬ平和を祈りぬ  
「冬雷」に入会初めの歌なりき姑父母子のゐて三十年前の私が  
本棚の整理は中止母と子の温もり胸に歌稿戻しぬ  
紫陽花の咲くこの季節父は逝きたり里の庭にも盛りであるや  
一緒にと夫の心配断りて一人での上京計画たてる  
修学旅行は参加せず京都奈良友の故郷高知へと旅せし  
花びらを東に向けて白芙蓉大きく開く清々しき朝  
芙蓉の葉大きく育ち窓覆ふ湯につかりつつ心安らぐ  
暑き日ぞそろそろ配食引退か弱気を払ひ自転車こぎゆく  
新学期始まりたるや朝々に挨拶交はず子の姿なし  
挨拶を交はず娘の姿みず川沿ひの路吹く風の涼し  
年一度短歌大会に会ふ友の逝去の知らせ力抜け落つ  
毎月の冬雷届けば一番に友の歌読み体調案じをりき  
大会にて昼食共にせしありき共に十六年生と知り嬉しき  
おはやうと挨拶交す仲間でき会はねば案ず川沿ひの径  
スパーで山盛りおだんご売出し中今宵は十三夜とぞ一パツ  
ク求む



いけがめせつこ  
故池亀節子（東京都）

## 日毎の散歩

コンビニは我が家に近く少量の買ひ物をする散歩しながら  
日の暮れて夜空に月がほんのりと見えてゐるなりスーパールの前  
沢山のダンボール箱腕尽で壊しぬ結構力仕事だ  
駅前よりノンステップと記すバスが通りゆくなり駅前広場を  
青空にヘリコプターの飛びゆく一機かすかに見ゆる廻るプロペラ  
自転車の荷台にはゆき犬乗せて犬はキヨロキヨロスーパールの前  
公園の大樹はぐるり枯れ葉のみ幼はブランコ大きく漕ぎをり  
幼らは声を張り上げ公園の迷路の出口を走り回りぬ  
作歌したり日毎の散歩は良いことだ続けて下さいと医師は言ふなり  
陽に照らされ置かれてありぬ自転車がピカピカ光る通りすがりに  
年末に娘の運転で熱海まで崖縁通り三時間ほど  
見上ぐれば崖の斜面は石垣で漁港に駅あり売店もあり  
岩壁の高速道路は芒が続く大海原は静かに漂ふ  
僅かなる散歩であれど日に一度歩めば心地よき気分なり  
大雪の予報に外を眺むれば雪は降らずに雨がそぼ降る

早朝に外眺むればどんよりと人つ子一人ゐない風景  
しばらくの歩みに腰の疲れたりカートに寄り掛かり体休める  
忙しきなか毎日手作りの料理をば持ちくるる娘有り難きかな  
ポストまで封書を持ちて十分程散歩のつもりで歩みゆくなり  
手を入れぬ庭の樹木は高く伸び枝も伸びをり小鳥囀る  
ゆつくりと手摺につかまり踊り場で一休みして上りゆく階  
散歩にも感染せぬやう気をつけて歩みゆくなり気配り常に  
転ぶなど言はれ乍ら又転び歩めなくなる数日間  
踏切が無くなりスーパールが近くなる休まず行けるカート引きつつ  
樹の下に小菊がずらり咲き充ちて優しさ醸す眺めつつゆく  
樹の枝を剪定鋏に切り落しすつきりしたり庭通るとき  
目覚むればピンクの素敵な花ありぬ「母の日おめでとう」と息子のコメント  
公園の鉄棒に幼が楽しげに逆上がりするを笑つて見てをり  
眺むれば安心安全と記すパトカーゆつくり走る駅前広場  
鳩二羽が顔と顔とで突き合ふ初めて見たり公園広場に

昨夜書きしハガキを出しにポスト迄杖の代りにカート引き行く  
 雨降りて庭の樹木のうるほひて通れるたびにほつとするなり  
 居酒屋の「おふくろの味」と看板に客の入るなり男性ばかり  
 五叉路なる窓より外を眺むれば大き囲ひは何出来るやら  
 集め置きし枯葉を大袋にゴミ出しすさつぱりとする庭もきれいに  
 歯科医師をば今日で止めたと白衣脱ぐ遠き日の夫思ひ出したり  
 休診せず直ぐに娘が跡を継ぎ診療為すなりチェアを替へて  
 鴉が電線に止り又一羽二羽で飛びゆく青空高く  
 みなとみらいがテレビに映り遠き日に友と行きしよ懐かしきかな  
 用あらば階段の手摺につかまりて上り下りする転ばぬやうに  
 重くてポロポロになりたる辞書なれど必要あらば今でも使ふ  
 半月前わが家の木戸口に足の小指をぶつけて骨折整形外科に  
 補聴器を付けてをれども聞えない事のよくあり困る事あり  
 歩めなくならぬやうにと少しの散歩家の巡りを歩み来りぬ  
 青空に白雲かすかに動きゆく眺めてゐたりコンビニの前

遠き日に我が出版したる歌集読めば甦る懐かしきかな  
 杖をつきカップメンの袋持つ老女見知らぬ我と挨拶交はず  
 診察の済みたる娘に常のごと野菜サラダを作つて置きぬ  
 電話鳴ればも一つ補聴器すぐにする会話の出来て有り難きかな  
 駅前の大広場にてタクシーの運転手いそぎ弁当食べをり  
 年末は帰省ラッシュか車の続く行きも帰りも絶ゆることなく  
 見渡せば富士の中腹に横一文字の長き白雲際限もなく  
 旅館にても出掛ける時は転ぶなと娘に手をとられ歩みゆくなり  
 青空に小さき白雲の千切れつつぐんぐん動くを眺めてゐたり  
 足の指が痛くて息子にマッサージして貰ひたり日日治りゆく  
 口あけて顎マスクして歩みゆく若き男性スマホをしつつ  
 三回目のワクチン接種に雨の中行つて来りぬタクシーに乗り  
 久びさにお握り作り子供等のばくばく食べるを笑つて見をり  
 公園で口笛吹けば次つぎと鳩がキョロキョロ足元にくる  
 余生をば明るく過ごさむと公園の椅子に掛けみて歌を詠みをり  
 血圧はいつも正常忘れずに錠剤飲みをり医師に従ふ  
 休診日は我に関係あらねども心安らぐ思ひに過す  
 雑木の枯葉の積る庭や石段帯はあれど体の動けず  
 目覚むれば体内時計のよく当る不思議に思ふ続けてみむと  
 駅前道の道に小さき花壇あり色とりどりの花を眺めつつゆく  
 石段の上より息子は転げ落ち救急車にて運ばれてゆく  
 衰ふるわが目にも見ゆる石段の割れ目にシソの葉抜いてもす  
 ぐ出づ  
 青空に半月浮きぬ眺むれば雲の動きに隠れては出づ  
 洗ひ物たまりて厨に袖めくり洗ひ棚に仕舞ひぬ夕方

鳩らしき鳥が群れなし高層ビルの上を飛びゆく眺めてゐたり  
 夕方の空眺めをり青空に白雲うすし真綿のやうな  
 青空に大き雲浮きピカピカと光り輝くビルの上空  
 公園の木叢の中をひらひらと揚羽蝶舞ふとても綺麗に  
 真ん丸き月が夜空にくつきりと輝きてをり暫し眺むる  
 真夜中にオレンジの雲見つけたり横一直線に幾重にもなりて  
 外出には転ばぬやうに気をつけて休む前には日記を記すなり  
 真つ青なる空に真白き大き雲動きゆくなりビルに隠るる  
 窓開けて外眺むれば中秋の名月なり暫し眺めてゐたり  
 雨降りて転ばぬやうに石段を気を付け乍らゴミ出しをせり  
 先ぎきの事思ふまい余生なれば素直に生きなむ有り難きかな

え ば と あ い こ  
江波戸愛子 ☆ (埼玉県)

## ハナミズキ

院内感染拡がるという病院は上の娘の勤めるところ  
わが家の隣に住まう同窓生逝きて夫のため息いくつ  
家売りにマンション買うと友の言う夫の葬儀を終えたる後に  
散歩より帰り来りて眼鏡屋の主人も腎臓ひとつと言えり  
入社より九ヶ月目のこの月も孫は寿司折ふたつ提げくる  
年末の本屋に入り一直線迷わず手に取るいつもの家計簿  
来年用にいつも購う家計簿の表紙は明るき海の刺繍絵  
家計簿も五年日記も余白ある暦も手にして足どり弾む  
令和三年終わりの日なりレシートを貼り付け厚き家計簿とじる  
家計簿の保存は五年と決めており稀に見返すことなどありて  
ならべ置く家計簿見ながら思いおり五年の早き五年の重み  
厨にてようやく片付け終えるとき聞こえてきたり除夜の鐘の音  
良きことのありますようにと手を合わせ父母に供える年越しの蕎麦  
妹の名前に届くゆうパック開ければ黒き大蒜あまた  
青森産を使用しましたと黒にんにく作る過程を妹の言う

免疫力あがると云わるる黒にんにく今日より君に一粒ずつを  
妹の黒きにんにく一粒を食せばふたり口もとゆるむ  
公園のさくらけやきの積る葉を踏みて歩めり行きに帰りに  
枯れ落ち葉あたまの上へ投げ上げていくども浴びる園児らの声  
父と母それよりながく暮らしたるちちとははなり今日も香たく  
若いねと言われ否定をすることも認めることできない齢  
歩み来て君の好めるかぼちゃ買うメキシコ産をまるごとひとつ  
先がけて桃色ひらき白ひらき紅色ひらく鉢の梅の木  
春やよい十一日は上の子の生日東北大地震の日  
わが家のここは夫の領域と観ていた庭の山茶花を剪る  
その父の髪を刈りたるバリカンに刈られゆくなり夫の髪のお  
おだやかに晴れたる朝ひさしぶり雀きたりて庭に啄む  
桜には青い空があいますねえ花を見上げて花に言いたり  
散歩より戻れる君の手のひらに小さき花と葉のハナミズキ  
花のさきほんのり染まるハナミズキ小さきグラスをよりに挿したり

ほんのりと染まる小さな花のもとすこし反りたる若き葉のあり  
 ハナミズキ挿したるグラスを卓におき君との会話しばらくつづく  
 鬼ごっこして遊びたる幼子が制服を着て挨拶に来ぬ  
 黒揚羽さりて黄揚羽すぐ来たり嫩葉かがやく金柑の木に  
 伐りつめし木槿の幹より細き枝すんすん伸びるいくつものびる  
 まっすぐに伸びる木槿の細枝に蒼ちいさく葉のもとにあり  
 八重の百合ひらききりたるその朝に木槿の蒼ひとつがひらく  
 ふくらめる蒼つきたる木槿の枝はげしく揺らしてゆく風のあり  
 庭の紫蘇みている夫のひとりごと今年はバッタがまだ来ていない  
 助手席に娘の言えり若者のような運転するんだねえ  
 新型のコロナ増えたる午後三時おとうとの死を知らせる電話  
 継ぐ人の居らねば小き仏壇に決めたと妹あんどの声に  
 滑舌のわるいとふたりのむすめ言う返す言葉を呑み込みている  
 精度よき塩分計を購いて夫のひとつの腎臓まもる  
 この前は上の子今日は下の子が付き添いくるる夫の受診日

土産物えらぶは楽しと孫むすめ修学旅行のみやげを六つ  
 京都より帰りきたりて日本の文化伝えたとしと中三の孫  
 夕食を終えて駅前広場まで早足にゆく元首相みに  
 寿司と鰻どちらがいいかと訊かれお初給料を手にする孫に  
 カレンダー日にちにつけたる丸印夫の腸の元気なあかし  
 このままで過ぎるもありと言われたる点のごときが増す君の肺  
 逝きしのち空き地となりていたりしが三階建ての家二棟建つ  
 兄逝きて壊さるる家の前に立ちその妹がカメラを向ける  
 右隣り左隣りの同窓生逝きて夫は昔を話す  
 専門店の食パンいただき切り分けるもつちりとしてほのかな甘さ  
 一日目二日目そのまま三日目は焼いて食べよとパン屋の指示書  
 今までの五冊並べてある棚に今年の厚き家計簿を置く  
 恵比寿駅すぎてがらんとする車内あなたとゆったり有明までを  
 三ヶ月ごとに通ってきたけれど六ヶ月後の受診となりぬ  
 CTの結果を医師より聴きたしと娘は次回付き添うと言う  
 買い置き金時豆を甘く煮る食べもの制限夫になく  
 塩分と暴飲暴食をつけて医師の言葉は夫を変え  
 食べ物のわが歌いつも寝ぐれし関口さんをまた想い出す  
 バターナッツかぼちゃは瓢箪かぼちゃとも云うらし瓢箪かぼ  
 ちゃと言わむ  
 また犬を飼いたいなあという君の願い断ちたる夜の静けさ  
 値の高きパソコン買いきたりしが君はメールもオフィスもやらぬ  
 そのままの形に残る蜜柑のかわ嫩葉いでたる梅の枝にて  
 買ひ物の袋を提げて久しぶりふたりで肩を並べて歩む  
 ブランコの軋む音して子らの声たかく聞ゆる日曜の午後

雨の日のバスは満員と言う高校の一年女子を乗せて駅まで  
 アラスカ産紅鮭缶と春キャベツ炒めて今日の夕餉の主役  
 発売にこの絵の切手四シート頼むと娘は紙幣おきゆく  
 「見返り美人」なけれど切手アルバムの背表紙そろえ時折のぞく  
 平成と昭和のコインアルバムの二ヶ所を埋める今日の釣銭  
 釣銭に使う硬貨の両替に手数料かかると肉屋の主人  
 朝なसान雨戸をあけて見る木槿今日は二つの花ひらきたり  
 朝の日のようやくとどくベニシダレ葉に残りたる雨粒光る  
 おとうとの病を知りて空仰ぐあにのひとりが罹りし病  
 姉二人駅に迎えて癒ゆることなきおとうとに会いにゆきます  
 妹は夫のためにつくりたる黒にんにくを分けてくれたり  
 我よりも一日遅れて生まれたる源ちゃんをおとうとと言ひて  
 楽しき

魚釣りゆく約束の叶わないおとうとを言う夫はいつも  
 源ちゃんと呼びまっさんと呼びあいていたるあの日のいたく  
 懐かし

朝六時あなたのあらし声きこゆ日本の政治に物申すこえ  
 町会の敬老祝いの品物にのし紙つけおり百名あまり  
 敬老となりたる年に祝い金ふりこむという広報誌よむ  
 合同歌集を読みたる友の嬉しそに辛けんびの歌なつかしと言ふ

合同歌集を読んだと言ひて涙ぐむ病に夫を失いし友  
 娘よりもらいし庭の白あじさい黄昏どきに花のきわ立つ  
 カレールウ溶きつつ想う週一度あなたへ届けた中辛カレー  
 五回目の接種のあればどうすると問われてすぐに受けると返す  
 次回より夫の担当かわるといふ化学療法専門医師に

入院日しらせる電話を夫まつ持ちゆくものを部屋に並べて  
 原発巣とり除かれているけれど夫はときおり脇腹に触る  
 紅葉のコキアを観んといで来れば大久保さんをまた想いだす  
 髪を切る孫と切られている夫の会話ききおり隣の部屋に

おおつかりようこ  
 大塚亮子 (東京都)

## 金平糖

ランドセル背負ふあの子の通る時間道路掃きつつ何時しか待ちぬ  
 「おはやう」と挨拶すれば「おはやう」と元気に返す声の嬉しく  
 クロスワードの空白の箇所埋められてゐるに気づきぬ夫の文字に  
 季来ればいつも姿を見せくるるヤモリ出で来ず冬となりたり  
 来年は会はむと電話に約したる弾みたる声耳に遣りぬ  
 帰省する度に私の大好きな茄子漬たつぷり作りくれにき  
 無花果の甘露煮いつも土産にと友手作りの飛び切りの味  
 チビのわれノツポの友と九年間通学したる思ひ出忘れず  
 人通りなければマスク外しをり冷たき空気心地よく吸ふ  
 コロナ禍に帰省叶はぬふる里に一人暮らせる兄案じをり  
 節分に孫たちの来ず小き声に豆撒く夫の後ろに続く  
 豆撒きを終へたるあした掃除機は豆を吸ひ込む小き音たて  
 虫喰ひの痕の残れる葉の陰に紅の色濃き侘助ひとつ  
 梅の香り運びてくるる春の風大きく吸ひ込むふたたび三たび  
 茶のけいこ長き休みに人気なき茶室に侘助一つを飾る

彼岸には早き墓原しづもりて煩きほどに鳥のさへづる  
 さくらには未だ間のある広場には梅咲き残るかをり微かに  
 茶の稽古再開したる稽古場に弾む声聞く久方ぶりに  
 殺風景なホームの階段十六段にひな人形を飾る華やぎ  
 ひな人形飾りくれたる駅員に「ありがたう」礼を言ひたり  
 関口さんの庭に咲きみるバラ幾つわがパソコンに送りくれたり  
 何年来の花見の約束果たさずに関口さんの逝きたる知らせ  
 江東区に永く住みぬき関口さん路地にひよつこり会へる気する  
 友持ちくるるホウチャク草をひとつ挿し今日の茶の湯の稽古を始む  
 芽吹きたる花いかだの小さき葉の上に米粒ほどの白き花咲く  
 客となるも客を招くも無くなりてコロナ禍二年たちまちなりき  
 母の日に子の持ちくれし紫陽花は疾うにわが背を越えて幾年  
 しつかりと根を張る紫陽花縦横に枝葉茂らせわが八十となる  
 近藤さんの遺しくれたる花いかだ我が家に根付きしろ花咲かす  
 半夏生一つを挿して友たちの来るを待ちをり簾おろして

嫁ぎ来て永く住みぬる下町に都電の思ひ出遙かとなりぬ  
 雨やどりしつ見知らぬ者同士おしやべり始める空見上げつつ  
 孫と子の来ぬとの知らせに黙々と迎へ火を焚く夫の背小さし  
 九十歳越して一人で住む兄の施設に入居の知らせの届く  
 幼き頃のわが思ひ出を見てきたる生家は空き家となりて残りぬ  
 兄弟の背比べのキズそのままに残る柱は廊下の外れ  
 東京駅を見下ろすビルの屋上にホームに出入りの「とき号」を見る  
 「お月様がきれいだよ」孫の電話に夕食の片付けそのまま路地に出で見  
 八十を三つ越したる連れ合ひと共に見てある中秋の名月を  
 五十余年過ごせる夫と肩並べ月を仰ぐは初めてなりき  
 母に手を引かれて茶道の先生を訪ひし遙かな思ひ出ひとつ  
 正座する足氣にしつつ大人たちの話聞きぬき意味解さねど  
 「またきてね」頭撫でつつ茶道の先生金平糖を包みてくれき  
 角ひとつ曲がれば母の姿見え着物姿に駆け出したりき  
 声出して唄ふ楽しさ思ひつつ入会手続き済ませて帰る

緑道を行けば赤・黄さまざまな落ち葉が路肩に吹き溜まりをり  
吹き溜まる落ち葉の中より虫食ひの無き五・六枚やうやく探す  
先を行く父親を呼ぶ少年の「待つて父さん」の甲高き声  
クロスワード早々解ける時もあり時計を見つつ独り喜ぶ  
窓ガラスに貼りつくヤモリの背を見むと外に回ればいつも逃げらる  
十二月に入りて届きぬ喪中のはがき故郷の友の逝きたるを知る  
結婚の祝ひに編みくらしテーブルセンター色褪せたるを今も持ちをり  
友に教はり初めて編みたる手袋は不格好なれど暖かかりき  
道隔て挨拶くるる人あれどマスクに顔の判じ難しも  
一月一日逝きたる友を送らむと通夜に香薫く一月五日  
茶道の稽古共に続けし二十年余のきれぎれに頭つ経聞きながら  
いつにてもスーツ姿に稽古せし友の姿に多く学び来  
休まずに稽古続けし友とわれ一人残され抛り所なし  
気に入りのスーツ姿に笑みかくる友の遺影に別れ告げたり  
水仙の蕾ふくらみ千両の色づき初むるも風まだ寒し  
白梅の蕾いくつの開きたり冬の日ざしの降りそそぐ中  
コロナ禍に帰れぬふる里思ひつつ一人暮らせる兄思ひをり  
両国駅にひな人形の飾らるると新聞に知り友を誘ひぬ  
長きに亘り仕舞はれるたる人形の今日晴れ晴れと段に飾らる  
両国駅のホームの階段十六段に毛氈敷かれひな人形並ぶ  
ひな人形飾られてゐる階段に腰かけて見る母と娘が  
常なれば夫と二人の寄せ鍋に孫の加はり賑やかなりき  
魚、野菜山と盛りたる大皿の向うに弾ける夫の笑顔  
「おかはり」の声聞くことも稀なりき子育ての頃思ひだしをり  
久方ぶりの茶会に社中のとも達と稽古に励む皆いきいきと

藤まつりに亀戸天神の社務所にてわが当番と釜を懸けたり  
あれこれと忘れゐること多くして娘に頼ることの増えゆく  
この後は嫁や娘に肩代りせねばと思ふ八十近し  
外出の頓に減りたるわが暮らし茶の湯の稽古を心待ちにす  
簾越しに入り来る風の心地良し「清風」の軸微かに揺るる  
夜の更けに階下に大きな音のして気になりつつもいつしか寝入る  
台所の床に転がるガスボンベ昨夜の音の正体と知る  
地下鉄開通バスの路線図整ひて都電いつしか姿を消したり  
突然に降りくる雨に雑貨屋に雨やどりする軒先に寄り  
ふる里への墓参は今年も叶はぬとわれ待ちくるる兄に伝ふる  
迎へ火を終へたる後の手火花をあげることもなく袋に仕舞ふ  
蓮の花なくてごめんと言ひながら仏壇磨き盆に入りたり  
二年余を墓参に帰れぬふる里の兄姉に書く暑中見舞を  
入学祝に父買ひくれし勉強机古りたるままに兄の使へり  
茶道の稽古休みとなりて毎日の掃除おざなり出窓のほこり  
七月にかけたままの床の間の軸を取り替ふ立秋過ぎて  
打ちつばなしの練習場に行くと言ふ夫にホツとするわれに気づきぬ  
コロナ禍となりて家居の夫の食事朝昼晩とキツチンに立つ  
白い雀を見たと言ひたる夫の言葉聞き流しをりここ二、三日  
「白い雀だ」通行人が大声に指さす方を手を止めて見る  
雀らしき白き小鳥を目に追へば街路樹揺らし葉陰に紛る  
精一杯声出したくてコーラスをやると決めたりグループ探す  
ドアの前に呼吸整へ洩れ聞こゆる歌声聞きつつ部屋に入りたり  
グランドピアノ置きある部屋に澄む声を聞きをり女性コーラスの会  
ビルの壁蹴りつつ移動し窓ガラス拭ききる男の動き美し

おおやまとしお  
大山敏夫 (埼玉県)

## 君の亡く

ゴム状にビヨンと一連の文字伸びて定着すデジタル画面の活字  
アナログの活字は鑄造鉛だがデジタルの文字はまさしく「活字」  
この眸は何を観るかとズームイン重ねてゆけどぼんやりの影  
少女誌に見る大いなるまなこの絵思はするまでふたつの眸  
描かれたる二重まぶたの黒きかげ見開くまなこやや精気なし  
微笑する逆「へ」の字なす唇の口角ちさくふたつの靨  
自然なる黒髪眉のうへに垂れすこし汗ばむひたひを隠す  
ほんの少し露出のはだへにほふまでピクセルといふ微小点群  
フォトショップ加工も化粧の技もありさりながらこのデジタル写真  
人間の頭脳のごとき重たさを感じてしまふスマホを持ってば  
つい忘れ取りに戻るが二日つづくたかがスマホと思ひながらも  
貫ひたる近所の大根二股に分かれ人形めくもの混じる  
積みあぐる本がみごとにバランスをとりてゆらゆらしつつ倒れず  
片付かぬ雑誌や本がわが椅子のかたへにひとつまた山をなす  
夜の更けに地震がくんと揺れて止むそれでも倒れず本の山三つ

勝組に利益を集め負組にさらに厳しくさういふ構図くもれるはレンズではなくわが眼球そのものか人の顔も山野も美しき山の緑を見ませうと来たるに鬱々視界が濁る  
眼鏡店に磨かれて一点曇りなきレンズとなりし時の歎び  
眼が曇る視界の濁りやすき日は老生活を明るくさせず  
われ明るくところを清く保てども乱れに乱る視野の濁りは  
眼鏡店に買ひたる洗浄スプレーに泡だらけのレンズ拭き清めゆく  
レンズの汚れなら洗ひ眼球の濁りなら手術か等とおもひ磨きぬる  
雨を操り誑かすものを王といふプーチンは誑かすロシアの民を  
藁人形プーチンを神木に打ちつけて逮捕されたる紳士のありぬ  
監視さるる世のなか町の神社ながら歩み入り去るまでの映像しかと  
五寸釘二本打ち込む藁人形いつぼんはプーチンの顔写真の上  
藁人形に釘打つ呪詛が陽の明るき午後二時過ぎになされたるとは  
日本にて藁人形に呪詛さることなどプーチンはつゆ思はざらむ  
インターネットの網にかかりてメルカリの「藁人形金槌五寸釘セット」あり

藁人形見つつ好物の水戸納豆藁苞ふたつ並ぶを思ふ  
われと同じ十月七日誕生日のプーチンと知りあららとなりぬ  
YouTube の時代にて暗殺映像も幾つか残り動揺つたふ  
背後には眼光鋭き屈強の背広姿があはれ眼につく  
演説する姿ほかして凄まじき発砲音悲鳴どやどや物音  
二発目の発砲に落命せるといふ一発後の三秒揺れ動く動画  
その顔を見るも厭ふといふ一人たりしかどただに驚けるのみ  
救急車迫り来て追ひ越し消えゆきぬこれで三台目けふの国道  
われまたもひとりの面輪おもひいで朝霞駅入口交差点過ぐ  
この信号を曲れば君の住みあたる家あり忘れはしない一つに  
真にわが歌読みくれし君の亡くいつきに衰へさまよふ日あり  
穏やかに鎮まり行くか汗みどろに喘ぐ熱暑のこのゆふまぐれ  
優柔なるわれをはつしと刺戟してあははと君はわらひるたるを  
斎藤茂吉のうなぎの歌つて面白い、いつきかせいの君のもの言ひ  
信女といふ名に変わりたる写真のまへ茄子の馬ひとつ置かれてありぬ



熊みのしし猿カラスそしてゆつたりと輪をゑがく鳶も人間襲ふ輪をゑがく空より直に降下して人の手に持つ獲物をさらふ人間の八倍の視力に輪をゑがき飛びつづ人の顔視るとふ鳶は人間の八倍ならわが二十倍ほどの視力かあのトンビらはでこぼこに黄の帽子並び歩み行く歩道橋うへの小学生の列歩道橋少なくなれど小学生連なり渡る黄の帽子見ゆ歩道橋の下に横断歩道無く走行車群跨ぎ黄の帽子行く咳払ひたびたび聞こえ息子とはこまで似るか今朝もおどろく小川家の玄關脇に実をつけて美しかりきかの日の金柑

いつの間かわが庭に花かかげみし百日草は小川家の種のどかなる越辺川のぞむ家裏の柵の古木は小川さんの自慢かの日見し春の越辺川ゑみたたへぼかぼか暖かかつたなあ葉袋の白の部分にメモリたる歌そのまま最後の投稿

亡くなりしその日の走り書き一枚われに届けど君は世になし見本作り提案せし『関口正道・歌と写真』良き企画ながらお蔵入りらし

画眉鳥のこゑはこれだと聴かせくれ打てば響く野村氏の対応いつも

小学校五年生はひとつクラスのみそのまま六年へ進級らしもたびたび絵や作文に表彰状もらふのも生徒数少なきゆゑか「誑かす」の文字教ふればその婆にいたく叱らる煩きことよオミクロン株いよよ迫りきぬ四日まへあひたる孫の発熱の知らせ

濃厚接触あるなしを辿りからうじて危ふき時は逸れたる見込み発熱の孫は一人の部屋内に臥りてをるか今この時も

濃厚接触それも恐れて二年ほど過ぎたるが注意力弛む気のせりオミクロン株の今日の感染者数死者数より頭にこびりつくウクライナ戦火の死者数

停戦には至らず互に席を立つ戦争のをはらせかたは難し

一頭のカラスアゲハが蜜を吸ひ復眼黒き頭ちひさし

ぐにやぐにやと口器を絡め蜜をすふ蝶の豊かな腹部が動くオニユリの赤き花弁に触れまはる蝶の口器は伸び縮みして蝶の脚細かく動きオニユリの花撫でまはすさまに歩きぬ近づきてわが覗くとも驚かず蜜すふ蝶の大き復眼

復眼は何処を主に見てゐるか判らずキョロキョロしない蝶にて大型の蝶は動きのおほやうに花を離れてわがめぐり飛ぶ

蝶を見てころころにかぶ誰某の全くあらず夏日の真昼

先生が十糸子さんの死を言ひ出でて涙ぼろぼろこぼしたる思ふ中学生のわが映画に観し老婆本当は若い北林谷栄の演技

名をもたぬ「婆役」の何と多きかな北林谷栄の映画たどれば齡重ね再び三たび観ることありその都度北林谷栄に観入る

眼に焼きつく『ビルマの竖琴』の老婆あり『にあんちゃん』の老婆にも観入りたり

自が前歯引き抜き老婆を演じしとは知らざりき『キクといサム』の演技

『青い山脈』のなかの中年教師役あれは齡相応の北林谷栄

二十歳のころ河原冬蔵氏を訪ね見しは北林谷栄の美しき写真『阿弥陀堂だより』観しより二十年経たり老いて演じぬし北林谷栄

ハナニラの終り玉すだれ茎のばす毒秘むる草花おほきこの庭

食へる草毒含む草など言ひつつ引きゆけば楽し今朝の草取りやはらかくうるほふ種をひしと抱く胡瓜もトマトもしみじみ観れば

道違へはひり込みたる住宅地凌霄花と鬼百合多し

凌霄花の花盛りなる生垣の続きみてゆふべ何か騒がし

路に幾つも寝そべる猫あて車にもクラクションにも動きのろのろ

## 杖に立つ

「親知らず」の抜歯手術に顎骨の嚢胞摘出骨を削ると  
 病名に「水平埋伏智歯」とあり「ちえば」と称すを知ればいぢらし  
 足指のざらつき喉のヒリヒリ感麻酔の切れた身体に戻る  
 まちづくりプラザに響くトレモロに激しく緩く癒されてをり  
 土曜日の子ども教室学校の五日制実施に創出されき  
 ゲーム機をギターに持ち替へ音探る子等見守りし二十年前  
 還暦に赤の革ジャン靡かせるとしとやかなりし教へ子の言ふ  
 数ふれば四十五年切れ切れに覚えてゐます教室でのこと  
 「奥深い」児童福祉を担ひたるあなたのひと言じわり染み入る  
 里親の制度と意義を語りあるあなたのビデオに我も学びぬ  
 習はしを簡略するも毛筆に拘りて書く賀状の宛名  
 手の震へ端正ならずも墨跡に委ね良しとす賀状の宛名  
 冬雷の大会特集取つて置き飛び交ふ評に歌の生き来る  
 互選評全て記載し届けらる友の声聴き姿見ゆるごと  
 テレワークの続く息子と並び立ち何故かなりゆき厨ごと為す

くろだ えみこ  
 黒田江美子 (千葉県)

中華風洋食系は手際良く調理為したる息子と知りぬ  
 神妙に出汁の取り方尋ねくる息子の舌に我が味沁みたか  
 戦争がこんな風に始まつて何故止められぬ問ひの苦しく  
 花木の道満開となる七日間に軍事進攻激化の一途  
 朝な夕な都市破壊さる映像を子等見紛ふなゲームソフトに  
 三番瀬の土手に穏やかな日の続き杖突く人に花びらかかる  
 小刻みに河津桜の枝揺らし目白あちこちつき飛び交ふ  
 豊穡の大地息吹く気配無し蛮行の跡地図塗り替はる  
 戦争を憂ひコロナ禍危惧しつつ我が日常に光不足す  
 捨つる無く活用の術を思ひやり和服処分の大筋決める  
 大方の着物は母の見立てなり始末付くまで母を思はむ  
 小豆色に蔦の図柄の江戸小紋地味なれど粹母の意気受く  
 秋コートにリメイクするといふ友に大島紬と結城を送る  
 縮緬の薄桃色の訪問着三回り若き友に贈りたり  
 紫の比翼仕立ての絵羽柄は着付け教室に稽古着となる

起業すと後輩女性尋ね来て三年振りに熱き対話す  
 後輩の早期退職に合点あり生れし町への目論見聞きて  
 この町に生き居れば納得構想は「公民館のような食堂」  
 転倒の瞬間歩行障害に躓きて大腿骨骨折す  
 予期できぬ事故とはしかり即刻にふた月分の予定変更  
 手術待つ高齢女性の多きこと総合病院整形外科棟  
 病床に動けずにある患者みな携帯電話に似たこと伝ふ  
 杖に立つ姿を鏡に励ましてリハビリセンターにコトコト向かふ  
 ふた月に五キロ痩せたる細顔にモジリアのごと鼻の大きく  
 人工骨置換手術後はリハビリの施術強化に転棟となる  
 転倒の恐怖薄れず足すくみ歩行自立の回復遅滞たり  
 弾む声リハビリ病棟に途切れなく患者と職員相性の良し  
 我が地区と野鳥観察舎循環のコミュニティバス導入要望  
 コミュニティバス実証実験半年の予定に試行運転始む  
 十二席のワンボックスに鷗の囃コミニティバス地区内走る

三度目の全身麻酔の手術なり口腔外科に五日間入院  
 説明に緊張感増し黙すのみ十四枚の治療計画書  
 埋もりて緩々と菌を溜め続け智歯は顎骨に囊胞成せり  
 恐る恐る説明受けたる計画書手術後読めば懇切丁寧  
 専門医四名チームに為されたる診療システム有難きかな  
 歯科診療二十外来を擁したる大病院のころざし滲む  
 十歳より二十年経し拓也君ギターリストなり煌めき秘めて  
 十歳の土曜教室に始めたるギターの鍊成ウィーンになせり  
 端正な演奏所作と包まれるギターの音色に思ひ晴れゆく  
 十二歳の十五年後に祐希君「渋沢篤二」を演じてゐたり  
 校内の劇発表に裏方を仕切りたる君既にプロなりき  
 銭湯の番組出演場々と為したる君の開花勢ふ  
 意にあらざる字かすれ字乱るれど墨色に期す賀状の宛名  
 解け合はず登録無形文化財書道と私の鈍き握力  
 後発の白内障とふ再びの視力低下に意気地のゆるむ  
 半年前読書執筆優先にレンズ選りたる手術を受けつ  
 窮するも一年二年は瞬きと捉へ過呼吸治まる兆し  
 「変はれば変はる」主菜副菜汁物の整ふ夕卓息子の為せり  
 非人道に核施設への爆撃を恐れなく打つ信じ難しよ  
 指揮したる大國元首は常式か執務室より背広に映る  
 待ちおほす河津桜の咲き揃ふ三月十日も十一日も  
 万物の時に至りて清々し常軌逸する侵略者憎し  
 駄駄つ子のなだめ難かる無軌道の脳裏をよぎる文明はるか  
 五十年前内地留学の教師をり沖繩から千葉へバスポート持ち来  
 本土復帰の日留学生教師の号泣したるを今に忘れず

庭に来る野鳥増えたり珍しく今日は尾長に癒されてゐる  
 窓枠にぶら下がり朝の体操す軋動かず瞬時目のあふ  
 藤あやめと時節の単衣を着こなして着付け教室に若きら華やぐ  
 愛着の深きものから始末する手法に理あり納まり易し  
 主宰者となりて地域に根付きたる路地裏文化の進化目指すと  
 手放しで声かけ笑ふ年寄りの溢れみた町忘れえずとぞ  
 子と親と祖父母世代の寄り合ひて食も心も満つる場にならむ  
 高齢者支援に長らく携はる地域婦人の発起に連なり  
 分け難き期間を二つに分けて呼ぶ高齢者保険証「後期」はいらぬ  
 「歩けるよ」主治医の声に痛み消え人工骨頭置換術受く  
 骨粗鬆症の話題我が身に受け止めず骨は強きと思ひ込みあり  
 骨粗鬆症に優先したる歯科治療かの決断も大義の流れ  
 療法師のコミュニケーション力豊か施術に傾聴会話の適宜  
 六十年経てクラス会開催すと脳内掻きませ十五を憶ふ  
 クラス会の清澄庭園涼亭に身は不調なれど情の駆け行く  
 アンケートに実現目指し役員は協議会にて奮闘相継ぐ  
 コミュニティバス実証運行一年に採算取れず我が地区終了  
 スーパーの交通不便地支援策の販売車ルートに我が地区入る  
 メッセージ溢れ心のこもりたる友からの菓子缶愉しかり  
 江戸の粋進化させつつ変へぬ技菓子職人の意気地味はふ

## 風信雲書

棚に積んで荒れてゐたる画仙紙を十年ぶりに出せばしみ多し  
 条幅を書かんとして墨をする中国に買ひし硯を背負ひ来  
 一斗の酒を木島先生に贈りしは川又幸子先生なりしと聞きたり  
 夜目覚め眠れぬままに条幅の作を小指に天井に書す  
 柿の実の一部をつつき甘くなるを見定め鳥は食してゐたり  
 八十を越えれば超高齢と先輩賀状に添へ書きのあり  
 強き線やはらかき線ふくよかな線もありたり筆の線質  
 強い揺れに天井が落下するやうな衝撃を受け寝床に身構ふ  
 畝の間にびつしりと生ふるハキダメギク大根の葉と同じ背に伸ぶ  
 骨折の知らせを受けて入院の兄を見舞へずコロナ対応に  
 姪が兄の額に触れて見よと言ふひんやりと冷たし棺の兄は  
 朝食はお粥かパンに決まつてた二十回行きし中国旅行  
 愛用の硯の縁が壊れたり茫然としてはがれたるを見る  
 何を書くか四字の禅語の深奥な語句を書展の題材に決む  
 雨降りて滑り易くなる冬の畑にそつと歩きて大根を抜く

けんもく ひさし  
 兼日 久 (栃木県)

ブロッコリーの実が霜を受けきらきらと小さき水滴となりて輝く  
 年賀状は生存確認と先輩言ふ確かに生きて賀状を書けり  
 ホトケノザ ヒメヲドリコサウ丈ひくく春の先駆けの花咲かせたり  
 ロシアがウクライナに侵攻し新たな傀儡政権を作らんとする  
 国内で暗殺さるるの防御策警護四十人をつけるプーチン大統領  
 正月の賀状に明年は遠慮すると書きし先輩三月に逝く  
 94歳免許更新しこれからは畑に励むと好々爺言ふ  
 薄いためびつたりくつきはがれずに一枚出すのに苦勞す画仙紙  
 たつぷりと肉太に書ける顔真卿の建中帖に勇気づけらる  
 まだ開かぬ桜の蕾うす桃に大福餅のやうな肌見す  
 二羽までが育てられる限界か一羽のひなを落とすコフノトリ  
 桜通りの花終りたり花水木通りの花を見つつ過ぎたり  
 行書体で「冬雷」と書かる田口先生の一点一画に筆力こもる  
 悠久の雅号を使ひて六十年書作の末尾に雅号を入れる  
 現金を給料袋に入れてもらふ給与支給長く続けり

会津八一平仮名のみで書きにける毛筆の短歌読み易きかも  
 告身帖のハネとハラヒは独特なり生徒ら半紙に筆を運びし（顔真卿・建中告身帖）  
 砂利敷ける家の囲りに春来れば雑草生ひて種々の花咲く  
 照つてゐるのに雨が降り出す現象にただ驚きてワイパー動かす  
 諸物価値上がる中でただ一つ年金だけが下がったりけり  
 お互ひに巨体身体ぶつけ合ひ土俵の下に落ちる力士ら  
 毛筆で活字を手本に習ひたり会津八一の書道練習法  
 舞ひ降りたあなたの手紙を読みました「風信雲書」と空海の返書  
 シルクロードを旅せし時の便箋の敦煌賓館の一枚出てくる  
 連日の三十五度を越す暑さに腰をかかめて幅に向へり  
 墨を磨り一夜を経過し朝見れば宿墨となり墨色悪し  
 父67歳母85歳癌に死す二人を越えて吾は存ふ  
 新築の祝ひに貫ひし一位の木五十年ぶりに紅き実つける  
 砂利敷ける玄関前に降る雨は伏流となり道に流るる  
 十年前日本を抜きGDP二位の中国製品溢るる

をぢちゃん大丈夫ですかと問はれたりぎりぎり寄せたる駐車の女に

孫娘はたちになりて総選挙に投票すると意気込んでをり  
 コロナ患者ゼロになつた翌日は三人となり一進一退（本興コロナ）  
 まく種が多すぎたかなと思ひつ列よりはみ出す小松菜を間引く  
 共に勤め共に教へし教員のかつての同僚の訃報に接す  
 勝つ度に居酒屋に行き慰労会を持ちし学校対抗野球に  
 免許証を返納したる老人は不便と言ひて再び取得す

隣り家の主人が亡くなり奥さんの声高の話し庭に響かず  
 太鼓橋の日光神橋にカップルが手をつなぎつつポーズを取れり  
 顔面が冷え冷えとして寒さ覚ゆ師走の夜中目ざめ顔撫づ  
 庭に生ふる露の葉なべて朝霜に枯れて茶色に地に伏してをり  
 45歳迄教員試験の年齢が今年度より撤廃されたり  
 60歳迄受験可能となる今年教員試験の年齢緩まる

大会に親しくことはをかけたれし関口正道さんの訃報に驚く  
 去年八月二回目ワクチン受けたるが三回目注射の通知来たらず  
 オミクロン株またたく間に急増し県内千人二月に越えたり  
 去年三月売り切れとなりし馬鈴薯の種芋をことし一月に買ふ  
 一月の畑に残る大根を土は凍りて引けども抜けず  
 廃業のスーパーの広き天井より電線を盗む泥棒集団  
 小学校に勤務したる八年間音楽の授業も担当したり

ピアノ弾き童謡歌はせ音楽の授業を教へし新任教員吾  
 住む家をミサイルに破壊され逃げ来しと着の身着の儘のウク  
 ライナ女性  
 三月十一日大震災あり十一年2時46分に黙祷捧ぐ

鐘鳴らし売りに来る豆腐屋に鍋を持参し買ひに行きたり  
 大会に話をしたる関口正道さん朴訥温厚真実味あり  
 遠くでは白く見えたり桜花近くで見ればピンク色に見ゆ（マイヨシ）  
 一粒の種は大きく成長し数十の花芽を持ちたる油菜  
 天より雨静かに落ちて二昼夜も降り続きたりしととして  
 菜の花の茎には数多の種実り重さに耐へかね地に臥してをり  
 らふそくに水を温めミルク作るウクライナの母幼児のために  
 子供らと休み時間には遊べよと校長は言ふ昭和30年代  
 ポーナスを紛失せぬやう校長より早く帰宅をと話ありたり  
 給料が銀行通帳に振り込まる退職年の三ヶ月前に  
 ウクライナ人は今は幸福にひたるなしサッカー選手の試合前  
 に言ふ

離れ住む長男残したるスピード靴無用となりてゴミに出したり  
 八十を越える齢となりたるにかつての同僚の訃報目立ちぬ  
 胡瓜苗買ひ来て十株移植したり五月の寒気に半分枯るる  
 「ハナミズキ通り」の下に植ゑらるる皐月花開き二キロも続く  
 声出して歌ふことは稀になるコロナ禍のためカラオケ遠のく  
 相撲見つ土俵がもつと広ければ怪我は減るよと妻は言ひたり  
 アメリカの脱脂粉乳のミルク飲みし戦後間もなき給食の時間  
 ロシア国になびかぬと言ひて侵攻を正当化するプーチン大統領  
 合意したる人道回廊設けたるもロシアの砲弾ウクライナ人を殺戮  
 鴉一羽田植終れる田の中に足を濡らして餌をついばむ  
 顔面は雨に濡れをり胸像の鼻より雫ぼたりと落つる  
 ロシアがウクライナに侵攻四ヶ月誰も止められぬこの侵略を  
 父と母の生まれたる地に教員となりて生涯住みつきにけり

大の字になりて寝るはうれしきぞクーラーをかけ眠りに入る  
 紹介する高校野球の校歌には男性が歌ひ女性の声なし  
 軟投派と思ひてゐたる投手かなコントロールよく大きく崩れず  
 三角ホーでつつきやはらかき穴を開け妻が白菜の苗を植ゑ行く  
 一、二回は消毒せぬと虫に食はれ大根の芽は無くなりてしまふ  
 野菜ポットに一粒づつの種をまき苗を育てし十年前は  
 湯を注ぎ表面張力となる湯呑に舌を近づけすすり飲みたり  
 朝昼晩三度三度の飯を食ひコロナウイルスに負けじ三年  
 ボクシングチャンピオンの井上高弥パンチの応酬に顔に傷なし  
 夜目覚めこほろぎ鳴くを聞きながら床に臥しをり目をば閉ぢつつ  
 朱の色を一層引き立て畔道に固まりて咲く曼珠沙華  
 五打席連続ホームーの村上選手鋭いスイングと広角にも打つ  
 国土の三分の一が水浸しになりたるパキスタン山河決壊す

## 下手の長糸

こばやしよしえ  
 小林芳枝 (東京都)

動かねば動けなくなる体とはさういふものと友の呟き  
 師の家につづく覚えのある道は過ぎて筆供養する寺に行く  
 地下鉄がくると言ひゐし師はをらず森下駅のある交差点  
 寺庭を掃く竹箒さくさくと乾反る落葉を木の根に寄せて  
 黒塗りの盆に盛られてゆく筆の或る高さより左右に転がる  
 穂の先を少しひらきて並ぶ筆さばさばと元の白さを戻す  
 焚き上げを待ちある筆をじつくりと温めて秋の日は午後になる  
 代はる代はる炎に焼べてゆく筆の今年は爆ぜることなくしづか  
 敷石の落葉おほかた桜にて黄に混じりたるいくつかの赤  
 縫針に一本の糸通せず三度外れるけふの視力は  
 糸の端右手に持ち針穴に眼を近寄せて念ずる瞬時  
 糸通しといふ名の便利グッズあれど頼りは手近ないつもの眼鏡  
 座布団の縁の解れを縫ひ合はす振れる糸を解しながらに  
 在りし日の祖母の戒めのひとつにて「下手の長糸」は今の私だ  
 針の穴爪の垢重箱の隅些細なるものに譬へて人は学びき

針の穴見つめて見えてきたるものなけれど白き糸通りたり  
 赤糸に縫ひし運針が始めにて浴衣いちまい我も仕上げき  
 充分にひらきて反らす掌の細かな皺にひかりを当てて  
 苦労性の人に多いと言はれたる掌の皺いまもかはらず  
 温かさ程よき両の掌に頬を包みて本読みてをり  
 親ゆびに力を籠めてひらくとき起立してゐる四つの指は  
 幼き日ともに暮らしし祖母の歳越えて似てくる先づは指から  
 お父さんお母さん兄さん姉さんと呼ばれて指は五人の家族  
 直ちやんはこの指だねと言はれたる長女四十七歳になる  
 指先に力を入れてと掛声の聞ゆる健康体操教室  
 甲の皺てのひらの皺擦り合はせたつぷりと塗る保湿クリーム  
 茎と葉の間より出でて逞しく伸びゆく花軸ことしは二本  
 熱帯の気候にとほきこの部屋に胡蝶蘭のはな咲くけはひあり  
 華やかに祝ひの席を飾りたる胡蝶蘭わが部屋にも馴染む  
 窓際を定位置として心良さほほ保たれてゐるかもしれず

たつぷりとシャワーの水をうけながら大きくひらく厚き葉ひかる  
 太陽の光に弱いと知りながら朝いちばんの陽を当ててゐる  
 胡蝶蘭が咲けば見にくる友のゐて春をたのしむこの年もまた  
 昭和十九年八月二十一日と記入して懐かしくなる生れたる日は  
 四人姉妹の末子「みつちやん」母に似る気丈さもちて夫を看取る  
 妹の家に来るのは九年ぶり隣のキャベツ畑住宅になる  
 農家さんより手渡しに買ふ枝豆と茄子とトマトを一袋づつ  
 ゆつたりとソファある居間の奥の間の介護ベッドの源ちやん笑顔  
 芳枝ちやんちに泊まりに行くと言つたよね術後間もなく電話をくれて  
 又行くねまた来るねと言ひ合ひて別れし日より十四日後  
 古文書を読み解き今年も海外に行くよと言ひて澆漑たりき  
 始まりはこの年ならむ『作品年鑑二〇一八』秋ごろの歌  
 検査また検査に戸惑ふ歌ありて戸惑ひながらめぐらしてはをらず  
 セーターを編み上げて喜びあつたる歌思ひ浮かべてこころの温む  
 大会に会へる楽しみありし日の準備諸々細かな作業

朝の陽の差しはじめたる部屋のうち斜めに壁のしろくかがやく湯に洗ひ食べるのですと言ひくれし人亡くて朝の梅千ひとつ梅の実の豊かに実る木の下の歌会を思ひゑがほを偲ぶ  
 百日草が咲き始めたといふ電話ほんたうに嬉しさうだつた声温もりが自然に滲みでるやうな電話の声をまた思ひだす  
 寒々とゆふぐれてくるペランダに出でて一人の衣類取り込むこの部屋で今年も年越しするといふ子等を迎ふるもの買ひにゆく朝より重きからだを励まして為さねばならぬこと一つづつ  
 日の沈み暗くなりたる窓のそとカートを引きてゆく人のあり在りし日の友等入り替り立ち替りあらはれて歳晩の夜を覚めてをり

師を送り小宮氏を送りし十二月此度は四人の友つきつきと一年は大丈夫だよと言つてたね半月まへの電話のすゑに「切り替へてゆけ」と鋭き声ありきバレーボールの孫のサーブに日曜の朝五時の空うつすらと曇りみてリユック背負ふひと行く目覚ましより早く目覚めること多くなりて南の窓よりひらく肉厚の丸葉なめらかに光りみる薄紅弁慶今年は咲かずひとまはり身を太らせて球形のサポテンは子をまた増やしたり駅までの十五分ほどをコミュニティバスに合はせて出掛けむとする

徒歩きの楽しみなりし駅寄りの公孫樹の並木何時よりか無し  
 デイスカウントスパー前に野菜用の土積まれみて心のうごく膝ほどに伸びたる草をけふは刈る百円ショップのちひさな鎌でマンションの花壇の縁にびつしりと寄りあひてドクダミの白きはな咲く

ドクダミを干して飲みたる日のありき四十代のをはりの頃にわが鎌に切られてたふれたる草の放つにほひに囲まれてをり土の中に鎌差し入れて刈る草のたちまち萎るわれの周りに桃色の花を咲かせてゐる草もかまはず根本よりけふは刈る  
 四十分ほどに刈りたる庭の草詰めて潰して袋にふたつ魚売り場のまへの大きな台のうへつやつやと蒲焼の鰻ひと色土用の丑といふ日は明日かと思ひつつ鰻のまへを素通りしたり雨と晴れ兼用の傘大きくてけふは真夏の陽を食ひ止める  
 初物の桃は数日仏壇に置いてたのしむやはらかな色彼のときの桃の畑のあをぞらと摘花のまへの満開のはないつかまた行けたらいいな桃の花いちめん咲く彼の日の小道  
 四階の通路の端の油蟬脚をちぢめて固まりてをり  
 じふぶんに鳴いただらうかからかと少しの風に吹かれてうごく土砂災害警報といふ白き文字友の住む地を何度も伝ふ  
 半分に分かれて並ぶ大根の上か下かで少しく迷ふ  
 一尾入り二尾入り三尾入りありてひもじさうなる秋刀魚横たふ買ふ予定なければ高く積まれたる十個入り卵の特売に合ふ  
 人參と牛蒡があればさんびらを作る方式にまたも従ふ  
 カード一枚翳し支払ひする人の隣のレジで小銭を数ふ

さくらい かず え  
 櫻井一江 (東京都)

## 空間芸術

玄関の鍵穴照らすを振り向けば月光と並ぶビル工事の灯  
 手前なる14階ビルを優に越し58階建てビルの建ちゆく早し  
 まちづくり地上58階地下3階これ程までの未来は見えず  
 気がつけば晴海の高層ビル群も既に見えざり工事休みなく  
 地下駅の連絡通路のトンネルを掘り進むらしガス工事の知らせ  
 再開発のまちづくりの図表に我が町の便利さ受けむ空狭まれど  
 現実に戻る間の無き光の映像「空間芸術」なす善光寺境内  
 本堂の内陣の仏像つきつきに光の彩り受けて迫り来  
 闇の夜に柔き映像と鋭き線の光につつまる信州善光寺  
 本堂の右側沿ひに祖の上げし石灯籠2基の雪払ふ息子  
 スノーブーツ履かざる吾の危ふさに息子夫婦の助けの腕が  
 フレイルの予防に繋げる踵おとし鎌田医師自ら実技の披露  
 直ぐに出来いつでもできる立つたまま壁たて伏せは手指を立てて  
 オレンジの仏花のユリは戦場の炎の如き色にし開く  
 「赤紙」を知らず生き居る孫子らよ戦争無き世を守り抜くべし



矛先に家族の顔の浮かばぬや戦争進めるプーチンの心  
 二時間余都電都バスに舍人ライナー乗り継ぎ乗りて公園めぐす  
 日暮里の駅より初乗り舍人ライナー常行く谷中の墓地を後にし  
 舍人公園駅のホームに降り立てば広き公園眼下に見渡す  
 カメラ持ち葦の巡りに人だかり「緋水鶏」現るチャンスを狙ひ  
 満開の桜の下にゆつたりとランチタイムはシートを敷きて  
 ホテルより二十分余りを歩き行き大勧進の朝粥膳に  
 聞き居ればジビエの普及目指すまち鹿肉ロースト粥膳に並ぶ  
 コロナ禍に延長されるし善光寺の七年に一度の御開帳に参る  
 ドッグランに放たれ走る犬たちの自由なる行動あかず見て居り  
 生ひ茂る櫛を飛び出し椋鳥は群れなし声出し桜の大樹へ  
 今年度敬老大会の歌舞伎座の参加応募の案内届く  
 友と我「ペア申込」にて応募せり抽選に受かるか九月歌舞伎待つ  
 ウクライナ・コロナも収束先見え六月早くも梅雨の明けたり  
 58階の高さに近づくビルの窓西日を受けて眼光の如し

地下鉄に完成プリント張り出され58階ビルの分譲始む  
 一日に6千歩と課し足らぬ日の補充に歩む築地大橋  
 隅田川の終の橋なる築地大橋の先方に広がる浜離宮の森  
 東京湾へ向ふ船は遊覧船ガイドの声の漏れて聞こゆる  
 築地大橋渡りきりて右側に工事中なる築地市場跡地広がる  
 築地から晴海へ渡る環2道の予定は隅田川を潜る筈なりき  
 我がまちの署名運動成果なくトンネル案頓挫し高架橋となる  
 柔らかき絹を広げる如き波ゆるりゆるゆるる川のぼりくる  
 ライトアップされたる築地大橋の藍の光が川面を染めて  
 二胡古箏三味線尺八馬頭琴ピアノが入りて一つの音に  
 日中の六種の楽器それぞれに独奏合奏のゆるぎなき友好  
 モンゴルの青年奏でる馬頭琴大草原の馬のいななきを出し  
 蛇皮も馬尾の毛をも使はるる二胡の音こそ吾が好みとす  
 コンサートの会場なるは思はずも久々に訪ふ豊洲文化センター  
 富士山が見える等など八階の廊下に語りし歌会のメンバー

何処にも消毒・検温徹底し感染症対策しんげんの構へ  
ワクチンの接種も伴ひコロナ禍の感染ピークの下火の兆し  
何もかもコロナ禍ゆえと言ふなかれ外出少なき効用探さむ  
緊急事態宣言解除はされつつもすぐにはされぬ講座の再開  
細き枝を縦横に広げ咲く小菊花びら淡き赤むらさきの  
秋空の青きに白雲一直線を描きぐんぐん伸びて行くなり  
区道二本先に建ちゆくビルなれど58階建てに伸びに伸びゆく  
近隣の説明会コロナ禍に中断されたる儘に工事は進む  
なる様になるよと笑まひし幾人が説明会後すでに此の世に在らず  
年末に聞き慣れし「第九」の歌響く本堂からの音の贈物  
両脇を息子夫婦に支へられ雪化粧の階段上り行く吾  
つま先と踵を上下に動かして骨密度強化勧める鎌田式体操  
丁寧に静かに語る鎌田医師の頑張らない体操の続けられし成果  
三分の早歩き後は三分のゆつくり歩きの繰り返し効果  
バタカラバタカラ繰り返し類 舌 喉と口を鍛へる  
七十代の鎌田医師やはり九十になりてもスキーをしたいと語る  
我が郷の長野県下に元気なる長寿者多きは鎌田医師在りて  
頑張らず諦めないで続けよと単純体操の教へ確と受け止む  
接種券を忘れず持参と念押しに伝へて予約の電話は切れる  
窓口へワクチン予約に立つをみな指定日問はれ「いつでもい  
いです」  
はんべんにチーズを挟みバター焼き月命日の一品に供ふ  
戦争で泣くのはいつも民なるを語り継がれ来三月十日  
高架上を走るが故の舍人ライナー窓より景色の繋がり続く  
人工芝のソリグレンデに子等の待つ保護者と共に長き列なし

池端にイス置き坐して釣りをする大方同じ年配男性  
十メートルの回向柱の上部には前立本尊に繋がる白き布  
回向柱の布は五色から金糸となり前立本尊の右手中指に  
本堂の内陣参拝回数回叫ひて息子の観察つづく  
仲見世の店の開かぬ早き朝本堂に「お朝事」の読経聞き坐す  
参道に礼する我等に貫主さま数珠を振られる「お数珠頂戴」儀式  
本場公園の南北行けば園外の三ツ目通りにバス停四つ  
網を持ち「昆虫原っぱ」に少年ら腰屈めつつそり入りゆく  
チヨロチヨロと出て来る水の気配なき淀みにメダカの素早き姿  
濃淡の緑の恵み続くなか赤鮮やかなるアメリカデイゴの花  
たわなる梅の実青くマルメロの黄色の果実に香気漂ふ  
六月の月命日たる母そして夫は共に享年七十三なり  
六月の友の一周忌をそれぞれの電話に繋げ語り語らる  
年一度ガス機器点検契約の十五年経たるが故の変更  
釣り竿のしなりの如き形なしギボシの花のゆらりゆらりと  
六月の「花嫁御寮」の妹は福を持ちつつ今年八十歳を迎ふ  
窓を開け朝の空気を入るとき近くに蝉の鳴き声猛し  
窓際に寄りて見上ぐるその先はビル建設の窓の居並ぶ  
我が家より区道二本を越す位置に58階ビルの建設ラッシュ  
南方に劣らず東に58階のビル建つ説明受けしは六年前  
58階ビルの工事は日に日に進み空を覆ひて迫り来たりぬ  
満月の姿を見むと家を出で月探しする環境となりたり  
中国と日本の楽器がとけ合ひて日中友好50周年記念コンサート  
スーツ着て肩掛けカバンを重たげに第一研修室へ若き入りゆく

こほみほこ  
桜井美保子 (神奈川県)

## 夢を持ちつつ

歩きつつ路上にわが手の影うつす狐のかたちスワンのかたち  
影絵といふ遊びを誰としたのかな霧の彼方のわが幼年期  
影絵遊び数多の画像にすんなりと皮膚滑らかな若き人の手  
人差し指小指に示す鬼の角みぎてに覚ゆる舞の鬼の手  
舞の足そとまたに踏み羅生門の鬼と戦ふ束の間われは  
酒呑童子茨木童子脈脈と演じられ来つ芝居に舞に  
単純な操作のみなる機種が良しボイスレコーダーネットに求む  
ひといきに扇子をぱつと開く音わづかな不揃ひ録音されて  
数日の寒さに縮こまるアメリカンブルー今日よく照りて色淡く咲く  
汲み置きのみづ洗濯機にまづ注ぎ残りをアメリカンブルーの鉢に  
『短歌往来』一月号に芳枝氏の歌あり吾によろこび一つ  
プリンターに用紙挟まり慌てたり夜の九時過ぎ注意力足りず  
晴天の光まぶしく信号の色見えにくし二、三度確かむ  
煮物しつつ立ちたるままに読む文庫『続青南集』熊野那智の歌  
友三人うたを残してもう会へぬところゆきつつ此の十二月

牛蒡にんじん里芋切り分け常のごとわが手は動く悲しき時も  
 年ごとに検診受けて二十四年甲状腺の病起こらず  
 眼鏡外し鏡に映るわがまなこ少し変でももはや気にせず  
 地下鉄の出口間違へまた戻り案内板の通りに歩く  
 表参道お洒落な街の大通り歩いてみたいが病院に行く  
 検査結果大丈夫でしたと言はれたりまた頑張れるこの一年も  
 病院の帰りひとりの昼食はカレーパンと紅茶いつもの店の  
 イートインスペース広し卓上にペーパーカップの熱きダーズリン  
 まつすぐに帰らずに乘る銀座線母とよく行きし日本橋に寄る  
 防災の備蓄のカレー好きになり家のカレーを暫く作らず  
 十種類のカレーを夫買ひきたり一人前を二人で試す  
 レトルトのカレーの味が口に合ふ備蓄しながら食べて買ひ足す  
 地震あらば廊下が安全と話しつつ母の使ひし手すりにさはる  
 普段から馴染みたるもの備へおく海苔の佃煮ツナの缶詰  
 メッシュなる帽子の内側はヘルメットいざといふとき顎紐もあり

折畳みヘルメットあり進化する防災用品の価格は手頃  
 エレベーター乗りたる途端敷物につまづき瞬時に体勢直す  
 小粒納豆噛み具合のよくなしと言はれけふから大粒を買ふ  
 納豆の大粒あまり好まねど食べてみよう和小粒を買はず  
 「あと十年元気でご飯作つてね」夕食のあと夫に頼まる  
 植込みの若葉突き抜け昼顔の花ふたつあり夏が近づく  
 公園のブランコひとつに二人の子乗りて漕ぎ出す見てあるうちに  
 空爆に破壊されたるウクライナいつまで続くこの戦ひは  
 戦はねば国も自由も無くなると立ちむかひ行く強き心で  
 アルバムより外し送ると兄の言ふ若き日の父と母の写真を  
 出征を祝ふ集合写真にて軍服の父と丸鬚の母  
 丸鬚の母の写真もその髪を飾れる櫛もわが手に残る  
 パリパリの海苔を巻きたる握りめし予想の通り旨いねと言ふ  
 石垣の石のあひだに伸びる草なよなよ見えて芯強からむ  
 足元の草むらのそば歩くとき露草の藍いくつも光る

大根に包丁入るる感觸のやはらかにして旨い予感す  
 タイマーをかけて煮込める大根をときどき覗くパソコン離れて  
 大根に添へる味噌だれ甘味噌とも合はせ味噌とも言ひ方さまさま  
 味噌だれと言はず味噌にて分かりあふ大根食べる二人の会話  
 雪道に草履の鼻緒が足に痛し人より遅く歩きゆくなり

YouTubeに鼻緒の緩め方を知り両手親指に鼻緒をひろぐ  
 坐れずに立ちをることの運の良し車窓にくつきり雪まと富士  
 停留所降りて帰れる道すがら見上ぐる月の凍れるひかり  
 吹き抜けのホールに置かるるクリスマスツリー電飾点滅銀か  
 ら金へ

ランドマークプラザの大きクリスマスツリー煌めく電飾この  
 世の光

みなとみらい動く歩道に冬の風絶えず吹き来る胸の底まで  
 制作中の『柗の家』の表紙カバー画面に見せてもらひしわれら(小川照子氏)  
 御子息の撮りたる写真多きことも話題となりき校正の日に  
 わが知らぬ草ばな君の歌を知るパンパスグラス粗毛反魂草(関口正道氏)  
 「花の画像アップしました」ある時のメールはベニマイコの  
 花添付して

入会の切掛問へば冬雷のホームページと嬉しき言葉(野村昭一郎氏)  
 益子焼絵付とともに楽しみしひとときありき下野吟行(増澤幸子氏)  
 国外に逃れて出産したる人「この子の未来に平和があれば」  
 熱海行きの向かひの席の赤ちゃん(ミニ)扇風機の風に眠れり  
 扇子より使ひやすきか高齢の人も手に持つミニ扇風機  
 この夏の暑さは如何に携帯用小型扇風機を買つてみようか  
 ふた月まへ山藤の花ありし山けふは青葉の鮮やかにして

柗の古木の写真引き立ててタイトルの文字の美しき赤

吟行会上野の森に綺麗ねと落葉拾ひし増澤幸子氏

現役より退きたるもミシンの手入れ怠らぬ歌あり誌上歌会に  
 桜井さんも Mac をお使いでしたか！と弾むごときメール昭  
 一郎氏の

聞き取れぬ心配のなくネット歌会繰り返し読めると昭一郎氏  
 ブログサービス終了となり関口氏の「日日耕日」の去りゆき  
 しか

食事処にぬぎたるスリッパ消毒液に拭ひてくるる宿のスタッフ  
 湯河原に行きて一日留守したる間に鉢の薔薇三つ咲く  
 太陽光あてても動かぬ腕時計基準値といふを子の合はせ呉る  
 「引出しに仕舞つちやだめよ」なるほどね」初めて買ひしソー  
 ラー時計

新しきスマホに慣れず焦りたり友の原稿やうやくひらく  
 九月号の原稿スマホに届きたり手帳に写しパソコンに打つ  
 ホーム画面に表示されたるメッセージ確認したり二日かかりて  
 持物にて若返らむかスマホカバー花柄あしらふピンクを選ぶ  
 充電の間ぼろんと幾たびも音するスマホ何を知らずや  
 人差しゆび親ゆび荒れてゐる所為か指紋認証反応のなし  
 木陰にゐる涼しさですよと子は言ひて完全遮光の日傘を呉れつ  
 百パーセント遮光の日傘つかひたし曇り時どき雨の日続く  
 樹の皮を自ら剥がす百日紅つるつるの幹に触るれば堅し  
 緩やかなくだりと登りマンションの周りを歩く朝六時まへ  
 笛の如き囀り聞かせ生垣の画眉鳥一羽飛び立ちゆきぬ  
 この夏の花は終りと思ひたる柱サボテンに花芽が三つ  
 草履ごと被ふカバーに滑り止めあれど恐ごは雨の道ゆく  
 来てみよと夫の声してベランダに仰げる秋の半月あかるし  
 歩道沿ひの紙屑ひとつ今朝見えず拾ひくれたる人のあるらし  
 食量減らしちやいけないしつかりと噛む筋肉を鍛へておかう  
 ささなみに光差せるを綾と見し心に触れをり古典文庫に  
 一首づつすべてひらがな中世の和歌のデータを画面に覗く  
 広き庭にテント張りたる出前歌会小川照子氏を囲みしひととき  
 照子氏の笑顔と歌をおもひだす『柗の家』大切にせむ

しまだまさゆき  
嶋田正之 (埼玉県)

## ひまはりよ咲け

タンブラーのアイスボールに注がるオンザロックのスコッチの香  
 ピート香の口にひろがる芳醇をしかとうけとめ見るシャンデリア  
 薄暗き電球灯るカウンター振るシェーカーの心地よき音  
 田崎氏の描く浅間に魅せられて幾度となく訪ふ軽井沢  
 大胆な色つかひたる画家にして憧れやまぬ田崎広助  
 山多く描きし作家の絶筆となりたる阿蘇の前にしまらく  
 ニイタカヤマノボレの暗号過りたり敵地先制攻撃論に  
 裏庭の新居に息子ら移り住み共に慣れないコーヒータイム  
 サックスとギターの音色が身に沁みるひもじさを知る昭和の漢  
 友ら寄りマイク握れば裕次郎フランク永井サックスに酔ふ  
 雨戸引くところに必ず帰りくる雀の番といつも目が合ふ  
 白蓮を埒とすれども冬場には藪の垣根に引つ越す雀  
 吾らより朝は早よから目を覚まし一刻囀り何処へかゆく  
 蝶番の軋みに似たる感覚を腰に感ずる朝の散歩に  
 欲未だ残る生身をしばらくは大事に保ち夢むさぼらむ

小旗振り父と別れしあの日より瞬く間なり七十八年  
 子や孫に後ろ姿を見せるなど考へもせず七度目の寅  
 講習のテストにて知る動体の視力低下に齢を認む  
 三年を限る最後の更新と覚悟を決めて免許証受く  
 おほなるに東京タワーの天辺がくにやりと曲がる瞬間を見き  
 何思ひ散歩するかと不意つかれウクライナとは咄嗟に言へず  
 独裁の愚に侵されし焼け原に悲しみを込めひまはりよ咲け  
 紛争を好機と捉へ核武装を論じはじめる小声なれども  
 じわじわと身に迫りくる気配あり同僚後輩サヨナラ言はず  
 ひな鳥の嘴にも似たる筍の黄を見つけたる軽いときめき  
 筍に鋏振り下ろし息乱れ暫く動けず木漏れ日の降る  
 故郷の山躑躅咲く牧場にマスクを外す 緑さやさや  
 実家には寄らず裏山離れ見る嘗て遊びし安戸城址の  
 弟の訃を告ぐるごと唐突な不如帰の音に目覚める今朝は  
 お兄さんの電話の声に身構へる 矢張りさうかと宙を見上ぐる

我が背中を追ひ弟は「ふぞろいの林檎たち」等スタッフたりき  
 葉を一つ挿し育めば愛ほしも月下美人に花芽がふたつ  
 冬場には室内に入れ鉢包み見守りきたる三年がほど  
 瓜トマトもろこし実る畑を置き義弟は逝きぬ柵機の朝  
 口数の少なき義弟が心こめ淹れて呉れたるコーヒーの味  
 病む前に株分けくれし無花果を墓と想ひて朝の水遣り  
 月一度二十二年間欠かさずに共に行きたり義母の墓参に  
 うから寄り神主招く盆祭コロナと共に習ひ途絶ゆる  
 六月に逝きたる末の弟は神道選ばず樹木仏葬  
 透けるほど淡き黄花を来年の表紙絵として描く八月  
 反り返り先太りつつ夜を待つ月下美人にときめき止まず  
 午後の九時微かに震へ真白なる花開き初む観よとばかりに  
 真白なる美しき姿に相応しき優雅なる香を誰に届けむ  
 挿し芽より育て三年目の秋の月下美人と一刻一会  
 部屋中に香りをみたし艶やかな月下美人と湯上りの酒

浅間嶺の薄く雪載せ鎮もれる麓の小さき池の紅葉  
 カイツブリ潜りては浮く池の面は岸辺の紅葉映しさゆらく  
 鉄琴を手に持ち鳴らし夕食の開始知らせるホテルのボーイ  
 鈴蘭の花を模したるシャンデリア多分我より少し年上  
 滝描く千住博の美術館十周年を祝ふや紅葉  
 滝の絵を随所に飾り静寂な画面は誘ふ禅の世界へ  
 音楽と照明コラボの大壁画滝動くがに四分のシヨ  
 夜桜の揺るる風情を滝の絵に重ね映して観する幽玄  
 中軽の田崎広助美術館こぶし落ち葉の中庭侘し  
 自然光取り入れ穏しき展示室この日飾るは阿蘇のシリーズ  
 B29恐れし空は遙かなり見えざるものに怯ゆる現  
 脊椎間狭窄症の手術から十数年過ぎ腰疼き出す  
 再びの手術施す勇氣なく日々の痛みと向き合ひゆかな  
 見た目には強面なれど臆病な戊寅を宜しく頼む  
 二年とは髪薄くなり白の増し皺深くなる歳月と知る  
 人間の八欲のうち幾つかが最近とみに弱くなりたり  
 絞りだすチューブの青に黒と白混ぜて描くは逆光の富士  
 富士山の噴火予測を真剣に語り合ふ日の近づき来たる  
 死ぬ前に富士の噴火を見たしやと川又幸子宣ひたりき  
 如月の友引選び入籍の孫は父親の捺印を得て  
 嫁方に入籍すれども仕事での記名は嶋田の姓の儘とぞ  
 どれ程の残り時間かともかくも孫等の幸を祈り暮さむ  
 免許証返納意見を聞きながら西日の部屋に紅茶を啜る  
 高齢者講習を終へ帰ってくるサンバイザーに夕陽避けつつ  
 雨ふふむ土より路の臺出でて白花を持つ あの日重なる

葉の陰に目覚め何やら囁ける番の雀の今日がはじまる  
 黒焦げの戦車の下より緑萌えやがて広々麦穂戦がむ  
 郷山に動員をされ植多し杉花粉を散らす大樹の森に  
 橡の大樹の新芽の色が好き無骨な男に似合はぬセリフ  
 腰骨に異変ふたたび朝朝の小さな我慢を明日へ延ばす  
 庭先の薔薇は咲けども外つ国の独りの論理の砲撃やまず  
 白蓮の木に巣箱掛け鳥を待つ期待はせずに望むはメジロ  
 久々に逢ひたる友等とたわい無き会話楽しむ意味など要らず  
 大仏の建立を為し寺祀り痲瘡<sup>かじ</sup>恐れれて高祖祈りき  
 グラムマンの低く掠めし鉄塔が建て替へられて銀色の美し  
 先づ母に死を告げなむと墓訪へば老鶯のなく画眉鳥の鳴く  
 父の顔知らず生きたる弟は御霊となりて相まみゆらむ  
 下賀茂の神社辺りを遊び場に育ちし嫁の想ふが俣に  
 玉砂利を踏み下賀茂の境内を列なし進む朱傘の後を  
 晴天に社殿の朱塗が目に沁みる笙筆築の生演奏の  
 杯を交はし神前に読む誓書 我家の姓の終り見届く  
 白無垢を直し緋色に角隠し照れる姿を拍手に迎へ  
 八坂の塔借景にして披露宴舞妓芸妓の踊りを見つつ  
 京料理の粋を尽くせる品々に舞妓の酌の日本酒涼し  
 天井に屋久杉使ふ日本間のこの贅沢も馳走の内に  
 婚礼の京の記憶の幾つかを深く収めて目つむる車内  
 強烈な日射しに広葉の色変はり月下美人の花芽落下す  
 不注意を悔ゆれど既に時遅く地面に萎るる花芽を拾ふ  
 生ごみを肥料としたる土作り野菜はすべて甘味含みて  
 霊園の墓所の在り処を教へ置く息子夫婦と外食の後

墓石に苗字を入れず刻むべし 以和わをもつてたかたとす為貴と  
 御影石に四文字を置き玉砂利を全面に敷き香炉は不要  
 酷暑日の少し和らぐ朝の径頭上にうすく伸びる絹雲  
 花芽伸び喜ぶさなか萎れ落ち月下美人の表紙絵描けず  
 ひと日にて命を閉ぢる夏の花なべてか弱き薄手の侘し  
 三日月の影は見えねど呼応せる神秘の力あるやも知れず  
 この時を逃して成らじと目を凝らしスマホカメラに確かと収むる  
 スマホもて送る友よりブラボの返信来たる間髪入れず  
 次の夜も四個の花芽が雨の中膨らみたれば急ぎ部屋へと

たかはしせつこ  
 高橋説子 (栃木県)

## マーブル模様の空

繋がりを遮るものの増えゆきてアクリル板をこつんと叩く  
 かつ切りたる初雪かづらを山と積み鎌を洗へば征服感沸く  
 薄つぺらな昼の月こそ愛しくて仲間を探すやうに空見る  
 東へと走るとき常に目で追ふは筑波山なり姿やさしき  
 「捨てるのはいつでもできる」は間違ひと納得しつつ仕舞ふセーター  
 卒寿近き恩師を二年待たせての同窓会に十五人集ふ  
 言ひ出しつぺになりて実施のランチ会に卒寿を囲む古稀の面々  
 第一回独り者同士旅行だねと十年ぶりに娘と旅す  
 一人客を覚悟して観るドキュメンタリー地味なる映画にそれでも四人  
 眺めたき筑波の嶺が見えたなら追ひ越し車線を外れて走る  
 みんなみのうす夕焼けに富士山の常より近く黒くろと見ゆ  
 冷蔵庫を空からにするぞと五日間家から出ずに料理工夫す  
 大姑、舅、夫、姑と四人送りてわれ古稀となる  
 無症状の陽性の児に保健所の対処まるで無しただ家に居る  
 二週間の自宅待機をする児らに庭より手渡すクリームシチューの鍋

塔婆二本用意しましたと住職は住職なしの墓参にせよと  
 柚子の木の高きところに手付かずのひと塊の黄いろ今年も  
 白じろと明けゆく空の雲のさまマーブル模様をなして色濃し  
 麦の穂のほぼ出揃ひて雲雀鳴く本物の春に浸る畦道  
 西瓜の「す」猿の「き」月の「つ」せの札はせつこばあちゃんの「せ」と四歳児  
 丸窓の中に激しく踊りみて昨日のわれを包みたる服  
 コイン二つ入れて回り出す乾燥機ああこの中に踊るのもいい  
 昨日より空は断然その青を濃く深くしてけふ夏は来ぬ  
 話題なる業務スパーにわくわくとカートを押せばまた買ひ過ぎる  
 旅支度も無く無造作にウクライナの罪なき人が葬られゆく  
 臉をも透かし川面をオレンジに染めてはつ夏の朝日のちから  
 降りさうで降らぬ雨待ち待ちきれず鎌を如雨露に持ち替へてゐる  
 耳の奥で「電池低下」と声がする寿命わづかと言はれたるやう  
 高齢者実態調査の名簿きて吾が名ありたり「ひとり暮らし」の欄に  
 高齢者の定義が六十五歳とは早過ぎ多過ぎ調査しきれぬ

濾過されて楽しきことのみ溜まりゆくそんなフィルター脳に付けたし  
 さあ行くぞ旅のパンフをめくりつつ耳はコロナのニュースを拾ふ  
 旅をせぬ十年が過ぎ旅できるとき来たれどもウイルスの壁  
 青と黄のウクライナ国旗を意識したる服を纏ひてせめてもの応援  
 留守をする三日分の線香燻らせて鈴も三回旅が始まる  
 全くの一人の旅はもう無理かツアーに紛れ富良野を歩く  
 夫の名を墓誌に撫でれば湧き起るほんの一年前の黒雲  
 夫の名を今は撫でるのみ近き未来となり吾が名刻まれるまで  
 唯一の悔いは最後のあの言葉を遺言みたいと笑ひとばした  
 左利きは個性のひとつと五歳児の鉛筆持つ手を見守りてゐる  
 ホテイ草の下に十匹ゐる筈の目高を探す溶けずに居れよと  
 道端のエノコログサが一斉に微かな風にも白き穂揺らす  
 ワイパーを最速にして帰宅する封切り映画の余韻閉ぢ込め  
 墓地沿ひをスピード落とし走る癖けふも元気に生きてますよと  
 縦と横われはどちらの糸なのか夫なきあと生きて立つてる



一様にスマホ見てゐる乗客の一人となりて集ひに向かふ  
 幼馴染四人揃ふは二年ぶり横浜・越谷・佐野より古河へ  
 ずつしりと重きを託びて手渡しぬ「桜あんぱん」佐野名物の  
 落葉掻きを怠けてをれば木枯しは見事に庭を一掃したり  
 マスクひとつポケットに入れ歩き出すこの秋いちばん厚着し  
 たのち

園児ひとり吾に託して出社する子に紙コップの珈琲手渡す  
 「富士山が居ないね」と児は窓外に晴れなら見える白きを探す  
 ビービーと煙感知器の作動して鍋よりおのれに愕然とせり  
 三度目の中止は駄目とランチ会に変へて集ひたるいつものメ  
 ンバー

東京駅に落ち合ふだけで大変と娘は近場に旅先を決む  
 勤め先の施設の風呂に入れたしと友は持参の脚立に柚子とる  
 コンコンと庭から孫にクリスマスマスプレセント渡すわれ忘年会帰り  
 風あれど向かひて歩く昨日より千歩余計に打倒オミクロン  
 「オミクロン」と防災アナウンス流れ来ぬ十二時丁度市長の声で  
 節分は今日だ明日だいや今日だネットで見たと古稀の面々  
 不恰好な枝ぶりなれど咲けば良く香る紅梅の鉢を持ち上ぐ  
 四十年の間に四人見送りて「頑張つたでせう」と遺影をつつく  
 学校で感染するはお手上げとワクチン未接種児童の不安  
 ざらざらの児の手の甲に荒れ止めを塗りつつ今日の給食は何  
 晩年に好みし陶芸家の花器を桐箱より出す仏壇用に  
 四つほど赤き新芽の付きたるをよるけて手折る牡丹のひとつ  
 自らの頭にバリカン当ててゐる隣の爺さま庭に日を浴び  
 農道をマスク外して歩きゆく麦の穂たんぽぽ仏の座みて

「高齢者実態調査」なる表に吾の名も有りこの先ずつと  
 一向に進まぬ吾の冬仕舞うすき氷の四月に張りて  
 還暦と古希のあひだの十年の濃きを語りて小半日過ぐ  
 よれよれのセーターと共に携帯の古き会話の二年分捨つ  
 「鉢のままもう一年」が待ちきれず挿し木の紫陽花五本を地  
 植ゑず

ひとり旅の友のメールにああ吾も今ならと胸がざわめきてゐる  
 市長の名書かれある筈の立て看板ひかり反射し判読不能  
 黒々と土は起こされトラクタのタイヤの泥を掻き出す農夫  
 早朝の散歩でさへも怯みさうなほつ夏の日の中に出てゆく  
 朝まだき大き如雨露を持ちてゆく墓所の小砂利に除草剤撒かんと  
 刈り入れを待つ麦畑の広がりてまだ水張田の数の少なし  
 業務用大袋買ひて何とする独り居の古希の身には不似合ひ  
 早朝の散歩ルートに外せない墓所と息子の家の近辺  
 畑越しに必ず吠える大き犬を睨みつけるのも楽しみとなる  
 初めての光景は黄の傘さして登校班に列をなす児ら  
 立ち漕ぎに土手をゆく女子中学生のペダルの軋み大きく聞こゆ  
 覚えたての仮名を道すがら児は拾ふうなぎ そば うどん  
 きりんぐみ さの

高齢者実態調査に出会ひたる九十越えの笑顔十人  
 朝練に急ぐかジャージにヘルメットの女子中学生立ち漕ぎにゆく  
 夏休みの初日の校庭華やぎてラケットぶんぶん弧を乱れ描く  
 丸二年会へぬ仲間の日常の写真途切れずグループラインに  
 杖二本を操りて石ゴロゴロの登山道ゆくツアアの仲間  
 野菜刻み納豆昆布に麵つゆで初めて作る「山形のだし」

「山形のだし」食べたなら夏バテの身体に効きさうこのネバ  
 ネバは  
 気紛れに常とは別の道ゆけば空き地のひとつ消えてをりたり  
 植木屋を待ちきれず持つ高バサミ道にはみ出すものから伐りて  
 命日に取つて代はられたる感の夫の生日に大福を買ふ

たかまつ みちこ  
高松美智子 ☆ (栃木県)

二〇二二年 壬寅

コロナ下の制限緩みて動き出す人の流れと購買意欲  
貯りたるスマホのポイントチャージしてバーコード翳す電子決済  
補助線を一本引けば導かるる数学みたいな正解が欲しい  
髪みじかく刈り上げたる子にはにかみて上目遣いに我を見上げる  
テンポよく積み上げたる指が息詰めて十個目の積み木はそっと重ねる  
右の手のスプーンを左に持ち替えて器用にアイスを口に運ぶ子  
片時もブロック離さぬ五歳児は助手席にまずブロックを組む  
マスクの下に真紅のルージュの唇を隠しているよな目ヂカラの女性  
健康で働ける幸元日の朝に二升の赤飯を炊く  
手づくりの施設神社をしつらえて屠蘇を振る舞う施設の元日  
父の家に埃を被りし布袋様福の神として施設に招く  
堪忍袋を背に負いたる布袋様施設神社の中央に座す  
元日の日直当番を引き受けて年の初めの福笑いを見る  
子が三人巢立ちたる家に母さんとわれを呼ぶ声は九十五歳  
血を分けたる子より深き縁あると共に暮らせる三十七年

心配を己の外に据え置く性質が免疫アップのコツとも知りたり  
立春を過ぎて地面の緩みたる庭草をひけば土がほろほろ  
吹き溜まる枯れ葉を払い見つけたるベンケイ草のみどりの芽立ち  
結球せる白菜二列がそのままの畑の主の訃報知る朝刊  
顔を覗かす緑みつけて土を搔けばちから秘めたるスカシユリの芽あり  
クロッカスの清しき白を喜びいるわが頬に触れて沈丁花が香る  
新しき四月始まりの手帳買う今年も一年仕事をせむと  
「もう少し生きるのもいいか」つぶやきて車イスの人が振り向きて笑む  
自転車を習う幼に付き添う父が土手の桜をときおり見上ぐ  
みずからの身体の軸を捕まえて幼はぐんぐんペダルを踏みいく  
花びらにわずかにうす紅かくし持つ白き芍薬を仏に供う  
あの人が来ると賑やか華やくと老の会話をそれとなく聞く  
三轟山の椎の木立ちの緑に庇われ夏日の中をトレイン登る  
わんぱく広場トランポリンに影ふたつ五歳と三歳が弾みて遊ぶ  
目線を外しぼそりと呟くひと言に五歳の心の意外を知りたり

言葉尽くして伝えんとするまっすぐを子供らしさと思い込みて来し  
 お金より休みが欲しいと宅配便のいつもの若者汗を拭きつつ  
 高齢者のコロナ感染の深刻と介護の疲弊を身に近く見る  
 籠りいても楽しむ術を持つ人がカギ針で編むルームソックス  
 ひと匙の麦茶を含みて飲み下す喉仏の動きをじっと見守る  
 もうこれが最後と思うケアマネージャーの更新研修六日間に臨む  
 ベビーシートの安全基準を熱心に問いいる汝はもうすぐ父に  
 あと十日で臨月ですと張り出せる腹に手を当て安堵する顔  
 初産の期待と不安が入り交じる嫁に重なるあの頃のわれ  
 身籠りて母となりゆく不安の先に育み護る喜びのあり  
 「お母さんありがとう」が素直に響く父となりゆく汝が言葉より  
 言葉なくも連携確かな厨房の阿吽の呼吸にしばし見惚るる  
 半世紀を夫と切り盛る中華店で友の身に備わりたる阿吽の呼吸  
 「いつもの」と言いて出でくる担々麺は私仕様で人より辛め  
 霧雨に濡れて浮き立つ蜘蛛の巣の中央に動かず女郎蜘蛛の居り

雲のなく澄みたる空に今日三度北へと向かうジェット機見送る  
 初めてのフリック入力に戸惑いて小さき「つ」の文字を30分捜す  
 時を違えてキャベツの苗を植えたよと手にすしりの地元産野菜  
 それぞれに利き手あること母いまも左に包丁を握ることあり  
 生たらの白菜鍋が食べたいとこの頃夫の好みが変わる  
 うす氷張りたる元旦雪被る日光連山男体が顕つ  
 鍵盤に機関車トーマス走らせて二歳と五歳がけらけら笑う  
 背が寒く熱の籠れる一昼夜ワクチン三度目の左腕の痛み  
 副反応ある人無き人それぞれに施設入居者のワクチン接種後  
 根を肥やし株を増やせるスカシユリがあちらこちらに芽立ち  
 ておりぬ  
 こぼれ種に生えたるはるこ草と抜く手を止めてそのまま残す  
 値引かれし寄せ植えの鉢の花ととのえて肥やし施せばふたたび盛る  
 いささかの土をよろこび花植えるわが手に程よき十坪の庭  
 ブロッコリーの畑に次つぎ椋鳥が降りたちたるのち飛び立ちてゆく  
 三月の暦めくれば六月が顔を出したり三ヶ月先に  
 古き駅舎が取り壊されたる無人駅に改札見守る桜しろじろ  
 朝あさにつばみ緩むを楽しみて五月の五日ひとつめの花  
 六年目に授かりたる子をつか抱きて子は三年ぶりの帰省  
 を果たす

わが胎にともに育ちしふたり児が揃いて父となれる喜び  
 萎縮のすすむ脳と心か胸踊り心動くことの稀となりたり  
 ノースポールの白しずまりてタピオンの紫勢うわが庭の五月  
 白髪の男性ふたりが切り盛りする午前六時のセブンイレブン  
 レジを打つ品出しをするそれぞれに高齢男性黙々と動く

ありがとうの言葉たどたどしき男性の前職は何かと思ひめぐらす  
 共感とは程遠き理屈が返りくるままだまだ若いね六十八歳  
 働きづめの膝が限界越えたねと手術控える人に耳寄す  
 チリリンと微かな風を拾いたる江戸風鈴の在り処をさぐる  
 向かい家のみかんの枝に吊るされた江戸風鈴の涼やかな音  
 江戸風鈴と鋳物風鈴それぞれの音色を思いそれぞれに良し  
 四十度の最高気温をたたき出す佐野駅前にNHK取材  
 たつぷりと梅雨の雨を吸うこともなく今年の紫陽花は夏日に焦げる  
 重き水筒を首に下げたる一年生が日傘を差して登校の列  
 パソコン作業に首も肩も前のめり折り折り手を挙げ背を反らしている  
 それぞれの庭に水張りプールで遊ぶ新しき住宅地に幼の声が響く  
 余計なこと考えずに済むと指を繰り編み進めいく水色のソックス  
 花笠をくるりと回し持ち上げてマスク姿の踊り手が過ぎる  
 三年振りの花笠まつりのパレードは掛け声なくとも静かに華やぐ  
 コロナ感染に残業の続く宵の口庭の水遣りにひととき憩う  
 距離保ちフェイスシールド付けての事例検討マスクの下の顔  
 知らぬまま  
 七つの事例を持ち寄り集うグループワーク現場ケアマネー  
 ジャーの苦悩に頷く

ふたり児をともに抱えし十月十日が今の私の奥深くある  
 菜を刻む鍋に油を回し入れるそれぞれの手が機敏に動く  
 四十年振りの京都もひとり旅と友が待ちいる紅葉の時期  
 若き頃はアンノン族だったという友が主婦を勤めあげてふた  
 たびの京都

橘 たちばな 美千代 みちよ (新潟県)

## 欧州ぶどう栽培研究所

年ごとに手帳の色を変へ来たりつらき時ほど派手めの色に  
 来年は良きことあれと満天星ドウタンの紅葉色の手帳を選びぬ  
 降るたびに冷たさ増しゆく雨に濡れ満天星は紅葉きはまる  
 LEDの光に透きて揺れてをり瑪瑙のなかの太古の水が  
 耳もとに瑪瑙をふればさやさやとかすかな音たつ太古の水の  
 一万年前なる水を瑪瑙より採りて飲みしと長寿を願ひ  
 令和四年明けて届きたる年賀状なにか猫つぽい虎の絵多し  
 凍りたる路面よろよと右折して仕事始めに向かふ極寒  
 凍りつく渦に刺される矢のごとし枯れはて折れてあまたの蓮の  
 渦の面を漂ふつがひの白鳥のデュエットの声絶えることなく  
 雪の壁をはしる車の影を追ひ夜を帰りゆくぬけ殻として  
 大正の塗りの盃洗に水そそぎ底に描きたる金魚泳がす  
 雪の宿、丸大豆せんべい並びをり三幸製菓工場は火事  
 ヘリコプター飛び交ふもとに鎮火せる工場は建つ雪の壁の間  
 イーリアスの時代に逆行せるかこの二十一世紀に侵略戦争

平和とは勝ち取るものかウクライナ軍事侵攻に知るその脆さ  
 プーチンを信じ選びたるロシア人の愚かさの罪ウクライナ虐殺  
 見おろせる雪の斜面に杉林ありて激しく花粉噴き出す  
 訪ねきて草間彌生の巨大なる花の彫刻は雪に埋まれり(花咲ける妻有)  
 急に気温上がりていそぎ咲く桜つづくハクレン開花の連鎖  
 桜咲き開花の連鎖加速して発火しさうな気分をしづむ  
 咲き盛る八十万本のチューリップなかなる迷路に子らは消えゆく  
 まろやかに花開く赤きチューリップの内なる黒を見てしまひたり  
 二十年わが家のシンボルツリーたる花水木咲けり上枝枯れても  
 ひとりを救ふために医療者われら努め戦争はたやすく命をうばふ  
 水張田のみなもにあはき影なして整然とならぶ苗のさみどり  
 行くあてもなければ旅行ガイド見て予約サイトをしばしただよふ  
 山法師しろく尖りて咲くまひる色合ひ変る左右の目にて  
 二年あまりに同じワクチン四回を打つはさながら人体実験  
 炎天のひと無き渦のほとり行く先に羚羊がしんと佇む

立ち止まり動かずをれば羚羊もわれを静かに見つめてきたり  
 猛暑日のさなかエアコン故障とのメールに冷水持ちて駆けつく  
 いくたびも閃光に染まる空に蹶つ雲くろぐると魔界めく夜  
 家の前の道路は川のごとき水渦まく中へ突入し行く  
 日差あかるき外は颱風にひと気なくパラレルワールドに迷ひ入ること  
 コロナ禍に会ひにも行けず葬式も出せず納骨まつ義母に詫ぶ  
 優美さに惹かれ供華にとせる百合のつよき香りに責めらるること  
 暗き空に浮かぶ中秋の名月の左肩によりそふ小さき木星  
 木星に左肩より見まもられ中秋の名月ゆたかなひかり  
 新潟の土壤にあへて外つ国の葡萄を育てるワインにせむと(欧州ぶどう栽培研究所)  
 三十年の古木カベルネ・ソーヴィニヨンの実を採り食めばさはやかな酸味す  
 指ほどの幹なる若き葡萄の木ならば五年後の収穫まちて  
 ポットの頂いたガラスの管に泡立つは炭酸ガスなり発酵すすむ  
 発酵後タンクに樽に分かれ入り眠りにつくもワインの原酒  
 幼き日いく度か連れきたるワインナリーに初めて試飲す育ちたる娘と

うす青き早朝の時をしみじみと味はへるなり猫に起こされ  
 マロンパフェひとつを娘と分かち食ぶ快楽にしばし我を忘れて  
 耳鳴りによき自然音のCDといふを聞き夜耳鳴りはげし  
 子等あそぶ声とほざかり山の道枯れ葉のおちる音のみを聞く  
 わが満天星がんじ絡めに締め付ける鳶の根元をカッターにて断つ  
 手術受けややく退院せし汝の祝ひにすぎ焼きを食べしも遙か  
 すき焼きつてどんなだつたか忘れてたなど言ふに胸をしめつ  
 けらるる  
 好きなだけ食へよと肉を足しゆけり飢ゑたる猫に餌をあたふごと  
 開院の初日に患者あまた来て対応しきれぬは予想外なり  
 九人のみの受診に暗澹たりしこと思ひ出づ父の開院初日  
 わが歌に関口さんの最後の評たまはれるを読むただありがたく  
 『死と足る』を賜ひて文を書かぬなら返してもらふよと関口  
 さんは  
 岸寄りの凍れる処に集ふ鴨ゆけばいつせいに水に移動す  
 祭壇に解決ねがひ捧げたる赤き蠟燭こころに灯る  
 後出しにてスーツ規定違反などこのオリンピックの運営あやし  
 美と思ひたるはまぼろしドーピングにまみれロシアのフィ  
 ギュア色褪す  
 古道具屋に得たる大正の盃洗にゴディバのチョコを盛りて摘みぬ  
 煎餅を燃料にして燃えさかる製菓工場は巨大なかまど  
 すぐできるウクライナへの支援にと赤十字への寄付を急ぎぬ  
 侵略者に効無き決議採択し盛り上がるのみに原発は炎上  
(ザボリージャ原発砲撃)  
 対になり並びるあまたの母と子ら平和な午後のワクチン会場

母よりも背の低き子供ばかりなり九から十一歳のワクチン接種  
 怯えつつワクチンを受ける子ら愛し守らねばならぬ何がなんでも  
 戦争に人道など無し撤退せるロシア軍遺体に地雷をしかけぬ  
 三メートル越す雪に埋まりる花の巨大オブジェがわづかに  
 のぞく  
 十年前ほくほく線の車窓より初めて見しこの異形の巨大花  
 花水木しろく咲く下わが少年帰りきたりし十年前まで  
 だれもあざだれとも会はずはぬ昼さがりガラス戸にあたり来い  
 たびも虻は  
 同情でも折り鶴でもなしウクライナの真に欲しきものども  
 与へず  
 対ロシア弾除けにされひたすらに戦ふウクライナ他人事にあらず  
 ブラインド開ければ会へりいつせいにこちらを向きて咲く石  
 楠花に  
 成功体験乏しき汝があきらめずこの度成し遂げたるを祝はむ  
 後部座席をキーキの箱がすべりゆきあせりぬ大きくカーブき  
 るとき  
 ビスケット生地のは底はチョコにて固定さる気配りうれしこの  
 フルーツタルト  
 愛らしき子役から大人の演技派へのイニシエーションかいま  
 君はヴィラン  
 四回目ワクチン接種の五時間後このたびもきたり眠気と痛み  
 撃たれるまではセキユリティボリスがしつかりと護りくると思  
 ひふたりや安倍晋三元総理銃撃  
 政治的に決して賛同できぬまま安倍晋三氏の訃報に涙す

このやうな終はりを望みてはをらず斃さるべきは政治の場にて  
 これほどの憎悪を犯人が向けたるは宗教団体近しと安倍氏  
 三十二度湿度六十パーセントの部屋にてなにもまともにできず  
 コールセンターに電話繋がらず Web 予約せるも修理は二週  
 間待ち

八月の初め猛暑の日は暮れて雲に籠れる雷鳴やまず

猛暑日をやぶる恵みの雨ならず類なき豪雨に濁流おし寄す

柴犬あたる宿は離れの露天風呂流されたりと川の氾濫に

雲わけて青空ひろがり陽光のまばゆきに今颯風来てをり

過失にて園児ひとり死なせるも心いたまぬか会見に笑ふ

(川崎幼稚園送迎バス置き去り)

到着せる義母の遺骨を胸に抱き並べおく義父の位牌のとなり

やうやくに香り弱まる白百合は最後のつぼみ開ききらぬまま

土壌より赤はむづかし期待込め植ゑらるるアルバリーニヨ白

ワインの木

赤に白シャンパンと試飲してどれがベストと問はれつい赤と言ふ

角田浜の砂地に育つ欧州の葡萄より生るる淡麗な赤

なかむらはるみ  
 中村晴美 (茨城県)

## 檀家に戻る

ステンレスの流しの曇り気になると在宅の夫幾度も磨く

在宅の夫の新たな楽しみは地震に破れし壁紙修繕

壁紙をジョイントコーク一本で夫は補修す数日かけて

何事も無かつたやうに壁紙の補修されたり在宅の夫に

師走にて新たな株はオミクロン水際対策今回は速き

控へ目なクリスマスソング流れる店内ゆつくり距離置き歩む

腰痛しと姑自ら申し込むリハビリ兼ねるデイサービスを

姑の要支援二級の判定さる元氣に見ゆるも九十歳なり

姑の部屋を掃除機かけてる夫の髪は細くて白し

寄せ植ゑのプランター内の弱きもの花付くままに茶色に凍る

手の甲に何度も擦り込む保湿剤あきらめるは早し老化と乾燥

不意打ちの雪に慌てて外に出る急ぎ車へカバーを掛けたり

雪降りて白く変はりゆくを眺めをり暖かき部屋の窓辺に立ちて

徒歩圏にて小さき店でも有り難しノーマルタイヤ雪に動けぬ

わが家に光回線引くを決むりモーターワーク現実味帯び

電話線の管より入れたるファイバー線壁の中通りリビングに出る  
 電話線抜くことの無くそのままに光回線と新旧共存  
 コンビニに並べる酒は厳選かあつさり辛口新しき風味  
 姑の埋めたる大根掘り上げて今夜のおでんの具材となりぬ  
 原発を攻撃したるロシア軍まさかありえぬこれが戦争か  
 核兵器ちらかせての恫喝のプーチンの目のなぜか虚ろなり  
 電気代記録更新の冬となるいつも通りの生活と思へど  
 隣りたる東海村の騒がしく研究所事故の避難訓練  
 久びさの震度五弱の大揺れに棚に置きたる小物の落ちぬ  
 原発の決まり文句の異常なし夜中の地震も反応速く  
 ミサイルをまた飛ばしたる北朝鮮いつか陸地に落つる日あるか  
 べにはるか炊飯器にて蒸かしをり簡単レシピのネットにあれば  
 オープン後間もなきカフェは混みあひて洒落たランチは腹に溜らず  
 テレビでは格安スマホで節約と欠点あるもそれには触れぬ  
 二十年メールアドレス変へず来て今さらできぬ格安スマホへ

節約より小銭稼ぎが性に合う駐車場ひとつ貸すを始むる  
 薔薇盛る自慢の庭を動画化するユーチューバーの多さに驚く  
 こぼれ種の発芽したるかインパチェンス良き苗えらびポットに上げぬ  
 六月に三十五度の気温なりエアコン効かせ家に籠れり  
 電力のひつぱく急に言はれても外は猛暑エアコン止め得ず  
 老朽の火力発電所に支へられ電力ひつぱく免れたるらし  
 あんなにも夢中になりレスマホゲーム突然冷めてアンインストール  
 一時の涼しき日に気合ひ入れ草刈り機もち畑に向かふ  
 盆前に草刈り済ますミッシェンを滝の汗流し日の沈むまで  
 仏花の向日葵今年は早く咲き盆より前に出荷となりぬ  
 台風は盆に上陸の予報あり早め出荷の向日葵売り切る  
 姑の建てたる墓は山奥に道両脇は蓋無き側溝  
 姑は新興宗教の信者なり二世は拒否す夫とわれは  
 駅近き寺は先祖の菩提寺なり檀家に戻る夫とわれは  
 五輪塔の墓が良きかと夫の言ふ真言宗の檀家になりて

赤大根美味しと聞ける酢漬けとす漬け液すぐに紅色となる  
 菊芋の程よく枝枯れ出荷へと準備始むる初冬となりぬ  
 高騰のガンリン価格急落すオミクロン株の出現直後  
 患者数少なき内にと近辺の店へ通ひて買溜めをなす  
 海外のマスクを付けぬ映像に個人主義の弊害感ず  
 不意打ちに予報の外れ雪の降る久方ぶりに積もる雪なり  
 五日後も日陰の雪の未だ溶けぬ常より寒き年明けとなり  
 ワクワクと困る感情入り交じりまた雪予報シャベルを出せり  
 鍋鍋はこの冬初に知る旨さ再度注文スマホを手に入す  
 真つ白なキャンパスに見ゆ春先の畑は平らに枯れ草覆ふ  
 新しき耕運機は音静かなりリチウム電池二つ乗せ行く  
 ロシア産の紅鮭多目に買ひ求む暫く口に出来ぬ氣のして  
 ガソリンのいつの間やら値上げさる上がるは速く下がるは遅し  
 軒下のネット外せり苗箱の絹さや陽を浴び蔓拡げある  
 アブラナの蕾を摘むを日課とし花眺むるは未だ先とせり  
 納車には半年以上と聞かされて新車の購入先延ばしとす  
 つぼみ菜を庭の畑より収穫す毎日食すも勢ひ勝る  
 つぼみ菜を放置したる畑には一面に黄の花の覆ひぬ  
 昨年の秋に植ゑたるマートルの弱る葉上に若葉の芽吹く  
 高騰する電気料金に驚きて近づき来たる老後を憂ふ  
 芽吹きたる宿根草の塊はこちらの都合に間引き透かさる  
 ビニールに被はれ育つトマト苗細く茎伸び葉色も薄し  
 太陽に数日さらせば葉色濃し温室育ちのトマトの変化  
 紫陽花の蕾の固き関東に一番乗りの梅雨入りを聞く  
 試し掘りの馬鈴薯切りて味噌汁へ短く煮ても形の崩る

処方薬二種類減りて健康に近づく氣のす梅雨の晴れ間に  
 結局は火力頼りか電力は原発頼るは事故の恐ろし  
 通販に求めし小振りのギンバイカ無事冬越して白花付けり  
 はやくとも半年先の納車なり部品入らぬ事情のありて  
 姑の居間に移動の決まりたる最近放置の二階のテレビ  
 WINEの有無を基準に店決めしネット依存の傾向ありか  
 鳴り止まぬ雷と雨の続きをり頭上にあるは線状降水帯か  
 六月に夏の暑さの今年なれど盆を過ぎては衰へ知らず  
 緑内障の定期通院の眼科なりついでに求むるコンタクトレンズ  
 生体を模したる素材のレンズらし瞳に乗せるも使用感無し  
 目の周り明るい色に化粧せりたるみとクマを誤魔化す如く  
 アイクリーム朝夕塗りて対応す年相応の顔面なれど  
 遠近のコンタクトなれど文字ばけて話が違ふとパンフレット見る  
 台風の進路予報の右側に大きく曲がりこちらに向かふ  
 還暦の間近のわれは山奥の墓への運転負担になりぬ  
 駅近き寺の墓地にも空地あり駅二つ乗り徒歩五分なり  
 姑へ来春からは駅近き墓地へ移るの希望を話す  
 姑は反対なれど限界なり駅近き墓地を急ぎ契約  
 齢九十の姑に無理か改宗は今さら戻るは恥の極みと

はしもとふみこ  
 橋本文子 (鳥取県)

## 子に従ひて日々楽し

かねてより念願なりし出雲発観光列車「あめつち」に乗る  
 紺碧の車体は海と空の色景色も水と空と岸沿ひ  
 あめつちは因州和紙の天井と石州瓦の窓ぎは机  
 夕方のニュース告げたり白鳥の群れが本日飛来したりと  
 日の昇る位置南下して山暗く冬の六時は明け方遅し  
 空と海くつきり晴れて高々と鯨とイルカの風船泳ぐ  
 砂浜にビニールテント並びあて炬燵を囲む家族の見える  
 鉢に育つ小松菜間引き手にすれば我に伝はる育てる喜び  
 初詣の近き神社も雪の中氣をつけ乍ら境内歩む  
 折からの雅楽に心ひきしまり只ひたすらに平和を願ふ  
 日野川のをしどりを見に誘はれてあこがれの事心をどれり  
 日野川の暖流選びをしどりは冬日の中にみな睦まじく  
 板張りの観察小屋は小さけれどカメラ用窓口高低あまた  
 をしどりの美しいのが雄ですよ係の人の小声の説明  
 人間を気にせずをしどり日光と流れの中に静かに集ふ



御嶽海の優勝嬉し育ちたる県への思ひ我らは同じ  
御嶽海の中学母校「彬々」が校訓なりと新聞を知る

コロナ対策にスキー教室なきままに小学校の卒業式近し  
戦災の放映みては人間のわびしき思ふよき為政あれ

「安曇野文化」といふ本友から届きたり信州のこと只なつかしく

安曇の人心合はせて作るらし俳句と短歌の人らの写真

ブロッコリーに黄色の小花咲き揃ひ食物でない様子になれり

踊子草苗は四万十川の産求め育てて黄の花の列

人の命なんとも思はぬ為政者の思ひのままか世界かなしき

地に低く咲く苺さへ花びらを散らせて春の風強すぎる

トマト苗ぐんぐん育ち元気よくばあちやんとマト喜ばれたし

脇芽にてさし木するトマトもよく育つ農家の工夫今年もまねる

雨止みて野山も木々も鮮やかな野道を進む滝を目指して

れんげ草田毎にやさしき赤一面耕耘機には遅しき人

歴史ある天の眞名井の滝の音山に清しく心にしみる

滝の前に太く立派なるしめ飾り心も体もひきしまりゆく

滝の由来書き示す文字美しく地元の思ひ胸に迫りぬ

滝の横日の射す池ににじますのあまた泳ぎて小波の光る

宇田川の地区を流れる滝の水米子市もうるほす有難きかな

奈良事件今の世にもある事か只驚きてさまざま思ふ

山崎様七月二十三日百歳の電話のお祝ひ告げるも樂し

人類が初めて月面着陸を成しとげたる日のテレビ忘れず

島根県へ二家族にて行く山路とどこどこに山百合白し

島根県立美術館書展に人は多けれど話声なく誠に静か

書道いま暮しと離れてゐるのかと思へど立派な作品並ぶ

書の極みか読み得ぬ程の作品に活字書体の説明うれし

美術館南の宍道湖波光り幼らはしやぎ人々やさし

塩尻市の甥の電話にこの秋はゐのししと熊の出没ありと

そば畑荒らし池の魚も喰らふらしき熊とゐのしし里には来るな

我のため思ひもかけぬ展望車予約とれたり秋晴れの日に  
 皆生温泉百年記念ジャンボリー快晴の空水族館なり  
 葉の緑濃きキンカンの葉にかくれ実の黄色増す十二月なり  
 我が腕をしつかり掴み歩む娘よ信じて欲しい親の力を  
 新生児用おむつ束ねてリボンつけ風船つけてお祝ひセツト  
 米子市の古代の丘に幹太き紅梅咲きて青空に映える

全部見て又戻り見る人のあり腰かけてじつと見る人のあり  
 手のりインコを飼ひたればパソコンにのりて仕事進まずと  
 有明に畑持つ友語るには猿の増え方とても多しと  
 村の人おどしの銃声とどろかせ猿ども退散させられたりと  
 来年は有明の畑あきらめて松本の庭に野菜作ると

父親に抱かれ赤ちやん梅の花見つめて愛らし枝には雀  
 日本海の彼方に夕陽明るくてよい日だったと喜ぶわれら  
 ひもなしのマスクを客の顔に貼り髪カットする美容院の工夫  
 戦争が市民生活圏に及ばぬ様鉄則ありと聞きしが如何に  
 しやくやくの芽の出ぬ日々を案ずれど四月になりて勢ひのよし  
 今年又トマト胡瓜育てたく土作りせりミカンの皮埋め  
 料理すること忘れたる百合の根に芽の出で土に預けて安心  
 毎日の米のとき汁今年又庭の野菜にかけては暮らす  
 戦後にて東京に学ぶ兄のこと食糧のこと案じたる思ひ出  
 土日には郵便配達ないからと注意厳しき娘の言葉  
 置かれある餌有料の小袋を求めては撒く日陰に立ちて  
 参議院選挙立候補人物に会はず声聞かず投票日となる合区な  
 ればか

島根県鳥取県は合区とて参議院選挙文字に読むのみ  
 市議なりし友散歩中石握り「いつ政敵が現れても」と言ひき  
 家はなれ猫なつかしむか孫たちに送信すれば笑顔が見える  
 冬と春入院してゐた友語る「家で骨折自分の責任」  
 店々に指の消毒用意され帰宅後指先ピリピリ痛し  
 米子市の水鳥公園カマガモが生まれて親子が泳ぐ可愛さ

## アイスチューリップ

みずたにけいいちろう  
 水谷慶一郎 (兵庫県)

つぼみ一つ開けば伝播するさまに秋明菊の花五つ咲く  
 地下駅の階を上れば黄色の耀きひといろ公孫樹の並木  
 ビルの間に沈むひかりに耀ひていちやう黄葉ちるときに散る  
 朝雲の重なりうごく切れ間より微かに澄める空の蒼見ゆ  
 夜の風に葉むらあらかた落としたる桐は幹枝をつややかに立つ  
 色褪せて虫の喰ひ跡のこる葉を風なきときも落とす桐の木  
 昼たゆく路次を行きつつまさかりの金木犀の香に覚醒す  
 対岸の葦洲の穂むら白ざれて上げ潮の風に騒がしく見ゆ  
 寒風に香を吹きあげて川土手の斜りいちめん水仙の花  
 向きむきに黄の花たてて一斜面にラッパ水仙かをりを満たす  
 白と黄の水仙ひろく土手斜りに群植なされ賑ふ人ら  
 木の陰につね目立たねど石路は黄の花かかげ旺盛に咲く  
 尾頭つき魚喰ひつつ無意識に老眼鏡掛け骨の身せせる  
 真冬に咲くアイスチューリップの名に惹かれ万博公園の花園にゆく  
 「太陽の塔」立つ緩き丘園の斜りに色分けアイスチューリップ咲く

冬さなか咲きつぐアイスチューリップ乏しき園の彩り満たす  
 冬さなか八千本の莖たててアイスチューリップの花が耀く  
 寒き風の折りに音たつ丘園に八千本の冬チューリップ咲く  
 北風の冷たくすぐる丘の園アイスチューリップは開花を増やす  
 冷凍庫に培ふ球根を土に植ゑ季節の錯覚がチューリップを咲かす  
 畝ごとに色分けて咲くチューリップ冬花園の温かく見ゆ  
 庭園の丘の梅林品種ごと名札掛けられ七百本香る  
 花ぬくく咲けど冷風過ぐるなか梅は一斉に香りを飛ばす  
 けふ一日空は明るく花園の梅香に浸り去りがたくある  
 枝ごとに堅き蒼をたてゐたる辛夷はけふの暖気に綻ぶ  
 「男の子生まれました」と初曾孫の姿すぐさま写メにて届く  
 予報どほり寒の戻りか街空の遠き濁りは光をとぎす  
 川土手の石段くだれば水際の砂洲びつしり菜の花が咲く  
 潮引けば泥土のひかる川尻に來たりてまれに夕つ陽を浴ぶ  
 自生して植込みに蔓を絡めたる朝顔小さく花の色淡し

生れ出でて九十日の男の曾孫ひかりと音に即反応す  
 物の形分かるか否か人の顔ちかづけば微笑み向ける曾孫は  
 抱かれゐる曾孫を撮るべく構へればまなこ見開きカメラ凝視す  
 葉のしげり少し縮ませやまぼふし雨の降るなか緑さだかに  
 雨に濡るる葉むらの上に五つほど白際だててやまぼふし咲く  
 軽快に弾みをつけて階段を駆けゆく青年の足に見惚れる  
 ピアノを弾き吾子らに童謡教へゐし妻のアルトの響き思ほゆ  
 躓くな急かせかするな自らに言ひ聞かせつつ買ひ物にゆく  
 腰痛むは梅雨の兆しか椅子の高さ角度を調整なして日々ある  
 読書にも食事にも一つテーブルに椅子微調整して腰痛に耐ふ  
 大き葉を重ねて茂る若桐は夏のひかりに乾くを知らず  
 裏屋敷の大き蘇鉄の複葉を乱して朝より風つよく吹く  
 梅雨はやく明けて日照りのつづけども今年は蝉の鳴くこゑ聴かず  
 羽化半ばに絶命なしたる蝉いくつ庭木の根方に留まる哀れ  
 動画など撮られて成長する日々の曾孫の姿がメールに届く

ひよろ長き茎に幾つも荳つけ揺らめきてゐる秋明菊は  
つぼみ堅く揺らしてゐたる秋明菊の白花ひとつ開くすがしき  
掃かれたるさまに広がる筋雲の寂しき彩となりて昏れゆく

「敬老の日」の定めにて祝ひ金を市より戴く米寿の生曰

まだ若き桐の木ならば幾つもの幹の瘤より枝を広がる

別離したる人思ひ出で詩仙堂にひびく添水の音を侘しむ

風のなか表裏をみせて吹かれくる楓もみぢの落葉しきり

表裏みせて散りくる楓のもみぢ葉が土に重なりくれなゐ深む

石段の両側に積もる楓葉のもみぢふうわりくれなゐ深し

川土手の斜りの土を押しあげて白水仙の花むら香る

蒼青く立てて黄の花束ねたるさまに咲きつぐ石路の花

蒼き目のをみなも和服に着飾りて成人の日に写メを撮り合ふ

くすねたる金か六千万保釈金を悠然と出す容疑者のふところ

コロナ禍を怖れて籠る日のながく体力気力いまだ戻らず

優美なる花を咲かせて百品種二百六十本の椿の森は

どの枝も白花びつしり咲き垂らすしだけ梅かぜに揺れつつ匂ふ

築垣より高く伸びたる辛夷の木は枝それぞれに荅を立てて

裏屋敷に老婆ひとり暮らしとなり庭の花木を惜し気なく伐る

河川敷のグラウンドの砂を巻き上げて川より直に冬の風過ぐ

ぬくぬくと川洲に咲ける菜の花に紛れつつ飛ぶ黄の蝶ふたつ

触覚のやうにふらふら揺らしつつ支へなき蔓を伸ばすあさがほ

三度目のワクチン接種したる日は副反応の倦怠感増す

抱きたる腕のなかに身を反らし吾に微笑む曾孫こよなし

昨日より咲き初めたる山法師の花浮かび見ゆ濡るる葉むらに

旺盛に葉みどり茂るやまぼふし今年は六つの花に終りぬ

豊かなる泰山木の花の香に路地ゆく人は歩みを留む

一時間電車乗り継ぎ徒歩二十分紫陽花園までゆく体力いままなし

心地よくからだ伸ばせどすぐ屈む背骨の癖が腰痛の因なり

ひと握り餌なげ込めばあちこちに池の水押し上げ鯉ら寄りくる

就床に送られてきたる写メをひらき笑み満面の曾孫に対ふ

満ち足りて生きしか否かは判らねど多くは孤独に世を離りゆく

戦争を知らぬ世代はウクライナの戦禍ニュースを映画のやう

と言ふ

もりとう  
森藤ふみ (東京都)

## ひつじ草

二年ぶりウォーキングの友と会ふ十四名がラインにつながら

会へばすぐ話のはづむ仲間なり互ひの健康まづ確かめて

ゆるゆると十四名の後先になりつつ歩む木場公園を

紅葉にまだ早けれど風のなき日の暖かさ背に受けあるく

飯桐の赤き実今年は房となり見上げる皆の顔のほころぶ

散歩道変へてみようと大手町に向かふ直線道路をあるく

再開の東御苑に立ち寄ると大手門に荷物検査受く

庭園の池に葉の浮くひつじ草真白き蕾ひとつの育つ

橋に来て皆既月蝕見上げをり母の命日けふ十三年目

タブレットかざす少女と話しつつ皆既月蝕橋に見てゐる

子の磨きくれたるガラス戸開け放ち年のはじめの空気を入れる

ポアシーツ洗ひあがりベランダの竿にかければ湯気立ち上る

咲き初むるミモザを見つつ歩みきて黒きマスクの友と行き会ふ

十分に蜜吸ひたるかうぐひすの一羽飛び立ちあと追ふ一羽

木場公園案内してと言ふ友と弥生三日のひだまり歩く

満開の河津桜を橋に見つつひさかたぶりに友との会話  
 欄干に凭れてをれば春の日に眠気くるほど背の温まる  
 青空に枝を広げるミモザの木溢れるほどに黄の花の満つ  
 咲き初める白木蓮の張りのある花びら連なる運河に沿ふ道  
 スーパーへの裏道隔て千年の森と言ふ名のビオトープあり  
 築山の穴のひとつがカハセミの巣と教へられ眼を凝らす  
 巣穴より飛び立つカハセミ一瞬に水辺に止まり高く飛び行く  
 池端に寄れば泥水かき分けて鯉と亀とが顔を出したり  
 熊蜂のくろぐろ光る丸き体ホバリングしつつ橋にいくつか  
 植込みの草刈り取られ浜木綿のたわみたる葉の少し戻れる  
 紅白の花ひとつづつ咲き残る浜茄子に実のあまた色づく  
 著莪の葉にやはり木下を埋めつくす厚き緑の石路の葉の  
 木下おほふ石路の葉の濃みどりを突き抜け白き十葉の花  
 ヒツジ草生ふる池の面去年の葉にまじる新葉のみどり艶やか  
 日の差せる池に咲きたるヒツジ草ふたつの花を愛しみ眺む

直ぐに立つ菖蒲の花の凜凜と濃きむらさきは江戸自慢の名  
 明日茹でるカチカチ硬きひよこ豆鍋に水張りひたして眠る  
 ひよこ豆浸せる鍋を火にかけて忘れずにするテレビ体操  
 池水にそれぞれ位置占めひつじ草あさぎ河ほね黄の花輝く  
 コロナ禍の三年目となる今もウォーキングの会活動出来ず  
 これまでのやうな活動出来ないとウォーキングの会の解散決まる  
 ひとり来て竜舌蘭の花あふぐ友と見たるは十九年前  
 眩しくて天辺の花はよく見えぬ十年前の写真添へある  
 スーパーに日替りに来る販売車タオル傘靴扇子にスイーツ  
 自転車に友持ちくるる馬鈴薯は田舎の姉の作れると言ふ  
 貰ひたるおからをタベ子の煮をりスマホ画面のレシピを見つつ  
 強き日の差す植込みを一面のむらさきにして藪らんの咲く  
 ガード下のブティック街は人まばら空気ひんやり一休みする  
 先の目的があれば頑張れる青年二人話しつつゆく  
 壊れたる傘持ちくれば新品を買ふとき一割引くとのチラシ

候補者のポスターひらり剝がれ落ち雨に濡れつつ地面に笑顔  
 次の会は一人の友の体調の良き日になると解散したり  
 冬の日のあまねく差せる枯芝の本丸跡にふゆさくら咲く  
 大樺の幹を囲めるベンチあり今日は鴉も雀も鳴き声聞かず  
 大手門出でて歩けば濠のきは白鳥一羽近づきてくる  
 始発なる東京駅のバス停に到着を待つ二十分余を  
 ゆうべ湯に入れたる柚子のまだ匂ふ湯から出されて洗面台に  
 ビル前に門松飾らる紅梅の花咲く小枝のおまけを付けて  
 大ききの揃ふごまめの青ひかりせるを眺めてレンジにかける  
 ペランダに乾反りたる葉の散りをを崩れぬやうに袋にいれる  
 雪がふるひゆうひゆう風に煽られて自由自在に街を白くす  
 降る雪の止みたる夕べ凍るから明朝注意とテレビのニュース  
 検眼の終はれば医師の白内障進んでみますと手術すずめる  
 手術日は年明けてから片目づつと言はれいち月の予約をす  
 左目に術ほどこされてゐるらしく光のチカチカ点滅してる  
 眼帯の上に眼鏡をかけ帰る駅の階段手すりにたより  
 強力なテープに止める眼帯を外し鏡のわが顔をみる  
 大きくて重たき今日の白菜の四つ切りされたる一つを買ひ来  
 体操の教室参加者募集するスポーツセンターの案内入る  
 丈高き八重の白梅咲き盛りうぐひす居ると言はれ見上げる  
 うぐひすの番なるらむみつしりと花つく枝に見え隠れする  
 枯草のいまだ芽吹かぬ原つばに時計塔立つ銀にひかりて  
 カハセミの飛び立つ一瞬見むと待つカメラ構へる人の隙より  
 ひと本の桜に花の溢れ咲き今日の寒さに微動だにせず  
 蝌蚪ひとつ池の淵より出で来るを亀が狙ひて首を伸ばせり

エプロンの紐のボタンの取れたるを付けんとな針持つしばらく  
 ぶりに  
 六台のバスを連ねて来たるらし小学校の課外授業に  
 学年の混じるグループ運動と園内探索に分かれゐるらし  
 保育園児けふはまだ来ぬ原つばに小学生の動きのびやか  
 連休中稼働をしないクレインの滑車が宙に揺らぐことなし  
 梅壇の上枝仰げば薄らとむらさき色のつぼみ広がる  
 石垣に沿ふ坂ゆるゆる上り行く一年ぶりの東御苑に  
 芝草と白詰草の入り交じり丈低く生ふ御苑の広場  
 眼前の高層ビルの圧迫感そろりそろりと汐見坂下る  
 茹で時間意外に短く柔らかになりたる豆を冷凍保存す  
 冷凍のミックスピーーンズひよこ豆胡瓜も加へサラダにしたり  
 大手門に集まりきたる十名と再会喜びしばし歓談  
 咲く花の少なき苑内歩みつつ泰山木の一樹に寄りゆく  
 樺の幹囲むベンチに腰かけて仰ぐ上枝にかぜとほりゆく  
 例会に試しに来ればと誘はれて集合場所の新橋に行きたり  
 和やかな雰囲気のみな大勢で歩くは楽しく入会を決む  
 貰ひたる予定表にはチームごとの日時とコース細かく記さる  
 月二度の例会の他初めてのコースはチームで下見に行  
 会へばすぐ話のはづむ仲間たち解散の後も歩かうと約す  
 植込みの木々の間より浜木綿の花やはやはと開き初めたり  
 川べりの草生にひと本立つ百合の白き三つの花を掲げる  
 ふれあひ館バザー再開すると聞き押入れ奥のバッグ取り出す  
 ガード下のブティック覗きつつ歩く御徒町より秋葉原まで  
 店先を老若男女行き来する大方の人リュックを背にして

町川の橋よりバケツ吊るし下げ水を汲みをり年配の人  
 スーパーを出でて開く傘突風に煽られ一瞬おちよこになりたり

## 夕日のんびり

積りたる厚き落ち葉を踏み歩く子ども染みるも趣ありぬ  
 晩秋の落葉樹林はすがすがと隅々までに落日入りぬ  
 風の道告げるがごとく落葉流れ明日の日本の姿思ひぬ  
 山々を共に歩きし友は逝くたつた二十日の入院を経て  
 十二月八日知る人年ごとに減りて平和の文字はさらばふ  
 「聞く力」誇る総理の答弁に優柔不断の湯気が際立つ  
 推敲に力入れよと指導せし先生偲び「歌集」手に取る  
 いっしかに月は半ばになりたれば焦りが糧か歌と向き合ふ  
 雪中を飛び立つへりの音せはし何処の人か無事にてあれよ  
 髭を剃る回数へりてこれもまたSDGsか雪降れる朝  
 過ぎし日を連れて来たれるアルバムのセピアの色はカラーのブラウス  
 布マスクに希望者おほしと笑ふ人「こども食堂」視野にありきや  
 独善の正義仕込まるロケット弾ひまはり畑を徐々に焼きゆく  
 攻撃は同胞救ふ手だてだと病院・学校そして原発  
 プーチンのマッチ・ポンプの非情下に妊婦も逝きぬ手負ひのままに

たかし  
 嵩 (福島県)

やまぐち  
 山口

寒暖差おほき日々の続きたりフリース半そでゆるる庭先  
 ほろ苦き路の天麩羅春のあぢ今日は日本酒四合瓶買ふ  
 車窓より眺むる乗り場人気なく名所案内の文字は薄れぬ  
 羽前小松井上ひさしの住みし里多様のダリヤ競はず咲けり  
 何処より飛び来たる種か二株の青き堇に春をおぼゆる  
 射し来たる光を吸ひて片栗は暫しのときを反りて息づく  
 風やみて佇み見れば木々の間に安達太良の峰白く浮かびく  
 吾妻嶺ゆ降りくる風も和みきて姿ととのふ種まき兎  
 里山は花のリレーで彩らる片栗・瑠璃草・曙すみれ  
 原発に町の期待を込めし付け町政あれど町民もどらず  
 里山に沿ひて拡がる水田に映る雲影園児らのかげ  
 虐待を受けつつも母を慕ひてか「ママごめんね」と最期のあまえ  
 炎・酷の文字が飛び交ふ八日間梅雨時なれど雨は何処ぞ  
 水滴をとどめをりたる薔薇五輪香れる部屋に遠雷すがし  
 やうやくに避難解除の双葉町戻りたき人やつと一割

理不尽な銃撃受けし元総理モリカケ花見道連れに逝く  
糸状となりたる雨は地を打ちてたぎちとなりて石段ゆけり  
ときをりに烟る街並うかばせて走る稲妻いづこへ落ちむ  
西空に太き二本の雨柱炎天の午後の待てる一雨  
遠雷にあはせ来れる黒き雲いそぎ戻りてシート取り込む  
干し物の取り込みすめば降り来たる大粒の雨たちまち豪雨へ  
処理難のデブリ生じて十一月光照らす駅とコンビニ  
住民票あれど住まざる人多く原発作業者町の核なり  
反対が六割こゆる国葬儀そとに恥づかしああ美しき国  
人間の命に軽重あらざるも生き様映る東西の国葬  
縁側に活くる薄に月の影ほのかに想ふ歌ふ母の背  
小刻みにガタコト揺れる心地よき在来線に夕日のんびり  
強風に在来線は停車してザザザアと「やまびこ」行きすぐ  
肌寒き風吹き下ろす吾妻嶺に雪かづかねど冬はただよふ  
列なして都市部にむかふ送電線ときに纏れて車窓は夕ぐれ

木洩れ日の径はいつしか枝影を映しほそぼそ虫の声する  
葉を落とし陽光浴びる樹の幹に脱皮遂げたる空蟬ひとつ  
残照の空に掠鳥群をなし何処へもどるか寒き風ふく  
昨日まで枝に耀ふ花梨の実けふ庭先に仄かな黄色  
逝き人と語りしことに思ひはせ坂道くだる月影のなか  
理事長の不正知りしも声上げぬ学徒らに吹け六十年の風  
変りゆく街並いかに詠ひしか川又先生の歌集をたどる  
何を詠むか迷ひて過ぐるわが日々は川又先生の歌集読み継ぐ  
締め切りが近づくほどに退会の文字さへうかぶ朝の脳裏を  
まばゆき日うけて降りくる軽きゆき地には到らず千両へ消ゆ  
収束の兆し凍らすオミクロン自粛のガウンほころび広ぐ  
サックスを始めし孫の出せる音のびしろ多くと真顔で励ます  
大会へ出場めざす部活動孫のサックス出来が分岐か  
布マスクの無料配布に悦に入る庶民の気持知りての所作か  
ひさし逝き十二回目の吉里吉里忌マリウポリには白熱弾ふる  
デジタル化民の所得は透明化議員の収支は紙がベースに  
山径にまだらに残る雪島はひずみて黒き筋ぎざみを取り  
デブリ処理関連工場建設にまたもや掲ぐ地元貢献  
ウクライナを背に増防衛費もくろむか福祉費かさむと減額予算へ  
プーチンの侵攻策と重なりて大東亜共栄圏ゆらぎてをらず  
昨日までは水なき田には雲流れ雲の間合ひを水甌らゆく  
雨の降る畦道をゆく郵便バイクときに弾みて泥はねゆけり  
雪の日も定時散歩の二人連れ今日は日傘で極暑の日暮れ  
政権と党内事情が優先か国葬実施へ走る内閣  
ざあざあ降りくる雨はほぼ上がり暑さ募らすみんなの声

在職の長きをもちて元総理足跡問はずの無審査国葬  
何故なるか歳ゆくほどに遠き日の思ひつづらる就寝のをり  
国会を経ずになされし国葬儀右手の土手に鶴は舞ひくる  
国葬で奏でられたる「国の鎮め」岸田内閣いかに聴きたりや  
「儀」の文字の付ける国葬すみたるも愈々ませるT教団の影



## 落の臺

父母の齡を遙かに越えて直永らへゐるを不思議と思ふ  
 コロナ禍に人との交はり絶えて今心は重く二年が過ぐる  
 冬雷の月に一度の例会を何より優先にしたる若き日  
 歌ありて仲間がありて励まされ尊かりしよ五十年が過ぐ  
 昭和平成若く楽しき事多く川又様との数限り無き思ひ出  
 寂聴さん逝きてしまへり同い年なれば法話も聞かれずなりぬ  
 大きな見事な柿を姪持ち呉る干柿にせよと楽しみの増す  
 丁寧に皮剥き吊し並べ干す日毎に熟れて赤味増しゆく  
 陽に干され風に吹かれて乾きゆく干柿の前父母祖母浮かぶ  
 大山先生お嘆き如何にと案じをり冬雷の友四人失ひし淋しさ  
 関口様写真撮影得意なるべし数多く残し逝きてしまひぬ  
 自家の柚子「重かつたよ」と例会に数多持ち下されき  
 道沿ひに土手百メートルは続くらむ折々の季節報せて呉るる  
 大樹なる樟二本どつしりと常緑保ち励まし呉るる  
 柿の木に年々僅かの紅き実に遙かとなりし古里浮かぶ

やまざきひでこ  
 山崎英子 (東京都)

季くれば春女苑咲き十葉の白きが土手を埋めつくしゆく  
 水引草目立たぬ花と思へども土手を埋めたりほのか明るむ  
 楽しみは土手に数多の落の臺摘みて味はふ春の息吹を  
 吾が好み知りぬし母は鯖そぼろ芯の海苔巻作り呉れにき  
 久々に母に習ひし鯖そぼろやつぱり旨しなつかしき味  
 コロナ禍と風の寒さに籠りゐて園を歩めば溢れゐる春  
 石に坐しそつと辺りを見廻せばなづなは春を楽しみてをり  
 思ひきり伸びて直径五センチ程のなづなは小き花咲かせゐる  
 散り急ぐ花びら風に舞ひ乍ら水面に数多浮び漂ふ  
 コロナ禍に加へて悲し戦争の現をテレビは無惨に映す  
 「BYLGARI」の香水母の日プレゼント何より嬉しローズの香り  
 紅白の花桃鮮やかに咲きつぎて見惚るる人と並び佇む  
 園庭の程よき風に鯉のぼりふくらみ泳ぐに園児等の声  
 「山崎さん私一人位休んでも等と思はず続けて下さい」と木島先生  
 ひとり一人がさう思つたら本は出来ません休まない様にと

先生のお言葉守り只一度の休みなく五十二年を迎ふ  
 コロナ禍に体操教室一年程を休ましてしまひぬ怠け心も加はりて  
 久方振りの体操もまだ手も伸びる足も上がる頑張れと云ふ  
 百歳と書かれるケーキのローソクを吹き消す瞬時幸ひ思ふ  
 香港に住む人忘れず吾が誕生日淡き紫胡蝶蘭届く

「応援団がついてゐる何も心配せず長生きを」と娘と孫のカードに

八月七日古里は祭りか店前に神輿休めば振舞ふ酒樽

街路樹の百日紅の咲きつげば父咲かせぬし白き花房浮かぶ

コロナ禍と猛暑に怯え家籠り土を踏まずに幾日過す

土に佇ちてマスク外して深呼吸草木の匂ひ心ゆくまで

土手埋めて水引草は懸命に目立たぬ花を咲かせてゐたり

久々に娘が九州より来るといふ台風通過無事祈りつつ

賑やかに女三人揃ひたり何より嬉し元気な顔は

幸せに暮してゐると思ひつつ九州はいつになつても吾には遠い

九日間の幸せか又来るからと握手する又の日待たむ強き心に

九州に遊びコスモス高原に酔芙蓉咲く道娘と歩みき  
 人と人交はる事の無き今の世は曾孫の成長も動画に見るのみ  
 年々の甘柿楽しみて幾十年待ちてゐたりき季節の秋を  
 妹も一人となりて娘の家に過す日多くなりてゆきたり  
 柿の木の手入れする事無くなりていつかしつかり渋柿となる  
 見た目には富有柿かと思ふ程大き実をつけ数多が実る  
 冬雷の集合写真は当然として時折スナップショットも  
 知らぬ間のスナップショット送り下され思ひ出残る  
 富士の写真ま近く撮し大判に今も吾が文机の前に  
 いつの日も優しく物言ひ穏やかに接し呉れしを忘れません  
 数多き年間歌集にわが一首選び下され形見の如く思はる  
 わが仏壇に香たきて冥福祈らむ安らげくませと  
 いく年を形変らず大きくもならず柿若葉の美しさ待ちをり  
 いつの間か彼岸花も移りきて赤きが目立つ土手のあちこち  
 古木とみゆ紅梅三本花は満ち小き枝まで陽を受けながら  
 水仙はすつきり気品を保ちつつ花壇を埋めてさはやかに  
 植込みのミニシクラメン春の陽浴びて殊更紅の鮮らけくして  
 年々の慣ひの如く千鳥ヶ淵のさくらを見むとバスに揺られて  
 花未だ少し残せる枝々の若葉に混じり紅き蕊あまた  
 バスにゆく市ヶ谷辺り浮びくる三島由紀夫の精悍たる姿  
 拝める靖国神社にいく人の小学同級生祀られぬむか  
 道隔てみ寺の枝垂早ばやとさくら若葉のみどり鮮やか  
 柿若葉日毎に葉形大きくなりて輝く陽ざしに守らるる如く  
 樟けやきゆりの樹若葉の下をゆく若葉の香り浴びる心地  
 見下ろしの樟の若葉の盛上がる勢に元気を貰ひたり

俯きて歩みてをれば良き香り思はぬ場所にジャスマンがあり  
 嬉しくて花を見上げて思ひ切り香り楽しんで深呼吸いく度  
 花壇埋め咲きたる水仙葉を刈られ紐に結ばれ束になりをり  
 土手埋めて水引草の丈も伸び勢ふみどりを頼もしと見る  
 何事も億劫となる怠け心捨て去りて今日より心機一転とせむ  
 「いいですよ山崎さん」等と褒められ懸命の時間の早し  
 常々に「転倒イコール死なり」と云ひつつ迂闊エスカレーターに転ぶ  
 店員の大きな声に二階にて待ち呉るる人に助けられたり  
 大変な事になりたる思ひに心は重くでも平常に歩ける幸せ  
 ベッドにて上向き横向き支障なし後から何処か痛むを恐る  
 骨折も外傷も無く無事なるは守られぬと深く手を合す  
 何事も無いと思ひつつ急変恐れ不安に過す十日余りを  
 母云ひましき「薄紙を剥ぐ様に」と日毎快復するを背に感じつつ  
 一ヶ月過ぎ来て動作も楽になりもう大丈夫嬉しき元氣  
 花の命長持ちの技術進みみてフリザーブドフラワー魔法の花贈らる  
 つる長く伸びたる先に群れて咲く二十個数ふ凌霄花のオレンジ色  
 み社の藁のみどり青錆びて濃緑大樹に偉容を呈す  
 緑濃き大樹の揃ふみ社の樟の早みどりひときは目に立つ  
 手入れする人のあるらし小き花壇おしろい花囲み玉すだれ咲く  
 間隔をおきて十本紅白のゼラニウム咲き華やかなりし  
 夕刻に元気な顔を見た途端お帰りなさいと口より出でつ  
 苑の庭少し歩めば柿の木に小き実鈴生り彩づき初めて  
 花壇の手入れ懸命にする人ありてアザレアの美しさ植ゑつつ語る  
 ゼラニウムもつと増やして植ゑゆくと花好きの人限りなく

## 妹よ

秋深み葉の色褪せくる大櫟落葉まぎわにポリウムを増す  
 絶え間なく降りくる枯葉の重なりは忽ち庭の面を覆う  
 晩秋の日暮は早く庭仕事思うとおりに日々はかどらず  
 暴風雨に耐えて残れる一本の皇帝ダリアは五メートル余に伸ぶ  
 温暖なる日々の続けば次々と皇帝ダリアは花数を増す  
 霜月に入りて尚も花盛る「さすが皇帝」と仰ぐ人の声す  
 くろぐろと一夜の霜に終りたる皇帝ダリアのすがた無惨に  
 何時のときも微笑む面に慈悲深き言葉を呉れる純ちゃんは牧師  
 コロナ禍に貴重なる時間寄り添いて下さる純ちゃんに感謝充ちくる  
 樹々の間を透し射しくる初ひかり仏間に届き眩しく照らす  
 樹の間透く初日の光とうとくも天照大御神の軸に及べり  
 雨後の雪は大雪なれど日の差せば早々としてめぐり解けゆく  
 大屋根に積りたる雪折々にすべり落ち来て地響きを立つ  
 近頃は緑茶を好む孫娘わたしが淹れると湯呑みを温む  
 コロナ禍に苦しみ居る中ウクライナ・ロシアの戦争恐怖に戦く

よし だ あや こ  
 吉田綾子 ☆ (茨城県)

俄なる春のひかりの眩しさに目を細めつつ濯ぎ物干す  
 ウクライナ・ロシアの侵略戦争に太平洋戦争の甦りくる  
 五歳児ながら「空襲警報」のサイレンに唐黍畑に隠れし記憶  
 聳え立つ大樟の上をゆくB29の低空飛行を目当たりせし  
 百歳なる山崎さんの短歌には常に気力と情熱のあり  
 どうみてもどう考えても百歳とは思えず山崎さんに電話してみる  
 「こんなにも長生きしていいのかしら」山崎さんの確かなる声聴く  
 一枚のはがきに書かれた十六行の細かなる文字に心情の籠る  
 連休に孫と連れ立ち墓掃除こわごわ草引く孫の手やさし  
 墓処に先祖を崇める心がけをやさしく諭すひとりっ子の孫に  
 戸を練ればみどり若葉の香り立ち屋敷樹の囲う広庭しずか  
 おおらかに芝生に散り敷く蔓ばらの花卉はハートの造形をなす  
 長雨の止みたる庭をめぐりおれば至るところに赤紫蘇の生う  
 苛立ちは猛暑のせいか老いの身にじわじわ疲労の恐怖ひろがる  
 どっぷりと大地を潤す雨の欲し期する遠雷の音近付かず

朝夕に注ぐ井戸水浸みわたり紫陽花は勢い萎えるを知らず  
 施設でのリハビリ長き妹の不意の訃報にこころ潰さる  
 コロナ禍に面会なども儘ならず悲しみ越えて後悔しきり  
 斎場のホールに流るる「川の流れのように」妹偲び涙こみあぐ  
 朝を待ち確と鳴き立つひぐらしの声は屋敷の樹の間を通す  
 目立ちくる休耕畑地の荒廢化先人達の思いを偲ぶ  
 雨後の庭雨傘杖にひと巡り茗荷の花穂に明日葉見付く  
 チューリップの支えにしたる百日紅の小枝根付きて五年経つなり  
 根付きたる百日紅の支え木は広がり見せて庭の木となる  
 秋彼岸ゴーヤの幼実三つ四つ傍らの木槿に宙ぶらりん  
 草を引く芝生に潜める檜の実を並べてみたり幼のごとく  
 妹の初の彼岸は腰痛に甘んじ嫁御に墓参を託す  
 なかなかの利かん坊だった妹よ事のあるごとに恋しさ募り来  
 三姉妹の末っ子なりし妹は洋裁を極めミシンを踏みき  
 コロナ禍の真っ直中の入院に面会さえも阻まれきたり

雑草と見分けをつけず秋明菊のひとつすべて夫は引きぬく  
 僅かなる残りの根より生いて立つ秋明菊も茎はみじかし  
 櫻落葉に檜の実沈む庭芝生くま手を使い入念に除く  
 あたふたとタクシーにて来る検査の日CT技師の優しき声受く  
 国会議員の選挙投票は大切と未だ夫は棄権をなさず  
 五十五個の蕾をつけて堂々と高処に揺らぐ皇帝ダリアは  
 降霜の予報にそっと戸を操れば皇帝ダリアは衰え見せず  
 遂にきたる放射冷却遅霜に皇帝ダリアはいよいよ萎えたり  
 植物と云えど終えたる生命あわれ皇帝ダリアの片付け急ぐ  
 教会のクリスマス会に念願の純ちゃんと会い心安らぐ  
 門松の南天の紅実つややかに照りておれども寒風荒む  
 我が家の神仏に供える鏡餅ずっしりとして趣のあり  
 其方此方に自生の楓幼木は赤き芽の吹く立春まぢか  
 律儀なる庭師の夫妻は年明けの初仕事をば我が家の庭とす  
 我が植えたる二百本ほどの百日紅伸び放題ゆえ整枝を依頼す  
 極寒とコロナ禍つづきに封じこむ心を癒す五輪競技の映像  
 空を指し梢広げる大樺寒風の向きに逆らわず靡く  
 エンジンの音量落し定刻の午前三時に新聞届く  
 三回目のワクチン接種終えたる夜持病の腰痛とみに痛みぬ  
 孫娘の呉れたる錠剤飲みたれば鎮痛効果にたちまち睡気す  
 夜半しずかに降りくる雨を聴きいつつ春の近づく響きと思ふ  
 庭木々の奥処に立てる樺の木の高き梢が夕光に浮かぶ  
 空爆に燃えつづけたる東京の真紅の夜空いまだ忘れず  
 多忙なる息子の誘いに桜の花盛りの牛久大仏の山辺をめぐる  
 満開の桜の花の優しさを分ち上げたしウクライナへも

張りめぐらす芝生の中に芽生えたる虞美人草は超ミニサイズ  
 姑の好みし淡き牡丹の花命日待たず咲き終わたり  
 寒暖の激しき日々に屋敷樹は芽吹きに合せ古き葉落とす  
 夜の明けに鳴き喚ぎいる子ガラスを宥めるような親ガラスの声  
 庭隅の僅かな揺れに気づくとき蔓ばら一気に崩れ落ちたり  
 濃淡のみどりの葉茂る庭の木々遠目に優しカルミアの花  
 コロナ禍にながく沈める心にも明るさ少し罹患者減れば  
 記録的猛暑に褪せたる樹木の葉は吹く風のまま戦ぎてやまず  
 積み肥をつくり上げたるミニトマト熟す暇なく鳥が突く  
 わさわさと身の丈程に繁茂する畑の草に日々悩みおり  
 さるすべり植え在る畑に自生する榎の梢側道を覆う  
 異常なる熱気勢う生垣の際立つ徒長枝庭師剪り詰む  
 超過密の仕事熟す医師ゆえに息子夫婦は家には居らず  
 老いければ動作の鈍り物忘れすすみて何かわびしく思う  
 いち日の雑用熟し仕舞湯に浸ればじんわり幸せ満ちく  
 我が田をば請負い呉れたる青年は早々新米を重ねゆくなり  
 かすかなる秋の気配に純白の玉すだれの花一挙にひらく  
 支え木の百日紅の枝先に初めて咲きたる花の揺れいる  
 朝夕の急なる冷えに庭の花色の窮まり確と咲くなり  
 枝先に残る紅花保ちつつ百日紅はもみぢ黄葉散らす  
 腰痛に暫し遠退く庭いじり僅かな手入れに趣かわる

冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集

〈作品一〉

## 霖雨

望の月十三夜の月残ん月みえず過ぎたり秋の彼岸会  
 たまに便りする友の来て摘みたての葡萄をくるる種なき翠  
 叢に繁く鳴くとふ秋の蟲わが身の内に鳴く声を聞く  
 まさやかに出でたる普賢岳雲海に刻こく沈む静寂のうち  
 ニトロ・ペン舌下に入れて横になる職に付く孫みるまで動け  
 大き雲うすくれなゐに染めてゐる今日の日輪何処を渡る  
 老人性疣といふもの表れて嫌なマスクを広げ出てゆく  
 柚子風呂に入りて来たと人言へり夕餉南瓜の煮付のり来る  
 簞笥より着物を出して嫁と娘形見分けして笑ふ声する  
 この冬を凌ぎて春立つらしき道ぬらして雨の音たてず去る  
 唐突に現れ突如居なくなる蠅取り蜘蛛よ何たべてゐる  
 手押車に躰ささへて歩みゆく躓くまいぞと自らに言ふ  
 折れさうな心のときに頭はるる佛は常に身近に在せり  
 子よ孫よ老いを残すな垂乳根の言ひにし言葉なぞる会ふたび  
 皮鍼うつ足とぼとぼと歩みをり外面の雨を喜びながら

あねがわすえこ  
 姉川素枝子 (福岡県)

見下ろしの石路のいろ移ろへど詠みにし師の影きゆることなし  
 これの世に再び会ふ日はなからむか白寿の友去る熊本とほし  
 麦耐なめて溺死をしたる猫を読み羨しむ吾は酒アレルギー  
 終はりかと思ふ日快く目覚むる日重ねて九十三歳近し  
 不整脈の連発言はるる現身を常に助かる方に置いてゐる  
 明け遅き外面は芽出しの雨なのか冬木の櫛に注ぎて止まず  
 雨降ればカーテン開けて硝子戸の黄砂流るる様を樂しむ  
 ジャジャ馬とからかはれたる冬鳥師さうかも知れぬ私はわたし  
 度たびの発作に意識失ひし吾よび呼びてくれし看護師  
 覚悟せよと主治医に言はれぬと口ごもる息子よ言ふな分かつてゐるよ  
 小康を得て帰りたる施設には平戸躑躅の色あせて待つ  
 裸木の櫛の和毛若葉となり青葉となれる施設に戻る  
 娘帰り一人となれる臥所にて般若心経声に出だせり  
 気象かはる度に不整脈出づるらし雨の降る日を常に待ちゐて  
 わが側に寐ねし娘が帰りゆくカーペットクリーナー転がして後

寐ねてゐるベッドに伝言貼りてゆく夜に見護る弟のため  
 山肌を覆ふ白雲ゆるやかに形を変へて峰はなれゆく  
 見下ろしの四阿めぐる人のあり停まり屈まり時なきごとく  
 室籠る吾にくると拾ひ来ぬ小さき山桃のその熟るる実を  
 水無月は水の月とふ梅雨の雨少なく終はりて曇る日つづく  
 久方の雨やみたれば息子来と吾は待ちをり待たぬと言ひて  
 冬鳥師にもらひし踏平は息子の名歌の友どち孫の名とせり  
 垂乳根の植ゑにし鬼百合傾きて咲かねばならぬといふごと蓄む  
 戻り梅雨の雨やみたれば蟬の鳴く猛暑まうしよと繰り返しつつ  
 われの物捨てらるる日はいつならむ母の教へし輪廻転生  
 明日くるね扉を締めて帰りゆく息子の靴音ひそかなるおと  
 廊下歩む息子の靴音離りゆき寝巻に替へて咳をしてゐる  
 冬鳥師にもらひし種のこぼれつぎモミヂ葵の一本の紅  
 紅あかと燃ゆる五弁花息のみて眼をおくる一日のいろ  
 眠れずに苛だつ今宵拝みゐる千手千眼観音菩薩

蟬なかず秋津すくなく移ろひて窓を開きて澄む風を吸ふ  
 戯言に笑ひ別れて明日の無きことのあるべし人や吾やも  
 蟬きかずわたらふ秋の芝草に蟋蟀なきて家を恋ほしむ  
 天高く雲なき朝海に浮く島原みえず見えぬ日多し  
 有明海隔て聳ゆる普賢岳ときに頭はる藍の色濃く  
 山法師の実は甘いとて手の平にのせて貰へりその小さき実を  
 芝草にのれる落葉のいぶせきに掻く人のなき施設のくらし  
 巢を作る屋根減りゆきて雀らの後の少子化あはれみてをり  
 漱石の「赤毛布」の句碑あるといふ耳納山並あき朝のかけ  
 「おかあさん」と呼ばれあいよと吾応ふ日本語うまき配膳女  
 ひたすらに足動かして道よぎる団子蟲の魂愛しみて待つ  
 幾日を樂しみあたるくれなゐの散りて失へり庭の一本  
 歌の友のぼりたるとふ駒ヶ岳「ブラタモリ」にその影を見る  
 尿酸値高きわたしに柳川の鰻に行かむと誘ふなかな  
 面会解禁知らせてといふ手紙入るたまに見に来る郵便ポスト  
 坐禅するつもりで写経たちまちに雑念おこりて脱字してゐる  
 そここの痛みは生きてゐる証わが家の硝子入る日優しも  
 年どしに来てゐし冬鳥おとづれが花なき庭を野の猫歩む  
 吾のしてゐし事を嫁のせり親子となりて年古りて来て  
 紋のある着物は嫁に渡るらし一つの重荷軽くなりたり  
 新年の料理を食べて帰りゆく娘は一人別れを言ひて  
 庭師と話す嫁の電話に安堵して施設へ戻る子に送られて  
 空を飛ぶ車の見ゆるはずもなく夕さりゆけば紫に見ゆ  
 硬貨二枚入れて二時間待ちたればひどく疲れて衣服とり出す  
 襦袢を捨てに来たれば幾つか入りてゐる言はねど悩みてをら

む人らも  
 風呂上がり湿る躰に微風あつ人に頼らぬ幸せのあり  
 辛きこと耐ふるばかりと歎きたる日は淡あはとなりていとほし  
 長江を下る孤帆を送りにし古人思ひて友と別るる  
 隣りあふ患者に忙しさうに来て化粧の香り残してゆけり  
 卒業祝渡して安堵する程のほどなき紙幣孫に包めり  
 幾月を過ごしたるのか声かすれ戻さむために歌ふ黒田節  
 減らず口互に言ひて一つ室に寝ねし娘が帰りて行けり  
 庫に冷やす水道の水旨いとて飲まれし冬鳥師よ旨いですね  
 西風に流されてゐるパトロール車狙ひ定めて下だりて行けり  
 赤色灯点滅してゐるパトロール車狙ひ定めて下だりて行けり  
 幾日か居ればうるさき娘帰り心臓なで寐ぬる他なし  
 ママごめんねと餓死の幼が言ひし記事また思ひをり目蓋閉ぢて  
 風呂に入る為に戻れる吾の家息子こゑかく無事かと言ひて  
 これの世に息子と同じ名に呼ばれる若者二人真幸くあれよ  
 車椅子押されて来たる青芝生歩む人なく見む花さがす  
 鳴き終へて飛び去る蟬はせみなりの故あるならむ知らずともよし  
 勢ひよく扉たたきて息子来る足音待ちてゐたとは言はず  
 感性を司るのはどこならむ知りてどうなる眠ることにす  
 なほ生きて生き存へて世に残る一首の歌を得て終はりたし  
 友どちの歌を読みみて涙わく涙かわける老の眼に  
 生きの命あれば悩めること嬉し惚けの頭たたきて許す  
 欲しいもの無いかと言はれ惑ひつつテンセルの上着一枚洗ふ  
 杖つきて木の根踏みゆきし熊野なる古道の同行誰なりしかな  
 ほの暗く幽かな本宮に人の無く幡の八咫鳥見下ろしてゐき

いいじまひさこ  
飯嶋久子☆ (茨城県)

## ふりかえる道

盲の友らに優しき声よとおだてられ声のボランティア四十年過ぐ  
 新しき機器に慣れずに人頼り声の市報の作業齒痒し  
 録音室への足は車に頼るのみこの頃運転臆病になる  
 我よりも十も若きメンバーに惜しまれ辞める今が潮時  
 五時になりストンと幕を下ろすと暗くなる街そろそろと行く  
 閉館後の美術館にてコンサート娘に誘われ着替えを急ぐ  
 美術館のエントランスホールに聴く三重奏大空間に響き渡る  
 ドライアイにさす目薬の冷たさに雨戸を練れば庭に雪積む  
 二十年忘れられ居た掻い巻きは冬の陽を浴びふつくり温し  
 生き甲斐の如く針持つ母なりき明治大正昭和を生きて  
 母逝きし歳を追いつく我なれば夜々に夢見る懐かしき日々  
 何気なく流るるテレビの映像に六十年前の思い出映る  
 南極へ発つ水産大海鷹丸見送る群れに吾も居りたり  
 「幻の発見プロジェクト」に見いだされ六十年ぶりの放映なると  
 六十年余歳重ねても淡き思い胸を浸してほっこりと居る

成田への夫の足を守らんと四十五にして免許取得す  
 往きはよいよい帰りは恐い暗き夜道を一人帰りき  
 よくもまあいろは坂を登りしよ奥日光の花を求めて  
 三人の娘にこんこん諭されて免許切れにて運転止めると  
 無事故にて過ごし来たりし歳月を愛おしみつつ車を放す  
 三日月と明けの明星向かい合いあけやらぬそら深き藍色  
 いっしらに母の口癖つぶやきぬ湯に浸りつつああ極楽と  
 二年越しの約束今年は果たさんと国立駅に4人が集う  
 あの日から六十年ぶりマスク越しあなたはだあれ声にて探る  
 八十代の吾ら皆公平におひとりさまとよばれる身となる  
 海近く小高き丘のみなと公園百八十度の視界ひろがる  
 東には太平洋の果てしなく西にはるか紫峰のかすむ  
 悪夢の如きキエフの映像流るれば娘は辛いとテレビを消しぬ  
 ウクライナの大地を埋めて輝ける向日葵見たし平和の世界に  
 常ならば優しき父や兄ならん狂える指導者に迷える兵士ら



朝露に濡れて光る茄子を手にしみじみ眺む滴る紫紺を  
 嘗て水戸にキエフとう名の店ありき今懐かしむボルシチ、ピロシキ  
 店内に低く流れる歌声は思い出深きロシア民謡  
 突然に眩暈吐き気に襲われて脳梗塞の再発かと恐る  
 外郎売早口言葉に唱えたり呂律はまわる腕の麻痺なし  
 危険なる暑さを告げる画面には日本列島赤々とあり  
 ウクライナ支援せんとのチャリティー展数多の小品壁を埋めおり  
 何方かが購入下され思いがけなし会場からの娘のライン  
 貧者の一灯お役に立てば嬉しいと笑顔マークのラインが届く  
 されば母も貧者の一灯捧げんと優しき薔薇の絵購入決める  
 女王の崩御の知らせ聴く午後招く如き大き虹立つ  
 数々の疑惑解明せぬままに日本の国葬実現するらし  
 どんなにか暑かつたらう千奈ちゃんは水のみ干して服まで脱いで  
 草引きを怠る庭に秋の虫漣のごと鳴き続けおり  
 人去りて廃墟となれる草むらに真紅の薔薇の一輪残る

冬に入りなお咲き続く朝顔は貴方の好きなヘブンリーブルー  
 年に一度お楽しみ会の発表会心静かに舞台上上がる  
 去りがたき居心地良き場を有難う十一人に別れを告げる  
 僅かなる隙間に入るの蜂を見てスズメバチよと隣人は告ぐ  
 盃の大ききなるハチの巣は四、五日ほどに南瓜大なり  
 白ずくめ完全武装のバスターは一瞬の間に巣を取り外す  
 ロダン作の彫像も黙して聞き入るや天井高く樂上りゆく  
 アンコールのトロイメライをハミングし久方ぶりの夜道を帰る  
 夏タイヤに出でたる娘気にかかり無事着いたとのラインにほっとす  
 押し入れに仕舞いっぱなしの掻い巻きを雲一つなき空見上げ干す  
 針穴に糸通せぬゆえ裁縫はこれで終わりよと掻い巻き残す  
 雪国の大学生なる孫にあて祖母なる母は掻い巻き贈る  
 今年また予定次々キャンセルに手帳に白き空き地広がる  
 外出のままならぬ今日雪の日はよしなしごとをラインに交わす  
 雪に転び硬膜下血腫の手術との友よりのライン病室より届く  
 大雪の予報に娘慌てずに明日はテレワークなりと告ぐ  
 フェリーにつみ夫と娘と三人で走りし北海道遙か彼方  
 散り初むるはなびら肩に受けながら尽きぬ思いで込み上ぐるあり  
 水戸藩の別邸たりしこの丘に美しき松並びて立ちおり  
 日替わりに暑さ寒さを繰り返す五月の部屋に春炬燵あり  
 海門橋越ゆればその先大洗潮騒を聴く宿に安らう  
 花あふるる家々の庭眺めつつカート引きゆく集積所まで  
 資源ごみ当番に立ち久々に会う隣人らと近況交わす  
 海岸通りシネコンありて楽しみ日々懐かしや今車なく  
 海浜鉄道最寄り駅まで二十五分若き日十五分の道程なりき

海浜鉄道常磐線と乗り継ぎて隣の街まで大回りする  
 駅に待つ友の車に揺られつつお会いするのも大仕事と笑う  
 同年輩の歌の友の手術済み無事と嬉しきラインが朝に  
 私より一足早く電動自転車嬉々と乗る様歌にありしが  
 親族に危険と諭され居ると聞くその後どうした未だ知らず  
 静養期すめばランチねとのびのびのなし崩しなる解散会を  
 声のボランティア四十年の歴史をと仲間と請われ重き筆とる  
 庭畑の野菜三つ四つ摘みてきて娘と二人の朝食始む  
 跡形もなくなるほどの攻撃にさらされ今は人影もなし  
 会いましょう三年越しの約束も果たせぬままに友は逝きたり  
 体操教室出づれば熱波身に受ける門前までの送迎嬉し  
 草引けば小さき蠅螂かま振りあぐる何もせぬよと思わず笑う  
 酷暑避け訪う黄昏の墓処にはひぐらしの声秋を告げおり  
 二年ぶり湊の花火大会らしベランダに出て遠花火見る  
 娘住む水戸大洗にも音だけは響き居るらしラインに問わる  
 はからずも濃厚接触者となりたるが外出禁止は常と変わらず  
 気配だけ残して姿見せぬ人あなたの夢をあげがたに見る  
 免許証返納後の一年間ふれあいバスの無料バス受ける  
 使い勝手はなほだ悪きバスなれど物は試しと試乗してみる  
 四十年この地に住みて今もなお未踏の地あり物珍しく  
 香り来て見あぐる枝に木犀の花たわわなり秋を告げおり  
 朝な朝な散る花弁を掃きながら未だ残れる暑さを嘆く  
 木犀の香に誘われて団地内巡り歩いて友と語らう  
 名の如く長く咲き継ぐ百日紅無人の家にも未だ咲くなり

いいづかすみ こ  
飯塚澄子 (東京都)

## 自選四十五首

園の子等玉入れに皆夢中なり五歳の曾孫も熱中の体  
ハロウインの渋谷の夜の人出をばテレビで見られる楽しき一夜  
肩腰膝注射を受けし翌朝は歩きの軽い幸せの日よ  
江戸博の大ホールにて区の日舞九十七歳姉も舞踊す  
我もまた膝の痛みを治し得て舞台に立ちたく切に思ひぬ  
日展の書に今年も入選す姪の努力の輝かしきよ  
弟の体調不良の見舞とて新聞切り抜き実家に送る  
手術して膿を除きし重病の八十半ばの弟の今  
友よりの葉書整理す旅先を必ず記す几帳面な友  
旅好きの友の便りは一冊の写真ブックに収めて二冊目  
両手つき「お願ひします」と挨拶し書に励む曾孫ら精進の今  
年の暮三十日に七五三実家近く的美容院、写真屋  
乙女髪七歳の姉袴着の五歳の弟根津神社に集ふ  
拝殿に上がりてお祓ひご祈祷受け七五三の袋頂く  
七五三の袋の中は長き飴クレヨンの箱祈祷の板絵

予約したる食事処の浅草へ赴く子等の姿の愛し  
日本髪すつきり額出だしけり母似の顔の何とも言へぬ美  
一枚づつ師の教へ受け稽古終へ両手をつきて姉と挨拶  
膝痛で坐れぬ私羨まし曾孫の二人の挨拶姿  
自転車の前と後ろに坐らせて押上へ帰る孫の仕事は  
昼下がり障子に映る紫木蓮蕾小さく処処に  
オーバーを着て歩く昼暑きかな如月の末春めく陽射し  
鷗外の没後百年の小旗並ぶ文京区内の通り見上ぐる  
裸木の池畔に並ぶ大木の天指す枝先陽射しに輝く  
珍しくボートを漕げる男あり九時過ぎの池朝靄かすむ  
紫木蓮蕾の育ち日々眺め弥生の下旬開きそめゆく  
十センチほどの蕾の開きそむ内側白き紫木蓮の花  
庭中のあちこちに椿咲きてをり亡き夫偲ぶ何よりの花  
週二日送迎受けて通ひ出す健康回復リハビリ組織  
六種もの機械で体を訓練し若き師の指示幾種の体操

膝や腰・肩にも注射施して整形外科のマッサージも受く  
 テレビ見て膝に効くとの飲み薬半年続くれど効果空しき  
 転入後三月の曾孫は日曜日琴の稽古に学校へ通ふ  
 琴葉といふ名を持つ小学二年生琴関係の受講に臨む  
 右膝の痛さ抱へて覚悟なす組織培養の手術申請  
 不忍の蓮の花をば車窓より一目見んとぞ眺むる卒寿  
 孫よりの種に育てし朝顔の淡き花色嫁の丹精  
 目覚むればまづ網戸越し朝顔のつるの花見る卒寿となりて  
 彼岸花一輪咲きぬ庭中の一輪目立つ今朝の見はらし  
 塀際にまた彼岸花朝まだき庭を見る樂し九月の半ば  
 五十号画板を求め折紙の会館にても和紙準備なす  
 曾孫らの七五三祝ひテーマにと九月下旬に作品制作  
 美容院髪上げ着つけ美しき画板に描く姿の工夫  
 五歳児の曾孫の着付雄々しかる袴姿で羽織も美風  
 五十号のちぎり絵仕上げ十一月都美に展示の作品となる

区役所で文化祭への搬入日コロナ禍ゆゑか出品少なし  
 文化祭出展は書のみ例年は句作と絵をも出展の我  
 見舞をば時に電話と姉妹にて話し合へども順調にゆかず  
 我が右手何となく揺れ左手も自然に揺れる気がかりの今  
 年の暮根津神社にはお参りの出入りの激しう列をなす  
 鳩一羽庭中を巡る十分間我に気づかずやがて電線へ  
 ベッドの脇障子開くるに小指より半分ほどの蕾目立ちぬ  
 オミクロンの感染目立つ吟詠も二月休まむ声に従ふ  
 マフラーを一つ身につけ歩く男セーター姿昼近き道  
 バスの窓スカイツリーが現れる彩色なしの昼姿かな  
 三時過ぎ講習果てて帰る道風冷たくてオーバー可とす  
 木曜の下校途中に転倒し右足首を痛めし曾孫  
 右足首骨折なしてステッキを両方使ひ母と帰宅す  
 週末は我が治療師の手当て受け右足首の歩き穏やか  
 月曜も重き靴と孫を乗せ自転車通学祖母の計らひ  
 転居して転入の曾孫小学二年何かと悩みあるかと案じる  
 紫木蓮花の終はりて若葉どき四月半ばは新緑覆ふ  
 戸口近き藤の花房密に垂れ往復の道ひと時楽し  
 コフノトリ四羽孵化との写真あり母鳥の凄く鋭い喙  
 休養をとればそれより運開く令和の新聞運勢の記事  
 内科医の許可を得たれば薬局が自宅に届ける薬なりとか  
 庭の隅どこも十葉の盛りなり白き十字の花競ひ合ふ  
 友よりの袋の中にサラダやら煮ものがありぬ格別な美味  
 コロナ禍がやや静まりて出張の多き息子に自立の夕食  
 八歳の誕生日をば祝ふ日は父、祖父の帰宅待ち兼ねる夕

羽二重団子をみやげに出張より帰る息子の愛しき思ひ  
 食卓に蒲焼いわし時に添へ夕食運ばる息子の計らひ  
 宣伝のテレビのお陰蒲焼のいわし食して心あたたか  
 来年度の会場取りの日の近し区民になりて向かふ吟友  
 六月の梅雨明け宣言これからの暑さに耐ふるか不安なる日々  
 リハビリの迎へ待つ間の二十分塀の中なる日陰におりぬ  
 入口で三十八度の発熱で別室にての見学しばし  
 PCR検査受けよと帰されて医師に連絡処置を仰ぎぬ  
 発熱は夕方待たず下がりたりひたすら休むベッド生活  
 電車・バス利用せずしてプレハブに来よと指示あり暑き陽差しよ  
 タクシーで出向いて受けたる検査には綿棒一つ鼻に挿すのみ  
 翌朝の八時過ぎには電話あり「異常なし」と医師より知らせ  
 百日紅見事な赤き花を見せ車窓の我を樂しませをり  
 曾孫らの箱根の避暑地の生活にコロナの故か語らひ聞こえぬ  
 三年間コロナ感染激しくて用心なせど身近に迫る  
 三年越しコロナウイルスはびこれど花火に旅行華やぐ夏日  
 十日ほど休みしリハビリ職員元気な姿に会へる今日かな

いとがひろこ  
糸賀浩子☆ (茨城県)

## リモート面会

月に一人一回のみの十五分面会の条件われらに厳し  
二、三枚葉の残る枝見上げおり明日は散る葉か紅く燃えいる  
娘への葉書を出しに両手には支えのポール己が影ゆく  
「相棒を見てる」と書き来し娘の葉書思いつつ今も郵便受け見る  
6Bの鉛筆ですら筆圧の落ちて娘の書けない両手  
うすれ陽にどうだんの紅葉極まれる動画を病める娘に送る  
まだ免許は返納ならぬ今の吾般若心経となえる仏前  
自宅にも帰れること無く三回目の正月迎う細れる娘  
娘の頬にその連合いの掌が触れたるおしぼりを当つ吾一人来て  
四週間待たねば面会出来ぬ娘どんな思いで見送ることか  
不馴れなる大雪二度目は融雪剤使いて雪掻き容易になりぬ  
病む娘の感動せし歌朱印の新聞切りぬき吾も読みおり  
萎縮すすみ声失いし大き眼に合図を送る娘愛しも  
タブレット預けし係の休暇にて葉書に頼る日々の続けり  
母逝きし歳を越えたる今の吾長女の難病を試練と受けて

まだら髪を褐色に染め牛久市へ二女と病む娘のリモート面会  
口からの食摂れぬ姉の好みしものメロンにスイカ焼芋と言う  
三月が来たれど雛涙せん病める主とのリモート面会  
リハビリの小物とねまき写真など送れる品から食べ物が消ゆ  
青ざめた娘の顔に笑みは無く見開ける眼に涙をみせて  
夜更け尚眠れず梅の庭に出づ花を見られぬ娘思いて  
シチュー鍋ゆっくりゆっくりかき回す娘に秘薬を造りやりたし  
帰り来て一人の吾に黒猫が庭よこぎって一声かけゆく  
最高の鰹の刺身目の前に萎縮の娘の喉通したや  
更衣シーズンなれど病室の温度は一定何を選ばん  
賜われる見舞の新茶も娘にはリモート面会残るのみなり  
人が人を殺さなければならぬ戦わが終戦は小学二年  
老農夫梅雨空の下畑起こし腰のラジオのリズムに合わせ  
病める娘今は取れてる鼻の管ビデオ撮りせんと喜ぶべきか  
あたらしく選挙の出来る若者よ見目よき佞者を選ることなかれ

洗面所に残れる老眼鏡めがねの度の弱さあの時夫は六十歳ろくじゅうなりき  
 ナメクジが三つ葉の一角食べつくす「お前も生きるか共存しよう」  
 気ままなる一人暮らしも又よしと思いたりしは皆在りし頃  
 火と土と水に声ある原爆忌絶やすまじきは人の声なり  
 久々に連れ立つ街に前屈む吾の歩みを二女透かさず言う  
 得るよりも失う多き高齢の夏は終りて芒穂を待つ  
 病院より帰れる日のなきわが娘着せてやりたや晴着というもの  
 病む娘へ土手の芒穂五本取り柿、栗添えて動画ラインす  
 秋ですよ私をも一度読んでよと嫁ぎし娘の本棚の本  
 髪染めて汚れの残る指先に老い感じつつ彼岸の用意す  
 稲の香を運び来る道朝夕に十九年間犬と歩みき  
 彼岸くれど相寄り語らう事ならず病む娘の名で卒塔婆そとば供養す  
 節電に案内灯を消す実家後の月見て泊ると決めたり  
 リモートの画面の長女の面窠おもやれに二女つぶやきぬ残り少なを  
 朝夕は寒いこの季の帰宅準備朱の道行と合う帯添えて

一年余娘との面会断たれて再開最初は娘の夫に決む  
 花八手小さき球を賑やかにつなぎてわれに家族思わす  
 猫の手より増しと稲束つくりけり吾れの終戦小学二年  
 今更に戦時の爪痕胃の写真「戦時の胃です」と担当医言う  
 朱に染まる夕陽よ冬至十日前一番星を見つけて帰る  
 日めくりの暦の薄くなり来たり激動コロナファイナルに入るか  
 水雨ふる同級生の告別式八十過ぎて喪服の辛し  
 一桁とスマホが知らず今日の気温あわてて替える起毛の下着に  
 作ること稀となりたる五目ずし酔の良くききて亡き母の味  
 最下位から日本一のヤクルトへ神戸の夜空に監督が舞う  
 二日はや薬とサブリを卓に置き気合を掛けて賀状の整理す  
 冬雷の年鑑参加費振込みて局職員と歌談議せり  
 道灌へ庵の少女やまぶきの枝を差し出す歌の尊さ  
 月々の市報紙上の「短歌」欄興味持ちたる五人乗り出す  
 つぶやけるごとく鳴きつつ淡紅の梅花をこぼし目白移り来  
 コロナ禍の休校延期にベッコリと笑むマスク顔の活力を知る  
 餌に向かう鴨の親子の曳きてゆく水尾長々と朝日の中に  
 置き去りにされたる猫の診療費「一万円よ」と次女は話しぬ  
 落ち合えるコーヒー店に手づくりの焼芋出せばうましと二女は  
 菰粥を温め平和に在る吾がウクライナの民寒さと戦火に  
 思いたちて『西行全集』もとめたり日ごろ暇なき晩学なれど  
 春昼の棚にしだる藤の房小さき風が大きく揺らす  
 わが里は水田みづたに淡き月映しとよもし過ぎる山ほととぎす  
 原発の是非をめぐりて座が二分 筍うましと話題変えたり  
 おかず一品あらば助かると言う二女に路煮をつくり週末渡す

わが就眠日付の変わる時間なれど歌を始める仲間を思う  
 何もかも未完のままに過ぎてゆく八十五歳の峠越えなり  
 つくば市へ行って人間ドック受く貧血ありと指摘されたり  
 フライパン包丁握り八十年癖のつきたる指重くまがる  
 九十歳日舞の舞台終えし友「来年在るや」と吾につぶやく文化協会春の祭典  
 輸出できる港うしなうウクライナ多量の穀物明日はどうなる  
 抱かれて散歩の幼マスクして頭を下げる大人を真似て  
 終戦後素人演芸に踊りし従兄弟化粧されて眠る棺の中に  
 入院の夫残したる老眼鏡三十年経て度の弱さ知る  
 思い出の詰まる実家にわが荷物留めおきつつ又立ち寄りぬ  
 経となえ神に仏に願えども娘は生きて難病に耐う  
 戦わぬ国の覚悟も変わる今戦時を耐え来し父母を忘れじ  
 わが就眠日付の替わる頃なれど短歌の仲間増ゆるは嬉し  
 容疑者が背後に映る安倍元首相を守れなかつたか日本の警備  
 二発目は数秒後と聞くにつけ安倍氏後方の無念の警備  
 歌の友癌に倒れて逝く前に吾に託しアララギ歌集  
 この暑さ八十歳越し初めてなり刻々変わる大気の記録  
 生家にて辞書ひき歌詠む窓外を見慣れたる老いとコンバイン行く  
 柏崎、長岡、片貝生放送海と大空へ打ち上げ火花  
 友の庭に実る巨峰をいただきぬ甘すっぱさは幼日のまま  
 甘柿を毎年ねらう椋鳥は徐徐に傷つけやわらげ食す  
 百匁柿私が生れておじいちゃん淳子が食べると接ぎ穂せしもの  
 友からのラインのレシピ酢のものはナス・鯉節・おかわかめ入り  
 疲れたる吾を守るおかわかめ蔓と根むかごも食し夏越す  
 二女と二人ロボット運ぶ食堂に病む長女との面会予約す

いなだまさやす  
 稲田正康 (東京都)

## 「岸を、倒せ、」

二年ぶりのバスに行きゆく東名路おぼえなきもの建つところあり  
 芦ノ湖の海賊船に上甲板へエレベーターの案内されつ  
 改修の成れる御堂に古き材あたらしき材組み合はせあり  
 盆回向の行道の僧となへめぐる般若心経ひびきあかるし  
 日露戦百年を経つ祖父の墓の銘ことごとく苔におほはれ  
 黒坂にはもう来られまいちははと汝を刻みたる石に立ちゐて  
 四軒のいとこ居りにし黒坂に住まへる人の二人となりぬ  
 中国山地やみとなりたる幾曲がりくだる子のわぎ思ひがけずも  
 何もなき真青の空に半月の白きが淡し冬至に近く  
 ジェンダーのこといひ盛かる新聞の役職記事に女性名ふたつ  
 世の中に酒がこれほど大切と思はなかつたコロナの騒ぎ  
 合唱用マスク開発せりといひややこもりたる「原爆小景」  
 土ぼこり立てども子らの遊びやまず蹴りたるボールそらしたりして  
 年かさの一群きたりすべり台しばし占めらる駈けのぼる子に  
 名の高き本のうちにて遠縁の太郎小父の名突然にあり

住まふ地の学校物語に現れて連載小説身に近くなる  
 ヘリコプター高きを行くにその音は少しうしろの空より落ち来  
 すべり台初めて滑つたをさなごがその母親と拍手してをり  
 捨てられぬ長き枯枝すてさせて車に乗せるまでのひととき  
 満開の枝が揺すられ揺すられてなほ散らずあり窓の桜樹  
 たまたまに開くる瓶詰表示せる賞味期限は父の誕生日  
 起きてより何年といふ日のふえてやがてすべての日に及ばむか  
 「病院が武装してゐる」ありさうもなき理由にて標的とする  
 病院の産院のそこにありぬべし昭和二十年三月十日東京  
 まばらなる葦の湿原すべて凍り境界などなかりきスピードスケートに  
 山すべてわかき緑の映ゆる午後多摩の奥なる園地にをりて  
 名を知らぬ十字花舗道のひび割れのすべてに開くまつすぐ立ちて  
 夜の更けにからす突然啼き出でつ夢みてゐたる如き声にて  
 朝あきに鳥が同じ声に啼き彼方の樹より応ふるがあり  
 毛皮もつ犬に布きせ牽き歩くこと何ゆゑかこの頃はやる

車椅子借りて巡れる清方展仰ぐ目線にとまどひながら  
 夕富士の稜線見えつ大きな樹の繁りやうやく薄くしなりて  
 学校を建つと杭打つ機械立つ来年の富士窓にあらむか  
 リハビリの壁に貼らるる七夕飾り年の半ばの過ぎてしまひぬ  
 さへづりの続きてゐたる四十雀突然黙り音なき間

朝あした同じ囀りつづくる鳥四十雀には言葉のありと

その母の送ってくれし産着小ささをかかげ笑ひしさを忘れず

「ママのピアノ」譲るを息子このまゝとではこのままに置いてゐませう

十三回忌はむづかしからう妹と来たれる墓に細き雨ふる

五十年を半年ごとに来てくれし調律のひと今年来たらず

暑さなほ続くといへる八月のことし初めのつくつく法師

コンビニの月見団子は品切れに仲秋をいひ円けく高し

「キシヲタオ…」そのもとに聞きゐたりきや幼きうまご安倍晋三の

忘れぬし教団のこと政党に関はるさまを報ず頻りにも

手伝ふといはるればまづ頼まむか選挙はいづれ人手と票数

足弱くなりて来てある箱根路のバス玄関の前に停まれり  
 朝の雨あがりたるゆるぎ湖を見ておかうかとバスの時きく  
 芦ノ湖に風のなけれど駒ヶ岳ロープウェイは雲に入りゆく  
 左脚がやらしいからといひながら硫黄泉への手すりをたどる  
 大涌谷ロープウェイ止まれば箱根すべて駄目と思はるといふがあり  
 妹婿に花送り弟におくり鳥取の母にけふ持ちてゆく  
 先祖よりの墓に香たき花を置く最後とならう黒坂泉龍寺  
 アケオメとふメッセージ飛ぶ世のうちに干支の画印を今年も押せり  
 やうやくに秋らしき午後ポストまで遠回りする六百何歩  
 同窓会幹事総会 ZOOM にて開くと参加求められをり  
 遠隔の会議むかしは電話にて今は顔見て話ができる  
 冬の間芝ふみ枯れて土ぼこり走る広場に親子かずあり  
 外国の子らしきグループアイスなめながらに話すわからぬ言葉  
 公園のへりに幌つき自転車のまた並びをる十月なかば  
 ヘリコプターふたつ過ぎ行く公園の秋きはまれる深き青空  
 冬ちかき季候となりて公園に置く自転車のすくなくなりぬ  
 よく晴れて風つよからぬ土曜午後ひとほ多き冬の公園  
 「充電する」などといふ語をさなごが日常に使ふ時代となりぬ  
 階段をのぼつたが滑るのは怖いをさなごに姉がすべつてみせる  
 下が見えないのはやはりこはいからまづうつ伏せの形で滑る  
 まづ梅の咲きて散り敷きおもむろに桜のつぼみふくらみ来たる  
 急に寒くなれる三月十日を過ぎ枝先やはりふくらみてをり  
 丈たかきマンションの窓みな灯りそれぞれにその生活がある  
 カウンターに遭ひたる人が中学のわが同級を上司といへり  
 新しき年度はじまり新制中学一期生は八十八歳となる

満洲国作りしはむかし他の国の部分を人民共和国とすと  
 こと悪しきものは「フェイク」と言ひ立てて大統領の侵略つづく  
 差別なく爆撃なすは日支なる重慶をはじめとすとぞいひたる  
 零下三十度の朝は白き旗四十度に赤き掲げき満洲阿城  
 ぶらんこ滑り台のけて土掘り水そそぎ翌朝スケート場となりき  
 鯉のぼりいくつ揺らるる空のあを夕やけ小やけ遊園の昼  
 写真とる顔出しパネルは親子用父親が下を抱きてのぞかず  
 ラヂオしかなかりし頃の歌いくつ一九五〇年代アメリカ  
 帰る車に道の選択いひながら眼に残る「築地明石町」  
 校舎建つと富士を隠してクレインの立てる富士見ヶ丘のわが窓  
 店ひとつ商店街に建ち替はり古きは五つのみとなりたり  
 二年たち老けのめだてるクラスの会みんな八十八歳となる  
 ポスターを貼らぬ候補者十人のあまり居りたる選挙が終はる  
 七月の終はるといふに蟬鳴かずことさら暑き日ざしの続く  
 みんなを初めて聞ける八月四日かかはりは知らねど雲厚くして  
 おまつりに合はせたるらし着物きるをさな二人のはしやぎて行けり  
 ポピュラーとふ言葉なかりきアメリカより来たれるものは  
 ジャズといはれて

子供らの上がり下りする滑り台かこみただ立つ親にありにき  
 汝が弾きし楽譜の棚に置かれあるハノンの表紙とれかかりをり  
 妻に縁ちかき子ヴァイオリン弾きとなり妹にチラシ送りやるべし  
 桜餅より道明寺好みしを思ひて買へり並びであるを

七夕の飾り外して夏の星のこるリハビリテーションの壁  
 政治テロを誰も思へる安倍狙撃いへ崩されしうらみをいへり

## 桜吹雪

立ち昇る噴煙すさまじ人間もマグマ一気に噴く日のあらば  
 夫婦喧嘩と轢かれて苦しむくちなはと見てならぬもの今日二つ見る  
 胎内に目を覚まさずにあるわたしこんなものかな温泉たまご  
 艶やかに傷無く太る大根を呉れて一席愚痴こぼしゆく  
 細長きじやが芋の皮剥きながら楽しきことを探しゐる冬  
 本当に緑の欲しい冬の日をサンタに頼む枯れない緑  
 洋服の採寸をしてもらふときメジャーに計れぬ心の窪み  
 愛などと容易く言ひし浅はかさ若かりし日の目の澱み  
 目玉焼き温泉卵鶏の命いただき今日が始まる  
 浄土宗のわが家もケーキを買ひて食ぶ降誕祭の雪の夜を  
 寒の水垂直に当て包丁の輝きに切る朝の大根  
 チョッキよりベストと言つて欲しかつた看護師脱げといふ服を  
 予報外れて大粒の雪降る町に出できて買ひぬ春の桜もち  
 朝見ても夕べに見ても天気図は七日先まで雪だるま  
 春来なば治ると信じ耐へてゐる人の願ひを叶へよ春よ

いのうえすがこ  
 井上菅子 (山形県)

円柱が持ち上げてゐるバルコニーゆめゆめ円柱折るるべからず  
 三百円の値札付けられ両手足ばんざいをして小蟹売らるる  
 はまゆりといふ学名に無き店に並びて食べぬ海鮮丼を  
 蕾紅く膨らむものも膨らまぬものにも等し梅林の風  
 死ぬる日は桜満開埋骨は桜吹雪に旅立つ人よ  
 四十六年共に暮ししを長しとも短しとも思ふ夫との別れ  
 夫に供ふるみそ汁作り一人分けてもらひぬ今朝は菜花を  
 桜散りあなたが逝きて二七日浄土に向きて遠のく人か  
 昨日まで在りし人亡し春の日の暮れなづむ庭過ぎ来し思ふ  
 ごみ出しは夫の仕事習慣に玄関までを今朝も出しおく  
 黄の木蓮咲きたる庭を去年までは二人眺めしよ今日一人見る  
 熟みすぎた果実のやうに毎日が心許無い夫の亡き日々  
 ミルク色にアカシア煙る河川敷失ひしものもう見つからぬ  
 羅生門蔓庭に咲かせて紫の濃き花愛でし遠き春の日  
 この世にゐぬ人を探せばはらはらとえごの花散る西公園に



水槽の隅にいぢけてゐる金魚思惑あるなら言うてごらんよ  
 話し相手なき一人には日本語も忘れさうなり夫のなき日々  
 扇風機五台を不燃ごみに出す家族の夏と共にありしを  
 蚊の気配なき夜を金鳥蚊取炷き夫在りし夏しみじみ偲ぶ  
 百日を咲くのだらうか百日草夏の暑さを盛り上げて咲く  
 嫁ぎゆき姓の変はれる名に呼ばれ予約の席に娘と座る  
 早朝の院内歩く白衣見ゆ刑事ドラマに見たる光景  
 惜しまれつつ逝きたる人の墓低し新盆の茶をたつぷり注ぐ  
 新盆はたちまち過ぎて送り盆昨日のやうでまた三日過ぐ  
 二週間後旅立つ人とは知らざりき春の日を浴ぶ山雀見つつ  
 自転車の子二人が「サザエさん」唄ひつつゆく学校帰り  
 次々に打ち上げ爆ぜる花火の夜置き換へてみる人の一生  
 包丁研ぎ趣味なりし夫逝きてより削ぎ取るごとき刃にも錆ふく  
 一人なる家にも日暮は早々と各部屋灯す家族待つごと  
 濁流の岸に佇む白鷺の一羽の憂ひテレビは映す

赤とんぼ小蜂が秋の陽に群れて飛び交ふテラスのおすすめラ  
 ンチ  
 美容室の飾り窓にも秋の来て造花で表す山の彩り  
 角のあるもの今日欲しく無し玉こんにゃく煮からめて  
 SLが通るとそばの箸を置き窓辺に客寄る山都町のそば屋  
 熟練の手の織る緋大切に着てゐる姉の形見の結城  
 その後を知らねば君は青年のままの君にてシュートする夢  
 心臓の高鳴る便りもはや来ぬ郵便バイクは秋の陽の中  
 マスクつるんとあごまで下げてかういふ顔してをりますと彼  
 女の夫  
 さやちやんとむかしの呼び名で呼んでみる四十過ぎたるわが  
 子の名前  
 頬薄き少女が左の手に掬ふ pasta 見てをり雪の窓辺に  
 曇天も寒さもうれし自粛解け閑上市場に魚介を焼きて  
 セルフレジ滞りなく出来たる日気に入り帽子は行方不明に  
 地味なりし着物もいつか身に添ひて縞の袖に錦紗の羽織  
 うちの雪隣の雪と目に分けて捨て場無き冬人格変わる  
 たまに來て小屋から葱を持つてきて甘えてみせる嫁きたる子が  
 一日一首作れば何とかなると言ひ友を励ましわれは詠み得ず  
 ささくれ立つ指に絡まり糸屑が離れぬといふ雪霏霏と降る  
 色分けの検査室への線たどり角を曲がりて若者が消ゆ  
 積み上ぐる雪の下にはあぢさみの三株がありぬ押し潰されて  
 北海道鹿部町よりはるばると届くホッケがにつこりと笑む  
 ふるさと納税わけあり魚どつさりと届くよみんないい顔をして  
 大雪の除雪のつけは春にくる足裏かかと裸の激痛

足の底痛めてをれば許されて炊事掃除の大方省略  
 人に混じりて大型犬が足早に避難する国あウクライナ  
 何事もうまくゆかぬ日満作の振れたる花つくづく親し  
 等身大の男雛女雛を作らせて金有れば叶ふこの世恐ろし  
 春風はまだ冷たくて気紛れの風花は今日野を奔りくる  
 活断層の上にてあればいつもいつも揺れていつかは本番と恐る  
 紫に波打つ傾り一面に菊咲一華春のうたた寝  
 梅林にまだ花の神来てをらぬ一週間を待てずに訪へば  
 一つつつ死後の整理の片付きて日毎遠のく夫かと思ふ  
 捨てたるを拾ひ直して丁寧に畳みて戻す亡夫のスエット  
 青鷺の卵を盗みくる鴉畑に青き殻を落して  
 閉院の駐車場の片隅に勢ひ咲きぬ庭藤の花  
 異論唱ふるすべなき者ら無言にて伐られてしまふ巨木篠懸  
 手分けしてしてゐし仕事夫亡き後一人にてする今日可燃ごみ  
 発泡酒の銘柄様々空缶の回収日に見る暮しの色を  
 小魚が水紋描く薄物にアイロン当てて夏を行かしむ  
 駅西の開発著く高層のビルは窓にも壁にも夕陽  
 救急車パトカー数台疾走の先に生まれてゐる悲劇  
 形良く太る真鱈は長崎産はるばる来たる一尾を買ひぬ  
 クリーニングの配達に來て猪にじやが芋喰はる話してゆく  
 主亡くす金魚もわたしも独りにて一つの屋根の下に住み分く  
 ハンカチを洗ひて熨して在りし日と同じに戻す夫の引出しに  
 御歯黒蜻蛉を神様蜻蛉と呼び慣れたことし六匹庭に棲みつく  
 霧幻峽に霧湧かぬ景ツアーにて夫と行きにし日も遠くなる  
 人住まぬ家となりたる数年をざくろは青き実を太らす

資源ごみ回収されぬ理由みて持ち帰る手に重さ加はる  
人間と確かめてより飛び立てる朝の翡翠瑠璃紺の羽  
朝々に朝顔の数亡き夫に報告などして日々は過ぎゆく  
新たな庭仕事などもうしない夫亡き後の消極増えて  
白髭に黒髭一本混じれるは縞柄猫の模様のひとつ

おうて き のり こ  
樗木紀子 ☆ (東京都)

## 隣の庭

濯ぎ物竿竹三本に背伸びしてスカイツリーを見上げつつ干す  
友の絵を見に浅草へ二年振りにバスに乗り行く杖を手にして  
一つ手前のバス停で降り隅田川を眺めながら吾妻橋渡る  
リバーサイドギャラリーでの作品展水彩油絵力作を見る  
晴天にスカイツリーと並びおり白き半月ペランダから見ゆ  
上空の白き半月たちまちに西方へ行く速さに驚く  
放映で京の紅葉名所巡り懐かしく見る行きし所多く  
高尾山高台からの絶景が母との紅葉狩の最後となりぬ  
隣庭の大公孫樹に陽が差して黄金色に窓は明るし  
朝起きて窓を開ければ風雨強く公孫樹の黄葉が境内埋める  
御神籤を引けば二人とも運のよく大吉いでて喜び合うも  
放映に七十五年前を回想す南海大地震田辺にて遭う  
父の生家木造にして家具襖倒れ小学校へ手を取り避難す  
初めての地震に遭遇どうなるかと恐さで震え止まらなかった  
隣町津波に流され家多く海に浮けるを田辺湾に見き

三年前大会のとき富士山の大小五枚の写真頂く（関口正道さんを偲ぶ 四首）  
 何回も墨田短歌会に参加されみんなの写真を撮って下さった  
 会食の席みよ子さんとおれ常と一緒に楽しく話弾みき  
 大会の時わが前の席におられ後ろを向いてお話し下さった  
 隣庭の桜公孫樹のはだか木は寒風に揺る冬芽を持ちて  
 境内の鳥居の両側に二本立つ棕櫚しゅろの緑葉窓に見ている  
 棕櫚の木は熊手のような緑葉を幹頂につけ風に揺れおり  
 三階から今日も花見す満開の桜は近くの社を覆う  
 桜散り二本の公孫樹は一斉に枝々芽吹き新緑の木となる  
 強風に散りたるみかんの花びらが路面まだらに斑模様を作る  
 甘夏を物干し竿で三人が十五個落しわが貰う三個  
 新婚の頃大宮の雑貨店に買いし真つ赤なデラニウムの花  
 夫の転勤五回ありてそのたびにデラニウムと引越共にしたりき  
 評判のよき真つ赤なデラニウム近隣の家に植えられ増える  
 満州熊岳城ゆうがくじょうに終戦を知る母兄われと弟二人

大連にロシア軍が参戦し銃を手に持ちわが町に来る  
 小学五年以上の女子と主婦たちは髪を刈りて男装させらる（われ小学三年生）  
 一年過ぎ木の荷馬車に二世帯乗せ長き列にて引揚げ出発  
 米軍の上陸用舟艇大勢の人を乗せてコロ島出航  
 出航の三日目われの横にいた赤ちゃん亡くなり水葬される  
 四日目に長崎の佐世保港に着く緑の山々美しき日本  
 五日のち上陸すれば全身にDDTを掛けられるなり（昭和二十二年十月）  
 隣庭の大公孫樹二本は見上げられぬほど高く伸びたり  
 窓に寄り公孫樹の緑よく見れば枝に丸い銀杏のあり  
 蝉の声約二ヶ月間高高と朝に夕べに競い鳴きたり  
 蝉の声ばったり途絶え八月の三十一日淋しくなりぬ  
 懐かしき京の大文字送り火の五山に灯るを放映で見る  
 京大の近くに住みて旧三高の屋上に五山の送り火を見き  
 辣蕪漬美味しく出来て年ごとに配る六人に喜んで貰う  
 麻雀の始まる九月十七日集会所へ喜びて行く

杖をつき下見て歩く猫背のわれ亀の頭と子は注意する  
 文化祭展示部門のみの開催に油絵四号出品したり  
 水泳のコーチが書道で日展に入選するも友と見に行けず  
 押上の会社の入口植込みに八重の赤しる山茶花の咲く  
 濯ぎ物干す手悴み息かけてこすりぬ今日は冬至の日なり  
 病身の長男帰宅す唯今と二十九日から三日まで居る  
 元旦に長男と二人で氏神の天祖神社に参拝をする  
 妹さんから寒中見舞届きたり十二月他界七十七歳と  
 中学時代この墨田区に住まいしか関口みよ子さんと同じ学校  
 北京五輪男子ハーフパイプ決勝で平野選手逆転の金  
 北京五輪女子カーリングを子と共に始終観戦す銀メダル得る  
 五日前四つ目通りの街路樹の白木蓮が咲き始めたり  
 今日来れば白木蓮の花半分茶色に変わり花弁を散らす  
 膝を痛め整形外科に通院す旧友達の五人にも会う  
 ウクライナとロシアの戦い停戦を願いながら放映を見る  
 墨田区の花なる躑躅が明治通り浅草通り満開になる  
 近隣の玄関前に立ち止まる君子蘭が見事に咲きぬ  
 ベランダに育てし君子蘭二十個の花ビルの陰となり枯れてしまいき  
 豊島区でコロナ禍の中弁当の無料配布に人の列ながし  
 東京大空襲を知らぬわれ早乙女勝元氏の本で知りたり  
 度々の空襲を受けウクライナ国民の死者千人以上  
 朝ごとに神社の周りと往来をわれら三人いつも掃除す  
 実りたる大き甘夏美味しくて朝四分の一ずつ食す  
 数年前榊を挿木せし枝に初めて白き小さき花咲く  
 お手付きをする歌六首を完全に憶え楽しむ百人一首

月末の土曜日カルタ取りの日に膝を捻挫し欠席したり  
 捻挫して曳舟文化会館のジャズ友の発表会行けなくなりぬ  
 ジャズ友とカルタの先生従兄弟からの見舞の電話に元気を貰う  
 幾度か原爆展の悲惨なる光景の絵や写真を見たり  
 台風にまだまだ熟さぬ銀杏を路一面に公孫樹は落す  
 五グループに分けられわれは木曜日集会所へ体操に行く  
 三年ぶり天祖神社の大祭は三日の間提灯飾る  
 雨の日のなりひらホーム大広間福引きとゲームに賑わいており  
 雨のため子供神輿が出なくなり残念がる子 口惜しがる子

くらなみ  
 倉浪ゆみ (埼玉県)

をばと我

友の家寒桜がひそと咲く病める主を見守るやうに

孫からのリクエストなるロールキャベツ笑顔おもひつつ二十個作る

まゆみの実つぶらなる実の赤冴えて冬のおとづれ近しと思ふ

風に舞ふ紅葉は夕陽に照り映えて叔母とすわりて飽かず眺むる

幼らのままごと遊びの客となる落葉の皿に南天のあか

南天の枝たわむほどの赤き実よ小さき幸あれ令和の御代は

母知らず母のかはりと慕ひ来し叔母こはれゆく哀しかりけり

うす氷霜柱もたつこの寒さピオラの花は黄の色灯す

美しき言の葉あふるる叔母からの文よむ昼つ方風花のまふ

川土手は茫ぼうとしてセピア色さぎ佇みて墨絵の世界

水仙は垣の片方に凜と咲く黄のいろ深しその芯のいろ

枝たかく多に黄に咲くらう梅の漂ふ香りは大陸の香り

母がはりの叔母は九十五歳なり我は叔母より早くは逝けぬ

「まゆみさん」といふ新しき仲間増え私はまぬけの「ゆみ」と名を告ぐ

弟は入所して迎へた誕生日後期高齢者となり如何なる日々か

白木蓮むねに飾りて出席した遠き昔の子等の卒業式  
 散歩みち犬のふぐりがひそと咲くブルーの星を散りばめたやうに  
 愛海さん旅立ちの春おめでたう蘇りくる「ままへ。おげんきですか」  
 四姉妹いきつめて見る堤のさくら薄ずみの空に淡あはとして  
 はづむ声孫娘からの電話なり「合格しました有りがたう」と  
 ウクライナとロシアの戦ひ新聞の紙面を占める割合増して  
 地蔵様の面に花びら三、四枚マスクの面も笑ひて御座す  
 春彼岸墓所おとづるれば赤きボケ黄の水仙も咲き辺り明るむ  
 九十九里の妹来れば汐の香が仄かに漂ふやうに思はゆ  
 幼子をのせた自転車の前かごに風と遊べり小さき鯉は  
 川越は本年「市制百周年」記念の諸事の挙行を祈る  
 叔母と我「短歌語法辞典」繰りながら過ごす時よ長く長くあれ  
 白百合を愛でし叔母逝きはや三年なつかしむ如くその庭に咲く  
 白雲木うらわの街に咲きにしか遠き日友とみた白き花  
 この土手路あら草ここたく刈り取られまぬがれて咲く白詰草は

友の唄ふ「秋田小原節」は朗朗と津軽三味線にのりて流れ来  
 孫の家ベランダいつぱいカラフルな洗濯物が風とあそべり  
 木の根方ゆきの下は涼やかに白く細かくひそと咲きゐる  
 眼とぢせみ時雨ふるを聞いてゐる文月の暑き我の生日  
 暑中見舞と友から届く鉢植ゑのこぼれる様な白き花はも  
 唐がらしの朱の色ふかく鮮らけし水を注げば辛き香のたつ  
 叔父逝きて一年経ちしが現実をあいまいなままに叔母こはれゆく  
 かはら辺を日傘をさして歩く人晶子の歌が甦りくる  
 この日頃夏草たちと追ひかけつこもう負けました自由に伸びよ  
 どこまでも抜けるやうな蒼き空ウクライナの空も同じ蒼さか  
 孫先生「仲秋節」と言ひながら月餅くばる中文教室  
 久方にそろひて墓参す四姉妹とりどりの供花墓所は明るむ  
 三年ぶり祭り囃子がきこえて赤飯用意す来る孫達に  
 をさな児と山車をひきしは遠き日よ我も若き母親なりき  
 曼珠沙華に白花あるを知りたるは九州柳川おとづれし時

在りし日の義父母が使ひしステッキは今も置かれあり玄関の片方に

黄の小菊地にひくくして凜と咲く友の供花にと手折りて行かん  
銀のペール広げたる様に河原の薄秋の陽をうけ燃ゆるが如し  
畑すみに鶏頭ひと畝のこされていよよ深まるその紅の色  
秋は去り町に師走の風が吹くマスクの人らも急ぎ足なり  
選挙戦のポスター風にゆれてゐる笑顔で写る落選せし人  
カサコソと落葉ふみしめ小学生通学路のこの道をゆく  
高き枝にざくろの実が三つ四つその色かはりて風にゆれるる  
店先の南天の朱はみごとなり陽に照り映えて幸よぶごとし  
父母と御主人亡くせる友三人師走にとどく年賀欠礼  
同窓生のお店も有るなり菓子屋横丁半日遊べり幼き孫と  
つややかに栗金団は仕上がりぬ我家の味よ私の味よ  
玄関をあければ清しき香りたつ寒水仙は凜としてあり  
如月の境内の梅ほころびて木下にたたずみその香たのしむ  
コロナに明けコロナに暮れし令和三年人等は今も右往左往す  
オリンピック開催年の同窓会又また中止と知らせが届く  
孫娘はや今年は受験生我神仏に祈る日々なり  
地藏さま新しきマスク付けておはす供花の小菊は黄と白にして  
花バサミはちんぱちんと音のして雪柳きる彼岸の供花に  
菖蒲の葉浮かべて遠き日を想ふ活気あふるる子育てのころ  
友の家つたの若葉におほはれてそのさ緑は眩しきばかり  
もえるよな赤きつつじも早をはり白く清けき卵のはなの咲く  
うの花は白く清けく楚そと咲く友の供花にと心してきる  
ていねいに折り紙を折るお嫁さんブルーのマニキュア涼よぶ

やうに

凌霄の花見るたびに想ひ出す鎌倉にあるお洒落なカフェを  
はや文月園児たちの歌声は「ささの葉さらさら」七夕のうた  
梅漬けの梅酢がたつぷり上がりくる赤じそ待つは心はづみぬ  
白とえんじのホタル袋の花咲けりホタルを入れて眺めてみたい  
三年ぶり寺庭で行ふラジオ体操木ササゲのサヤ風に揺れる  
浴衣まとひ団扇つかひてそぞろ歩く若者達よ暑くないのか  
砂ぼこりたつ河川敷のサッカー場暑さに負けじと少年の声  
ああけふも熱帯夜なり救急車の音が聞ゆる間近で聞ゆる  
友からと妹からの文届くせみ時雨ふる暑き生日  
妹たちの漬けたる梅の実食べ比ぶ祖母の味にと近付きてゐる  
わが家の隣は双葉幼稚園第一回の卒園生我は  
こんべい糖散りばめたる様に百日紅晩夏の町に散りいそぐなり  
つつみの道曼珠沙華の花点点と秋陽をあびて緋の色灯す  
柿の実はここたく実り色付きて木もとに寄れば熟れたる匂ひす

さいとうとみこ  
斉藤トミ子 ☆ (栃木県)

## 蔵王の御釜

要らないと思つていたるスマホ今無くては成らぬ物となりたり  
欲しい物何にも無いと思いつつアウトレットに登山靴買う  
思い出す「待てば海路の日和あり」六年生の担任の言葉  
飲み喰いの仕放題なる生活を長く続けし夫の病  
処方さるる薬忘れず飲む夫薬だけでは治らぬものを

何時までも聞いていたいと思う音田んぼの畔に霜柱踏む

リハビリは辛い食事も飽きたりと入院の夫我儘の出る

コロナ禍に面会ならず濯ぎ物届けて山をのんびり歩く

マッサージ痛み堪えつつ受けおりにオイルの感触心地よきなり

半世紀余働き通せる我が身体リンパマッサージ己に褒美

幼児に座席譲れば白き歯を見せてペコリとお辞儀するなり

エスカレーター七基乗り継ぎ辿り着くMOA美術館若者多し

見入る人多くあれども静かなり美術館鑑賞コロナ禍に良し

美術館の窓より望む熱海の手船を追ひ飛ぶ鷗が数羽

佐野駅の始発に乗りて熱海まで乗り降り自由な青春切符で

河津桜はらはらと散る下を行く海鮮丼の店を目指して  
 暖房の効きたる車内に抱え持つザックの中より干物が匂う  
 渡らむと歩道に待てば車止まる熱海の車は止まってくれる  
 県警の「止まってくれない栃木県」キャッチフレーズ思い出せり  
 歩行者があらば車は止まる熱海己が運転省みるなり  
 芽生えたるオクラの苗の元気なし葉裏にびっしり油虫いる  
 緑増しトンネルとなる細道に一面の白エゴの散り花  
 草藤とスマホに検索雨上がりの今朝の散歩に覚えたる一つ  
 さわさわと水口よりの水の音田に満たされて雲を映せり  
 苗代に苗育ちたり田植前の静かな時を風に揺れおり  
 夕暮の墓苑に一人母想う齡越えたり三十六回忌  
 雛の衣装作りいし母浮びくる錦の生地を裁ちて縫いいし  
 一日中坐して手仕事の雛作り丸みおびたる背なつかしむ  
 「何をしてもちゃんと責任とりなさい」就職の時言われし言葉  
 長き首ふんわり下げて餌ねだるキリンの顔が目の前にくる

遠足の園児に混ざり爺と婆おもわずはしゃぐ餌やりタイム  
 腹筋に力を込めて息を吐く酸素カプセルの酸素吸わむと  
 横たえればすぐに睡魔の襲いきてカプセルの中熟睡したり  
 青田なか首真っ直ぐに空仰ぐ白鷺一羽身じろぎもせず  
 凍らせたトマト頬張り一休みじわじわと胃の腑が冷える  
 お互いに「馬鹿みたいね」と笑い合う何時もの山で何時も会う人  
 生塵の袋突っ突き肉漁る一羽の鳥逃げず喰いおり  
 咲き初めたる蝦夷竜胆は雨に濡れ色増しており那須岳の道  
 細波に蔵王の御釜は輝きてエメラルドグリーン of 宝石の如  
 紅葉の栗駒山は賑わいて擦れ違う度譲り合うなり  
 這松の緑に赤のななかまど正に錦絵その中に立つ  
 二座登る一泊の旅は初にして日毎肉食ストレッチせり  
 テント負い一人キャンプを樂しむと若き女性の眩しき笑顔  
 山頂に会いたる人は九十三歳我れの足もと気遣いくれる  
 アルプスを縦走せし事語る翁山はいいなーと遠き目差

青き空荒草蔓延る休田に藍より青き朝顔の花  
 枯れ初むる荒草の中の紅き花スマホに検索するこう草と知る  
 香りくる金木犀は今年二度目気温変化の現象なりと  
 電線にびっしり並ぶ燕たち囀りており旅の準備か  
 ダンベルを我が家に見つけ筋トレするサツカー好きの十歳の女兒  
 さりげなく度を外すなり高一の孫は集合写真に入らず  
 レントゲンの骨に異状は無いと言ふ医師の言葉に我が尻撫でる  
 日本初女医誕生の紙芝居萩野吟子の資料館にて  
 男尊の世に生れ意志を貫きて医師の資格を取りたる吟子  
 散歩道名を知らぬ花検索す留紅草と出るこの蔓植物  
 外気温三十五度なる日のプール水に漬りているだけで良し  
 真夏日に近き気温の神無月手指のカサカサ秋は来ており  
 更新の認知症検査の講義受く八十までは運転したく  
 右左確認をして右見ればすぐ傍らに車来ており  
 糖尿と診断されて十余年夫の身体に異変現る  
 薬さえ飲めば良かれと思う夫テレビ番せり散歩もせず  
 執刀医は孫ほどの年齢前の説明ゆつくり話しくれたり  
 ひよどりは群れてかき菜を食べ尽くし隣の芥子菜啄みもせず  
 今年も又「七草なすな」と唱えつつ粥を炊きたり土鍋に任せて  
 傷の治り悪いと主治医に言われたと声元気なし入院の夫  
 十余年かけてなりたる病にて治り悪いは想定しおり  
 コロナ禍に面会ならずナースに聞く様子漏らさず聞く  
 ふくらはぎ腰肩背中のマッサージ滞るところ痛みあるとぞ  
 動く事働く事は厭わない喜寿なる今も家業を担う  
 ローブウェイの座席に立ちて声上げる幼はみんなの視線を集む

渡良瀬の土手に菜の花揺れており旧谷中村と標識の立つ  
 黙し見る十二・三世紀の展示品色保ちいる事の驚き  
 咲き満てる河津桜の根方にはクリスマスローズの俯きの花  
 青青と勢い茂る芥子菜は虫一つなく花咲かせおり  
 らじるラボに友の葉書が読まれたり亡き夫偲ぶ相聞の文  
 ラジオより友の名聞くは初にして生日祝うラインを送る  
 歩く速度遅くなったと口ぐちに言い合いており散歩の仲間  
 いつまでも自分の足で歩きたし朝靄薄れ光の眩し  
 日を受けて水路に水の光りおり燕は田泥啄みては飛ぶ  
 芥袋両手にさげて登校する中学生に挨拶さるる  
 ライオンの餌やりタイム檻越しに棒に付けたる鶏肉をやる  
 泳ぎ終えフロント出れば夕立なり車に行く間ずぶ濡れとなる  
 頭から汗滴りぬバンドナを又取り替えて登り出すなり  
 風通る稜線に立ち深呼吸夏日最中に宝永山へ  
 ゆつたりと波紋を広げ大き鯉泳ぎ行くなり川の浅瀬に  
 田に水が入れば聞こえし蛙の声今年は聞かざり燕飛び立つ  
 稲の丈越えてツンツン生う稗の稲より早く頭垂れ初む  
 眠りても眠りても尚眠れしは過去なり今は五時には目覚む  
 床の中もぞしたり伸びたり散歩の前の準備運動  
 木木数多切り倒されて太陽光パネルの並ぶ山肌となる  
 日に一つててる坊主作りきて二日の旅は晴天となる

しょうだふみえ ☆ (栃木県)  
 正田フミア

## 白菜の結球

実生から育てた低木花咲きぬ実りくれたる柿を撫でおり  
 実生から育てた柿の初生りは味見せぬまま忽然と消える  
 結球と半結球の白菜の種類あること知らずにおりぬ  
 今年こそ結球白菜作りたく本を三冊パラパラ読みぬ  
 白菜の結球する種を買い九月育苗開始わくわくとせり  
 白菜の苗定植後防虫のネットを掛けて薄め酢をやる  
 待ちに待った白菜結球出来上がり九株なれど愛しき野菜  
 株もとに包丁入れて切り取れば白菜重く結球を抱く  
 朝毎に南瓜の受粉済ませればぐんぐん育ち大きな実となる  
 畑から車道に伸びたる南瓜つる轆かれ平たく筋ばかりなり  
 畑越え南瓜の蔓が隣家の塀に近づけばUターンさせる  
 コロナ禍が少し下火に思われて次男帰省す二年ぶりなり  
 帰省の子に五歳児懐くも食事以外マスク外さず語り遊びぬ  
 北風に吹かれて畑に来たるとき麦青々と踏ん張りており  
 三回目コロナワクチン接種して発熱頭痛に二日寝込みぬ



男児五歳袴姿に詣でたり和服の母と歩み合わせて  
 写真館に祖父母集まり男児五歳袴姿をみんなが見つめる  
 三月にトマト種まき大玉と中玉ミニの育苗に挑む  
 あきらめて続くコロナ禍耐えるなり畑耕しジャガイモ植える  
 幾年も咲きて明るく楽しませ希望もたせる庭の花桃  
 花桃の桃色つづき白が咲く見上げる大樹に胸のふくらむ  
 玉ネギの畝に荒草目立ちおり玉ネギ押さえ慎重に抜く  
 金時豆かぼちゃオクラ空心菜と種まきポットに種を落としぬ  
 種まきの頭の中は緑の色発芽のみどり素直に嬉しい  
 種芋の里芋掘れば白き芽の発芽が見える地中も春なり  
 溝を掘り腐葉土魚粉堆肥入れ埋め戻す畝作り意欲わく  
 茄子苗を大きポットに植え替えて花芽の時をわくわくと待つ  
 入学の祝いに机と椅子贈る居間に合うよう小振りを選ぶ  
 黄の帽子黄のランドセルカバー目立つ小一子らが一列にゆく  
 七回忌ははに供える一对の豊かなる菊の花注文す

川又師の弔いの朝にははが逝き想いだしつつ七回忌墓参  
 川又師逝きて現に会えざるも歌集に頭ち来る七回忌偲ぶ  
 育苗の大玉中玉ミニトマト鉢増し二回莖太くなる  
 夏の日はトマトに強し不織布を大玉に掛け日焼け防ぎぬ  
 給湯器とうとう壊れ交換に新品納入不可の世相聞く  
 心配は直ぐに消えたり給湯器中古なれども高温の湯量  
 われよりも十一若い友逝きぬ突然の報せに立ち竦むなり  
 空調服左右の小さな扇風機とバッテリーにて風起こすなり  
 風起こす空調服の素晴らしさ首や背中に涼風巡る  
 トマト茄子の収穫に着る空調服涼しい風が服の中吹く  
 ボランティア共に努めた友が逝く本の音訳暖かき声  
 小説を鼻濁音にて音訳の友の音声いまだ忘れず  
 悔やみ欄を再度見たるも媪の名が七日前には会話交わせし  
 活字好き日記を付けて本を読む媪はいつも歌集の読者  
 房なりのブドウのようなミニトマト初めて成功一枝に十二個

渋柿がたわわに実り赤くなる旨そうだねと人ら寄り来る  
柿くれとベトナム青年柿を指す渋いと言えども話通じず  
顔ゆがめ食みたる渋柿ながら帰り行きたりベトナム青年  
渋柿を百個皮むき干し柿に紐でつるして竿にかけおり  
初生りの柿を愛でんと近寄れば柿の木だけが寂しく立ちぬ  
白菜を栽培するたび結球の緩い形の収穫をせり  
晩秋に大きな南瓜収穫す重量感ある八十個の実り  
収穫の箱にかぼちゃ七つ入れ持ち上がらずば一つ二つ出す  
水仙の白き花揺れ甘き香に冷えたる体ほのぼのとす  
白菜の霜に焼けたる頭頂部剥いて切り取る鍋の支度  
霜除けに菊の枯れ枝エンドウの周りに刺して守らむとする  
花桃の梢に飛び来てヒヨドリは高くさえずる日に幾たびも  
ヒヨドリの高きさえずりペランダの竿に止まりてしばしおりたり  
車免許更新に初めて高齢者講習受けるどきどきしつ  
二月に入り雨雪降れば地に伏せたカキナ葉っぱのしやつきり  
と立つ

種とりをしたるストック秋にまき発芽するまで胸の高鳴る  
桃色の八重のストック香り初めて育苗し朝が楽しも  
このごろは鴨鳴かずペランダにリングもらうまでじつとして  
イヌノフグリの青き小花を見ていれば春を思いて楽しくなりぬ  
日毎来てみかんついでむ鴨が桜咲き出せば来ることもなし  
わが背を超えエンドウの蔓伸び上がる手を高く挙げ莢収穫す  
畝作り有機肥料埋め入れて里芋の大きい親芋植える  
桜青葉輝く五月の短歌会真摯な指導の川又師頭つ  
晩秋に蒔きたる麦の穂が出てぬ敷き藁にせんとぎくぎくと刈る

種をまき育苗したるトマトたち黄の花咲きて畑に運ぶ  
トマト苗を植え付け根元に麦藁敷くエンバク麦の匂いかぎつつ  
梅雨明けの三十五度に汗したり夜に水やる苗や鉢花  
猫小屋に遊んでいたる猫たちも三十度越え冷房の居間に  
土壁の物置涼しく収穫のじゃがいも並べ今年も保存  
育苗の大王中玉ミニトマト赤く色づき畑にて食む  
側溝の上を踏み来る足音に顔を上げればミツバチ働きおりぬ  
ズッキーニの受粉をせんと雌花を覗けばミツバチ働きおりぬ  
支柱立て空中栽培試みる南瓜の蔓を棚にはわせて  
給湯器の交換作業完了しガスの点火に湯量流れくる  
アサガオの初花咲きて朝朝に花を数えるひととき楽し  
タオルまき首を守れど日焼けせり両手の日焼けさらに増す夏  
はつとして庭木を探すアブラゼミの今年初めて高く鳴く声  
空心菜の発芽子葉は万歳の姿愛しく何回も見  
空心菜ツルムラサキは夏に強く活力つけんと浸しに胡麻和え  
朝顔が昼になつても花保つ初秋の風に涼しそうなり  
大空に朝露受けて咲いている支柱いっばいの朝顔の花  
草取りに空調服を着てみれば涼しい風が首に吹き上げる  
在りし日の友の遺影に涙するひとり焼香切ない別れ  
近所にて言葉かけあう媼とわれ短歌年鑑喜び読み  
収穫のトマトは赤く糖度あり果物のごとく卓上に置く

## 鈴木やよい (東京都)

### 黙黙と

黙黙と庭仕事する秋の日は気付かぬうちに手元の暗し  
緑葉を伸ばし始むる曼殊沙華枯れゆく野にはそぐはぬ力で  
入り用でおろしたはずもATMピン札出づれば使ふをためらふ  
日曜の冷たき朝に試合する子らを見る親みな背を丸む

棚に並ぶ御節の値段に驚きつつ少量パックで迎ふる正月  
ふはふはの綿毛となりて枯れ残るつはぶきの花に初雪の降る  
凍る道自転車もろとも転びたる記憶のありてそろりと歩む  
松飾り取れたる朝は明るくて頬の筋肉ギュツと上げてみる  
どんど焼のやぐら整ひ夕焼けに高き青竹シルエツトとなる  
電車内ぬくき陽を背に眠る人膝のパソコン広げたるままに  
駅前の裸木の枝をねぐらとす椋鳥並びてネオンに浮かぶ  
細々と続けてきたる豆撒きも今年は豆すら買はずに終はる  
うらうらと光溢るる坂道を汗ばむ背中で梅林めざす  
梅はまだ蕾と知りて帰る道畑に聞こゆ耕運機の音  
塩漬の桜に甘味引き立ちて桜餅うまし今日は雛祭り

土手道の薄暗き灯に浮かびたる梅は静かに華やぎてをり  
「序の舞」の大き複製に息呑みし幼き頃の呉服屋の記憶

大漁の法被あざやか大道芸春の陽受けて拳玉みせる  
爆撃の瓦礫の映像切り替はりパツと現るいつものCM  
公園の野草屈みて見つめをれば見知らぬ人が名を教へくるる  
育ち悪く収穫もなく放置したザーサイ春に黄の花つける  
スーパールの改装セールに売場変はりいつもの品物うろうろ探す  
車窓から桜も見えて吊り革は揺れに合はせてスイングしをり  
土手に咲く桜の根元はぬかるみてくすむ花びら泥水に浮く  
冠の飾りを揺らしぐづる子も手を引かれ歩む稚児行列  
読経のなか烏帽子つけたる稚児一人衣裳のままで地に座り込む  
土いぢり好む母にと擬宝珠の若株掘りて土産に持ちゆく  
人影なき社を守る狛犬は遠き目をして新緑に坐す  
草むしりに羽音が響き見上ぐればスズメバチなりずりずり退く  
去年は六月八日に見たと聞きもうそろそろと蛍が気になる

沢沿ひに道ひんやりと緑深く修行の場なる滝の近づく  
檸檬の葉に動かぬ幼虫気になりて指触れたればムギユツと角出す  
炎天に日傘で狭まる視野の中エノコ草が生き生きと群る  
お施餓鬼で貰ひてきたる鮮やかなほほづき二つ玄関に飾る  
力士にも感染広がり呼出しは墨濃き文字の「不戦勝」掲ぐ  
間延びした音にてテレビに納まりたる三尺玉の実物見たし  
暑さこらへ見つけた店にミルク味無くまた外へ出るかき氷求めて  
背後より荒き呼吸で近づきて走り抜く人汗でぐつしより  
土手道に立ち止まり見る歩数計まだまだ足りぬ目標の距離  
喘ぎつつペダル踏む坂かるがるとアシスト自転車追ひ越してゆく  
羽化したるアゲハ飛び立ち抜け殻のうつろな空間そのまま残る  
草茂りし空き家はすでに更地となり敷地の傍に曼珠沙華咲く  
抽選での会場取りは気が重し周りで待つ人みなライバルなり  
劣等感も自慢も人との比較なりと通りがかりの寺の門にあり  
実を付けたるカンナのなかに一つだけ花の残りて暮れゆく公園

立派なる旧本陣で気に入るはうさぎ模る釘隠しなり  
覗き込むとんがらし地蔵のほこらには袋のままの鷹の爪あり  
洗濯のり持ちて夫が出掛けるは地域の子らとのスライム作り  
取壊し近き校舎の壁被ふ紅葉のつた陽に輝けり  
ぼんやりと消えゆく月の位置確かめ気になりながらも台所へ戻る  
見上ぐれば月のかけらは早膨らみ新しき光をかうかうと放つ  
穏やかな師走の昼にじつくりとガラス磨きて心も拭きゆく  
グラウンドの隅の櫛は葉を落とし野球の子らを静かに見下ろす  
衰へゆく猿を世話する飼育員老いの姿をまつすぐに撮る  
避けられぬ老いは同じと思ひつつ猿のイソコの記録を見る  
幾度も元旦廻りてきたれども今朝は雲見てリセット思う  
一日の目標達成あと少し歩数アプリに励まされ歩む  
パンダ鴨と聞きて思はず聞き返し如何なる鳥かとネットで探す  
ぐちぐちと悩む吾には眩しく見ゆ白鷺すくつと首伸ばし立つ  
冷え込みの厳しき朝にそだけは淡紅あふる寒桜一本  
甘納豆に稔典さんの句が浮かび「うふふふ」と口に投げ込む  
落書きのへのへのもへじが何か違ふ「の」が「め」でまつ毛  
の目がばつちり

今はただ草の生ひたる本丸跡固き蕾の桜が囲む

散り始むる桜に今年も見納めと冷たき雨にダウン着て出る  
傘に跳ねる雨音聞きつつぼそぼそと独り言いふ桜の下で  
桜しべ残る枝々見上げをれば例大祭の法螺貝の鳴る  
御詠歌に続き進む貫首さま赤き大傘さしかけられて  
立ち枯れて河原に残るスキなれど根元辺りに緑のまじる  
端午の日連なる鯉は垂れ下がり尾びれに触れて喜ぶ子のあり

どつしりと幹に苔付け桜立つ梅雨前の空に葉を繁らせて  
夜の土手螢あるか目を凝らす手で外灯の光遮りて  
排水の入りし頃あるこの川につつましく飛ぶ螢のいとほし  
ごぎの上に思ひ思ひに座りたる園児らじつと紙芝居見る

滝近くに苔むす石仏並びて揃ひの頭巾が赤く際立つ  
通るたび鉢植多檜櫓を覗き込み成長確かむ揚羽の幼虫

寝過ぎた梅雨晴れの朝は静かなり夫はずでに畑に行きて  
暑き夜の眠れぬ疲れを残したまま先づ手を伸ばす昨夜の枝豆

浜離宮の緑の水辺に身を乗り出す如何してここにエヒがあるかと  
東京湾の水と気付き見て見ればひらめくエヒはゆつたりと過ぐ  
岩煙草目指して沢浴ひ登りきて時期遅しと知る散り残る花に  
翅広がる揚羽の横に殻のあり羽化したばかりかじつと動かず  
灼熱に静まり返る庭園の池には鯉が競ひて口あく  
獣から畑の西瓜を守らんと夫はザルを買ひきて試す

今年もまた無駄な努力に終はるかど売場の西瓜ながめつつ思ふ  
暑いのにどうしてさうまで走るのかその体力が羨ましくもあり  
駅に着けばどつと噴き出す顔の汗マスク外すを気にしつと拭ふ  
世の中の同調圧力やも知れぬマスクは老いも隠してくれる  
通るたび激しく吠ゆる犬なれど何故か憎めずいつも近寄る

通学路を見守る夫のボランティア警官のごとき制服にて行く  
イベントに薄煙流れイカ焼きの匂ひ漂ふ鱗雲の下

オーダーはスマホでと言はれメニュー無くおたおた読み込む  
QRコード

初めてでも仲間がいれば怖くない試しては笑ひオーダー終へる

## 切り株

住職の親子の読経が畑地より空に大地に広がる小春日  
燃え上がり縦横無尽火は盛る精霊おくりひたすら合掌

のてんぼの赤さに惹かれ林に入る脳裏をよぎる季節の花々

渋滞の東北道はたそがれて渡良瀬川に落ち行く夕日

わが巡りひた迫りくる変化ありコロナに続くその後の暮らし  
歳重ね兄弟姉妹そろえば共通の癖などありあり父母の懐かし

うるち餅網に焼けて立つ香り待ちどおしかり正月あのある

六日間共に過ごして孫等はかえり犬は日向に四肢伸ばし眠る

雪を分けナズナを探すわが畑三株見つけた明日は七草

雪ゆえに遅れた七草メモ入れて友等の家に届ける早朝

三人の孫に「焼き絵をおしえて」と乞われて夫のまなこがひかる

コースターに模様を描き電気ペンで焼きゆく様を見て居る孫等

それぞれの個性を見せる作品に満足している夫も孫も

仕事もつ孫等に「続けることが大事」と夫は焼き絵の道具を贈る

初詣叶わぬままに子等帰る夫に一つの明かり残して

たかはししょうこ  
高橋燿子 ☆ (埼玉県)

芽キャベツとブロッコリーを摘み居れば椋鳥が寄る首を傾げて  
 オレンジ色の切り株に四十余年花見をしたる友が偲ぼる  
 「伐採」の張り紙つけて十日後に椅子の高さに桜の切り株  
 サイレンと防空壕におののきたる幼い日々が今蘇る  
 川浅瀬に水浴びをする椋鳥の群れをつつめるしぶき七色  
 木の上に羽づくろいして羽ばたいて水浴び後の椋鳥忙し  
 娘と二人花見の途中椋鳥のありさま楽しむ心行くまで  
 トンネルに吸い込まれゆく思いあり夜の桜の爛漫妖し  
 乳を飲み母に寄り添う仔馬みる日高牧場のどかな春日  
 丘目がけ疾走する親子馬サラブレットの血が騒ぐらし  
 生垣の傍らに声をふりしぼる小雀拾えり散歩の途中  
 手の内に目を閉じ丸む雀の嘴の周囲に産毛ふわふわ  
 群れの声騒がしく渡る梅林に小雀放てば木を上りゆく  
 小雀の温もり残る手の感触日長の土手に梅雨空仰ぐ  
 堤防を背に観音が白くたつ津波と同じ高さにそびえて

読経の合間いつしか雨あがり浜風が供花をゆらして過ぎる  
 三百の花びら潜む蕾の蓮を見たいと待ちぬほどけ行く様  
 疎開という移動手立ては食べ物も安全もない筈暮らし  
 飽食の時代となりぬ敗戦の飢餓かたりつつ雑炊とする  
 又してもコロナの患者増加して息子の感染嫁から知らさる  
 それぞれの部屋にこもれる二週間バラ肉煮込み届ける見舞い  
 重箱を玄関に置き戻りみち鳥の背を見る十三階の窓  
 腰痛の吾とひざ痛の妹が階段見上げる新国立劇場  
 オペラの中に身を置きて吾に聞きよしテノールの声  
 単衣なら吾手で縫おうと針持てば絹の感触蘇りくる  
 針運ぶ手順覚え居る不思議斯かる晴れ着を縫うも最後か  
 補聴器より聞きたき声は届かずに雑踏に居る心地ざわざわ  
 荷が届く栗ぎんなん新米と秋の生日を父母に感謝  
 待ち待ちて木犀香りぬわが生日炊きこみご飯は栗と銀杏  
 わさわさと紫蘇を取り来て実をはずす食べる楽しみ配る楽しみ

塔婆焚く息子は服を脱ぎに脱ぎついに肌着で作業に動しむ  
 蒟蒻や煮つ転がしの御馳走は母より姪に引き継がれたる味  
 故郷の家をめぐる二度三度林の中にてんぼ赤く  
 大銀杏朝日に輝く天辺に白鷺一羽止まりいて動かさず  
 黄金色と鷺の白と青空と出会いの感動という他はなく  
 面影の澆澆として今もあり友は鬪病七か月後に逝く  
 微笑める自らの写真に満足し友は子息に抱かれ逝きたり  
 子は嫁と巢籠もりくらし貫く強き身辺整理が着々という  
 米寿の兄は婚六十年と大僧正にお礼のべいる和顔のままに  
 花いけて正月飾りも終えて待つ三河より来る一行五人  
 携帯をかざしゲームに夢中なり孫ら四人がテレビに向きて  
 雪の朝ただ静かなる土手の道犬引く人の足跡続けり  
 一月の半ばになりていまだ咲くトランペッターが部屋に  
 香り来

賑やかに娘ら家族を迎えたりまずは二年の無沙汰を詫びる  
 日を浴びて種馬鈴薯が売られ腰さすりつつ一キロを買う  
 名を知らぬ野菜や魚を教わりて朝の市場に増える知り合い  
 畝を立て馬鈴薯並べ植えつける土の温もりに包まれながら  
 シルバーの毛皮のコートを脱ぎ棄てて白木蓮は春を告げ来る  
 年ごとに春を告げたる桜の木老木になり伐採される  
 醜さをこれでもかとさらけ出し攻撃破壊戦争の恐怖  
 羽ばたいて水浴びをする椋鳥を木の上に待つか群れの半分  
 研修医となりたる孫を祝いたり杯を重ねる家族の絆  
 咲きつぎて季節のアピール羅生門カズラ二輪草すみれ  
 日程表と地図を見つつ相談の四年ぶりなる夫との旅

新千歳空港出れば山桜がうすいみどりの林にちらほら  
 ウポポイにアイヌの文化の祈り歌神にささげるまこと見たり  
 伝承の衣装も職員の手によるとアイヌ文化を守る人らは  
 森進一島倉千代子の歌碑のある襟裳岬に砕けちる波  
 忘れまい一瞬に奪われたる百九十人の犠牲者の碑  
 白波の寄せる堤防人住めぬ危険区域荒浜の地区  
 骸かと拾いたる雛にその鼓動動かず鳴かず身を守るらし  
 草むらに雛を放てば舞いおりて親子か二羽が茂みに消えたり  
 馬鈴薯にトマトによく似た実がついて話題になりぬ畑の仲間  
 育ちすぎはスが入ると聞きまだ青い茎を引き掘る馬鈴薯畑  
 記録にはない六月の猛暑という家に籠り買い物は夜  
 暑き日も野菜の収穫楽しみに夜明けを待ちて犬と畑へ  
 取りたての茄子とトマトとピーマンが厨彩る元気の源

添竹より伸びて朝顔宙にあるも庭木のほうに傾く素振り  
 一面の緑の中に凜と咲く蓮に魅せらるカメラが並ぶ  
 河骨と立て札あれどチガヤばかり羊草もアサザも見えない  
 忘れまじ「広島」「長崎」ウクライナ戦闘続く民の苦しみ  
 キャンディを撒く米兵にわが親は近寄るべからずと厳しく咎めき  
 平熱に戻る息子を戒めたり五十代は若くはないと  
 「お琴の発表会に来てほしい」由奈の電話にこころ弾みぬ  
 厳しい稽古の成果見せ一糸乱れぬ箏曲を奏しむひととき  
 緋の法衣着け「恥ずかしいよ」と言いたる兄祝賀の席に常と  
 かかわらず  
 近づきて無沙汰詫げればお互い様と美しき白髪のがれの人

た なか ゆう こ  
 田中祐子 ☆ (埼玉県)

## 家族

発想が違うんだよと子が笑う大真面目なる冒険願望を  
 為し遂げてたわいも無きと笑うまい七十八歳一歩進めり  
 翹雲へ入り日が射して窓越しの秋の構図は深まりてゆく  
 ニコニコとばばの話聞き呉るる本来無口の少年に温む  
 ほの残るさとの訛りのあたたかき兄は怒るとさらに目がひらく  
 軽やかに民族衣装に唄い踊るドンコサックを兄と観劇しき  
 夜も更けてスマホに辿る遙かなるロシアの記録はドンコサック  
 雪だるま大きく作る隣家の小一少年得意気のポーズ  
 孫なんぞ可愛くも無いと放言のその祖母の笑み雪だるまと並ぶ  
 食文化変わってくれば子供達の歯数も定かにならずと歯科医  
 半世紀夫とも通いき隣街の病院不便に転院を決む  
 有り余る想いをまたも畳み込むこの病院に夫を看取りき  
 このうたが好きと時折口遊みき鈴懸の径ラジオと唄う  
 在りし日のちようど今頃この席で夫と昼食楽しかりけり  
 微笑みをわれらの席へ送り呉るる独り食事の婦人泛びき

五年目の春はともかく爽やかにブラウス選びて墓へ参り来  
 若竹の具材がおもの混ぜ御飯に旨いねの声その父に似る  
 市を挙げての一斉清掃の決行はコロナ禍のなか三年振りなり  
 補佐役と次男が休日返上に空缶ごみを共に拾い呉る  
 大好きな姉がとうとう身罷りぬ不意にはなくそれでも不意に  
 どうしたと受話器を通す柔らかき声に癒され励まされ来て  
 古歌まじる安倍晴明語りべの姉に仕込まれき幼日のわれ(陰陽師)  
 貧しくも幸多かりき幼日の母の記憶と姉兄の記憶  
 ひきふねに乗り換え来たる姉の家うら寂しきよチャイムを押す時  
 黒目勝ちの姉の笑顔は活き活きと見ゆ六十代の遺影を飾る  
 玄関の上がり框に腰掛ける姉の整髪におしゃべり尽きず  
 ほろ苦き路の含め煮ことのほか姉好みたれば早摘みに煮たり  
 仕立てたる黒の羽織をその時は掛けておくれと姉言いましき  
 肌掛けを真夜に直して呉るはだれ夢かと思ひ安らぎ寝入る  
 甥宛に姉の恩情したためて二度読み返す朝六時まえ

花の名を時折忘れるゼラニウムのプランターに育ち十年を咲く  
 廃屋となりて幾年か隣家の婆ちやま呉れきゼラニウム一株  
 百歳を二カ月残して逝きたると婆ちやまの娘御久しき来訪  
 婆ちやまを語る娘御のやさしかる泣いて笑って晴れ晴れと帰る  
 若き日の読書に北条政子在りて古本の束を倉庫より出す  
 古びたる文庫本に「鎌倉殿の13人」と史実を照らす  
 戦ささえ無かったならと幼日の母の呟き想い出したり  
 然りげ無く手を添え呉るる子の友はわが息子達と同窓に学びき  
 ミラー越しに後部座席を覗き込み元気そうだねと運転の次男  
 駅を挟み大手スーパ一両隣り休日の隙を次男が連れ呉る  
 買出しの袋二つを軽々と持ち呉るる次男に遅れじと歩く  
 駐車場の植え込み清かに秋あかね数多飛び交うを次男は気付かず  
 人差し指に円を描きて秋あかね取らむとしたりき少年の日に  
 コスモスが小き花壇に溢れ咲き空の澄みたる結婚記念日  
 埼玉は遠いところよと潤みたる懐かしき母を抱き締めたき日

茫茫の庭はきれいに整いて古家の風格僅かにあがる  
寝返りをしつつ聞き留むる終電のエクस्प्रेसに深まる郷愁  
筑波嶺へ繋がる峡の秋の日は午後四時なればすっかり暮れて  
秋の陽をぞんぶんに浴びる柿の実を取つてあげると兄の木登り  
フリージアの蒔きどきなれば保存する球根如何にと不安に覗く  
黄の花はとりわけ香り高くして秋たけなわをフリージア蒔く  
文化の日だあれも来ず肉じゃががほっこり煮えて供える夕べ  
パープルの混ざるセーター勧められ躊躇いつつも思い切つて買う  
紅葉にまあるきかたちを誇示したる玄関先の満天星  
松葉の木に覆われて咲く山茶花の白を優しと見てる夕暮れ  
起床時の遅れる朝は大急ぎ表まわりの雨戸を開ける  
風の無き土手道空は澄み渡り中川青く静まる初春  
バス停に余裕を持ち待ちをれば十分遅れの前のバス着く  
昨日は三者面談と高一の少年の笑み久びさに見る  
駅近く路線バスにて十分のクリニククの所在保健所案内に  
長男の付き添いありてこわばらず新たな医師に今を話せり  
わがさとの庭より腕いで来たるごと冬雷表紙絵に彷彿したり  
一滴の点眼済みて朝刊の活字を裸眼にたしかめており  
父母会は年嵩のほうと笑いたる嫁は髪形変えて恥じらう  
冬の間はビニールシートを被せ置く勿忘草の萌え出づる庭  
庭隅に五年を過ぎて咲き初めるクリスマスローズの薄紅二輪  
一抹の不安を抱え三度目の通院の日は暖かく澄む  
紅梅と白梅門を挟み咲き子等思いつつ香り楽しむ  
薄靄に包まるる墓地は謎めきて人影のなき彼岸の早天  
目を止めるブラウスはみな高価なり着て行く場所も無いわと離る

遊歩道に二度ほど見知る老女また右手をあげて擦れ違い笑む  
カラフルにスカート穿きてスニーカーの老女のこなし頼もし  
く見る  
失敗と工夫をかさね漸くのネモフィラとぞ姉き被りの笑み  
ネモフィラを瑠璃唐草とも呼ぶらしも昨夜の雨に清しさを増す  
藍色のほんに可憐な花の咲く勿忘草が吾が庭に満つ  
在住の人等と暫しの交流に次男は言葉少なに笑顔  
大雨にタクシー頼む通院の朝の寒きに冬と紛えり  
閑散としたる期日前投票所の係五人の視線に疎む  
真夜覚めて姉のいましめ思いおり寝返りしつつほっこりしたる  
為来りに悩む日在りき今年より組うち揃いての新盆参り止む  
冷房に籠る日の増して長男の持ち呉る本を読み尽くしたり  
来客の帰り間際を降る雨にやむなく鄙びた傘を勧める  
今風の雨傘買わむと店に入り偶然居合わせる子の友と選ぶ  
路線バスを頼る買出しは少なめに多きを持てば腰に障り来

たばた い お こ  
田端五百子 (岩手県)

## 余生の日々 I

夫の魂を乗せて来たるか薄き羽光らせ蜻蛉軒端に止まる  
双の手に蜜あふれさせ桃を食む裡なる鬼の鎮まりてゆく  
舷に止まりて鷗は狙ひゐる競りに零れたる獲物狙ふか  
風の意のままに秋桜揺れ交はす色また色や牧の果てまで  
海にちなむ画廊のテラス海猫に見られつつ友と紅茶をすする  
「朝顔の種」と記したマッチ箱母の針箱に潜ませありぬ  
海に向く特攻の墓奈落より這ひ上がるがにけあらし渦巻く  
若者ら魚雷となりて死す事実今は無人ドローンが狙ひ撃つとふ  
丘跳ねる兎の如き動きにて黄金の芒が風に靡けり  
芒原こえてその先海原へ一つ秋蝶飛び込みてゆく  
しんがりごとくも知れず翳雲青空覆ひ小春日の午後  
頬かぶる媪が独り麦を踏む継ぐ子あらざる切岸の畑  
十二色すべてを使ひ曼荼羅描く青と紫いろを重ねて  
「百ひく七」と数字が不意に踊りだす認知症検査受けたる夜半に  
一本のザイル揺らして病院の窓拭く人を待合より見上ぐ



しがみ付く幼の頭権現にばかり咬ませて年改まる  
 吊革につかまる人と肩触れて防虫剤の鼻かすめたり  
 奴胤一本松を越え昇る尚も日輪に近づかむとして

園児らに女警官しやがみ込み交通ルールゆつくりと説く  
 窓ガラス白く曇らせおでん炊く家族の幸せ満ち来る時間

「熱いですよ」軍手に渡さるる焼き芋を吹いて叩いてさすり食べたり  
 「この子らの願ひ叶つただらうか」絵馬ならし荒ふる風を境内に聞く  
 羚羊にも迷ひあるらし雪原の途中で踵を返す足跡

防寒着のチャック緩めて散歩道短歌の欠片を拾ひつつゆく  
 真つ青な空の天辺で宙返り挑戦者は弧を描き大地に着地す  
 ひとつまみ梅酒のグラスに雛あられ入れてウクライナの哀しみ思ふ

雪解雫を肩に受けつつ暖簾くぐるご当地グルメラーマン旨し  
 山くんだり谷を走りて野を巡り我が田充たせる春の水音

「だいぢやうぶ」断り言葉と受けとりて杖突く媼の背を見送りぬ  
 身に余る未来サイズの服着たる生徒校門駆け込みてゆく

潮騒をかき消す如く鳴き交はし海猫乱舞す三陸の海

過疎の地を素つ気なく過ぐ選挙カー先代からの票眠り居る地ぞ  
 奈落へと落ちゆく如く二つ蝶切岸の菜畑もつれ飛びゆく

夫の癍残る籐椅子陣地とし短歌を捻る至福の刻と

陽に向きて自己主張する向日葵よりうつむく百合を夫は愛でぬし  
 継ぐ人の有らざる友の家雑草に占領されて滅び迫るか

靴下を脱ぎて砂浜駆けてみる外反母趾を波洗ひたり

若葉風入れて会議の始まりぬマスクの顔しか知らない人らと  
 味噌蔵の節穴に夕日射し入りて発酵といふ蠢き匂ふ

「ぢや又ね」と頬ずりやめぬ人論し棺の蓋は永久に閉ざさる

張り紙もせずひつそり店たたむ子らを相手の媼の駄菓子屋  
 星隠れ風なき闇の川べりを秘めやかに蛍の三つのひかり

帰省したる孫は「首掛け扇風機」忘れて縁に大いびきかく  
 タグ付きのヒールが箱に仕舞ひある闊歩する日もあつたればこそ  
 折りたたみ傘の如くに百合開く危険な暑さの続く昼下がりに

昨夜の夕焼け吸ひたるやうな朝焼けに夜釣り見合はずと魚屋の叔父

観客なく五千の花火空に爆ず花火師の技競ふシヨトカ  
松原の倒木をもて造りたる生徒らの吹くオカリナ響く  
荒縄に組まれたる櫓に子らの刈る稲束掛けゆく笑顔の唄ら  
立ち昇る煙ほそぼそ瘦せサンマ味は上等大船渡産  
白目して睨むと外人箸つけず三日三晩を煮込みたる「かぶと煮」ぞ

なだらかに丸み帯びたる水平線のぼる初日を岬に拝む  
五線譜のごと電線に並びあたる雀の姿見なくなりたり  
空つ風に飛ばさるる五円のレジ袋国道横切り垣根にとまる  
折からの雪につや増す実南天ゆふべ大方きつつき啄む

「片目達磨」大事と抱へ御社のきざはし下る紳士に出会ふ  
大泣きする児に獅子舞の怯み見え汗する美人の笑顔あらはる  
数独の荒野を彷徨ひいねがたく枝折戸を打つ風の音聞く  
おさがりの紅絹の襦袢は七五三祝ふ女孫の晴着と成れり  
毛嵐の中より一両車現れて女生徒のこし発ちてゆきたり  
樋ながるる水音日増しに春奏で南天の実は大方鳥食む  
青空を写し取るがに犬のふぐり春日を受けて土手に一杯  
夕焼に染まる雪山向ひ家のガラスが映す明日は晴天  
「桜の開花」海峡渡るとニユースあり列島の長さ改めて思ふ  
花いかだ押し合ひ川面を流れゆく花びら屯し風に押されて  
夕焼けの彼方へヘリコプター消えてゆく雪の残れる稜線かすめて  
鏡のごと光る水田は若葉して鳥のさへづる山並み映す  
軽やかな囁りなのに名を知らぬ小鳥が枝に胸毛震はず

花吹雪両手広げて唯歩く籠り居に飽き出できし堤を  
選挙カー白き手を振り過ぎゆけりうぐひす嬢の声のみ残して  
カルガモが横断歩道を渡りゆく出勤急ぐ車を止めて  
親の出番こいらまでと豆御飯でんこ盛りして娘の前に置く  
農道より現るる耕耘機ゆつくりと街中に泥ぼたぼた落とす  
起きぬけに畳の縁に躓きぬ老いの兆しの一つと寂し  
雷がでんでん太鼓振りみると幼に添寝す布団を撫でて  
あと十分歩けば家に麦茶待つに堪らずスーパ一の扉押したり  
教室の窓を染めぬる夕焼雲あの子らの夢かなつたらうか  
孫自慢始まりさうな気配ありて用件のみを手短に言ふ  
故郷より宅配便の夏野菜つめる地元紙皺のばし読む  
叢に生える白百合一輪を地蔵様の足元に置く  
雷に怯え鳴く犬抱き寄せる一瞬獣の臭ひ鼻つく  
木々の下繁るドクダミ強き香にむせつつ青空仰ぎ見る夏  
コロナ禍に滅多に会へぬ曾孫三人スマホに並びそれぞれ語る  
日本の懐試さるる局面ぞ元首相国葬反対デモ悲し  
双の手を濡らして桃の蜜を吸ふおすそ分けとふ友の土産ぞ  
夕焼を掻き分けカモメ従へて入り来るさんま船港活気づく  
線状降水帯で猛烈な雨「命を守る行動を」とテレビ念押し

なが おひろ こ  
長尾弘子 ☆ (東京都)

## 中溜りの日

髪を切り心は少し若やいで夕暮れの街を歩いて帰宅す

小春日の背に暖かき道を行く昼食共にと娘の待つ店へ

公孫樹の葉の黄に移りゆくグラデーション風に遊べる秋ふかまりぬ

路地裏の空地に茂る草の中水引きの紅なつかしみ見る

音たてて実を落としいる櫛の下啄む鳩は驚き飛びたつ

小春日の土手の傾りの草紅葉ソリすべりする子等の声高し

反射板交通事故の防止にと靴に張られて歩く夕暮

枝先に小さき膨らみ蕾ならん裸木の辛夷に春待つ力

友逝きて八年経ちぬ頂きし車輪梅芽吹き思い出新た

浅き春子等の遊ぶを遠く見て白梅の下静けさに立つ

ビル風に身を屈めつつ歩み来て地下鉄駅に髪整える

窓際の光の中に寄せ植えの小さきハーブを置きて春待つ

タラの芽を見つけて献立きままりたり八百屋の店に沢山の春

恵方巻関心なければ店先に並ぶを見れば買ってしまえり

新聞の編集手帳声出して読むを日課に滑舌たしかむ

枝垂れ梅紅梅白梅咲きさかる香梅園の日溜りの中  
 卒園式のライブ配信落ち着いて振る舞う孫の成長を見る  
 雨上がり桜さくらを見て歩く心おどらす花追い人われ  
 広げたる公孫樹の枝々緑ぐむ浮き立つ心少しもらいぬ  
 池の辺の芝を啄む白鳥の名はさくらとレオ人に馴れおり  
 刻みたるキャベツの箱の浮く餌場 首重たげに音たてて食む  
 名を呼べば近づく白鳥その白さ保つ尻尾をちよつと振りたり  
 竹林にこぼれ日ゆらす風ありて吾が丈ほどの竹の子数多  
 午後の茶をしばし楽しみ別れ来る小径に卵の花白々と咲く  
 坂の街ぶらり歩いて軒下の燕の巣作り佇み眺む  
 魚屋の客の帰るを離れ待つあお鷺一羽馴れたる動き  
 投げらるる魚の頭飲み込んで魚屋の前離れぬあお鷺  
 大雄山鷺の声に送られて心みちたり宿に帰り来  
 マスク外しラジオ体操深呼吸大公孫樹の下緑に染まる  
 ヤモリには強い薬は如何かと葉裏の虫をブラシで払う

剪定のミスにて咲かぬ紫陽花の鉢にあふるる葉に梅雨のあめ  
 此処かしこ路地に置かるる自転車の乗りたる人の気持留めて  
 ピアノの音流るる午後の両国駅構内に置かるるピアノに集う  
 父と娘と手をつなぎ行くラジオ体操出席カード胸に揺れおり  
 蟬の声いまだ聞かねど低き枝の葉裏にしかと空蟬のあり  
 細き葉に蜻蛉とまりて金色の背ゆれている朝の川辺に  
 蓮の葉の緑ゆたかに立ちあがり花の咲き初む不忍池に  
 猛暑日の木陰に数羽鳩のいて土に腹つけ暑さ凌ぐか  
 いつになく人の流れの多くあり外出制限緩和の後に  
 混雑を抜けてようやく喫茶店の窓に見下ろす駅前広場  
 戯るるラブラドルと甲斐犬は共に三歳いつもの朝に  
 蟋蟀の声聞きたるはいつのこと秋風の吹き懐かしみおり  
 町会より長寿祝い金いただきぬ終わろうとするコロナ禍の夏  
 隅田川船の通れば波立ちて吾が足元を濡らして行きぬ  
 水嵩の増えたる流れ透明の水母は数多浮き沈みゆく

コロナ禍の誕生会は集えねど祝いの菓子が町会より届く  
朝摘みの「もつてのほか」を買い来たり香りと齒ごたえゆっ  
くり楽しむ

公孫樹葉を散らしおり並木道に掃き寄せられて黄の山ふたつ  
夜嵐の車道にころがる植木鉢眠り妨げるその高き音  
マスク付け大きな眼帯吾の顔片目だけなりこの不自由さ  
タクシーに乗れば怪我かと問われたり白内障の手術の後に  
スマホ開けば挨拶は皆スタンプで人それぞれの違い楽しく  
ラインにてお座敷小唄の替え唄ありボケない小唄を領きて聞く  
三回目のワクチン予約決まりたり友と三人力を合わせ  
念入りに上着にセーター毛玉取るコロナ禍のうつ脱ぎ捨てるごと  
目白いて時折落とす桜花手に取りみれば茎の傷新た  
満開の桜大樹のうす紅を仰ぐ老いの身さみしさの湧く  
河川敷に共に遊べる椋鳥はゴルフボールをよけつつ啄む  
露天風呂谷のせせらぎ聞きながら極楽気分手足を伸ばす  
ラインにて暑中見舞の仕掛け花火曲に合わせて幾百の花  
香を散らし並ぶ金銀木犀を見上ぐる先の秋空の澄む  
ずぶ濡れの服脱ぎながら思い出す晴れ女だといつも言う人  
わが肺の透視写真の矢印の先の一点癌の疑い

ながみつとくこ  
永光徳子 ☆ (東京都)

## 四季を生きる

多摩御陵の池のほとりのモミジの木交じり気のなき赤の迫力  
ハラハラとウインドウ叩く銀杏の葉ワイパー動かし視界を確保  
落葉の銀杏並木の枝の間に初冬の空は青く澄みいる  
立冬の朝の陽射しはテールに飛び交う野鳥の影を映しぬ  
山茶花の艶やかに咲く生垣に狂い咲きたる紫陽花の青  
胡桃の木の川面に延びた枝先に烏瓜の実赤く連なる  
曇天の冬日の空は淀みおり野鳥の群れは低きを飛びぬ  
お札授与するマスク姿の巫女達の優しき目元に心安らぐ  
寝込みたる娘に送るクール便レンジガス台フルに使用して  
タッパーにあれもこれもと詰め込みて「食は力」とクール便出す  
職人の庭木刈る音心地よく梯子の先に青き空見ゆ  
梅の花散らし吹きたる春一番花粉を運び黄砂を運ぶ  
朝焼けの空に羽ばたくカラスの群逆光の中影絵の如き  
山寺に甥姪達と母方の祖父の壁画を訪ね見に行く  
桜咲く岩殿観音正法寺の仁王門の先石段つづく

岩壁に立ち並びたる石仏に桜の花の散りてつもりぬ  
 高台の観音堂の天井画「鳳凰と竜」迫力のあり  
 額堂の壁画は「白馬と人物画」劣化したるが落款の見ゆ  
 襖絵の「雪もち笹」の静寂感胸に響きて足止まりいる  
 嫁ぐ前母が呉れたる南崖の春蘭の絵絹形見となりぬ（南崖は祖父の雅号）  
 若き等と古きを訪ね語り合い春の一日老いを忘れる  
 青空に緋鯉真鯉のはためいて水面に映る影も泳ぎぬ  
 菖蒲湯にゆったり浸かり目を閉じる脳裏を過ぎる鯉のぼりの歌  
 芍薬の丸き蕾はふくらみて今朝開きたり大輪の赤  
 在りし日の夫の植えた芍薬を一人眺める四度目の初夏  
 古びたる花の凶鑑を取り出せば小さき押し花はらりと落ちる  
 病院のロビーに置かれた笹飾り世界平和の文字の目立ちぬ  
 里芋の葉の露集め墨をすり願い事書きし遠き七夕  
 茗荷摘む季節となりて想い出す義母と探ししナンバンギセル  
 猛暑日の高校野球の地区予選日傘かざして家族並びぬ

球場の近くに止まる軽トラック アイスクャンデーの幟り懐かし  
 六十年掛け替えのなき心友の棺の蓋に吾は釘打つ  
 真夏日の驟雨の中を黒塗りの車は飛沫<sup>しぶき</sup>あげて消え行く  
 誰も居ぬ家に戻りて喪服脱ぎ冷房つけてソファーに沈む  
 涼風に慌て散りゆく百日紅猛暑の夏の主役をおりる  
 スーパーに停めたる車のワイパーに赤トンボ止まり乗るをためらう  
 山田川の護岸工事が行われ橋下の狸住みか追われる  
 四年前夫見舞いて帰る夜親子の狸と初めて出合いき  
 山林の造成進み追われ来て又追われ行く狸<sup>いざこ</sup>よ何処  
 コロナ禍の落ち着いた頃会おうねと誓いし友の納骨済みぬ  
 ススキ枯れ彼岸花咲く庭先に四季咲きのバラ細々と咲く  
 長雨に庭の雑草勢いて吾が手に負えず除草剤撒く  
 七日経ち草は見事に枯れはてて薬の威力に不安の残る  
 寝付けずに古き冬雷読みおれば時を忘れて朝の鳥鳴く  
 朝刊の配達員のバイク音馴染みの音に安堵し眠る

腰痛め玉砂利の道進まれば門前に立ち参拝したり  
 小春日の庭に舞いくるヒヨウモンマダラ琥珀色なる羽の輝けり  
 幼虫は醜き姿の毒虫と知りても尚見るヒヨウモンマダラ  
 初霜にかじかみて立つスプレー菊朝の陽のなか花びら開く  
 庭隅の落ち葉に埋まる猫の墓落ち葉の下には水仙出づる  
 コロナ禍に食事の会もなくなりて友人達とチャットで会話  
 月食を各自の家でスマホ撮り写真出し合いチャットで楽しむ  
 久々に生家に帰り元朝の参拝の為鳥居をくぐる  
 敵かに社に流るる元朝の甥の祝詞に故人を偲ぶ  
 振袖の晴れ着姿もマスクして柏手を打つコロナ禍の春  
 初雪に化粧されたる庭先の万年青の赤き実雪間にのぞく  
 春光の雪は重たく降り積もり蕾の並ぶ梅の木覆う  
 ベタ雪は朝日に溶けて流れ落ち梅の蕾に勢いを見る  
 雪の前咲きはじめてたる福寿草春の陽射しに黄に咲き誇る  
 春の陽に土軟らいでムスカリと犬サフランの発芽広がる  
 石油缶運べなくなり更に今日ベットボトルの蓋に難儀す  
 足弱り車に頼る日常に免許返納の決心揺らぐ  
 コロナ禍に帰国叶わぬ娘に代わり知人の個展一人見に行く  
 コロナ禍の規制解かれて久々に古本まつり開催となる  
 ユーロード無数に並ぶテント小屋メモを片手に端から覗く  
 年々に立ち寄る店は見つからず気力も失せて木陰に休む  
 霧雨の庭眺むれば紫陽花の青の深きに心鎮まる  
 華やかに庭盛り立てたツツジ、バラ梅雨に入りて花がら無惨  
 山野草の花の名前を調べたく主亡き部屋に久々入る  
 色褪せた押し花灯りにかざしみるザック背負いし姿浮かびぬ

梅雨寒の独りの部屋に寛がむ仕舞い込みたる炬燵取り出す  
 姪からの宅急便のダンボール開ければ自家製野菜が数多  
 此の夏は庭の手入れも儘ならず其処此処に立つ半夏生の花  
 庭隅に自然に根付いた藪甘草オレンジの花猛暑に映える  
 若き日に横手山にて眺めたるニッコウキスゲの群落想いぬ  
 猫クーの墓の周りの鬼灯は八月盆の仏壇かざる  
 朝夕の家族ラインに支えられシニアライフも良きと思ひぬ  
 熱帯夜娘婿より送られた花火の動画涼風をよぶ  
 週一度娘と囲む昼食は食事制限忘れ楽しむ  
 独り居は大儀なれども楽もあり気楽に生きよう八十六歳

のむられいこ  
 野村灑子 (千葉県)

## 昔、昔のはなし

道に会ふ小学一年に病死せし生母の事を語る女教師は  
 継母故大変だつたでせうとさぐりを入れてくるを悲しめり  
 こんなに大きく育ててくれてよかつたねといふ言葉が聞きたかつたのに  
 二度目の母親ながらやさしくて姉妹皆義母が大好きだつたよ  
 さぐりを入るる恩師の話にやさしかる義母の苦労に感謝の念わく  
 手先の器用な母は物のなき戦後に編んで縫つてと草履作りくれし  
 職場にて鬱病になり死にたいと吾は毎日義母に言ひゐし  
 吾が死ねば義母故苦悩を汲めざりしと母は悲しげにさとし続けぬ  
 自分に合はぬ職場は短所を目立たせて吾は苦しく悲しかりしよ  
 吾に席を譲りくれたる白髪の婦人が「お気をつけて」と降りぎはに言ふ  
 四万温泉へ向かふ道路に埋めらるる楽曲ありたり通れば音する  
 落葉たまる道を馳せゆく乗用車乾ける葉を皆舞ひ上げて行く  
 指先の神経鈍くなるらしく満水のコップを倒す事多し  
 大雪にも長靴欲しと言へなかりし昭和二十年代の貧しさ思ふ  
 小五の冬の大積雪に幾度も足駄でころぶ学校への道

貧しくて物を大事に使ひたり手入れして長くいとほしみつつ  
 三月程我慢しそれでも欲しき物求めき修理し長く愛しき  
 ぽいぽいと買つてぽいぽい捨てるのは日本も地球の末路も危ふし  
 いかり肩の吾には不用の肩パッド合はせ縫ひとめ靴磨かむとす  
 膝病みて正座できざる身にみるは落語家たちの正座の姿  
 左利きの女が包丁をトントンと持ち料理するを危なげに見る  
 知らぬ人と話してはダメと言はるるか年を聞けども目をみはるのみの児  
 新聞に部厚く入る食品のチラシ値段段8の字続く  
 いつからかお得意様になるらしく老人用の必需品冊子届く  
 碁盤ささふる四つの足はくちなしの実の形とふ私見を禁ずとて  
 対局を回りでみるに私見禁ずと碁盤の足はくちなしの実の形  
 手のひらを思ひきり伸ばせば19cmなり家具買ふ目安に計りみるなり  
 夕方の風の寒きにかぶりゆく帽子を下げぬ臉近く迄  
 長い事華道に親しみきたれども外国産の花の名覚えられず  
 雨上がり庭の草中にひなげしが首もたげくれば抜かずに見守る

長押し手の届かなくなり今年又出来ぬ事のひとつ増えたり  
 終点なれど頭深く垂れ眠りある乗客の肩やさしくたたきぬ  
 翁に付き添ひて車椅子押す女の言葉のやさし横顔の似る  
 醤油の小ビン二回傾け味ちよつと薄き大根の煮物のガス切る  
 色淡きピンクの踵を陽にさらし若きはゆつくり小犬引きゆく  
 目が合ひてニコと笑へばマスク越し「いづこで一緒した方？」と言ふ  
 宝くじ売り場の横に置かれゐて「好運のザブトン」といふ金のすわり物  
 目の中の白がきは立つ黒人に並びゆつくり信号渡る  
 庭一面に敷きたる黒き敷物の端に蟬の抜けがらのあり  
 足もとより出づる小さき草々も太陽の光を待ちて生ずるもの  
 ペンライト左右に振る会場にひとつ上下にふる明かりがありぬ  
 真北なる高層マンションの窓あかり今宵じよもつきゐてうれしき  
 その場所の他には置かぬと心して身の回りの手荷物習慣づけをり  
 一割の値引きしてくる証明書外見は元気な我が身に携ふ  
 上皇様御成婚記念に植ゑられし泰山木切株に蟻の往き交ふ

六歳の時に生母が亡くなりて母といへば育ての母のこのみ  
パン食は今普通なれど弁当箱に食パン一片少しの麦飯  
時間内の入浴なれば泡立てて体を撫でて温もりて出づ  
若き頃は擦れば垢の出でくるを今は脂の減りたると思ふ  
風呂上がり油分補足と腕と脚オイルたつぶり塗りて出でたり  
音もなく降りくる雪は山茶花の小さき葉表を密に白くす  
姪つ子の晴れ着は姉の縫ひしもの帯結ぶ後姿の賀状

春になれば勢ひ増しくる蔓日々草小さきうちですつきりと刈る  
ひと夏を繁茂しむる蔓日々草茎の伸びるて今静かなり  
枯れゆける茎刈りれば地にもぐる草の根つ子が顔出してくる  
さしゆける傘より背なのはみ出して細き雨は丸き背ぬらす  
陽の高き頃に抜きたる草々を集めむとして木の根につまづく  
庭土にへばりつきたる草々を鎌にはがすに濃き闇迫る  
瘤のごと額に浮きたるふくらみのありて前髪はあげずにをりたり  
額の瘤かくさむとしてかぶりたる帽深々とマスクに出でゆく  
粉雪の舞ふなか品を満載に走るよ移動スパー車は  
惣菜画側面に多に書かれりて音にぎやかにくる移動スパー車  
庭木の枝剪定したれば部屋中より表歩む人の顔しかと見ゆ  
玄関に置きたる対の人形の一人を捜せどどこにもゐない  
朝めざめ出かけてゐたか対の人形今朝は揃ひて玄関にあり  
屋根たたく雨の上りて前線は遠ざかるらし薄日さしくる  
二時間をかりて不用品整理するに右から左へ移動したまま  
もぢずりの花ねぢれつつけなげにも咲くを認めぬ病院の入り口に  
部屋内を片づけるたるに冬雷の前月号は読まずに過ぎたり  
隣家との境に植ゑたる凌霄花房は垂れきて先は塀越す

空リユック背負ひきて生活必需品詰めこみ夕の買物終へる  
公園の立ち木が作る陽の陰を選びて陽強き昼中歩む  
目で友になりたる幼子照れながら乳母車の深き傘にかくる  
音のなき短き日中日に二首を詠ぜむと決めノートにむかふ  
携帯用の万年筆型の老眼鏡鼻の上に小さく坐る  
電話交換に従事せしあれば名のらずも雰囲気で誰とすぐにか  
かりぬ

締切日間近になりて速達で出すこと多し書道も歌も  
暑さ戻る中に清しくなく蝉のつくつく法師秋に入るらし  
いつまでも暑くオーシンツクツクと鳴く蝉聞けば九月に入りぬ

はま だ  
濱田はるみ ☆ (埼玉県)

## ロシア侵略の一年

体験者の戦争詠は鋭くて戦後生まれの心に残る

バイエルに弾丸刺さりし戦時中その一点で恐怖伝わる

二年近くマスクをしてると外すのが恥ずかしいような気さえしてくる

青信号渡るかどうか迷いつつ結局チカチカする中走る

二人の子供の支援嬉しくて仕事のやりがいのひとつとなりぬ

白蓮と晶子の一生知りつつもドキュメンタリーに見入ってしまう

誠の歌をうたわぬ事に何の価値がありましたしようと晶子は言えり

ぎりぎりのバスに乗るため走ったがたった一分で息切れるとは

贅沢な好物白子のおすましを残業続きの息子に作る

歳とりて初めて分かる身体のメンテナンスに時間さかれる

アルファベット省略文字が氾濫したった三文字忘れてしまう

見た夢は起きた途端に忘れたがハラハラドキドキだけ残りたる

年女しかも五黄の寅と知り強運と言えは息子と居ること

高校は好きな教科だけやりたいとあの頃の気持ちふと思ひ出す

百歳を越えて詠みたるひとり居を只ただ凄くと思ひて味わう



年毎に体の不具合い起きてきて齢とることを発見している  
 温かき言葉とスタンプに癒されて繰り返し見るスマホのライン  
 ウクライナの被害伝える報道に歌詠めぬ程怒り込み上ぐ  
 駅前に無料PCR検査あり「五分で済みます」に反応少なし  
 PCR検査の向かい側ワクチンの危険広める演説のあり  
 プーチンは民を操り築きたる長年かけてロシアのトップに  
 ウクライナの悲惨写すも止められぬ何と残酷な世界に居るのか  
 薔薇の絵はありふれていてどのように描くかに迷う構図に迷う  
 今になりロシアの歴史ふり返り変わらぬと知る国の体質  
 マリウポリ製鉄所の幼な児が生きて家に帰りたいと言う  
 長年の仕事をいつ辞めようと考えながらその時は来る  
 視力落ちやつと退職決心す疲れると余計見えにくくなる  
 体調は序々ではなくて急変す予定くずれる先行きのこと  
 仕事に熱中できて辛き時助けられたと振り返りおり  
 戦闘の意識の高さは祖国愛ウクライナはコサツクの国

海にまで散り撒かれている地雷あり湾内の船動けないまま  
 暴力を許さぬのならウクライナを支援するという行動に出る  
 懐かしき横浜の店でピザランチ冷めるの構わず話始まる  
 分かり合える友有り難しエンドレスに話せる想い残し別れる  
 長時間おしゃべりしても飲み時間の時間は疲れを超越したる  
 帰りでも不思議と疲れが無いことを知りて驚く人の神経  
 マロニエの花が開くと描きたくて今年も描きぬひと日の命  
 副首相の怒りと勇気が戦時下の性犯罪を糾弾したる  
 戦争の番組毎年見るにつけ悲惨な事実明らかになる  
 食料も武器も無いまま撤退を許さなかった軍国日本  
 沖縄もガダルカナルも兵力が比較ならずも捕虜になるなど  
 スウェーデンまでもがNATOに加盟して軍事費増やす国多くなる  
 プーチンはあらゆる卑法な嘘並べプロパガンダは終わることなし  
 農家で養蚕もありし母の里桑の葉食む音嗅いも懐かし  
 プーチンが恐れることは民主化がロシア国民を目覚めさせること

友人と出掛けた街の路地裏にみごとに鶏頭八鉢もあり  
扇風機しまわぬ内にストーブが恋しくなりぬ今朝は十二度  
葉をよく見てあれは朝顔でないのよと妻が夫にバスでの話  
ウイルスで世界全土が変わる前作りし歌を捨てられずおり  
外食を節約すればと始めたるワールドビジョン久しくなりぬ  
国境無き医師団の支援迷うなら始めてから節約すれば良し  
犬養道子さん曰く金持ちでない人程助けてくれると  
コンサート三年振り嬉しくて温かき空気会場に満つ  
銀杏は五十秒温とあるのに三十秒で殻割れにけり  
冷蔵庫の煮栗の期限近くなりささげを置いて栗おこわ作る  
思いがけず北海道フェアバイキング蟹一点に集中したる  
カンツォーネで優勝したる唄友はセミプロでなく完全にプロ  
鳴き声のコールとソングは違うこと七十過ぎて知るも楽しき  
好物の干し柿干し芋高価にて我慢の限界越えたら食べよう  
魂はつながっていると思いたる亡き友のメール消せずにおりぬ  
白内障術後一年過ぎてから視力落ちきて心配となる  
高校にスケートボード専攻が出来たというのも今の時代か  
女性の合格率が高かった過半数の医学部入試  
後発白内障の手術して免許更新無事終わりたる  
ウクライナ侵攻の訳あらましが亀山郁夫の文で分かりぬ  
耳当てに二重マスクの装備して寒風コロナの中へ出掛ける  
暖かきそよ風に触れ忘れたる春の欲び思い出しおり  
すぐ側に若き家族が越してきて赤子背負うは新鮮なりき  
また冬に逆戻りの寒さでも花粉症だけは春を伝える  
久し振り図書カード手に結局は二倍の金額買いてしまいぬ

プーチンの非道は時代を逆行し平和への努力をあざ笑うもの  
マスク脱ぎ初めて見る顔意外なり二年以内に知り合いたる人  
コロナはウクライナよりましという話で一貫タクシーの中  
今の世に国民滅ぼすジェノサイド誰も止められず攻撃続く  
頭皮にたつぶり汗かく日々となり髪に五指入れ風を取り込む  
昨今の郵便到着あてにならず飛脚よりも遅いことあり  
この声は柳生博さん気付きてしみじみとするナレーターの声  
二回目の薔薇のスケッチ今年荒川線の三ノ輪橋にて  
ソビエトもロシアも同じ武力にて制圧してきたチェチェンも  
チェコも

ロシアとウクライナのサイバー戦は他国の人もIT軍となる  
戦争は人の愚かさ象徴し破壊と殺りく終わりを知らず  
十五夜の季節になると思い出すお月見飾りの楽しき宵を  
空豆は蚕豆とも書くこと知り繭の形を思い浮かべる  
秋の空見たこともなき瑠璃色に思わずスマホのシャッターを押す  
昼間からこおるぎの声草むらに短き命謳っているのか  
草むしり赤ちゃんバツタが飛び出して潰さぬように気をつけ  
むしる

本家の従弟の言葉思ひ出す継ぎたる田畑売れぬ辛さを  
グローバル経済機能しなくなるシナリオ見据えたプーチンの戦略  
戦争は飢餓や難民増やすだけ地球が狭くなりたる今も

はやし みちこ  
林 美智子 ☆ (東京都)

## 満月の光降る

二十五年前と変らぬ三鷹市の風のホールに聞く弦楽合奏  
あの時は息子がチェロを弾いていた今ヴァイオリンの列に孫おり  
久々の渦巻く弦の音の中コロナ禍を忘るクリスマススイブ  
去年は練習の場もままならず演奏会でき夢のようなりと  
名古屋より幼友達泊まり来てシャンパンに祝う孫の成人  
公園の満天星の刈り込みが丸みを帯びて春の気配す  
生年月日まるで同じと関口さんに大会の度言わるも懐かし (関口正道さん)  
小公園の真ん中に立つ大柳二月半ばに青める気配  
給湯器壊れたままに冬を越すコロナ禍ゆえの半導体不足と  
給湯器壊れてみれば冷たさに思いを馳せる昔の暮し  
野菜にパスタ茹で汁どれも貴重なり急ぎ食器の下洗いする  
壊れたのがお風呂でなくて良かったと業者に言われ給湯器待つ  
第六波終息したら会いましょう約束事が日毎増えゆく  
テーブルの下に寝そべる犬長し大雪予報に籠る一日  
真夜中に微かに屋根打つ音のして見れば満月の光降るなり

空高く微笑むごとく満月の二月の冷気を纏い輝く  
 露の臺浅き緑の美しく平箒に並べ目にも春なり  
 垣間から犬が用水を眺めおり光の反射と小き水音  
 雨上がりの爽やかな朝公園の若葉出揃う柳を見に行く  
 春の柳真下に立ちて見上げれば小き雄花の連なり降るよう  
 丈低き竹垣越えて山吹の用水の上に枝垂れ咲くなり  
 夏グミの淡黄色の花あまた咲きてめぐりに甘き香満ちぬ  
 ヨガ終えて開け放つ窓よりひいやりと心地良き風入りて包まる  
 階下より急ぎ足にて私を探しているらし犬の足音  
 狂犬病予防注射の時季となり犬猫病院外まで並ぶ  
 赤々とレンゲ畑に夕五時の光まぶしく自転車に行く  
 大雨の予報がありて用水を止めれば水底に白き藻の花  
 三軒先の垣にあふれるジャスミンの香り流れ来草引きおれば  
 六月半ばまだ田植せぬ水張田の向うに白きアジサイの花  
 夏早し伸びに伸びたる畑の草子等の手を借り風通るなり

草刈れば茄子のいくつか現れて早速夕餉に焼茄子並ぶ  
 目に見えぬ細かな雨が少しずつ窪みにたまり時は過ぎ行く  
 七月半ば我が家にもコロナ到来す一人罹りて二階に隔離  
 高熱と下痢と吐き気とのどの痛み日替りで来るコロナの症状  
 五日を過ぎ快方に向かうも食事運ぶ我が足取りに階段きつし  
 家族感染幼な児おれば防ぐのは至難と思う七波ピークに  
 雨小止み台風はもう去ったのか玄関前にて迎え火を焚く  
 久々に十月初めは晴れ予報サニーの故郷長野へ向かう  
 牧場の入口に繋がるシェパードが母カーリーなりサニー飛び付く  
 キツネから子牛を守る役目なりと聞きてシェパードのカーリー見直す  
 せせらぎを見下ろすデッキで食事作り木立の上より心地良き光  
 草の実をいっぱい付けてサニー戻る小川で濡れて湯気立つ勢い  
 森を抜け星を見ようと歩き出す足元照らせど背後は闇なり  
 大きき星沢山見たが真つ黒な闇が心に深く残りき  
 秋晴れの富士見高原から富士を見る山々連なり天空散歩

青空に黄金色に太りたるカリンの実揺れ秋盛りなり  
 用水に音立てて落ちる実もありて流れ行くカリンの旅路思わる  
 落ち居たるカリン十個ほど積みおけば仏壇の間に香り満ち充つ  
 瓶四つ曙のようにあたたかき色してカリンのジャム仕上がりぬ  
 憂きことの積る日あれど空澄めばひとごとのごと軽くなる今日  
 青き芝生え揃いたる小き庭に犬伸び伸びと横たわりおり  
 しぼし目を離す間に穴掘りて芝剥がれおり犬の習性  
 小一時間麻布の寺での三回忌車の中に犬は待ちおり  
 車酔い犬もするらし横向きで別の車に頑として乗らず  
 外面の良きを誉められ我が犬は帰宅後廊下を全力疾走  
 犬の居ぬ間の洗濯と思えども今日は雨にてストーブに豆煮る  
 一年振り会場で会った孫の友勉強が楽しいと別人のよう  
 我が町は八人なれど東京で三千人越えコロナ禍再燃  
 お洒落なる紋付鳥がこの冬も一羽畑に虫を探せり

雨あとの水位下げたる用水の水面に立てる白き梅花藻  
 完熟のミニトマトうまし夏来れば小学担任の先生思ほゆ  
 津久井郡千木良村なる先生の庭に座りてトマト頬張りし  
 冬雷年鑑読みて去年のあれこれ色鮮やかに思い出すなり  
 玄関を開けた途端に飛び出して通り掛りの犬追うサニ―  
 犬の件一〇番しましたと女性の訪問に恐れ入るばかり  
 夕方にお巡りさんがやって来て吠えるサニ―と共に謝る  
 家の中で家族と一緒に暮らしても通る犬には吠えかかるサニ―  
 シャッター式のゲートをつけて嚴重に開けたら閉めるサニ―  
 のために  
 今日涼し保育園児の散歩の列が用水沿いにゆつくり進む

我が家の朝食に来るジャンさんが公園の柳に足止めており  
 月桂樹・カリン・夏グミ・満天星 庭の木々こそ花盛る今日  
 パイナップル葉っぱと皮のゴミ嵩む孫の健康法いつまで続く  
 陶芸の師よりの電話筒が出たとの知らせに息子駆け付け  
 程良きは隣近所に配りたり残る筍鉄釜に茹でる  
 梅雨来ればかしこに潜むアジサイが次々開きいつも驚く  
 我が家にも何種類ものアジサイが今年色濃く水路縁取る  
 亡兄の八重のドクダミひと株が我が庭隅に絶えず咲くなり  
 ローズマリー用水に向かい繁茂するをかがみて切れば香り手  
 に染む  
 静かな雨畑に腰掛濡れており胡瓜も茄子も今日はお休み

ふるしま  
 古嶋せい子 (熊本県)

## 蝶のゆくへ

葉を落としくせる枝の影うつる道を歩けりその影ふみて  
 早く覚め窓あかるむを待つ時間たのしき事を記憶に探す  
 乾しものの動けば人の気配かと思へりわれは人恋ひてをり  
 曾孫の日日の動きをスマホとふ狭き画面に顔寄せて見る  
 芽ぐみどき青葉の時ともみぢどき一本の木にひととせを見つ  
 往きにチワワ帰りはプードルと会へる道いづれも服を着せられて  
 草もみぢ始まりてゐるこの道を歩くいつまでその時知らず  
 靴底に落葉踏む音のこるけふ人にも会はず犬にも会はず  
 天窓の霜とけて模様となる過程ながく見てをり首かたむけて  
 電子辞書に鳥を啼かせて空をとぶ形を思ふ老のあはれさ  
 あなうらの枯葉踏む音シャンソンにその名のありき若き日の歌  
 往きは右もどりは左に瀬の音を聞きつつ歩く川に沿ふ道  
 道に会ふ人にさざんくわ咲くところ教へたりしてけふは物言ふ  
 枯葉踏む音かそけしと形容し常識なりとすぐ却下せり  
 階段を数へつつ来る公園のベンチに寄りて聞く鳥のこゑ

葉を落とし盡して立てる木のありて寄る鳥も見ずただ風吹きて  
 われ待ちてくるベンチに寄るとき木の暖かさ風のやさしさ  
 風のきて落葉の動く道を行くおなじく吾も風に押されて  
 日のあたるベンチに坐り鳥のこゑ待ちをりけふは立春にして  
 雛の日に乏しき具にて作るすし金糸卵を多く散らして  
 新しき芽を出す鉢と枯るる鉢運命といふ程にあらねど  
 黄の蝶のまつはりてくる昼の道ひとに会はねどほのぼのとせり  
 この春は鶯おほく啼きくれて褒められてある如き心地す  
 再びを会ふ証なき花の時たびたび仰ぐことしの桜  
 嫁の来て帰りたるのち抽出しのスプーンフォーク正しく並ぶ  
 幼き日たばこ草とぞよびし草いまの幼はその名を知らず  
 花の時に遅れて来たる公園のベンチに見をり蝶のゆくへを  
 飛行機の音と雲とを残す空ゆふべの風を受けつつ仰ぐ  
 母の日といふ日に届く菓子と服むすめは祖母となりても娘  
 クレマチスの和名の出でず時を経て夜の枕に浮かぶ鉄線

初めて聞く如く頷きながら聞く子をうしなひし友の嘆きを  
 たわいなき事に涙のにじむ齢なみだの元はすぐに忘れて  
 美しと拾ひてきたるもみぢ葉の色褪せて伏す朝の卓に  
 買置きの桃の缶詰あけて食ぶ六月なかばけふ桜桃忌  
 夢の中のわれ健やかに歩きをり歩数計など持つこともなく  
 硝子戸を開くれば襲ふごときこゑ蟬はおのれの盡くる日知らず  
 たなばたの空仰ぎつつ吾も待つ早く去りにし夫のすがた  
 聴力と視力おとろへ嗅覚も危ふし新茶いただききたれど  
 蟲が音に立ち止まりたり昨日まで聞かざりしことしの蟋蟀のこゑ  
 鍋こがし物を落としてつまづきて老いのいちにち取り留めのなし  
 今はもう聞く事もなき形容詞芙蓉かんばせの顔その花ひらく  
 タぐれの風に揺れゐる猫じやらし猫のみやげに摘みて戻りぬ  
 この年のはじめての栗たべてをり拾ひて剥きて届けてくれつ  
 覆ひるし葉のおほよそは散りてゆき空ひろがれる長月なかば  
 約束を違ふことなき友のごと彼岸となれば彼岸花咲く

青き実を拾ひてきたるどんぐりの部屋の中にて熟れ色となる  
 朝夕の風こちよきこの季節ふたび会ふといふ保障なし  
 話したき人おほよそは世にをらず頭の中に会話を作る  
 照りかけりして過ぎてゆくけふの空わが躰調と重ねたりせり  
 わが卒寿祝ふと集ふうからのなか一歳に満たぬ曾孫  
 洪澤はこんなに美男だつたのか大河とふ名のドラマ見てをり  
 漢方の薬を飲みて躰調の戻る気となる昭和生まれは  
 新しき手帳家計簿とのへて新しき年迎ふる豫定  
 朝の窓あかるき時はゆゑもなく良き事あると思ふ單純  
 電線に雀の並ぶさまを見ず思へば声さへ聞かぬこの頃  
 ひとまたぎなどと人言ふ木の橋を渡り終へたり長くかかりて  
 彼岸花の花は終はりて遅れたる葉の並び立つ道のべの青  
 外に出ぬわれ慰めてさざんくわの荅そろひて開きてくれつ  
 着るものをセンス良しなどと褒められるすべて娘に貰ひたる  
 もの  
 グローヴとバットの子らに追ひ越されけふの歩みは千歩を越  
 えず  
 手袋の片方うしなひたる事を言へずに過ぎす子のプレゼント  
 部屋の窓に暖かく見え出できたる道に吹く風まだ冬の風  
 柴ならし物売りにくる車待ち週に一度は魚を食べぬ  
 新しき土盛り上がる枯れ草の道にもぐらの動きのしるし  
 霜除けを怠りて鉢に枯らしたるベゴニア捨つる詫びを言ひつつ  
 音のなく降る雨の中はなびらを見せ始めた桜のつぼみ  
 おほかたは犬ひく人の多き道いぬ持たぬわれ手を振り歩く  
 失へるもの数へつつ聴力と視力に至り折る指やめつ

花待ちし時はやく過ぎ今はただ空をおほひて青葉ひろがる  
 洗濯機の掃除といふをしてくるる嫁はいろいろ物知りてをり  
 平成は何年までと問ひたりし昭和生まれの九十となる  
 紀元節天長節と地久節そのとき歌ふ歌知りてをり  
 花房は短かけれども野の藤の頃と思ひて廻り道せり  
 花みづきことしの春は早く過ぎ遅れたる白やま法師の苞  
 残されし苗に小さき花咲きて夫を思ふ季節めぐりぬ  
 献立の浮かばぬ時のために置くコンビーフ缶冷凍ギョーザ  
 プルメリアの香り漂ふ南の島たのしみし遠き思ひ出  
 かの島に共に遊びし友ひとり施設に住めりすべて忘れて  
 田に水を引くころとなり川の水動かすなれり雲をうかべて  
 足みじかき犬ひく人にゆゑもなく親しむ心われの偏見  
 採りたての胡瓜とどけてくるる人河童忌などを話したりせり  
 蟬のうた多く残しし冬鳥師せみ聞くときに思ふもろもろ  
 煙草盆といひてもわかる者をらず灰皿なども使はずなりて  
 舗装なき道を選びて歩きをり足裏に押す土の感触  
 嫁おくりくるどこやらの蜂蜜を嘗むる薬効ありといはれて  
 どこやらの蜂蜜といひて一日にひと匙なむる嫁にもらひて  
 窓に這ふかまきりが一の形を変へ一となりたり半日を経て  
 常手持つ手帳に行事の予定なく印の残る孫の誕生日  
 空見えぬ程しげりみし桜木のわくら葉を敷く季節めぐりて  
 夕焼けの空を背にして杉の秀の並ぶ形を佇みて見る  
 広辞苑われには重く今はもう電子辞書にて字を探しをり  
 庭に立ちこの夜の月を仰ぎをり再び立ちて見る証なし  
 彼岸花ならびて咲けるあたりにて蟲なきてをり昼に歩けば

煩はしと思ひし夫の蘊蓄の聞けぬ相撲をひとり見てをり  
 言ひたきこと言はず過ぎせば安泰と知りぬ見ぬ振りといふ言  
 葉もありて  
 草の蟲聞かむと立てる夜の庭かぜ吹きてをり長月の風

## ブレイクあずさ ☆ (カナダ)

## 振り向きもせず

陽気なる路上暮らしの兄弟の死を知る街角花束置かれて  
 早世の流浪の兄弟忘れえぬ親しみのある「インディアン」の目  
 オーロラと竜巻と湾に集う鯨奇妙な秋に心ざわめく  
 月も出ぬ夜に飛び立つ雁の群声振り絞り高く響かせ  
 地上にて一羽の叫ぶ声あれば仲間雁は次々降り立つ  
 わが知らぬ遠き世界にいる君は静かな寝息の合間に笑う  
 ことさらに明るく母とニコする日本の国境今日より閉ざされ  
 南国へ渡らぬ雁は物憂げにつぶやく首の雨払いつつ  
 暮れる陽の温もりのあり冬雷の表紙を飾る柿の実みつつ  
 違いより似たるところを見つけ合い笑えば近し韓国の人  
 降りしきる雪を浴びつつ自撮りする家族はシリアより来たるらし  
 大雪のあとの眩しき青空は雪掻く人を饒舌にする  
 凍りたる湖に子らは集まりぬホッケースティック手に握り  
 ベトナム系寺院に漂う線香の香りなつかしゆっくり歩く  
 更新のされることなきブログにてしばし佇むただただ寂し(関口正道さん)

うろたえてざわざわとする細胞をなだめて眠るワクチンの後  
 バクラヴァの店の少女はよく笑うヒジャブの下のまつげ揺らして  
 父親よりきれいな英語を話しているヒジャブの少女はカナダ育ちと  
 青紫蘇の種をもらいに自転車に二十キロ漕ぐ春はまだ先  
 でこぼこの道を走ればかさこそとポケットの種樂し気に鳴る  
 ひと冬をかけて楽譜を暗記する五分に満たぬブラームスの曲  
 一瞬の心の乱れに見失うブラームスの音その着地点  
 ロシア語の練習帳の書きこみに不穏な単語ばかり増えゆく  
 美しきロシア語の音に繰り返し偽りを聞く テレビを止める  
 隣町のロシア会館しんと立つ青と黄色のペンキ被りて  
 手作りの短歌メモ帳贈られて優しき歌を書くこと決めたり  
 春風に白きテントは揺れ揺れて三年ぶりのサーカスを待つ  
 晴れ晴れとジャズ聴きに行くダウンタウンコロナ規制の少し緩みて  
 呼ぶ鳥と応える鳥の透き通る声重なりぬイースターの朝  
 客車引き毎日同じ道を行く馬にも届け春の潮の香

人間を恐れぬコヨーテゆつくりと森へ消えたり振り向きもせず  
 手のひらに小さき蜂は死にゆけり最後の蜜に少し羽ばたき  
 長き冬に耐えたる茗荷の葉の繁る住めば都と笑うがごとく  
 よその子もまかせなさいと胸を張り雁は連れ行く三十六羽  
 後ろ手にうなづきながら歩み寄るワタリガラスよ助言くるるか  
 夏至の朝窓は次々開かれて長く患う人の住む家の  
 波の間に見え隠れするアザラシと目が合う今日はとても良い日だ  
 花豆の蜜を求めてハチドリは今朝も来たれり強き羽音に  
 ジギタリスは花房つぎつぎ捨て去りて首長竜の姿に立ちおり  
 預言者のようなる昏き眼差しのワタリガラスが低く鳴きたり  
 森も町も飲み込む無慈悲な赤き火をいくたび見たるかワタリガラスは  
 尾を振りて吠える柴犬コヨーテと約束したるか野を駆ける日を  
 そっけなく陰性告げる検査薬そろそろ与えよ痛みの名前  
 ウイルスを抱えて遠く遠く聞か外行く人らの張りのある声  
 三日目に陽性反応示されてようやく道の見えたる気をする

雨の日に裸足にさまよう女あり人はささやく心の病と  
 遠巻きの視線にももう傷つかず雨の通りを裸足に行く人  
 霜月の雨の今年は容赦なく道路も線路も遮断されたり  
 「ありがとう」は葡語に由来と言いつつ日本語教師まことしやかに  
 「日本人のみに聞こえる虫の声」詩人のキーツに失礼でしょう  
 沈黙は美德にあらずとつかれてシミュレーションする苦情の電話  
 らちあかぬ電話の相手に語気強く粘れば君は親指立てたり  
 追いかける音符が熱を帯びてゆくベーターヴェンの最後のソナタ  
 ふぞろいの髭にも白きもの混じる横顔いまま形よきかな  
 水点下十二度の空気かき分けて半袖シャツに少年滑る  
 雪靴に一步一步と踏みしめる父の登りし山に見立てて  
 なけなしの野菜集めて粥を炊くせりもはこべもなければど美味し  
 水雨降る街に桃花の咲くごとし旧正月のアオザイの人  
 寝苦しき夜のお守り枕辺の猫の口もと笑みの形の  
 はちみつこのトルコの菓子のパワフルな甘さが欲しい仕事の前に  
 照れ笑いに差し出されたる花束は白菊本日結婚記念日  
 夕闇に飲み込まれぬようピアノにて和音をなぞる背筋を正して  
 表紙には久留米の椿手作りの短歌メモ帳綺麗な折り目の  
 九州の短歌の先輩いつの日か会いに行きたし椿の頃に  
 アフリカにルーツを持たぬ我が刻むビートのみなもと東京音頭  
 開かれぬロシア語クラスこの春の受講希望者一名のみに  
 風つよき夜の隙間を埋めたくてウクレレを弾く「多摩蘭坂」歌う  
 ゆくりなき暗さを持ちたるハイドンのソナタをいつそう好き  
 になりたり  
 ふさぎこむ心に風を送るため半音上げるHelloの「ロ」の音

ストリートビューをたどりて蘇る七歳のわれは「じゃつど」  
 と話しき

コヨーテと歩きし朝を思いおり痛みの波の少し引くとき  
 目の前にゆらゆら長き灰色の尾導くように進みしコヨーテ  
 コヨーテと過ごせしほんのひと時を思えば胸に灯のともる  
 歌ひとつまとまらぬままに時は過ぎ雨はいよいよ激しく降りぬ  
 こわごとと食めばほのかに米甘く胃の腑の痛みの去りたる四日目  
 自転車と森を走りぬ北国の短い夏に追いつくために  
 四つ足の獣を真似て前傾の姿勢に走る森を嗅ぎつつ  
 「おオカナダ」屈託のなき歌声を夏空に聴く少し離れて  
 真夏日を走る少女のざんばらの髪ライオンのたてがみに似る  
 ごみでなく宝の山と呼ぶのだろう声を弾ませカラスの親子は  
 イパネマの娘になりたし街角に焼けつく太陽止まらぬタクシー  
 雁の群の真下をくぐると縁起よし本日決めたる法則ひとつ  
 首傾げ人を見ているふわふわの小さきコヨーテこの春生まれ  
 年上の友のこの世を去りてより鳴ることのなきMAX手放す  
 詩は弾を止められないが真実を歌えると言うサルマン・ラ  
 シュゲイ

日本語と英語ほどには違わぬらし柴犬応えるコヨーテ呼べば  
 不機嫌は病のせいと思えども言葉のとげはなかなか抜かず  
 ウイルスのじわり攻め来て細胞は悲鳴を上げ声なき声に  
 「これ平熱？」三十八℃を問う君は華氏とマイルとポンドの国にて  
 きしむ身に寝返り打てば丸らかな猫の背中の鼻先にあり  
 暖かき寝床を持ってぬ人さえもコロナは襲う今もどこかで  
 ベーターヴェン「癒えたる者の神への感謝」痛みの夜に差し込む光



ほんごうた こ  
 本郷歌子 ☆ (栃木県)

コロナとバスケットと

コロナ禍に楽しみを成す時は来ず駆足で過ぐる日々の冷たさ  
 虹を見て燥ぐ心に戻りたい過ぎゆく時間に苛立てる日々  
 満月の光は刃となり凍てついた大気を裂いて我が身に刺さる  
 七十の生日間近ぼんやりと理由なき不安の広がりにゆく  
 冬の朝身にも心にも温きもの届けとばかりにカーテンを開ける  
 山際は濃いオレンジ色に染まりだす今日も快晴冬の日始まる  
 三度目はカクテル効果を期待してモデルナと決め接種券待っ  
 買物のついでに回り道をして打つつもりなり三度目のワクチン  
 モデルナの副反応に二日寝込む目の開けられぬ頭痛続き  
 口紅は乾いてしまいぬ二年間マスクの下は素っぴんのまま  
 枝から枝へ花を突き飛び移る鳥よ満開の梅を散らすな  
 粧いを凝らす日は未だ来ず新しき服の着る当てのなし  
 指先は水の温みに気付きたり洗い物に鼻歌出でくる  
 満開の花惜しむがに花冷えの暫く続き四月に入る  
 結婚を告げられやっとな気がついた我に潜みたる君への想い

万葉の乙女にあらねど満開の桃の下照る庭に佇む  
 空よりも一層深き青持ちてデルフォニウムの花開きたり  
 ひたすらに手を動かして草むしる憤りのままの乱れた抜き跡  
 共に暮らす娘は大人となりたるか助言はいつも少し辛口  
 貼り出した行きたい国の一覽表黄ばみてゆくか線引かぬまま  
 客席はチームカラーの黄の服に半分埋まる東京体育館  
 コロナ禍に声出せぬ歯痒さ力込め拍手で応援バスケットボール  
 盛り上がる光と音の体育館応援の拍手は試合前から  
 目をつむり両手合わせて唯祈る残り六秒シュートよ入れ  
 ブレックスの勝利を告げるブザー鳴る歓喜の涙に隣と抱き合う  
 歓声は地響きの如身を包む覇者となりたる我がブレックス  
 甘味断ちの願掛け効いて優勝のトロフィー掲げる我がブレックス  
 バスケットの優勝パレード沿道にファンと選手の笑顔の爆発  
 バスケットの優勝の余韻覚めやらず繰り返し見る試合の録画  
 バスケットの優勝の瞬間ときの感激の蘇りくる録画見るたび

奥社へと続く階段仰ぎ見る覚悟を決めて一步を踏み出す  
 空想の中なら自由に羽ばたける羽根を畳んだままの現実  
 組板も包丁も手も染まりたりビーツの赤は強力無双  
 温かきビーツのスープを飲み干せば我が血となるか赤きスープよ  
 バーナーの音響くなか熱気球のゆっくりと揚がる芝草の上  
 十メートルまで揚がりて揺れる熱気球飛んで行きたし山の向こうへ  
 畑には煩い鴉に突かれて西瓜の紅き果肉散らばる  
 皮剥かれ齧られたる玉蜀黍敵は鴉か白鼻心か  
 サングラスとマスクを着ける外出に化粧を止めて四年目となる  
 隔てなく地上を照らす十五夜の満月に祈る平和有れかし  
 一心にどくだみ摘めば両の手に臭さ残して籠に溢れる  
 蚊の痒み直に治まるどくだみの効き目実感す夏を過ごして  
 邪魔物と思いしどくだみ薬効を知りてより庭は宝の山に  
 峯りても峯りても生うるどくだみよ薬効あるは神の御業か  
 翡翠を撮ると無言で男たちは水音高き川辺に待ちおり

二年ぶりの友の墓参り新しき卒塔婆立ちおり十七回忌の  
 秋の日を背中に受ける道の辺にしがみつかに蒲公英の咲く  
 立ち込める朝靄の中隣屋の窓の辺りに鈍き灯の色  
 俺だけが我慢を重ねたと言っけれどその物言いに耐えるは家族  
 月見んと窓を開けば虹の傘被りて淡き大きな月  
 東京より帰りて見上げる佐野の空真青に澄みて四方に広し  
 柳葉の落ちて空の巢現れる鳥の声の止みてより久し  
 空の巢は柳の枝に絡まりて肌寒き風に僅かな音す  
 繁り合う柳の葉に守られて幼き鳥は巢立ちたるかなや  
 三畳庭園池の水は静まりて泳ぎゆく鴨の水緒の広がる  
 大き岩に走れる鳶の紅葉して首飾りの如われを誘えり  
 がさがさと荒れた踵に冬を知り伝染したるストッキング脱ぐ  
 小寒の風に震える紫と黄のピオラ咲く庭の日溜り  
 裸木となりたる柿の天辺に大きな音たて鴉飛び来る  
 甲高き一声残し鴉去る縄張と思うか庭見渡して  
 正月の風冴える日はマフラーに顎まで埋めて土手道を行く  
 真夜中に娘の帰りじつと待つ人気なき駅の灯の細きよ  
 幼き日落葉焚きした冬の朝祖母と両親姉妹揃いて  
 西風の吹き荒ぶ日は日溜りのガラス戸越しに庭を唯見る  
 食べ頃のかき菜は鳥共に啄まれ畝には残れる茎だけが立つ  
 黒々と桜並木の枝透かし真冬の入り日は静寂の中  
 初雪に勇んで出かけるウォーキング雪の向こうに三疊山見えて  
 角立てて真つ直ぐに刈りたる山茶花の垣に紅き花覗きたり  
 枝先の赤く染まりたる桃の下西日を浴びて我も立ちおり  
 風荒ぶ一夜の明けて庭隅に隣家のサンダル転がっている

畝立てて小指ほどの葱植える二百本程一年分を  
 我よりもきつと長生きするだろう夫は意志強き健康オタク  
 補聴器の雑音高し話声は紛れてしまふストレス溜まる  
 夕暮れの色しだいに濃くなりて淡淡と浮かぶ姫りんごの花  
 野良猫の餌となりたるか連翹の花の下鳥の羽根の散らばる  
 玉葱の一個百円にぎよとして夕食のカレーは煮魚に変更  
 頬撫でる風にも木香薔薇は揺れ散り急ぎゆく五月の庭よ  
 切通しの崖より垂れる白藤は主張するがに光を返す  
 朝靄は杉木立も我も包み込み等伯の絵の中に行む  
 歯を削る隣の音の鋭きよ次は補聴器を外して行かん  
 朝五時の冷気を大きく吸い込んで草捲りせん日の登るまで  
 日中を冷房の中に閉じ籠もる酷熱の夜に早や虫の音が  
 偶さかに涼しいと感じる日のあれど佐野の気温は三十度なり  
 一回り大きくなつたようだねと庭に腹這う青大将を見る  
 小玉西瓜に親指ほどの実のつきて朝夕確かむその大きさを  
 取り時の日付をつけて水遣りす西瓜の香り脳裏に浮かぶ  
 錦鯉とお玉杓子の棲む池に熱帯睡蓮の紫開く  
 この夏のグリーンカーテンの朝顔は繁る葉に花のひとつも咲かず  
 白金の光を放ち吾に対す心に沁みる十五夜の月  
 山の端に十五夜の月の現われて魅入らるるほどに光を放つ  
 焼酎に漬けたどくだみ変身を遂げて香りの円やかになる  
 どくだみの臭いが溶けて焼酎は軽き香となり茶に色付ける  
 雑木林を抜ければ九月の日は射して彼岸花の赤く群れおり

## 裸足の夏

投稿の君は介護を地獄と言ふやがては介護さるる身ならむに  
 女たちの声さんざめく歌会にはじきだされる難聴のわれ  
 白がちのうす緑なる秋そぼの大花野ゆく没りのこる月と  
 ベニシアさん貴族の子なれど放浪す行き着く処は日本の施設  
 辻立ちの誦経の僧に喜捨すれば声高くなる仙台の空  
 核のゴミ処分場でゆれる寿都町かかはりのあり次男の遭難  
 好奇心が研究の動機と真鍋さん尤もなりとわれもうべなふ  
 刈り取りの茗荷のあとの菊の花植もいとし返り花する  
 暁けの道たぬき親子は関越の歩道橋わたりぬわが前そろり  
 仔狸よ人に慣るるもよいけれど道路わたるな犬に気をつけ  
 時も金も無き若き日の山やまよ炬燵に妻と百名山見る  
 日本人は心に故郷の山を持つ深田久弥はかく語りしが  
 生き様がそのまま歌になるような残りの生を如何にか生きむ  
 快晴の朝のひかりはたちまちに雪催ひとなる蔵王嵐に  
 大観音の肩に負はれて没りのこる望の月さへ朧おぼろに

まち だ かつ お  
 町田勝男 (埼玉県)

仙台の榊持ち来て神棚に新たな注連は四尺にせむ  
 皮剥きて吊るした柿はサンルームぬくぬく皺み米寿の形  
 久しぶり越乃寒梅の屠蘇二杯酔うてまた寝る元日の朝  
 明日枯るる花にも水をやる心誰が謂ひしか長寿のイメージ  
 陽当たりに葱苗植ゑむと畝切れば妻はせつせと落ち葉埋め込む  
 子や孫に若さを貰ふ元旦にわれも疲れき妻も疲れき  
 F1レースでホンダが初めて勝つたとき椿山荘に招待されき (回想)  
 営業と資材と鍛造三人で殊勲のエンジン目交ひに乾杯  
 心臓のクランクシャフトは三トンの板ハンマーの手造りなりし  
 ワクチンの接種も確定申告も早い者勝ち老いに酷なり  
 領収書整理し確定申告書書かず役場に丸投げにする  
 申告の税金どこに使ふのか国債残高一千兆円  
 投稿者の心理のひだを垣間見る新鮮な語彙はわれにも参考  
 ドンコザックの故郷なりしウクライナ野太き合唱今に聴かずや  
 過ぎし日に十日旅したポーランドワルシャワクラクフ今は如何にか

マスクも眼鏡も補聴器さへもみな外し遠く嶺白き蔵王に見入りぬ  
 三月の地震か三和土に三本の尺余のこけし落ちて転げる  
 コロナ禍もやまを越したか道の辺にマスク散らばるはつ夏の朝  
 歩みつつ手に扱きたる弾力の道の傍へのエゾノギシギシ  
 古い武器の在庫一掃と新武器のテストを兼ねた戦争ごっこ  
 庭に出ればカラスの威嚇絶え間なしわが家の主はわれか鴉か  
 鑑真も〇ヘンリーも教へ呉れし亡妻よ自分の生に悔いなしか  
 寝ざめより起き上がる迄のしばらくを持って余しをり自覚なきまま  
 あげぼのの散歩に出でて野にひとりマスクを着けるか迷ふひととき  
 蝉の声とラジオの音のなひまぜに裸足の夏がまたやつてきた  
 十数人の僧の誦経は堂に満ちみそはぎの水打ち振り終はる  
 「田舎教師」小林秀三のいしぶみに妹らと撮る建長寺おぼろ  
 「北帰行」読めば従来の啄木像少し歪みぬこれがまことか  
 死にたくはないかと問へばこれ見よとのんどの疵を指した小奴  
 十六歳で上京したる滝野川鍛冶屋のみならひ啄木が癒す

かはばたの松に没る陽よ少年のわれ人となるふるさとの日日  
 ふはふはとさ迷ひ飛べる雪虫の早よ木の膚に綿虫となれ  
 ふるさとは戸伊摩がとよま登米となり友は還りぬ妻に抱かれ  
 明けの闇白き花びらまき散らす冬近きを知る墻の山茶花  
 キヤスターを曳けば駅ごとエレベーターの位置を探して右往  
 左往す

宇都宮黒髪山の襲の雪近ぢか見ゆる靄はるるとき  
 道ひとつ隔てた家の大木はあらかた伐られ朝の陽のさす  
 免許証返上すれば無気力に見上ぐる昼の月より雪虫  
 元旦の屠蘇が醒めれば年末の仕事の続きキヤスター修理  
 新井師の志多見少年剣友会五十年経て県で優勝  
 多様性認めぬアドルフヒットラージェノサイドの果ては自死  
 なり

知の巨人原爆勧めたアインシュタイン彼の頭脳に哲学がない  
 偶に訪ひし和光の技術研究所所長の解説無ければ理解不能  
 紫も白も消えたるクロッカス原種回帰か黄のみ咲くなり  
 しらじらと霜夜の名残り明けやらぬ地の果てまでも霞なびきぬ  
 春嵐ざわわと過ぎて花散らす定めなき日の春ごちかな  
 春の朝ビニールトンネル片付けぬ鴨来ればまた網を張るなり  
 駐車場管理も賃貸更新もすべて止めたり短歌のみのこる  
 今日はいよいよ又良きこと一つしたやうな友の子に一人家主とりもつ  
 君の母の結婚祝ひの支那鍋は六十五年使ひ感謝の廃棄  
 女子高の亡妻の母校に入学の宝田明は反戦の人  
 同窓の宝田明は反戦をとなへつ逝きぬ亡妻よよろこべ  
 クルマの無い不自由な生活楽しみたい真青な空は広くはてなし

三階のパイプの水漏れ一階のわがマンションの部屋に沁みたり  
 実力の差がありすぎる選抜高プロ野球選手の養成校か  
 江戸時代の飛脚に似たり郵便も隣町さへ三日も四日も  
 投稿のハガキは一色ウクライナ花の色から国旗の色まで  
 蕉翁の奥の細道出立日五月十六日われもみちのく  
 久しぶりの東北新幹線自由席窓際に空きなし右に筑波嶺  
 大宮から宇都宮まで我慢してやうやう空きぬ左窓際  
 大地震に白石・仙台間脱線跡形も無きみごとな修復  
 万緑のみのく窓を飛び去りぬそのスピードは雨を横にす  
 仙台の勾当台も街路樹も新緑燃えて眠気吹つ飛ぶ  
 関越のフェンスに雛げしの花競ふ明けの散歩の行くところまで  
 菜園の収穫めぐりガーガーと胡瓜も茄子も盗つ人のごと  
 妻はおでかけ昼の厨に湯を沸かす笛吹きケトルの無慮な悲鳴  
 道に這ふでんでんむしを摘まみ上げ轆かれぬやうに葉の上に  
 載す

梅雨明けは二度目になるか戻り梅雨くち縄一匹車道に轆かる  
 暗い空建設資材置き場だけ異国語聞こゆ自転車の人ら  
 梅雨晴れ間風の匂ひのはたつみ小さなあぶくブチンと弾ける  
 ワクチンの接種はこれで四回目コロナよさらばといかぬもの  
 かは  
 小惑星りゆうぐうの砂のアミノ酸生命の基は宇宙より来たか  
 原爆を無辜の市民に二度テスト人の心の有りやあらずや  
 四天王の幟はためく祭壇に檀家総代繰り返したり  
 たらちねの母にかも似ん旅立ちの姉は棺にはつか笑むなり  
 リユウマチにあればど悩んだ姉なるに遺影の笑顔にその影はなし

葬儀社と火葬場ふたび行き来して利根の堤を眼間にせり  
 日に一錠ベオーバ頻尿に効果あり二錠を請へば医師は否みぬ  
 五十年通ふ理髪のマスターは鏡を持ちて後ろ髪見す  
 書道教室止めて幾とせ御霊前の名前を三度書き直したり  
 歯医者より健診のハガキ来たりしが外出が億劫のこの頃なりき

まつなか か よ  
 松中賀代 ☆ (高知県)

## まゆ玉の歌

秋風に白粉花は黒き実をほろほろ零すわが足もとに  
 木陰にて移動販売車待つ間コロナワクチンの話に夢中  
 販売車が店を開けば待ちいたる皆立ち上がり無言に選ぶ  
 山峡のダム湖がよほど好きらしく渡りの鴨が浮き寝している  
 独りでも元気であればと思う日にセントポリアの苔見えたり  
 苔からセントポリア開くまで長い時間をゆっくりと待つ  
 知らぬ間に無人の駅になりいたる急行列車のすさまじい風  
 乗り場にはアンパンマンの看板が風が風に打たれて動きを止めず  
 新年を祝う家族は四世代高校になる孫を励ます  
 二月号これを最後にもう読めず柁の歌もまゆ玉の歌も  
 春めけば水路に沿うて露の臺つくしも芽吹き身も軽くなる  
 のろまでも十時すぎれば日溜りに日向ぼっこで寛いでいた猫  
 あの日より一年がすぎ枯れ草は猫が寝ていた凹みを残す  
 母子草子供のころに覚えた名なぜか迷いぬ引くか残すか  
 チューリップ苔を守る二枚の葉なに色咲くや苔ふくらむ

チューリップ絵日記に書き残したい芽が出て花の咲きおわる迄を  
 新しい制服を着た写真とメールこの孫達に平和つづけよ  
 満開の花に集まる人達はスマホ片手に笑顔はじけて  
 雨脚の強まる音を聞きながら美しかった桜に感謝  
 春の田に水満々と満たされて朝よりの雨は救いの雨に  
 雨上がりの朝は空気もしっとりす春菜生き生き新葉の光る  
 間伐の後に光の差しくれば雪持草の株が増えいる  
 朝の風身に受けながら一しごと顔に朝日の差しはじめたり  
 一枚の田の面は広く水かがみ山陰うつし月を浮かべる  
 昨日まで代田でありし一面が早苗植えられ植田に変わる  
 若苗は規定通りに軽やかに植えられ行くを吾等見る役  
 蚕豆は祖母の代より延々と花も変わらず味も変わらず  
 梅檀に青き小さな花咲けば梅雨の近づく事を思えり  
 子つばめは災害ヘリの低飛行に恐れ驚きちりぢりに飛ぶ  
 四月より通所デイケアに行きはじめ筋力つける運動に励む

先輩の歌に心を動かされ心気一転がんばってみる  
 まだまだと思えば出来る冬雷の先輩がお手本張らなくちゃ  
 吾が背なで幼き娘が幾たびも歌っていたよ「トンボの目玉」  
 真夏日に高砂百合が咲いていた母の看取りに通ったあの日  
 難聴の友には軽く手を上げて挨拶をするデイケアの中  
 先輩のがんばる姿に励まされ自分も励む百歳体操  
 九十九歳ピンシャンとして八十代の手本となれる先輩在す  
 ようやくに稲穂出揃い作柄も見通し良いと喜ぶ農家  
 雨不足きびしい暑さ続く日に痩せた野菜を窓ごしに見る  
 蜜蜂の受粉のおかげ長丸のトラマクワ瓜ころころ実る  
 熟すれば程よい甘さ柔らかさトラマクワ瓜は夏のご馳走  
 猛暑日が少し和らぐ夕暮れは棕の古木に小鳥ざわめく  
 曾ばあさん若ばあさんと各家が賑やかだった昭和の頃は  
 台風の凄さを言いて「避難せよ命守れ」に急ぎ立てられる  
 避難してと娘が手配のホテルまで明るいうちに雨の中を行く

秋野菜やつと育ちて抜き菜する膝庇いつつ勤しみし吾れ  
 一声を掛ければ届く妹の家に干し物出ればくつろぐ  
 らつきょうの花は紫かんざしを並べた様に一列に咲く  
 力なき吾が歩みとは思いつつ気力で今日も巡りを歩く  
 こまごまと折ることあり来春はコロナ治まり健やかな年に  
 初生りの金柑五個はうす黄色特大の実に育ちつつあり  
 三時すぎ木の実目当てに先づ雀目白にひたき交代に来る  
 夜明けまで雨風荒れて眠れず窓越しに見る外の景色を  
 風のと一番気になる野菜畑ブロッコリーは倒れ折れている  
 十二月ことし最後の広報を留守の家にも声かけ配る  
 庭に咲く枯れ色の花藤袴アサギマダラはこの花に寄る  
 あれこれと声高に言わぬ二人の娘その陰に居る吾れの過ぎ行き  
 木から木へ飛び交う目じる最後には紫式部の実を拾いつくす  
 風に舞い落ちくる木の葉重なりて初霜光る山際の道  
 粉雪は舞いまいをして降ってくる大寒の日は一歩も出でず  
 隣家の三匹の猫わが庭に日向ぼこする逃げもしないで  
 水仙の香りが風に乗りてくる日差し温か歩きに行こう  
 干柿が色よく乾き飴色に満足感は何時にも変らず  
 オキザリス鉢いっぱいに広がり日の差しくればぼつと満開  
 重き足たしかめ乍ら草の道やすみ休みで日溜りを追う  
 柔らかな波れん草を一人分いそいで摘みぬ粉雪は散る  
 北山は時雨まじりか冬の菜に霜除けをかけ藁を敷きやる  
 薄らなる霞の中に田起しの始まるを知る香長平野に  
 何日もこんな日和を待っていた「さあ元氣だせ」足を踏んばる  
 白菜は寒い間に育つもの甘味も増して大きな球に

北窓を開けて誰かに会うようにメジロの二羽に声をかける  
 芍薬に赤い新芽が出る頃は春やさい蒔く準備はじまる  
 大木の枝は四方に広がりて桜の花は盛り上がり咲く  
 山裾の小道をひとり著我の花今さく頃と辿り着きたり  
 谷奥に著我の花むれ風にゆれ木陰でしばし花を眺める  
 物運ぶ軽目のものと買い替えた一輪車は今われの片腕  
 初生りの胡瓜ピーマン手に摘みて初物ですよ姑に報告  
 赤きバラ朝つゆ受けて咲き始む青葉の中に際立ちてあり  
 雨もなく日差しは弱く丁度よし白つめ草の根を深くとる  
 大輪の色鮮やかなアマリリス強い日差しに負けないで咲く  
 明け切らぬ小藪の中にホトトギス耳をすませば只管に啼く  
 玄関に濃い紅色の花が咲く「ひとり娘」の一鉢を置く  
 雨音は徐々にはげしく屋根をうつ恵みの雨をよるこぶ農家  
 さつきから塩辛トンボ往き来する吾の動きに合わせる様に  
 今なにを思っていますや百三歳の姉とリモートの面会もどかし  
 今朝の風たしかに秋を思わせる畑に出れば上着がほしい  
 菊芋と教わりながら遠目には向日葵の花と見間違えたり  
 夏草の中の南瓜は一元に二個は付きおり暑さに耐えて  
 今一度すべての施錠を確かめる月のあかりの廊下に差して  
 夕五時のチャイムを聞けばそろそろと道具をしまい相撲観戦  
 一雨が降れば畑は潤いて大根白菜発芽はじまる  
 賑やかなホテルの朝はバイキング若者はみな洋食選ぶ

むらかみよしえ  
 村上美江 (岩手県)

## 「活版」の屋号

あの人も歩いたらうにこの道を四十年も勤め上げしか  
 西日差す南の机に対ふ娘に長居のおひさま元温める  
 パソコンの宛名の文字をひとまはり小さくなほす喪中はがきの  
 高卒の五十周年記念の日最初で最後の同窓会待つ  
 友が作る記念写真や出席簿校歌校舎の小さなアルバム  
 助からぬ命の時を覚悟して残すアルバム花柄表紙絵  
 良い人は早く逝くよ誰か言ふ召されし友のピースの多さよ  
 年末に次次届く喪の知らせ着替への指に力入らず  
 子を残し逝く親のありその心思ひて通夜への足取り重し  
 身体張り男手一つで子を育て障害持つ子を遺し逝く友  
 つつがなく日暮れとなりて安堵する家族の器と箸を置く時  
 温かいそのことが一番の御馳走と炊き立てご飯と味噌汁囲む  
 案内をしてみたかつた岩手路を印刷のこと沢山話して  
 富士山の冠雪光る写真見る関口さんの心偲びて  
 封筒にどつしり重く資料寄せ印刷工の時代を語りぬ

共通の話題の嬉し寅さんの映画の場面「朝日印刷」  
寅さんの映画の場面語り合ふ「あそこはちがふ」と印刷の話

「活版」の屋号の響きそのままに活字の中で育ちし吾は

読めざる字一つありしといふ祖父は「先生」と呼ばれ版を組みるき

さとかたは百年超ゆる印刷業大正二年二月の創業

寅年の義父が帰つて来たやうな若沖の虎のカレンダー着く

又もどり夫の遺影の前に行きひたすら祈る子等のしあはせ

特別なことなどさして望まずに只たんたとひと日の夕べ

階の踊り場に立ち振りかへる社の前の早苗健やか

「こんにちは」ああこの人も被災者か同じコートに親しみが湧く

水道の凍結予防のカバー取る心躍らす水のいきほひ

床に就くわが枕もと深夜便にチューナー合はせ息子置き呉る

初めての四人の集ひはその日から「四つ葉の会」と命名したり

出身は陸前高田市学び舎は大船渡市の朗希を祝ふ

被災地に力の湧く日 日曜日朗希の日となり朗らかとなる

被災地に希望の星の朗希くん「令和の怪物」「令和のスター」に  
気仙沼「おかえりモネ」の爽やかな笑顔が浮かぶ水色の空

当面の目標として五年間まづ健康とラジオ体操

女子会が週に二回も待つてゐるコロナで忘れたおしゃべりの時

二度と無い今日といふ日を話し込み「又ね」「又ね」と言葉が返る

クレヨンの水色みどり合ふ二色なにより空と山の色なり

ゆつくりとゆつたり過ごす非介護の今日の一日ひとひを大事に過ごす

採れたてのウニの丼一年の唯一の楽しみ嫁むつまじぎ来りて

早朝の地震に飛び起きスマホ見るまづは津波の有りや無しやと

うしろ影みんな一つの方を向く花火大会 ウクライナの空よ

暑き日に床をのべてくれし子よ母を喜ばせくれし真心

コロナ禍に興味示さぬ吾の手に娘より渡さる旅行日程

戦死せし参百拾萬の人のゐて戦後七十七年が過ぐ

孫背負ひ行方不明の幼子をかうしてをれぬと媪捜せり

白鳥は最後の声の美しくスワンソングといふ言葉聴く



晩秋の暖かき陽射しを思ひ切り全身に浴び家事の捗る  
 ふはふはの羽毛布団を取り込めば倍にふくらみ顔をうづめる  
 どなたにも優しい光日曜日いま山際には虹立つ  
 一年をあちこち過ぎし丑年のあと二ヶ月も歩みそぐはず  
 ピースした笑顔の友の胸の内知らずに乾杯グラスを合はす  
 何回も手作りアルバム開きをり友の心中知る由もなく  
 冥福を祈りて願ふこれからの残されし家族の健やかなれと  
 患ひを抱へて友は臥しむたり残せる息子は障害を持つ  
 学園に通ひたる子の楽しさを十年前の職員に聴く  
 初恋のああ初恋の君なれば十二のままの吾が心うち  
 そのことはそのこととしてそのあとをどう考へる わたしの心  
 年賀状胸に抱へてにこやかに母はまつ先にその話する  
 次々に親しい人の逝く知らせああ長生きは辛いと母は  
 春が来た母の化身の鳥が来たどこから来たの生きてゐたのね  
 目に見えぬ糸を動かす蝶の舞マリオネットの劇のごとくに  
 新しき道路の出来て自宅前の車の往来九割も減る  
 冬の花パンジービオラ起き上がり無色の景に彩りを盛る  
 朗希くんの地元の号外どの店も早朝すでに消えて無くなる  
 十八歳松川捕手と二十歳佐々木朗希の名バッテリー  
 新記録「13連続奪三振」プロ野球界の新星朗希  
 雨の後若葉はいよいよ盛り上がり山の黄みどりみどりが光る  
 旅先の一輪挿しの矢車草ちよつと涼しげちよつと寂しげ  
 大き松今まで紫あでやかな牡丹を隠しき伐つて気が付く  
 義母の行くシヨートステイの送迎のありがたきかな「いつて  
 らつしやい」

午前中キッチン涼しく煮物用根菜刻み義母を待ちをり  
 「おかへり」と笑顔で義母を迎へれば少し離れてシヨートス  
 テイ顔  
 気になるか義母の草取る庭の手中も廻らずに五日目の帰省  
 体温を優に超えたる極暑にて大雨コロナと命危ふし  
 毎日が真つ赤な気温予報凶なり今日も信じがたき高温予報  
 日本中どこにみたどて災害の起きる確率大きく膨らむ  
 主亡き畑の老木梅の実よ あと何回を約束されてか  
 雑草は抜いても抜いても生えて来るこのしぶとさを吾も持ち  
 たし  
 引き抜けば結果が見える草取りも雨が続けばやる気の失せたり  
 雨多き今年の天気の不平等ひ大雨被災地の映像悲しむ  
 大雨でりんごの枝に着くゴミをポランテア等は丁寧に取り  
 ひつじ雲うろこ雲との見分け方指一本に入ればうろこ  
 十月の声を聞けども日中は半袖Tシャツ出番の多し  
 青天の日曜日なれど心晴れずコロナウイルス濃厚接触  
 人の気も何処かボタンの掛け違ひ異常気象の生き辛さかな  
 朝晩の冷え込み少し足踏みすこのままでよしこの位のまま  
 駅弁も機内食も食べたいがそこに居るからきつとおいしい  
 満足を得られても次々と草の根しぶとく一掃清掃

冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集  
 〈作品二〉

## 散歩の風景

公園の木陰に小さきテント張り若き親子は声立て遊ぶ  
 木の陰はどんぐり一面落ちていて拾う子供の帽子はいっぱい  
 秋バラは香りの強いと聞きたれば御苑のバラ園に連れ立ちて行く  
 バラ園に近づけば香り風に乗りマスク付けても匂いてきたり  
 丸の内三菱一号館あたり上向けばまわりのビル迫りくる  
 脇役に回りておりぬ常緑樹みどりの横に際立つ公孫樹  
 散り積る公孫樹のなかにもみじの葉とところどころを赤く彩る  
 橙と赤黄緑のもみじ葉に京都の菓子原型を見る  
 せせらぎの聞こえる池にもみじ散り空を映して水の輪あちこち  
 外苑の並木の公孫樹の先端は鋭く尖り天を突きさす  
 日曜日原っぱ公園に子供らの声の響いて歩きも弾む  
 冬至過ぎもみじの道の色失せて名残りの枝は寒さを誘う  
 わが短歌手ほどきくれたる母の友九十三歳いかにおわすか  
 年賀状元気な写真の母の友家族の方より返信のあり  
 枝いっぱい蓄ふくらむ紅梅のほころびはじむ一輪二輪

いざわなおこ  
 伊澤直子☆ (東京都)

公園の河津桜の枝枝に蓄ふくらむ一月半ば  
 となり家の広き空地は霜の色今朝の冷え込み目にも確かむ  
 大寒の陽光はやや眩しくて風の中にも温もりのあり  
 久しぶりにおしめりありてこの朝は刺すような寒さ少し和らぐ  
 庭の柚子丈を詰めたるこの冬に思いもよらずたわわに実る  
 ダウン着てストール巻いて散歩する背に受ける陽はほのかに温い  
 押し花になりたる蠟梅萎れてもなお香りありテーブルに置く  
 一輪車練習している少女いてこぎ出すところが難しいらし  
 青空にドコモタワーのそびえ立つ横に御苑の薩摩寒桜  
 太き幹地を這うように伸びた先枝分かれして梅は咲きおり  
 満開の河津桜の横に咲く黄の土佐ミズキ珍しき花  
 枯色の広き原っぱに少しづつ緑ののぞく春彼岸前  
 寒戻り季節風吹く公園に辛夷れんぎょう花は春なり  
 一週間行かれずにいた公園の花の景色はすっかり変わる  
 枝枝に赤子の手のごと丸まりてもみじの新芽は萌え出でており

枝の先に新芽の出でたる花桃は色濃く青き空に映えおり  
池の中の杭に止まれるかわせみに望遠レンズが二機向かいいる

「美の巨人」新宿御苑を取り上げる花を見に行く予定の前日  
何度となく行きたる新宿御苑なれど解説みればまた新しき

公園になにげなく咲く藤の花薄紫がやさしく垂れる

念願の鐫木清方展に行く清しきものの心に通る

神宮の池はかすかに波立ちて写る緑と青空揺れる

青もみじこんもりかぶさる道続き木もれ日の模様見ながら歩く

立夏過ぎ熱き日差しに青もみじ輝き増してそよ風わたる

孫の浴衣仕立て上がりを買い求め寸法合わせに針を持ちたり

綿菓子のようにふわりと丸まりてスモークツリーの花は朱鷺色

若みどりに輝いていた木木の葉は黒みをおびて重く繁りぬ

テレビ壊れスマホも機種替え高齢の頭に忙しき新しき機器

新しき機器の取扱説明書テレビもスマホも斜め読みする

窓外の重なる緑に照る朝日今日も暑いと語りかけくる

野沢菜のおやきと団子で腹ごしらえ寺に参りて植物公園に行く  
公園は検温消毒記名の後チケット売場に行かれる仕組み

橙のたわわに実る木のありて肌はなめらか形も揃う

雨のあと舗装道路に散るもみじ張りついてなお色を見せおり

蠟梅の蕾ちらほらほころびてもみじの後の公園彩る

雪解けて茎の折れたる水仙を見つけて手折り部屋に生けたり

親しめるもみじの道の冬木立枝の先まで細く尖りぬ

娘来て脚立用いて柚子を採り五キロ余りを持ち帰りたり

桜散りひときわ目を引く桃色は花海棠のふくよかな花

清方展を出づれば皇居東御苑青葉あふれる池にはコウホネ

明治神宮木の香漂うミュージアム隅研吾氏の設計という

ミュージアム宝物殿の御物にはなつかしさ覚え拝観したり

宗教画の続いた後に印象派なぜか心のゆるむ気をする

六の日に魔除けになると紫陽花を吊せば色の失せずに乾く

花もちのよくない真夏に紫陽花のドライフラワー彩りのよく

続けたるウォーキングも真夏日は休みとしたり無理はするまい

## 父の帰宅

候補者の顔で投票決めないが誠実そうな写真の並ぶ  
 新聞の政党代表ポーズ決め謳い文句は給料上げる  
 今日一日笑顔で過ごして下さいとアナウンサーは番組締める  
 先人の開きし土地にガラガラとソーラーパネル林のように  
 念願の一時帰宅が許されて車椅子の父仏壇へ向かう  
 「ただいま」の大きな声に驚いて立会う皆が思わず笑う  
 夕食の膳に向かいて元気よく「いただきます」と父は箸持つ  
 孫達が「私わかる」と父に問う名の出ぬ父は自ら笑う  
 今年こそ人をよく見て付き合えと己れを戒め霜柱踏む  
 勤め終え正月三日に帰る子は超極暖の肌着をくれる  
 軽く見た時ほど雪は降り積もる人のこころを見透かす天は  
 厳冬期に鍛えておけば夏に負けぬ誰かの言葉を信じて走る  
 太陽は残る力を振り絞り大地を照らす大寒のゆうべ  
 筑波山を正面に見る兄の家にわの蠟梅つぼみをひらく  
 自宅から見る形が一番と筑波の峰を兄は見つめる

いしわたりしずお  
 石渡静夫☆ (茨城県)

沢庵を漬けても食べる人いない兄は言いつつ樽でくれたり  
 個性など言う人も無く世に出でて従うのみの羊となりぬ  
 三度目の接種となれば厚着でも練習通りに肩までするり  
 人間が人間を殺す怖ろしき隕石のごとミサイル落とす  
 最後まで戦うと言うウクライナ兵国を愛する信念曲げず  
 ぼんやりと生きた十代受け入れて輝かしたい今この時を  
 日に三度食事し夜は湯につかり戦なき世をいつも通りに  
 力だけが正義のような侵攻を止められぬ今地球を憂う  
 雨風の収まる気配無いままに部屋に籠れば梅雨に入りたる  
 街並みの変化に心寂しくもあのプラモデル店今も営業  
 どの国も自国の利益を言い出して譲り合わねば世界はどうなる  
 父の日は忘れてないと食卓に握り寿司あり焼き鳥もあり  
 三人で囲む夕食それだけで楽しさ美味しさ共に増したり  
 吾の手を労わるようにワイシャツの袖にゆっくりアイロンかける  
 冷房の嫌いな家族誰一人エアコン入れると言わず耐えたり

外出はなるべく控えて下さいとアナウンサーは語尾を強める  
 じりじりと焼け焦げるほど照らされて稲は穂を出す真直ぐ天に  
 夕方になれば少しの風来たるささやくように稲は揺れたり  
 来週もまた行事かと嘆くまい陰で働く人を想えば  
 日中の暑さに何もする気無し陰の濃くなる夕方を待つ  
 田舎でも生きて行くため冷房が必要なりとつくづく思う  
 この猛暑エアコン無しで過ごせぬと二人気が合い電器店へと  
 自らを追い詰めるごと環境を厳しくしたるか人間界は  
 早朝の田の面を撫でる秋の風朝日を浴びて我が影長し  
 朝食はパンにしようと思えながら忘れて米を漫然と研ぐ  
 冷凍のトウモロコシを解凍し丸かじりして行く夏を惜しむ  
 生かされて生きる身なれば移りゆく季節を楽しむ今金木犀  
 動くたび用事を次々思い出しあれもこれもと自分を急かす  
 人前で言いにくいことを文字にしてメール送信す伝わるだろうか  
 連日のミサイル発射に脅えおり地下室も無くシェルターも無し

選挙カーの訴える声響き合い候補者名も聞き取れず居る  
 歳時記の道と呼ばれる散歩道黄葉の中句碑を尋ねる  
 歳時記の道で拓本取る人等浮き上がる文字に歓声あげる  
 今度こそ失敗せぬとグラタンのレシピ手許に分量はかる  
 店頭のガソリン価格高止まり信号待ちで恨めしく見る  
 次々と書類を出して介護士はサービス受ける父の名書かせる  
 パソコンの仕事の疲れを取るようにゲームに夢中深夜の娘  
 あと一人集合時間に来ぬ人を研修バスの皆で氣を揉む  
 夫婦にも晴れの日あれば雨の日も会話少ない今日は曇りか  
 「これからも安全運転お続けを」ラジオの声に氣を引き締める  
 運転に人柄出るかじつと待ちお先にどうぞとやさしい車  
 後ろ向きに車椅子ごと降ろされる父を迎える三人の娘  
 暗黒の中から家並み現れてひとつひとつが顔に見えたり  
 年内に送ると約束した資料送れぬ自分を嘲笑う朝  
 多様化の時代に消える陽炎か偉人の教えを信じる吾は  
 後ろ脚を投げ出し椅子の上に寝る猫の眉間は張り詰めたまま  
 着膨れて動きの鈍い亀になり春立つ前の寒さ味わう  
 他国土を我がもの顔で疾駆する戦車の群れは悪魔のように  
 旅客機がミサイルならばぞっとする羽田に向かう轟音止まず  
 隙の無い後ろ姿の俳優の歩く踵に修練を見る  
 歓声を響かせ春の園児らはブランコ高く青空を飛ばす  
 波風を立てずに生きる道もよしミモザの花は静かに揺れる  
 若い時は旅に出るよと繰り返す上司の笑顔浮かび来  
 齒科医院の裏口のドア開かれて春の日差しに白衣干さるる  
 校門の扉は少し開かれて花見の客を迎え入れたり

花貫のさくら公園春浅み桜の木々は蕾堅かり  
 訪う人の無い湖畔にひっそりと茨城百景の碑木陰に立てり  
 溪流を見つめて日がな一日をこのまま居たいせせらぎ聞いて  
 思い込みはすべて自分に都合よく刷り込んでしまふ過去の記憶も  
 水田を見回る農夫苦笑して今年の田植えは頼んだと言う  
 二年目の田植え機運転の若者はしつかり前を見据えて走る  
 母親は心配そうに子を見つめ苗を用意し畔で待ちたり  
 熟練の農夫は迷わず淡々と田植え機走らす隣の田圃  
 烈公の歌碑を尋ねて登りゆく月居の山新緑萌える  
 月居の前山過ぎて石段は袋田の滝へと急降下する  
 会う人に嫌な思いはさせまいと心を配る吾ははかなし  
 誤送金の金を返せぬ訳言わぬ自分の金で無いと知りつつ  
 ウィグルの民族展を訪ねれば来場者の無く受付は一人  
 雨上がりの清らかな朝ウォーキング田の面に映る青空連れて  
 もう少し布団の中にいたいけど今日も四時台もつたいなくて  
 梅雨明けの発表される六月の炎のような今日も猛暑日  
 間において南の田より心地良き風が来たりて心休まる  
 背後から様子をうかがう容疑者の視線の先に安倍元総理  
 背後から迫る容疑者誰一人止める者無く銃を構える  
 順調に梅を干したる三日間あとは夜露に打たせるだけと  
 冷房の世話にならずに生きられる嬉しい八月二十八日  
 黄金色の稲田は刈られ消えてゆくこも一枚あそこも一枚  
 一棟の高層マンション煌々と灯りを点す金曜の夜  
 くしゃくしゃな心の皺を伸ばすごとアイロンかける古いハン  
 カチ

二匹入り小ぶりの秋刀魚三百円二パック買う北海道産  
 鶯の初鳴きに耳を澄ますように石焼き芋の売り声を聞く  
 内海に突き出す丘に守谷城開発逃れる巨大な土塁  
 攻め入って奪った土地を併合するロシアの蛮行止められぬまま  
 突然にドラマは消えてミサイルの発射を告げて画面動かず  
 政争に敗れ姿を見せぬ友次の選挙の出馬を明かす  
 イベントの最後は皆と「龍ヶ崎錦」を踊る見様見真似で  
 スポーツの日は馴染まぬと視聴者の声をラジオのアナウン  
 サー告ぐ

いなづたかこ  
 稲津孝子 (福岡県)

## 躰温計

帰りきて坐る佛壇に百合の花の花びらひとつ音して落ちつ  
 蛻蝶にはかの寒さに葉のうへに動くことなし羽とづるまま  
 孫かよふ女学校の名書きてあるボールペンを貰ひぬ孫に  
 み雪ふる越の生菓子末の子が買ひて来たりぬ夫の忌日  
 道の端に吹き寄せらるる葉踏みゆく桜の落葉櫛の落葉  
 初春を迎ふる写真に教へ子の父母より賜へる岡山の菓子  
 瓶に挿す枝より育ち花の咲く母の侘助言ふひとをらず  
 知らぬ間に眠るソファアの夢の中ひたすら謝るわが声に覚む  
 何しても何を聞きても何見ても楽しかりにき夫のをりて  
 庭に出で屈めば雪の降りてきて土のうへにてたちまち消えつ  
 リハビリに好みて夫の歌ひにし「星の流れに」口遊みをり  
 吾亦紅掬月見草この年も種のこぼれて花さく庭に  
 一度だに弱音を吐くこと夫なく我の横にて静かに逝きき  
 この後は宥め宥めて付き合ひてゆかむ心臓四月になりぬ  
 耳に手を当つる夫が窓に寄り招きてくれぬ庭の鶯

ああ夢で良かりきと言ひ覚めし夢さめて具躰を思ひ出ださず  
 物干しの棹に下げたる干柿が粉ふき始む冷蔵庫の中  
 よく出来てゐますと葉書賜ひにし先生思ふ先生の文字  
 近ごろは雉鳩の声きくこと無し母の使ひと思ひゐる声  
 学校に持参の孫の躰温計時間かかりて楽奏でるといふ  
 我生まれたる中国の張家口の冬期オリンピックの青い空  
 もはや歌できなくなりし歌よみの母の最後に作りにし歌  
 役所より年金の通知くるといふ娘は五十二歳になりぬ  
 目の覚めて眠れぬ窓の明るみて今日も鳥が鳴きて過ぎたり  
 立つ人の多き電車の空く座席坐らせて貰ふ我になりけり  
 朝出でて歩き始むる常の道けふは遠くで雉鳩の鳴く  
 風ありて池の面に立つ細波の光を返す日の射してきて  
 尾を下げて鳴く電線の鵲のうへに残れる弓張の月  
 庭に在すお地蔵様の採寸し縫へり緋色の頭巾と前掛  
 鍵あけて只今と入る髪短くなつたねと言ひてくる人なし

大学の祝辞に学長宣ひし沢山子どもを儲けよ諸君  
 野菜の副木に動かぬ揚羽の幼蟲が我を見てをり黒き眼で  
 我が庭に生るる小さな蠟螂が尾を上げ動く野菜の莖に  
 目の覚めて寝台の横の手摺もち立ち上がりたり掛け声かけて  
 娘ふたりの厄に買ひにし長きもの傘の古びつ年月を経て  
 震災の時に植ゑにし水戸の梅の埋もる木札十年経たり  
 本を買ふ事に苦情を言はざれば感謝しをりと夫の言ひき  
 家庭婦人ソフトボール大会に完全試合をせし事ありき  
 夕べには出できて庭の幼蟲に声をかけたり寂しくなりて  
 雨あがる莖に動かぬ幼蟲が眼凝らして我を見てをり  
 雄花咲き雌花の開き始めたり蟲たち励めよ南瓜の受粉  
 声出して数を数へてリハビリを終へて自ら拍手をしをり  
 風いでてこより靡きて音のせり南部の鉄の風鈴の音  
 姉逝きて十年独りの義兄逝く我に歌をぞ作れと言ひて  
 この秋も秋明菊の咲く頃となりて夫の忌日の近し

池めぐる空に暫く立つ虹を幸ひとして始まるひと日  
 どうしても覚えられざる首相の名の新聞を置く食卓のうへ  
 死に目には遇へずと言はれてゐる爪を燈の下に切る父母の無し  
 挨拶して過ぎゆく自転車ネパールと言へりお国はどちらと問  
 へば

暖かき霜月蓄む連翹の開くことなし朝夕冷えて  
 朝刊に番付表の挟みあり去年は無かりし相撲の近し  
 手を叩けば振り返る夫戻りきて弁当渡すなどありき若くて  
 いち時に遅れて開く金木犀の木の数多し池巡りつつ  
 抽斗の母のバツジは右左に螢がハートを支ふる形  
 朝池を共に歩いて名を知らず賜へる手作りの柚子胡椒  
 仏壇の夫の目線われ右に左に動けば合はせて動く  
 夜の更けに夫の寝込みてみしあたり何か物音聞こゆる如し  
 絶対に失敗あらずとふレシヒあり取り出し煮をり丹波の黒大豆  
 食べたらず磨く怠り歯茎痛くなるその時に飲む薬を持ってり  
 柚子の苗買ひきて植ゑて芽の出でず再び買ひきて名知らぬ實  
 生る

バス停を探して今日もウロウロ長く住みある福岡の町に  
 遅くなり夜半ゴミ出しに来る空に朧に見ゆる上弦の月  
 百貨店に牡蠣のフライを食べる往復せるを言ふ人もなし  
 腹黒ぞと夫自ら言ひみし腹の大きな痣はいつ消えにしや  
 茎ながく咲きたる日本水仙が寒さ続きて匂ふいつまでも  
 カテーター入り心臓に高周波照射されたる身軀劣る  
 緊急の手術の先に入るとふ待ちあるベッドに歌を思へり  
 この四月小学校中学校と大学に入学する孫四人

寒さきて氷点下二十度越すといふ北見は息子の学びにし町  
 昨夜よりの雨の上がりて歩く池の雲の切れ間に見ゆる青い空  
 蚕豆の店に竝べば買ひてきて茹でる六月母好みるき  
 ふるさと銀河線とふ単線の電車にて学ぶ息子に会ひに行きにき  
 金太郎鉞担ぐ絵の朝の貨物列車は何運びをるにや  
 言はれたる役にその度手を挙げて出て行き演じきといふ幼女は  
 付箋ある詩集に赤く引く線に夫の声の聞こゆる如し  
 神様がお赦しにならず悪業は罰が当たると思ふプーチン  
 明け方の激しき雨風ひとに聞く眠れぬ眠りに聞こえてをらず  
 六月の十日時の記念日を今ひと知らず天智天皇  
 飲みこみの悪くなりきてパタカラと幾度も言ひて薬を飲み  
 長きトンネル抜けたる如き二、三日庭に花穂の揃ふ藪蘭  
 朝に来てラジオ体操する池の空に残りてゐる白き月  
 白き花穂先に残る紫蘇摘みて佃煮作り待つ三回忌  
 唯一の水の惑星になるといふ地球の成り立ち知りぬ今宵は  
 店頭利平栗あり栗入れて赤飯作る氣力のあらず  
 薬にて眠る眠りに夫来て母来て今日はまた人の来る

いのうえのりこ  
 井上法子 (大阪府)

## 流るる日日

朝の日に白く光りて開きをり昼と夕べに酔ふ酔芙蓉  
 年年に待てど花なき木犀の今年は窓に匂ひて止まず

マスクなしには過ごせぬ日日を重ね来てウイルス収まる日を願ひたり  
 手さげ袋にポシエツトにも一つづつ予備のマスクを入れて出かけぬ  
 ほととぎす雨ののち地に伏せる満開の花に日の光さす

餌もたぬ我に急ぎて泳ぎ来る亀に謝り本堂に詣る

消ゆることなきウイルスにマスクなしでは済まぬ日続くいつ

いつ死んでもいいと言ひつつサプリ飲み予防接種をすべて済ませり

年重ね残る二人の歌の会逝きにし人の話は盡きず

出かけむとすれば先づ眼鏡財布に保険証ハンカチちり紙

名を知らぬ蟲の声いつよりか聞かなくなりて寒き日続く

いつ迄も消ゆることなきウイルスにマスクなしでは済まぬ日日

少しづつしつかり歩ける様になる曾孫につき合ひて腰も膝も悲鳴をあぐる

逢ふ度に言葉が少しづつ増えて今日は「どうじよ」と初めて言へり

虫除けの薬怠けた侘助の花びら半分喰はれてひらく



ひとつふたつの終はりを数へてわが意識なくなりて膝は人工となる  
 手術の痛みが取れば楽になることを信じて漸く決心をせり  
 長年の膝の痛みに堪へかねて九十歳にして全身麻酔受く  
 麻酔よりさめて再び痛み出すこの世に痛みのあるを呪へり  
 痛みてもお腹の減るのは有難しお粥を美味しと思ひて食ぶる  
 手術の翌日からのリハビリも歩ける希望ありて苦にはならず  
 車椅子に乗りて久久に出る病院くるま椅子同士が挨拶かはす  
 片方の足が歩けて有難し杖つきて部屋の中を暫く歩く  
 リハビリの進みて退院を許さるる子に助けられ家で暮す喜び  
 助けられて少しづつ道を歩きみる恐る恐ると言ふ有様に  
 ほんの少し歩かなかつたと思ふのにまるで雲の上を歩くが如し  
 十分も歩けば疲れ一休みして又続きを歩いて休む  
 いつからか昼は卵かけご飯と決めてをりあきる事なし独りの時間  
 水やりだけはと片杖ついて狭き庭の隅隅までを時間をかけて  
 曾孫来ると電話のありて手の届く所までの物を移せり

239

家中を歩く曾孫あきることせず歩く疲れを知らずに  
 もう一緒にボール投げなどしてやれず坐つたまままで遊ぶこと考ふ  
 曾孫に会へた幸せそれだけで十分と思はねばならず九十となりて  
 優勝旗しつかり掲げ行く主将熱き戦ひ重ね来たりて  
 又ひとつ出来ぬことの増えてゆくペットボトルの蓋あけられず  
 九十年われにつき合ひ歩きたる膝も痛みて杖に頼れり  
 水やりもつらくなり来て庭の木木あめ待つ様に葉を垂れてをり  
 種とびてあちこち開く立金草いろなき庭にあかりを灯す  
 今日ほこれ迄と言ひつつ又も手をのばすアイスクリーム三十度を超す  
 手水鉢の水のむ雀をカーテンの間隙より音を立てず見てをり

## 現し身

漱石の紙幣は稀少価値あると教へくれたる人に取り置く  
十七年経る中越地震の傷跡は境内一円埋まらぬ亀裂  
ギヤマンの壺に活けたる穂芒は野趣失ひて月見にそぐはず  
墓群に寄り合ふ小さき石仏は杉の落葉に温もる如し  
わが留守に夫の干しくるる濯ぎものよぢるるままに風に靡くも  
明るさを増しゆく秋の山茶花の生垣匂ふがごとき輝き  
落としたる一円拾はぬ学生を追ひて媼の説諭の長し  
胃カメラを受けたる夕餉は鯛料理粘膜つくろふ効果あるらし  
電子レンジ使ふすべなど知らぬ夫日々支ふるはわれよりあらず  
水道管凍結したり青空に空気は透明に震へるごとし  
耳障りな車の音は初冬の冷気に路面のしまりあるため  
柔らかな日の差す気配に起き出づる雪の止みたる元日の朝  
年明けも続く葬儀に身のたるく僅かの時を炬燵にもぐる  
行事後に終日続く身の重さかかる怠惰は安穩のうち  
カピバラの冬至の湯浴みの放映あり隙なく柚子の盛り上がるほど

いのうえまきこ  
井上榎子 (新潟県)

薄氷の張りたる池に沈みある日の丸模様の鯉の際立つ  
急勾配の御堂の屋根より落つる雪に鯉棲む池の半分埋まる  
起き抜けに鯉を数へて見届ける夜半に獣らの危害なきこと  
ワクチンの副反応か起きがけによるめくわれに壁の冷たし  
夢をみるのは五臓六腑の疲れといふ本を読みをり思ふ節ありて  
年毎に衰へたれど気が付けば家業の主体がわれに移れり  
しんしんと留処なく降る雪を見て積もる雪とぞ常套句なり  
新しき地藏届けど頼まれたる前垂れ縫へず布を無駄にす  
手伝ひの媼に頼めば翌朝に地藏ら前垂れ頭巾も付けらる  
雛が巢にゐたるか庭を掃くわれに嘴太鴉の当たりては飛ぶ  
身に痛き程の冷気の本堂の供花は春まで生氣を保つ  
観音堂めぐる歩道の筍の育ちを待てば根刮ぎとらる  
二か月も季節戻りをするといふ五月初旬に暖房切れず  
筍を掘りたる途端に猩猩蠅数多飛び来て切り口被ふ  
啄木鳥の突く音響く車庫の壁慌てて追へど円形の穴

啄木鳥の開けたる穴に出で入りて雀の番が枯れ枝運ぶ  
語尾ながく相槌を打つ友ありて共感示すやうには見えぬ

山鳥の鳴き声響くわが寺をめぐる五月の空気潤ふ

真夏日の夕焼け広くわが浸る露天風呂の底まで届く

俄雨やみたる夕べの草叢に露のしたたる葉鶏頭の朱

コロナ禍にて香典弔問野辺送り辞退と書きたる触状まはる

利き腕を痛めて盆の近づけば吊る布摩りつつ意気込み失せる

整形外科の待合室に居眠りてわがそこばくの平安にゐる

痛み止め飲まず胃痛に堪へをれば汗滲む顔の艶を褒めらる

コロナ感染を言ひて棚経断ると数件の電話あり今年初めて

亡き叔母の臥しゐたる部屋の狭くして布団踏みつつ人ら準備す

台風の去りて輝く夕映えの庭に散らばる鉢植ゑ幾つ

「最高のクール便です」と言はれたり宅配の人に出すアイスコーヒー

棚経を終へて帰れる夫のシャツ汗に張りつき逆さに脱がす

彼岸花軒にとぼしく咲き残り続く法会の涼しく終る

土砂降りにビーチ・パラソル幾本も携へ檀家は納骨式する  
墓掃除へたる職人に確認をすれば頼まぬ墓も混じりぬ  
採まれる痛みを言へど力抜く時は僅かぞマッサージ師は  
風向きの変はらぬ池の噴水に打たれつづける水仙の葉は  
暮れ方に野太く鳴きゐる鼻は婦宅促す夫の声に似る  
葬礼の師走になりて続く日日新年迎ふる準備の出来ず  
雪国のイメージなるか晩秋に都より着込みて法要に来る  
ゆくりなく車内に見掛くる市の議員競馬新聞にペンを走らす  
茶菓などは不用と聞けど冬荒れに困ふ人らを客間に持て成す  
層をなす落葉掃除を簡略に済ませて職人は言葉なく帰る  
友の書店に久方ぶりに立ち寄れば不況嘆かれ不要の本買ふ  
強く弱く電線鳴らす夜半の風目覚めて長く眠れずに聞く  
要領の分からぬ夫の買ひ来たる雑煮の白滝三千円ほど  
胃の不調続く日々にて胃カメラの診断結果はストレス性胃炎  
如月のショッピング通販に富有柿ありてすぐさま注文したり  
やうやくに寝入りたる時また吹雪く夜更けに懈し副反応は  
向き向きに伸びたる枝に連翹の黄の花溢れ参道に沿ふ  
雪折れの杉の小枝を片さむと持てば花粉にくしやみ止まらず  
穏やかに降りくる曇見あげて植ゑたばかりの種と苗想ふ  
焼却炉の上の木の枝に煙避け餌をねらひつつ鴉は去らず  
俄雨やみて日暮の庭隅に白く鮮烈な雪柳そよぐ  
雀蜂駆除の職人壁板を剥げば張り付く巣に仰け反りぬ  
撥ね出しの百合と業者が呉れたれど素人目には理由分ならず  
歯の治療受ければ痛みの和らぎて夫の小言に怒りのわかず  
除草剤撒きたる人らを咎めねど鈴蘭の芽の辺りを探る

気象病とメディアの報じる症状のありて薬に頼る六月

コロナ禍に三度中止の施餓鬼法要は覇気なく御堂の供花を整ふ

預かりてひと冬を越す骨箱に慎みて御明し朝々点す

ホトトギス昼夜間はずの鳴き声はつべんかけたかど確かに

聞こゆ

日盛りのアスファルト敷く参道を自転車漕げば臭ひにむせる

手際よく籠に入れたれどスーパリーのセルフレジにて手数がか

かる

消極的な表情をするわが顔を鏡に見れば仕事進まず

この日頃寝付きの悪くカフェインを含む飲料水夜は控へる

真夜中に救急車にて運ばれたる近所の老人朝には草取る

解体の家より出でたる観音像気軽に預かれれば夫は咎むる

日盛りにアスファルト敷く道路橋自転車漕げば臭ひにむせる

夜の庭に白く咲きたる月見草昼は萎みて紅色になる

盂蘭盆のさなかの葬儀に住職の留守の言訳を檀家に告げる

少しづつ時計の時刻違へども几帳面な夫この頃直さず

裏庭の池の端に沿ふ水芭蕉文月終りの暑き日に照る

暇と言ひて上がりくる媼に齢など又聞きながら話題をさがす

湯殿うつつ夜の雨音うらさびし葬儀に行きて夫居らぬ夜は

暑がりの夫の運転する車に膝掛けかけて縮こまりゐる

わが家より車で十分の三条市気温三十七度と報道のあり

うじまたかこ  
卯嶋貴子☆ (東京都)

## 楽しく生きる

女子高の文化祭が近づきて太鼓の音の響きわたりぬ  
 恋人を待つように二十六歳の初孫を待ち焦がれている吾  
 渋柿の今年の実の数少なくて大きい粒が五十ほど生る  
 干柿を今年もおいしく作りたし寒さ来て三週間すれば甘くなる  
 百四十年に一度という月蝕を午後六時十分東の空に観る  
 みかづきと木星今日は近づきて夕空あおげばあざやかにあり  
 沖繩に越して行きたる友人は暖房のない冬をたのしむ  
 チラチラと窓の外は雪模様久しぶりなる積雪たのしむ  
 底冷えのする一月は家にこもる風が吹いても雪が降っても  
 念願のさだまさしコンサート抽選に当り有楽町に行く事とする  
 孫たちのおふれるほどの笑い声部屋に満ちるしあわせの時  
 新橋の駅前にある劇場の外のベンチにスズメ寄り来る  
 さだまさし久しぶりのコンサートやはり生の音は心に響く  
 白梅の咲き初める枝に小鳥たちときおりおとずれ花を啄む  
 二十六歳の男孫来りて三〇〇グラムのスTEEキペロりと食べる

三年ぶりに花芽を出したるシンビジウム何色なのか楽しみに待つ  
 透きとおる臘のようなるシンビジウム毎日愛でて一ヶ月経つ  
 木の芽立ち辺りに緑の満ちあふれうつの吾には気持が沈む  
 昔なら姥捨山に捨てらるる歳になりても生きるは楽し  
 ヨタヨタヘロヘロ樋口恵子氏の本で知る老婆は一日にしてならず  
 さみどりの奥多摩霊園へ墓参り息子と孫と三年ぶりに  
 暖かな陽ざしの中で墓掃除息子は水汲み孫は墓石磨きす  
 陽ざし浴びて暖かくなりたる墓石をなでてしばらく父母を偲びぬ  
 八重桜のハラハラと散る墓地公園で掃除している人と会話す  
 やわらかな黄緑の柿の葉に赤いてんとう虫一匹みつける  
 さわやかに緑の風が吹いている五月の連休家居しており  
 窓開けて胸いっぱい風を吸う五月晴の緑の風を  
 自動車も園児の声も聞こえない静けさの中ひとり漂う  
 ベランダの鉢植えで一冬過ごしたるはえとり草に花芽の伸びる  
 片足の折れたるカラスの雛一羽拾いて家につれて帰りぬ

声をかければ近寄りてくるカラスの雛わが家族の顔をおぼえたるらし  
 久しぶりに次男が家に顔を見せ夫と兄と旅行の計画す  
 痩せすぎの次男の体重聞きたれば母の吾より十キロ少ない  
 ベランダの小さな花にしじみ蝶小さいからだで蜜を吸う  
 足折れたるカラスの雛のいる小屋の掃除に日課がひとつ増えたり  
 毎日カラスの雛との闘いで二ヶ月たちていたずらに慣れる  
 トリセツを読まない夫は手にしたるスマホの操作息子が頼り  
 立秋を過ぎて咲きだす酔芙蓉刈り込みしても勢いつづく  
 記録的暑さ続きで西瓜が甘い食欲のない夫に毎食用意す  
 取り込みてまだ山積みの濯ぎ物暑さ続きで畳めずにおり  
 駐車場の僅かな隙間の荒草にカマキリバッタ今年も元氣  
 夏祭りドドンガドンと太鼓鳴り浴衣姿の親子行きかう  
 朝夕の寒さ来たりて柿の実の黄に色付く秋になりけり  
 満開の白ピンク赤の酔芙蓉通りがかりの人がスマホを向ける

卒業後六十五年小学校の六人の友の一人欠けたり  
 寒さ来て赤く色づく渋柿の今年の干柿上手につくろう  
 暖かくまぶしい光春が来た黄蝶が飛んで沈丁花咲く  
 世界では戦争が起き人が死ぬ木は芽吹き花は咲いても  
 猛暑日に庭の木を切りかたづけぬ夫の体調心配しつつ  
 実生にて物置小屋の隅に生え年々葉の数増やす万年青は  
 お面付け浴衣姿の若い人賑わう通りの夏祭りの日

## 一陣の風

石段を流るる水のかたちして蔓のぼしをりへくそかづらは  
 夕日背に歩くわが影脚ながし膝のけだるさ映ることなく  
 緋めだかの群るるがごとき雲消えて宵の明星かがやきはじむ  
 雲がくれしてゐたる月顔を出しわれに微笑み再び隠る  
 迷ふほど持ちてをらねどこのあした着てゆくものがまだ決まらない  
 水を断ち夏を眠りしシクラメン与ふる水にたちまち芽吹く  
 急激に気温下がれるこのあした水道水がぬるま湯となる  
 払ひても払ひても来る一つ蚊よ右のこめかみ狙ふなにゆゑ  
 実生なる柚の木その実むすぶまで十八年とぞ味深きとぞ  
 箒草コキアとんぶりなど呼ばれもこもこ育ちまるまる紅葉つ  
 一心に草の実をはむ雀たち踏みさうになる吾をしりめに  
 朝六時色の抜けたる満月の沈みゆくまで立ちて見送る  
 なほ固き蕾もらひし白木蓮苞を脱ぎたり花瓶のなかに  
 向かひにて目の化粧する人のをりきれいなる手のやはり男性  
 点滅の信号渡らぬこととせり決めていささか心穏しも

うちがきよねこ  
 内垣米子 (千葉県)

ガスの火に調理するなく洗濯機操作するなく母のひと世は  
 春女菟ささめきあひし草の原一面シートに覆はれてあり  
 梅が咲き桜ふくらみ戻りたる冬の気温も冬とはちがふ  
 寒くなく早足にても汗かかぬ帰りの道をさくさく歩く  
 庭があり金魚をりたるあの頃は世話する気力体力ありき  
 桜切る馬鹿は過去にて街なかの並木のさくら太き枝伐る  
 一陣の風ふき抜くる朝の道われに流るる花に向かへり  
 ロシア語からウクライナ語の発音に改むるとぞ「キエフ」は「キークウ」  
 遠足の友のおにぎりおいしさういつでも母はすし作りにき  
 やはらかな緑のなかに白緑茶緑ありて萌えゆく林  
 まじりあひフエンスにあふるる山吹と木香薔薇のまじらぬ黄の色  
 片言に鳴くうぐひすに口笛を吹けば正調きかせてくれつ  
 馬の眼はビー玉になると思ひにき幼きわれはただ単純に  
 突風に転がりゆけるわが帽子追ひかけくれつ犬連るる人  
 「だるまさんがころんだ」に止まるごと窓の木の葉の静止する夕

縁側に背なを丸めて刻みるし母のきんぴら牛蒡ふとかりき  
 一枚を解きて傷の手当てせりアベノマスクがいま役に立つ  
 駐車場の窪みに残るよべの雨二羽の雀が交互に浴びる  
 見失ひ諦めをりしポールペンファイルより出で声の出でたり  
 改札にて気付かむ人の悔恨の日傘が残る電車の手摺りに  
 見目悪しされど衿袖裾からの風の涼しもそんなブラウス  
 眠り来ず寝返り寝返りかへりみる午後の昼寝の楽しき夢を  
 心配の種が芽生えて動く夜いつそ育ちて実つてしまへ  
 長いこと出でざりし熱出でたればPCR検査に陽性  
 水のめぬ喉をすんなり通りゆく西瓜ひとくちああありがたし  
 雨のなか自転車のひと歩くひと窓に羨む隔離のわれは  
 あの星がシリウスなればとさがしたるオリオン淡し九月の空に  
 木星があれば土星かあの色は火星かなどと星空たのし  
 しまふ場所まよひ迷ひし物をいま捜しさがして見つからずをり  
 一難の去りゆかぬまままた一難金木犀の香るといふに

いつまでもマスクが防寒とならぬ日金木犀に三度目の花  
 いつよりか人住まぬ庭繁茂して大王松が電線おほふ  
 夕日背に信号を待つわが影を車ひきゆくあたかも頭  
 朝のみちじんわりお腹のあやしくてつきつき人が追ひ越しゆけり  
 狭すぎる庭に野菜を試すひと最終的にんにくとなる  
 隣にてスマホ操る手の白しシミなしシワなし横目に見をり  
 おにぎりを食べつつエスカレーターに乗りある女性の空腹度合  
 夏のころ汗にぬれたるマスクぬち呼吸にぬれたりけさの寒さに  
 夕茜のこるみそらの星と月みあげつつゆくよろけたりして  
 あしたより吹く北風に朝の富士夕べの富士のくきやかなる日  
 画面にて話せる人のずり落つるマスク気になるやはり気になる  
 まどかなるのこんの月を窓に見るわが誕生日はやく目覚めて  
 夕空にありし金星いまはもやまこと大きく明けに輝く  
 この寒き夜をいづくに過ごすのか餌をもらへる野良の猫らは  
 身の程の魚をもらふ雛鳥よわれは南瓜をのどに詰まらす  
 この冬はマフラー外さぬ電車ぬちコロナに細く窓あけてあり  
 小さめを普通サイズのマスクにしこの冬水漬いでぬ幸ひ  
 こぞ買ひて着ざりし中綿入りコート重宝したる冬のあけゆく  
 二階建てせいぜい二軒と思ふ地に三階建てが何と六軒  
 東日本大震災の起きたる日われ手術して十一年経つ  
 満開の桜の古木ひと立つ残れる枝のくろぐろとして  
 さくら咲き駅に三三五五つどふコロナ感染増加のきざし  
 乗り来たる袴姿の三人を直ぐに見るひと横目みる人  
 両手にて絞り出したる歯磨き剤片手はなせば元の木阿弥  
 往来のはげしき道に咲き盛る雪積むやうな花水木よし

席あるに立ちたるけふの電車より富士見ゆる箇所すべてクリアす  
 背丈ほどの半円球に咲き揃ふ額あぢさみに回り道せり  
 ゆくりなく出合へる言葉わが愛づる咲くさまをいふ「胴吹き桜」  
 豫報なる風雨いよいよ木木なびき雨のしぶきは路面を走る  
 マスクせず独りごとと言ふ人をりてめぐりに坐る人あなくなる  
 老眼鏡かけて拡大鏡二つ重ね見てある憂鬱の鬱  
 上を向く小さな花の群れてをり庭石菖と赤花夕化粧  
 あつけないき梅雨の幕切れアイスノン枕を使い夏の幕開け  
 早すぎる梅雨あけマスク真夏日節電円安物価高鳴呼  
 こめかみに額に背中に汗流れリュックサックいよいよ辛し  
 涼やかに静かに咲きたる額あぢさみ仕舞ひに四ひらの薯片を伏す  
 藪辛子など思ひぬし藪枯らしその花つぶらなサーモンピンク  
 電車にてのみどの奥がかゆくなり唾液腺押す耳下また顎下  
 眠るまへ明日着るものを思ふ癖おもふ間のなく眠る日のあり  
 食べられず飲めず眠れず急変を恐るる夜は明かりを消さず  
 急変の時をおもひて貼りておく住所大きく電話の横に  
 ひたすらに夜明けを待ちて部屋ぬちを歩きたりせり張り裂け  
 ぬやう

痛むのどに市販の梅がゆ卵がゆ不味くて鍋に米を煮てをり  
 つながりは電話のみにてばい菌の心地してある自宅療養  
 感染の自宅療養十日間解除となりてまづ店へ行く  
 木星にしてはまばたく明き星ああシリウスぞ九月の深夜  
 暑き日のはげしき疲れ後遺症かと思ひのよぎる感染の後は  
 感染後味覚案じて亜鉛のむ嗅覚はよし木犀にほふ

## おしくら饅頭

食卓に花なきけふは買ひきたる野菜を挿せりつるむらさきを  
 雨のなか追ひ払はねど野良のねこ軒より出でて二度ふり返る  
 秋の気配おもはする風そよぐ庭朝刊を取りてしばし佇む  
 壁に貼る吉井勇の祇園のうた白川と知る「冬雷」誌上に  
 こがらしの夕べ早目のひとり鍋はくさい旨き冬に入りゆく  
 勧めたるピアノもいまだ弾かぬらし介護のつづく卒寿の姉は  
 店先にはうじ茶を煎るその香り道にただよふ今もかはらず  
 小春日に膨らむ布団に坐りゐて手など振りたり写真の夫に  
 正月の食品子らに送りきてちよつと奮発ひとりの昼餼  
 「早春賦」ラジオに聴ける春のうたわれも歌へりあすは七草  
 寒き風ふきゆく花壇に直と立つ水仙ならびてみな蕾もつ  
 御社に納むと決めて安堵せり思案のすゑの雛人形たち  
 義足にて空をはばたく幾たびか力の尽きつかのコフノトリ  
 お写真のおかほを知るも知らざるも歌びとを悼む仏壇のまへ  
 暖かき日の差すごぎに土ひろく花を植ゑたき人のひと手間

おおつかてるみ  
 大塚照美 (兵庫県)

叔父のまつ胸にてゆつくりお休みと言へるのみなり棺の叔母に  
 氷雨ふる傘の下での勧誘に負けてしまへり宅配牛乳  
 縫物の前に手の爪きり揃ふこぎれいに生きむなりふり構ひて  
 この年の花見はけふぞごみ置場の上なるさくら朝日に耀ふ  
 春浅き庭の小草の根をおこせばおしくら饅頭の団子蟲たち  
 施設のをば逝きて役目の後見を終ふるこれよりわたしの残生  
 表戸の棧を拭きつつ手のとまる春寒やはらぐきのふより今日  
 歌会のわれを見送る五階より指笛ふききテラスの夫は  
 一つの世も国の争ひさけ難く海が七割とふ世界地図みる  
 刃物のまち三木市より来る研ぎを持つ今も使へる母の裁ち鋏  
 お見舞とふ十歳の姪のさくらの絵春には亡夫の写真のそばに  
 教科書に学びし教育勅語なり義父の遺しし桐箱の軸  
 嫁よりのカーネーションを食卓にけさは珈琲二杯のみたり  
 夏祭の神輿を担ぐと京へ行く子は鯉口とふ衣装たづさへ  
 帰り際かたみにタッチのみにして息子を送る尾灯まがる迄



早や夏のシャツなる娘かべに掛くる亡夫のパナマ帽被りて出でつ  
掘り返す土より出づるおほき蚯蚓まうし訳なし日向にさらして  
嫁の里のハウスのトマトこれぞトマト戦後はたけに椀ぎし味なる  
丸めたるアルミホイルにてお手玉す瞬発力と指の訓練  
網膜の手術のわれに付き添へる娘はやがて膝に金属を入れる  
きびきびとごみを積み込む若きらに頭下ぐれば満面の笑み  
俎板も軽きがよしと買ひ替へて支度にかかるゴーヤの佃煮  
高齢者の誤嚥を避けるそのこつを食道うしなふ子に教はりぬ  
賞味期限近きリユックの鮭ごはん食べる食べない昨日もけふも  
処暑すぎて盆の名残りの鬼灯を食卓におくガラスの酒杯に  
ノルウェイの湖と森みせたと言ひし夫の十三年忌  
ごみ置場のそばに散らばる落葉など手にて集むる人に頭さぐ  
夜行便のあかりが高度をましてゆく果てなき闇にひかる木星  
家いへの伝ふる料理あまたありお向かひが下さる彼岸のおほぎ  
白黒の映像こそその臨場感にはじまる「柘榴坂の仇討」

十月の暑さに戸惑ふ日にちにもはや散り敷くさくらのみもぢ  
小春日待つさざんくわに先がけて蕾ながらに匂ふ金木屋  
やや欠けて見ゆるこよひの月あかりに秋の名残の蟲の声する  
耐へ難き荷は課さずとふ神様の御社に頭さぐ散策の道  
気がつけば暮れゆく庭の時雨にてつかのま濡らすつはの黄群を  
わが墓所の隣があきとなる売値永代供養と管理の費用  
昼夜なく眠りあるらし施設のをば一瞥のみの面会十五分  
久びさに会ふ長男の躰形に叱責四分激励六分  
勤め人なりし夫の公私なるかきもの手紙の整理かんがふ  
朝より二度も食パン焦がすなどこの迂闊さは何のはじまり  
「冬雷」の表紙の絵なる柿のいろ年の始めのはなやかさなり  
愛子さま成人の儀は正装にてそのお姿のいともかくはし  
クリスマスグッズを壁に飾り終へこの年も待つ教会のイヴ  
年末の広場のピアノどなたでもと弾き手を誘ふわが住む駅も  
打水の凍れるあしたポストまで無沙汰ばかりの寒中見舞  
大寒に入りたる夜の中ぞらにあたりをほらふおほき満月  
駅いでて夜の冷気に息みだる迎への車ならぶ道のへ  
指導員の勧めくれたるスキップを試してみたり小路に入りて  
ポストより取り出す梅の絵の葉書もいぢど行ききたし借楽園に  
薬汁を作るに欲しと人の庭みあぐ二月の若きビワの葉  
シャツを揺すりてやまぬ春の風のぞけばさきさきらぎの雪  
湿疹もきれいに消えて眠るなり死相にあらぬ叔母御の最期  
久びさの小田巻蒸しも食べきれず食の減りゆく好物さへも  
苛立ちも自ら押ふる外はなしラジオに安らぐヴィオラの音色  
役に立つ思ひなけれどユニセフに少し募金すああウクライナ

朝霧かもやかと枕に聞きてをり海峡をゆく船の警笛  
濠の水にはかに動きて大き鯉近づきて来つこちら見据ゑて  
美作の藤の園なる棚のした房の長きをよけつくぐりつ  
われも着しセーラー服にていち礼せり入学式なる隣家の少女  
人の詠みし「ウクライナの月」思ひ出づかかる惨禍の豫想な  
かりき

草ひきて月の出を待つ庭のうへ兵器供与まつ戦の国は  
領海と領土を争ふ小き星もはや失ふ大義名分

窓に見る隣のくすのき日の照りて緑かがやく五月の息吹  
ブルーベリーのジャムに汚せる前掛のはや乾きゆく朝の薫風  
巢のひなをまもるや下枝の鴉たち威嚇しないで通るだけです  
男性の弾く駅ピアノに佇めり素通りできぬ「ラ・カンパネラ」  
「読み返してもらへる手紙を書け」とふを反芻すなり歌も然りと  
庭先に盛りむかふる額あぢさる濡らしてやうやく梅雨のあめ  
降る

易やすとマスク外さぬ律儀さも規律ゆるめば道に捨てらる  
見付けたる店の棚にある鷹のつめ栽培農家のこだはりを買ふ  
新しきらくらくホン持ち遠回り歩数計の文字「五千歩ヤッタネ」  
目を凝らせば確かに見ゆる夜の空限りなき星は砂金のごとく  
鯛焼に並ぶ幼のチョコクリームたひやきの歌知らざる世代  
炎天下の汗にて入る百貨店マネキン人形は秋のコート着つ  
秋半ば木枯らしのごと硝子戸に吹きつけるかぜ野分といふらむ  
「冬雷」のわが歌よみて呉れたりし歌びとの友の急逝を知る  
近隣に缺の音の絶え間なくそれぞれの庭秋を迎ふる

## 日々思ふ

先人の漢訳努力忘れ去りカタカナ英語の氾濫する世  
 雨の日に三年振りの障子貼る明かり灯せば白の際立つ  
 幾種もの林檎の並ぶデパートに迷ふも樂し今日は「ふじ」買ふ  
 大会は誌上となりぬコロナ禍に選歌をしつつ知る人の顔  
 二度咲きの金木犀の香に魅かれ木の下に来て鼻呼吸する  
 月もなき寒夜の庭に石路の仄かに浮かぶ黄の暖かさ  
 水仙の伸び始めた芽は天を向く寒風のなか刃にも似て  
 大学の森にさへづる鳥の声木々を渡りて遠く近くに  
 秋晴れの朝の光に顔向けて体内時計を合はせると妻  
 コロナ禍は免疫力こそ頼りなり筋力きたへ大波に備ふ  
 喉かわき二年振りなる喫茶店ソファ―に眼を閉ぢレモンスカッシュ  
 テレビに視る阿蘇の噴火の猛々し人住む大地の真下は灼熱  
 三年目の秋迎へたるニシキギは夕陽を吸ひてくれなる深し  
 風に舞ひ家裏に落ち芽を出してひと角の枝を張りたる南天  
 冬富士の白を遮る丹沢の黒き山並みなみへ続く

おおの  
**大野**  
 あかね  
**茜** (神奈川県)

マンションの解体されし跡地には若草の萌え小鳥ついで  
 中学の休みの時間の喧騒はコロナどこ吹く若さ澆刺  
 薄ねずの色の空より細雪音なく庭に初雪となる  
 フリージアの球根掘りて食となす鼠の生きる力を知りぬ  
 たわわなる千両の赤消え失せて掛けたる網の隙間に小鳥  
 妻が里の正月の餅食べながらあと何年か義姉弱りたる  
 古いけど日当たりだけが宝だと父母住みし家に冬越す  
 午前二時スマホの告げる警報は遙かなトンガの噴火の津波  
 どんど焼き熊野神社の境内の高き炎を見上ぐる人々  
 病院の待合室の窓の外降る雪眺めふうつと一息  
 完工の市民病院は森に建つ病む人なきごと白亜の威容  
 年鑑の完成迄の工程を少しも知らず短歌読みある  
 関口氏の坂の写真を見るたびに昔往き来したる人々重ぬ  
 ひと気なき乗馬クラブの広き馬場ただ一頭が草食み尾を振る  
 山吹の黄の鮮やかな八重二つ風なき庭にゆらりと揺れる

角に待つ集団登校の小学生ランドセル光る一年生も  
 川岸のベンチに坐り昼食のパンを食べつつ地図を広げる  
 木から木へ狭庭を回る揚羽蝶硝子戸越しに眼で追ふ五分  
 百円のゴーヤの苗のつる伸びてネットを伝ひ緑葉溢る  
 ばら鑑賞疲れて休む珈琲店スマホに撮りたる花々を見る  
 夏草の繁る坂道息継ぎて我家をめざす日盛りのなか  
 柏餅四つ求めて帰る道鯉のぼり泳ぐ端午の節句  
 堂々の銀行支店も閉ぢられるデジタル社会に押されるままに  
 アマリリス五つの花卉一斉にひらきて深き真紅艶めく  
 賜りたる糠漬の味に母想ふ糠床こねる両手のあかざれ  
 空を見て干し物取り込む間一髪稲妻光り土砂降りの雨  
 みなとみらい運河を跨ぐロープウェイ空中散歩の親子手を振る  
 燕の巢に雛の大きな口見ゆるピーピーと親待つ三羽  
 夏の朝の靄かかりたる庭が好き草に露あり花色さやか  
 窓に寄り我を見送る母の眼の寂しさ知りつつ去りし若き日

年などは忘れ好みのままに生く「老いる意味」とふ本読み頷く  
 町会の敬老祝ふ菓子配り残る一つを我も貰へり  
 洗面所の歯ブラシ置場を工夫せり覗き見る妻良いと一言  
 密避けてエレベーターに乗らぬ日々階段に慣れ登りも楽に  
 仏壇の供花に四季を感じてうた創る人知れば床しき  
 僅かなる怒り引き摺り道を行く鴉の鳴き声今日はのどかに  
 生け垣にからまる蔓を除かんとその根探せど茂みに深く  
 刺をさけ柚子の実二つかぐはしき香りの満ちて眼を閉ぢる  
 石路の花に蜜吸ふ黄色の蝶はねを重ねてじつと動かず  
 免許証の返納話題に上れどもサポカー続々高まる安全  
 コロナ禍に人混まぬうち買物と開店前に早くも十人  
 窓少し開けて授業する中学校学ぶ生徒ら背筋伸ばして  
 丸々と実る甘夏その枝は撓りたるまま風にゆらゆら  
 三年目に一つ実りたるレモンの樹冬への備へ根元に蒔  
 送りたる机にちよこんと座りみて学ぶ写メール小学一年  
 地植ゑして半年経ちたる紫陽花の若葉の奥に小さき花芽  
 焼け落ちて骨組み露はな火事現場十日過ぎてても鼻つく匂ひ  
 初蝶が柚子の葉群を飛び回る微かな花芽の香りを知るや  
 住宅が迫る小山の竹林の朝採り竹の子並びて求む  
 評判のクッキー売場はいつも列長きに諦め横眼で過ぎぬ  
 中学の新人生らし駆けて来る遅刻か校門閉ぢられてをり  
 時折の腰の痛みは反り腰にて自ら直せと医師はきつぱり  
 足腰の衰へ防ぐスクワット習ひとなりぬ膝を直角に  
 甘夏の伸びたる枝に幾十の小さな実の見ゆ期待膨らむ  
 甘夏とりんごをリュックに坂登る先行く妻は葉物を持ちて

庭に飛ぶ水色の羽の揚羽蝶前に見たのは中学の頃  
 久し振りのバスの乗車に身構へる座席の人々皆マスク顔  
 黒揚羽大きな羽根をひらひらと去りたる庭にすーつと黄揚羽  
 筋肉の固まる病に足弱り兄は介助の人の手握る  
 震災に備へ貯めたる缶詰の賞味期限の近づき開ける

## はるかなる日よ

週一のコーラス開始急激に忙しくなりぬ脳も体も

「雪国」のとまどうリズム裏拍はいつもそうなり時間を要す  
夫たちの演奏響く会場に娘家族の笑顔もありて

ボーカルの美しき声引き立たせコンガを叩くラテンの響き

コロナ禍に三回のみ音あわせアンコールもあり老いの華やぎ

再度観る「沈まぬ太陽」ロングラン「沈まぬ」という恐ろしさ知る

満州で生まれた吾にあまりにも重く哀しい「大地の子」読む

口にせぬ大人の恋を描きたる「あ・うん」に流るるアダージョ深し

ポストンに学びたる孫の帰国なり三日の隔離水戸のホテルに

三日目の検査結果は陰性と親子の再会ラインに見たり

退職後の生き様綴る会報誌三十五号今日完成す

会報誌編集に関わり十四年わが脳トレもいささか疲る

わが街の文化のひとつ映画会テーマは重く「いのちの停車場」

おわりても席立つ者なく静まりて問われる思いわが停車場は

「梅の香に誘われました」と笑顔にて訪う人のあり三月八日

親たちに捧げる本と書かれたる「アラバマ物語」今日完読す

父親のヒューマニズムの精神に熱さこみあげ文字がぼやける

再び「ひまわり」を観る上映会戦さの悲惨さ今と重なる

ひまわりの下には亡骸重なると繰り返すのかおろかな歴史

一歳のわたしを背負い引き揚げし母の苦勞をしみじみと知る

わが父はシベリア抑留四年間帰りし時にわたしは五歳

わが街の女化おなげの里に語り継ぐ「きつねのおんがえし」麗しく

ひさびさに女化の里訪えば満開の桜みごとな樹形

「ミリアンドマイガール」のミュージカル画像に観たり孫の演技を

遠き日のわが振袖が好みだとほほえみて言う二十歳の孫は

黄色地に花の刺繍のある晴れ着父母と選びしはるかなる日よ

着つけ師の技の見事さレトロさもモダンになりて孫の華やぎ

版画家の手島氏熱く語りたり北の自然は太古の自然と

一本の線に命を吹きこむと版画家の目は鋭く光る

教材の『しまふくろうのみずうみ』は子らの心捉えはなさず(手島圭三郎)

一本のぶどうの木より垂れ下がる房百十三個日毎に育つ  
 名作「子鹿物語」の鑑賞会自然ゆたかなフロリダの島  
 子鹿とのふれあい通し少年は自然と生きる厳しさ学ぶ  
 終盤の父のことばに熱くなる「息子はもはや子鹿ではない」  
 日米のはざまに揺れし生涯とイサムノグチの生い立ちを知る  
 広島の死者を弔うメモリアル考案せしはイサムノグチと  
 九月の手術を控え仮退院なんどものぞく夫の顔色  
 四時間余手術の時をじっと待つ夫似の娘の横顔見つめ  
 若き医師疲れも見せず笑み浮かべ「小嶋さんががんばりました」と  
 天草の重き歴史を知る今宵「新日本風土記」釘づけに見る  
 構成のセンスの良さに魅了され楽しみに待つ「新日本風土記」  
 わが街の「龍音祭」にわが団も参加ときめて活気づきたり  
 歌詞好む「みんなちがってみんないい」金子みすゞの思いを歌う  
 弾みて歌う「武蔵野を歩く歌」によりがえりたり学生時代  
 スタート時難しかった「雪国」の曲のイメージ日毎ふくらむ

晩年のフジコヘミング飄々と「わたしは曲に色をつける」と  
 小三治の「粗忽長屋」今日も聴くたくみな話芸沈黙もまた  
 晩年の小三治淡く語りたり「俺は落語にとりつかれた」と  
 オンライン効果があると教師言う教材分析深くなりぬと  
 旋律の最後に響くカバサの音「幸せはここに」しっとり聞こゆ  
 切れ味の良さが問われるマラカスは「ベサメムーチョ」盛り  
 あげてゆく  
 天ぶらを山盛りあげておもてなし「これぞ手作り」と婿さん  
 の言う  
 コトコトとぶり大根も煮あがりてたつぶり盛りぬ南天も添え  
 大晦日子育て論に花が咲き「モラルは家で」若き等が言う  
 一月は宮本輝の壮大な物語読む「ドナウの旅人」  
 読み終る宮本輝の物語「ここに地終わり海始まる」を  
 ラインあり「餓死せぬように餌頼む」野鳥の会の古き友より  
 庭先の白菜八株芯あらわ冬鳥たちへのプレゼントなり  
 高齢者免許更新済みたれど実技に言われる「癖を直して」  
 二十歳より無事故無違反自負すれど油断大敵「これからです  
 ね」  
 イギリスが発祥の地のカーリング確かに思う頭脳プレーと  
 「掃く」という仕草滑稽にも見えてストーン届き相手を弾く  
 五十本色とりどりのチューリップ華やぐ庭にしはしやすらぐ  
 誘われて「りんごの花見」初参加二町歩畑に千本もある  
 酪農を止めてりんごを生業にしたと語る三十四年を  
 うぐいすの鳴き声響くりんご園南限と聞くわが地のととなり  
 久方ぶりのライブシアター今月はピアノの詩人シヨパンの世界

昨年のコンクールにて二位となる反田恭平大画面に観る  
 ぶどう棚五年目となり生き生きと繁る葉の間に緑の実数多  
 今月のライブシアターフランスの作曲家とぞマスター笑顔で  
 小太鼓は同じリズムを十五分「ボレロ」の響き心地よく聞く  
 今月のライブシアターはモーツァルト繰り返し返すフレーズに癒  
 されてゆく  
 丹念に曲の背景語りたるマスターの弁に理解深まる  
 たつぶりと水をあげよと庭師より教えられたりぶどうに触れて  
 うす緑のぶどうの房は生きている虫喰いのあと葉にはあるが  
 『壇上』と名づけられたる友の句集白き表紙にカトリア淡く  
 「俳句とは対象への挨拶」とありて三百余の句丹念に読む  
 「壇上に十五の春の輝けり」巣立つ子らへの友のまなざし  
 「今夜も宇宙ステーション飛びます」友のラインは夕方届く  
 五分間ゆっくり進み東へと夫と見上げる宇宙ステーション  
 願いこめ心から歌う今年また「ああ許すまじ原爆を…」  
 娘とは息子とはありがたきものパソコンからの情報分析  
 コロナ禍に面会はなし夫からの電話回数多くなりたり

## 鳳仙花

自粛して電車に乗るも稀となり街の賑わい今日また思う  
 人を避け街にも行かぬ寂しさを誰もが耐えたり今年の夏も  
 都会にも減少続く感染者嬉しさ告げたし野に咲く花に  
 小豆色の花咲き終わり種を持つ萩の実ゆらゆら色づきてゆく  
 裸木を見つつ歩めば花二輪うっかり桜のぽっと咲きおり  
 鳳仙花の爆せて飛び出す黒き種次々つまむ膨らんだ実を  
 仰ぎ見れば心晴れゆく青き空なんと不思議な自然の力  
 人気無き野辺の陽だまり黄の蝶の一つひらひら我に寄り来る  
 ひと時を我のめぐりに遊びたる黄蝶去りゆく雲無き空へ  
 夕日追い海岸線を走りいる観光列車「時代の夜明けのものがたり」  
 海に入る直前までの沈黙が解け夕日は土佐湾に落つ  
 暖かき陽射しの庭に風も無し午後の散歩に心の弾む  
 創業から百六十年の文具店閉店セールのに並びぬ  
 路面電車に乗り合わせたる外国人の妻の故郷は我が町と言う  
 通訳の妻に耳寄せ頷いて我に微笑むイギリスの人

かわかみ み ち こ  
 川上美智子☆(高知県)

「にんにくと鰹のタタキ大好き」と日本語すらすら話しくれたり  
 ラジオから二胡の奏でる曲流れ何故か哀しき「北の国から」  
 コロナなど無かった日々を思い出し聴けば侘しい「北の国から」  
 白内障の手術終えたる友の言う「何と鮮やか布団の模様」  
 つづら折りの農道一人帰りつつ今日も唄いぬ「三百六十五歩のマーチ」  
 人気無き農道選び唄いたる吾の歌誰か聞いていたかも  
 音読する新聞記事に極まりて声詰まりたるウクライナの惨事  
 雑木林の幹に吹き出る柔らかき新芽はぐんぐん伸びて葉開く  
 「お変わりはありませんか」友のメールありワクチン接種の夜に  
 二人して訪れし友想いつつ今日は一人の牧野植物園  
 乙女等は「この子かわいい」とチューリップの花の一つにスマホを向ける  
 そよ風にはらはら零れ葉を落とし竹の秋来る芽吹き春に  
 巣箱置き蜜蜂世話する老い人は蜂の可愛さばかりを語る  
 蜜蜂も懐いてくれると言う老いの情の籠れる言葉が沁みる  
 連休は読書と決めて歌集を探すが家に近き町立図書館分室に

山の端を谷より霧の立ち昇り竹やぶの奥処に不如歸啼く  
 お日様を味方につけて楽しんで堤に数多サフランモドキ咲く  
 駅へ行く我を追い越しそくさとビジネススーツの若き女性行く  
 遠ざかるビジネススーツの若き背に遠き日の我浮かんで消ゆる  
 草刈り機のエンジン音が響く土手男三人皆若からず  
 いましがた刈り取られたる夏草の匂い新しふかぶかと吸う  
 草刈りを終えたる土手のすがすがし作業の人等思いつつ歩む  
 背後からついと現るるオニヤンマ散歩の我を追い越してゆく  
 吾の肩を指し来たるかあぶら蟬話したき事あるかのように  
 肩掴み見上げるような蟬の目に吾の顔如何に映りているや  
 午前六時窓開け放ち筋トレの二十四式太極拳から始まる一日  
 稲刈りは厳しい残暑の早場米友からの新米心して食む  
 貰いたる新米隣へ裾分けす「まあまあこれは」とこぼるる笑顔  
 草出でてバッタが跳ねる土手道に連なり咲ける赤き彼岸花  
 夕闇の風に乗る来る虫の音にテレビを消して暫し聞き入る

冬日和歩く坂道に息を継ぐタオルで拭う汗ばむ額  
 落ち葉踏み歩める先に近づける山の頂上程良く高し  
 品揃え「無い文具は無い」と言われたる老舗文具店の閉店決  
 まる  
 文具店の閉店惜しむ歌の有り高知新聞文芸欄に  
 「またお会い出来るといいね」降りぎわの夫妻の言葉心にお  
 こる  
 籠り居てパソコンに向かえば聞こえる道行く人の声の端々  
 地球から戦争の言葉無くなれと平和唱訴える小学五年生  
 ざっくりと山肌崩れたる中程に野すみれ一株むらさきの花  
 川土手の左右より迫る傾りにて萌え出づる草の色の優しき  
 花びらに煌めく雫連なりて紫あやめに残る雨粒  
 図書館は役場の支所の片隅の回る書棚にて歌集は二冊  
 届きたる観光パンフを眺めつつ諦めきれず溜息幾度  
 川土手の草刈の傍に集い来て雀ムクドリ何か啄む  
 「長江の流れのようにゆつたりと」師の声浮かべ太極拳せり  
 草叢に足踏み込めば驚きてバッタ次々飛び出してくる

かわまた みちこ  
川俣美治子 ☆ (栃木県)

## 生きてるからこそ

床の中眠れぬ夜に虫の音も聞こえず今は時計の音だけ  
 テーブルにみかん入れたる籠置けどなかなか減らぬ二人の生活  
 シヤカシヤカと音が重なり心地良いリズム感じる落葉道続く  
 二年ぶりこたつで並び寄りかかる孫の重さとぬくもり感じて  
 おめでとうメールが届く誕生日めでたくもなしそれでも嬉し  
 松過ぎて日が少しだけ延びたよう柚子茶を飲み夕暮れ眺む  
 曖昧なこどもの頃の思い出を確かめたくも父母すでに亡く  
 陽を受けて茶を飲む十時穏やかに時が流れる外は冬晴れ  
 今日もまた歩けることの楽しさに冬木立見上げ深呼吸する  
 風の音流れる雲と揺れる木々窓から眺むる景色は寒寒  
 起きぬけの床の冷たさ足裏に身震いひとつ寒さ増しゆく  
 春めいた陽を浴び振り向き夫曰く春がキラキラ見えるようだ  
 と見上げれば黄が少し褪せ見頃過ぎそれでも蠟梅夕日に凜と  
 信号待つ学生たちの胸にさくら笑顔で語らう卒業生か  
 山頂より遙か彼方に我が家を見つけ眺むる風心地よく

冬物のセーター洗い干す今日は空も緑も空気さえ初夏  
 感嘆の声が思わず出る桜見上げる先はうすももと青  
 満開の大きな桜に風吹きてふわりひとひら着地まで見る  
 まだ緑揺れてる麦の穂絶え間なくザワザワゆらゆら風に合わせて  
 こたつにてもりそば食べている暑さ季節が混じる一日の中で  
 飛行機雲を指差す孫と空を見る白線伸びて眩しきは夏  
 雨の中黄のあでやかにしつとりとひとつ開花すジャーマンアイリス  
 夏のような強い日差しを仰ぎ見る梅雨入り間近の洗濯日和  
 雨あがり田植え終えたる水の面雲と青空映し輝く  
 チクチクと羊毛フェルトに針を刺す雑念消えてただひたすらに  
 梅雨が明けアクアマリンの涼しげなピアスに替えて七月になる  
 首にタオル帽子をかぶり散歩に行くような姿で濯ぎ物干す  
 朝起きて夜寝るまでに暑い暑いと誰に言うでもなく口にする  
 真夏日の暑い暑い毎日とうんざりするも生きてるからこそ  
 亡き母の嫁入り道具の桐箆筒中身は母の在りし日のまま



ハアハアと辛さするどいカレー食べ吹き出る汗にストレスも飛ぶ  
夕暮れに庭に水撒く西空は橙から赤明日も晴天

山道に姿の見えぬ蟬の声ミンミンジージー聞き分け楽し

槐の木にぬけがら残し蟬たちはどこへ飛び去りこの夏を鳴く

今日も又危険な暑さに気の滅入る冷えた西瓜を大きめに切る

日光の社寺を巡りてゆつくりと身体の中から浄化されゆく

いにしえの暗き山道歩き行く思いはるか巨木を見上ぐ

夕食後片づけ終り茶を飲めば窓から半月ふんわり見える

芝刈りを終えた夫が庭に立つ満足そうにうなづきながら

窓からの風に揺れいる風鈴は季節違えたような音する

栗ご飯食べべいる夕餉に賑やかな虫の音聞こえ秋が重なる

何日も降り続く雨寒々と庭に注ぎて冬へと向かう

昨日は扇風機仕舞い夏終わる今日は暖房入れて冬来る

十三夜月は隠れて見えねどもだんごを食し夜空を眺む

十月の晴れた日の午後飲む紅茶は澄んだ空気に合うダーズリン

植えたてのビオラの紫日に映える晩秋の庭でコーヒーひと口

いつもより早く夕餉の支度するおでんの具材ことこ煮込みて

眺めては今は着ることもない服をまた捨てられずまい込み

たり

昨夜からの冷たい雨は山茶花の紅を散らして降り続きおり

赤白黄庭のビオラは賑やかで紫一株孫のリクエスト

昨夜から雨と寒さが続く朝こたつから出られず体丸くなる

夕方の急に温度の下がる頃西空の赤鮮やかさ増す

日だまりで陽射し背に受け本開く太陽に合わせ移動しながら

師走になり朝の寒さに身震いす吐く息はまだ白くならねど

マスクつけ手袋帽子スニーカー散歩に向かう暮れの晴れた日

山道で飛ばされそうな帽子押さえ友と語らう今年の抱負

仏壇に供えし干し柿下げいたたく幼き頃を思い起こす味

庭隅の寒さの中の黄一輪クワカス咲く春が間近と

孫と我同じ背丈でピースする満面の笑みの写真が届く

携帯を手に持ち待つは受験結果吉報願う孫の合格

晴れた空風吹く外を眺むれば花粉か黄砂か空灰色に

花届く今日は夫の誕生日満面の笑みの写真こともたちへ

この時期はコロナのマスクそのうえに花粉のメガネかけて鏡

見る

暖かな日に誘われて蜂二匹ビオラの花から花へと移る  
寒さに耐え蓄大きく膨らんで桃の色濃く開花も間近  
孫二人小中入学晴れやかな笑顔の親子写真に並ぶ  
酢味噌和えウドの苦みと香り良ししみみ春を味わう夕餉  
たけのこの歯ごたえシャキシャキ香りして静かに味わう旬の

ごちそう  
涼しげなグラスに庭のミント挿しそこだけしゃれたカフェの  
雰囲気  
いただいた最中をひとつお茶うけに甘さほっこり心ほぐれる  
小雨降る山の頂にとんび舞う大きくくるり一回りして  
赤桃黄明るい色の服着たいと思えど買うは黒白灰色  
中国語習い始めて楽しくてやる気はあれどなかなか進まず  
九時前の気温はすでに真夏日になりて記憶にないこの暑さ  
軽やかに涼やかに氷の音たてて素麺すすりホッと一息  
隣から賑やかな声笑い声庭にてプールああ夏休み  
音だけが遠くで聞こえる雷に耳を澄ませど雨音はなし  
滝を背に思いつきりの笑顔作り背筋を伸ばすカメラ目線で  
公園のみみじの葉先うつつすと赤く染まりて秋の気配す  
朝からの霧雨続きすずしくて季節の移ろい感じる九月  
窓そとに金木犀の香りして黄の花見つ目にも楽しむ  
雨上がり雲間にのぞく太陽の暑さ少く空気が変わる

こうづ さちこ  
神津早智子 (千葉県)

### ひとり居の日々(三)

北海道に今夏採れたる唐黍のポターージュ届く濃くて旨しも  
腰の手術以来かけざる大字仮名通ひ来る吾子に教ふこの頃  
衆議院の選挙速報長々し切り替へて見るヨーロッパの城  
問ひ来たる息子に予定を返信す明日は木曜日鍼師の来る日  
雨の日は避け予約とる美容院帰途は歩行器に買ひ物をして  
NHKの仮名教室に通ふ子が週末に来る宿題もちて  
眠り来ぬ日々続きつつこの夜の映像だけの海外旅行  
欠礼の多きこの年遠く住むいとこ賢ちやんの訃報届きぬ  
魚の目はこんなに痛きものなのか八十半ばを過ぎて知りたり  
息子さんひとりとなれる向かひ家の二階の明かり点らぬこの頃  
通販の草刈る道具使ふ子の帽子のうごく窓暗くなる  
祭日も休まぬ鍼師に変更を頼む息子と娘の来る日  
コロナ禍にふゆるマスクの中のしみ吾だけでなし今朝の新聞  
向かひ家の解体工事の業者らしインターホンの挨拶の声  
何でもなきことが億劫になりてゆき今年も頼む正月の仕度

洗面所をあたたため遅き湯に浸り泊まる娘とすごす年の瀬  
賑やかに元旦忽ち過ぎてゆき残るすき焼きに火を入れて食ふ  
欠礼状ふえて賀状の減りにつつ格別の冷えに寝具重ぬる  
四年ぶりの雪の翌日通院のタクシーの予約に難儀してをり  
極寒の新年早々の通院に雪道を来てくるとふ子は  
来てくる娘を待ちて出かけゆく四年ぶりとふ雪つむあした  
音たてて頭皮ふきぬくる風いたし立春寒波つづくいつまで  
変異株の濃厚接触の疑ひに娘来られぬさびしき週末  
越しゆけば二軒三軒建ちてゆき顔も名前も知らぬ人ふゆ  
魚の目の痛み耐へつつ詠草を投函したる老の充足  
自らの添削に歌作する吾をよろこびをらむか泉下の父は  
向かひ家の解躰工事終はりたり更地にとどく灯火わびしむ  
天候の週間豫報に選り決めむ歩行器に行くカットの豫約  
独り居の日々に娘のくれにける「声に出して読みたい日本語」  
七日ごと処方薬を分別す長く夫の使ひしケースに

昼食を共にと息子が来るといふリクエストなく困りぬ吾は  
 去年より冷ゆるこの年一人なる今夜の入浴ためらひて寝る  
 知る人ぞ知るハンバーガー上等の値に納得をするも食み難し  
 来む日のため馴染みの鍼師に託したり東京の子らの携帯番号  
 寒風の過ぎて翌日よぐひの春一番ちさき花びらはしる道ゆく  
 コロナ禍の訪問鍼師の生活を支へむか週二度の施療は  
 春墓参ことしは息子が言ひて来つ約束出来ぬ吾の躰調  
 いち早く火事を知らせたる犬二匹表彰されつ昨日のニュース  
 この日また臥して見てゐる大相撲観客の傘に知るけふの雨  
 春の墓参はじめて子らに頼みたり故なき胸の痛みに臥して  
 東北の大地震のあとの節電を終日言へり雪をきく日に  
 万葉の植物の会に入りぬし母のおもかげ今やなき庭

## 出会うよろこび

こ だまたか こ  
 児玉孝子 ☆ (愛知県)

猛暑日のひかり遮り緑の窓全うしたるゴーヤカーテン下ろす  
 畑に出で久し振りなる草取りに体の軽く動くは嬉し  
 久々に電動自転車に乗りたれば只管前むきハンドル握る  
 祥月のお勤めせんと仏具類磨きしておれば子の手伝い呉る  
 さつま芋菊芋ヤーコン掘り出すを兄弟揃い手伝い呉れたり  
 小春日に二匹揃いてヌートリア人を恐れず草を食みおり  
 玉葱を百本植える間の時雨家に急げば大き虹立つ  
 豌豆に支柱を立ててネット張る寒さに耐えよと話しかけつつ  
 「そばの会」男グループの仕立てるを女人揃いて頂く師走  
 夫植えしレモンの木高く実の数多分ける仲間の増ゆるは嬉し  
 大歳の年越しそばを頂くは女孫二人で作りくれたり  
 着飾りたる女孫とスマホに成人の日ひかりを仰ぎ恙無き長寿  
 最後なる二人の孫の成人式祝うを告げて亡夫に香焚く  
 手術して五キロ減りたる体重の増えるこの頃計るを楽しむ  
 己が身を起こすは自分よ寒中に気合をかけて掃除機握る

音立てて春一番の吹き抜ける鎮守の杜は騒めき立てり  
 約束なくこの日この場所この時間久しぶりなる友と出会いぬ  
 四十年余三十坪の畑づくり為しきたれども憂うこの頃  
 年寄るも動ける事の幸せと三日続けて畑仕事なす  
 啼く声の急に鋭く屋根の上愛の季節か黒き鳥群る  
 夕方を予約の医者に急きたれば自転車転倒し停まる瞬間  
 何事もなく過しきて遇う災難左足疼き夜を眠れず  
 畑隅を黄に染め並ぶラッパ水仙墓処に香れと数多持ちゆく  
 嫁ぎ来て九人家族の揃う卓独りの厨に遠き日思う  
 命日に庭の花持ち来たる墓所もやもやを語り墓石を拭く  
 菓子の名は「東京ばな奈見いつけたっ」女孫のみやげ抹茶に味わう  
 同じ靴長く履きおれば母の日にスポーツシューズ娘の呉れたり  
 こんろに掛け忘れたる薬缶の火に知人は留守に家焼き尽くす  
 玉葱を収穫せねばと焦る日の雨降る兆しに嫁手伝い呉る  
 花苗の五種を選びて模様替え夏を迎える私の花壇

作物に呼ばれて出向くこの畑九十二の夏無事に越えたり  
 夏野菜揃いて育つに声かけて天地の恵みを収穫したり  
 わが畑に半夏生咲くを待つという人に出会いぬ夏至の夕暮れ  
 咲き続くアナベルの花降る雨に枝のたわみて重さに耐える  
 母の日に息子の呉れたるサーキュレーター優しき風に夕餉の食卓  
 馴染みたるすし屋の急に閉店し半月過ぎて主人身罷る  
 真夜中の大雨に目ざめ雷鳴の独りの閨に轟きわたる  
 入社して二年の女孫熊本に急な転勤知る七日前  
 出発の日夫の仏前に手を合わす孫の姿をそっと見守る  
 日本人形あるかの電話に迂闊な吾息子に伝えて罨と知りたり  
 夫逝きて独りの暮し常となる遺影に御休み告げて安眠  
 取れ立ての無花果持ちちて友の来る奇遇なり吾が生日のひる  
 台風の雨降る中を敬老の日孫と娘の訪ねくれたり  
 菜園の守りは吾と言い聞かせ雨後に草取り大根の種まく  
 歌をよみ心静まる時すごす日暮れに漸くまとまる一首

ノーベル賞に輝く真鍋氏榮しくて仕方なかったと温顔に語る夕食の用意をするに見つたり元氣な守宮びたりと這いくる休みたる「元氣アップ」に出でたれば仲間において活力戻るスーパーに払う硬貨にすべる指ルーベに見れば指紋のあらず二刀流大谷選手の MVP 賞野球に興味なくも湧き立つ声を出す機会少なき吾なれば報恩講の経を習いぬ柿の実の熟さず落ちて地に残る帯にからから病葉積る今までに無き寒波とう一夜明け庭に初雪朝日に照らさるるコロナ禍に集えぬ親族ひさびさに寅年迎え細やかに祝ぐ駅降りて寒風に押され田舎道タクシー頼まず吾が家に向かう咽頭の診察受けるに看護師の「あーんをして」と真顔で言いぬチューリップ卓に飾れば今朝開く鮮やかな紅独りを和ます寒あやめ開きて寒き空の下閑かに花の庭に増しくる作戦を練りて勝ち進むカーリング平昌に「そだね」と懐かしき声

転倒よりひと月を過ぎ恐恐とペダルを踏みて医院に向かう四月十日気温の上がり二十八度庭にひらひら花木水咲く犬連れて気さくに挨拶くれる兎に出会ってほのぼの畑の帰り雨降るの予報に早朝夏野菜植える準備と急ぎ出掛けるモロヘイヤトマトセロリに茄子胡瓜実るを信じ息子と植える雨降れば草取り楽に為すとして早朝に出づる三時間ほどスマホを使いこなさぬ吾に子は安価に済むという機種に替えたり

結婚して三十年になる息子夫婦の旅に氣持を渡す男性に襟足きれいと褒めらるる彼は油絵かくが趣味なり百日紅陽射しをうけてあわあわと咲きそむる花の明るく揺らぐ夏野菜の収穫に来たる畑には太き胡瓜の根元に横たう早朝の涼しさに草取りおれば蝉鳴きはじむ午前六時に長男が生活センターに伝えくれ素早く動き救われたり百日草の暑さにめげず鮮やかに咲くは嬉しく日毎に供うワクチンも四回目です高齢者受付に並び何もなく済む昨日までの猛暑の去りて二十七度自転車に乗り係りつけ医に玉三郎の御園座にくるといふ此の機会逃すなと孫にチケット頼む落ちていたと知人より受くる郵便物インフルエンザ予防接種券

こばやしといこ  
小林貞子 (山形県)

## 新生児室

刈り残る稲穂はひかり宿らせて暮るる山田の隅に明るし  
各戸より村人足は一人づつ山裾めぐる水路の草薙ぎ  
籍抜かず町に移りて数年は人足代を金で納めし  
名は高尾もろてに余る重き房ひとつぶ食めば甘さ極まる  
玉庭の奥地を占むる山ひとつ行く手に聳ゆ丸丸として  
吠ゆるがに冬風狂ふ浜行けば棘あらあらと浜茄子の這ふ  
北空に朝日連峰はろばると真白に見えし今杉の伸ぶ  
初雪のさらりと清く積もりみて心弾みの朝の目映き  
柔らかき冬日に白の美しく正月迎への障子張り終ふ  
霽降る出で湯の宿にこもごものコロナの二年を友と語りぬ  
転ばず舞ひ終はれよと何の子へも祈るテレビのフィギュアスケート  
焼き胡桃パンときれいに二つ割り力仕事を夫熟しをり  
殻の屑入れまいと目を凝らしつつ胡桃を白き大鉢に剥く  
青空を束の間見せて雪しまく北風小僧の激しき斑気  
突然の訃報を受けて急ぎし日節分寒波の渋滞の列

歳神の棚の左右に松を結び新たな御札張りて調ふ  
 年祝神酒のお下がり杯に受け帰省かなはぬ子らに乾杯  
 居間に置くサンセベリアの葉の揺れて家飛ばすがの風の勢ひ  
 鮮らかな花のカタログ目に強く赤き花野の夢は夜すがら  
 てんてんと小き足跡雪のなか餌を探すらむ鼬一匹  
 塵収集所の戸の金網を食ひ破る胴細長き鼬の執心  
 母子らが戦火の地より身一つに国境超ゆとテレビは報ず  
 斯く迄の非道を神は許すのか砲撃跡の新生児室  
 鎌の月赤みがかりて沈み行く彼の地は瓦礫の下に幼ら  
 柔らかに丸く重たきもの抱へ春野を歩く夢なまり色  
 北窓を開ければ弥生の供花のゆり白光りかな花の貫緑  
 飯豊嶺の雪解け水はあさみどり白川湖上に柳直ぐ立つ  
 黄緑に萌ゆる柳の水没林湖上へ映る影さざれなみ  
 手作りの小きあづまや松林叔父亡き今も風渡るらん  
 暮れ泥む縹の空の柔らかし遠き戦火の空よ鎮まれ

濃き赤の花多過ぎて雪椿軍靴は命を踏み躪り行く  
 ひとむらの白詰草に四つ葉殖ゆ胸に小さき楽しみひとつ  
 秋植ゑの白き鱗茎アリウムの蕾は臯月の風にさ揺らぐ  
 登り来てどんでん平ゆり園はいま花盛り大気芳し  
 アリウムの荅は擬宝珠の形して青白き珠うてなに包む  
 梅雨明けて黒き細葉の蛇の鬚にむらさき淡く小花穂をなす  
 編み終へてまた始めむか花結び布の内張り姉に褒められ  
 減塩の梅干作りの塩加減ぎりぎり少なの成否の境  
 梅干の日とあり七月三十日梅と紫蘇干す晴天続き  
 ベランダの梅干の香に偲ばるる梅並べるし母の指先  
 暑き日は香り爽やか梅ジュース琥珀の色をととの産  
 雨止めば早もかなかな片泣きて檜の幹より気配を立たす  
 予定より三日遅れて大根の種を蒔きたり雨頼みして  
 彼岸入り待ち兼ねて掘る薩摩芋長く太りて紅鮮らけし  
 楽しみて育てたる木通影も無し籠を背負ひて猿来たるらし

軽のトラック買ひ換へグラントゴルフ行く付合ひ多き八十二歳  
 葡萄の実熊の横取り今年無く心円かと友は言ひたり  
 前山の紅葉の錦照り映えて惜しや今日吹く風の烈しき  
 夕暮れの薄野原の根の影に目を逸らしつつ風の音に怖づ  
 歌詠むは心療内科的治癒と友は言ひ切るその連れ合ひに  
 町なかの柿を食ひ荒らしたると言ふ熊の話をこの秋聞かず  
 胚芽米の餅を切り分け手作りのおせち料理と共に送りぬ  
 季節風コロナ旋風飛び交ひて人々には「スマホ」の電波  
 目の前の道を車を消し隠す真つ白闇の吹雪恐ろし  
 こころみに左の耳の側に振る水琴鈴の余韻の細き  
 屋根なだれ三角形の山なしてペランダの縁に並びたり  
 断層を逸れて地震の稀な町風は県下の三指に入りぬ  
 湯船より湯の蕩蕩と溢れをり錆びて回らぬ身の内の螺子  
 新刊の本を電話で申込み期待と不安の七日目の朝  
 雪道を腿高く上げ肘を振りたまの散歩に負荷を掛けをり  
 夜中まで夫はテレビを見てをりぬ「ロコ・ソラーレ」のファ  
 ンなるらし  
 皮のまま八等分に酢を加へキャセロールにて林檎焼き上ぐ  
 目覚むれば嵐の夜半の窓明し雲飛ばされて照る雪月夜  
 塵出しの日を守らぬが一人ゐて夜に置き行く様の素早し  
 切れ端の枝を壺にて咲かせたし力を込むる剪定鋏  
 親を子を戦火に投げて嘯きぬ欲得尽くの正義の行方  
 「次回もね」医師は予約の日を示す三か月後の梅雨の頃比  
 朝夕に松の小道を巡りては庭造りせし叔父身罷りぬ  
 寝ねかてに夜を過ごせば暁の窓被ふがの梨の白花

花椿さうびの重ね忍ばせて大人しやかな薄き桃色  
 九野本の苗屋に甘藷の苗求む葉と葉の混みてひげ根の長し  
 紅はるか紅あづまの苗植ゑ終へて夜来の慈雨に実りを思ふ  
 九野本の苗屋の店舗賑はひて取れ立て胡瓜のコンテナの山  
 花付きの胡瓜は安く計り売り瑞瑞しきを並び得たり  
 猪独活は山の傾りへ蔓延りて白き小花を平らに広ぐ  
 アリウムの心許無き花の茎杭から杭へ紐を張りやる  
 ソーラーパネル薙ぎ倒されて道路沿ひ業者は雪の重み量れず  
 散居集落青田の風の渡り行くソーラーパネルの骨組無残  
 紫のアリウム・ギガンテウム花好きの友持ち行きぬ香り無き花  
 こくりゆうらんと呼ぶ人ありて竜の鬚小粒の花と碧の実を愛づ  
 豊後梅実を太らせて枝に重く薄らと黄みを帯び始め来ぬ  
 今年梅大実多しピンボンの球ほどありて樹勢を憂ふ  
 梅の実の青きを割りてぎゅつと詰め砂糖も入れる此は梅ジュース  
 九十四歳大往生と褒めやらむ夏の終りに義姉旅立ちぬ  
 納棺を終へて顔付き柔らかし硬き芯持つ義姉でありたり  
 葬式の白百合たわわ手に重し移り香著き喪服を洗ふ  
 新婚の貧しき臥所晒されき悪しき仕来り残るを知らず  
 招かれて筆筒の中を見たのよと他人が告げし速き秋の日  
 口惜しさを胸に畳みて年古れど底ひのをどみ時にし乱る  
 白菜のポットの双葉間引きせりピンセットにて未だ二本立ち  
 望月に心澄みたる翌朝はトイレのタイル目地まで磨く  
 ホース引き久にトイレの丸洗ひ和洋二室を乾拭き仕上げ  
 未だ早いと夫の宣ふ薩摩芋マルチの中を探りてみたり  
 若者が播種機に乗りて撒く蕎麦を雀群れ来てチュンと啄む

さいか  
 齋鹿ミヤコ (神奈川県)

いきなりの富士

庭の菊たけ低くして拡がれる白と薄紅ことしの色に  
 水やりも肥料も要らぬ庭の菊ことし黄の菊仲間となりつ  
 わが庭の背高泡立草の花やさしく黄となるえだを増やして  
 野の花は野にありてこそと思へども背高泡立草を植ゑたり  
 確りとハグしたること思ふ朝あ夢のなか相手はどなた  
 歩道橋いそぎてをれば透明の空に浮かべる真つ白の富士  
 この寒さどこへも行きたくなき寒さ何処へも行かず雪の降り積む  
 パンジーの姿を隠す今朝の雪ふるれば雪の音無く崩る  
 一晚を雪に埋まるパンジーの昼には変はらぬ姿を見せつ  
 いきなりの白妙の富士ハンドルの向かう正面しかと立ちをり  
 海に沿ふ道を走れば富士のやま裾まで白き気迫を持てり  
 ハンドルを握るこの手にシャッターを切りたし富士の今の姿を  
 横浜の港にゴンドラ行き交へる動画を見れば乗りに行きたし  
 浴槽に沈みて居れば揺れ来たりこ度は隣の悲鳴の無くて  
 揺れ終はる時を待ちをり湯の中にかからだをじつと鎮ませてみて

この度も湯舟の中に揺れきたり前回よりも強くてながく  
揺れ去りて喉もと過ぎてゆくごとくいつものやうに服を着てをり  
封筒に入りてきたり瓔珞筒アナスの葉のひとつ折れつつ  
瓔珞筒アナスの葉の折れに添え木をあてれど回復ならず  
柿の花つくづくみれば花びらは外に向かひてカールしてをり  
バター色の柿の花びら四枚の蒂に包まれみな下を向く  
ハンドルを右にきりたるその先に空より低く虹よこたはる  
時のきて蓋を開ければ納豆のほひ確かに納豆にほふ  
蓋をして二十四時間四十二度設定すれば納豆となる  
ふはふはと咲きたるニゲラの花のあとふはふはの実のうまれたり  
ふうせん形の形にふくらむ莢のさきの隙間に見ゆる種の小さし  
種黒き草花多しと思へどもクロタネソウの名を持つニゲラ  
甘きもの果物好みし夫なりき祥月命日寿司を食べをり  
なま物を禁止とされし入院の夫に運びし握り寿司いくたび  
入院の夫に持ちゆける握り寿司を作りくれける店はいま無し

薬にて治癒したりける病なれどその薬にて侵されし夫の心臓  
寡婦となる十年あまりの新聞の購読者の名は今なほ夫  
つぶやきて静かに歩くかのひとが手拍子をとる歌ふひとになる  
ピアノストテノール歌手は介護職ともに若くて職場の仲間  
今日つひに不本意ながらの放屁をば友と語りつ大笑ひして  
母もよと放屁のことを友に言ふ友も同じと言ひて笑ひぬ  
失くしたるスマホに電話をかけたれば呼び出し音の聞こゆその度  
失くしたるスマホの呼び出す音すれば無事だと思ふ気にもなりたり  
失くしたるスマホの位置を示される画面に出たる近くのスーパー  
銀行のカードとスマホ免許証われの手許をしばらく離る  
五千円の現金以外は戻りくる携帯電話とカードの類  
お手すればかはゆいねえと言はれる犬のパセリはワルツを踊る  
ロボットのパセリを撫でればうつとりの仕草となりつまなこを閉ぢて  
高齢者施設に来たるロボットの犬のパセリは職場の仲間  
わが庭に増えつつ咲ける秋海棠となりの庭に今年咲きをり



通販のリシマキアの花咲かず葉を落としつつ枯れてゆくらし葉を落とすリシマキアの鉢動かせば株の周りの赤き芽の出づある店にスマホのナビの指示のまま行けば着きたり迷ふことなく迷はずに着きたる店より還る道かへりのナビにひとつ迷ひつナビの言ふこの狭き道を行くのかと車を降りて人に尋ねつこの先の十字路には注意せよと庭の手入れをする人の言ふ教へらるる道を進めば行き交ひの車見えたり家の隙間に花びらの色変はりたる庭の菊その枝の下あまたの新芽花びらのひらけふたつの色もてり紫と黄のパンジーの株真つ黒の黒に咲きたるパンジーの苗買ひたれど庭に馴染まずパンジーのどの株よりも小さき株なれどふくらむふたつの蕾石垣をはみ出る庭木の家の窓あかりの灯ることなく過ぎつ時世らし焼香のみにて帰りゆくひとを見送る兄の葬式弔ひの様な変はれど式場の中にも外にも数多の花輪PCRの検査キットがわが家に届けり念の為にと言ひて友人の一人職場の三人が感染者数の数に入りつTVを無料で譲ると投稿すれば忽ち五件の問ひ合はせありTVを捨てる費用のかかる世に無料で貰ひてくるるひとあり今世の最後の兄に会へずして葬儀に並ぶ姉の隣に朝はやく焼かれて遺骨となる兄のかすかに笑ふ壇上の写真早朝に飛んで行けどもこれの世の兄には会へぬ別れとなりつ公園に来ればそのつど背をのぼす背伸ばしベンチに親子が座る脇のぼす器具に下がりて居る時に声高きひとの話しかける声掛けて来たるひとのしばらくを体のことなど話すベンチでシャンプーの指先当たる感触の好みの美容師今日は当たりぬ

テーブルを二つに区切る板をよけステキを食ふ仲間と行き不要なりと思へどマスクは日除けにも素顔隠しに時におしゃれに千日紅マリーゴールド芽を出せり種まき用と言ふ土のなかり千日紅の双葉と茎はくれなゐの色を持ちをり日差しの中に鴉外の没後百年記念とふ旗を掲ぐるバス停留所道端の垂れさがるはな花びらの緑をふちどる青紫よ調べたるヨウラクツツアアナスとふ花の名前の飲み込み難し漢字にて瓔珞筒と書くといふこの花の名にやや納得す取り寄せたる瓔珞筒アナナスの幼き苗の赤き花の芽女王の涙ともいふ瓔珞筒アナナスの花零るるかたち色増せる柿の枝葉の拡がりぬ小さく膨らむ実を抱きつつ切り売りの西瓜を迷はずかごに入れつ五月晦日の夏日といふ日にヨーグルトつくる道具が納豆をつくる道具にいま変はりたり声高くしばらく鳴ける鳥来たりすがたの見えず気配もなくテノールのマイク通さぬ生の声はだの奥までつたはりてくるテーブルに置きたる歌集のわが歌を実用書だねと息子言ひをり無関心の息子がなぜかわが歌を読みつつ言へりあだかうだと家計簿の代はりに月のレシートをノートに貼れば意外と易し三台のハーブを運びその弦を触らせてくるるハーブ奏者は渋滞のみちを走れば背の高きトラックのうへ満月うかぶこの年は寒すぎ暑すぎまた急に寒くなりたり十月となるこの夏もたびたび買ひたる小豆アイス売り場には無し九月の終はり大豆煮ることの無きまま古稀を越え納豆用の大豆を煮てをり適当に水に戻して煮る大豆此度は初めて柔くなりたり

さ おと め  
早乙女イチ ☆ (栃木県)

## 月夜の町

ばあちゃんドライブにでも行くかいと誘う長男どこへ行くのよよい天気家族で行こうひまわりを見に行くかいと群馬を目差す鮮やかなひまわりを見に来た人らものすごいなとひまわり歩道どの位面積あるか広広と日に向き並ぶひまわり数多

キンカンが黄色くなつて朝の日にそよ風にゆれ輝きており重たげに庭すみに生るミカンあり食べ頃かなとそつとふれ見るあちこちに家の明かりが輝ける月夜の町をゆつくり回る

風強く白鳥見えず数多なる鴨がびっしり水辺賑わう

長男が大平町の清水寺にロウバイ見に行くかいと誘ってくれる

ロウバイは黄色な花で小さくてふんわりとして数多並びぬ

佐野駅のイルミネーション鮮やかな広場を回り田沼へ向かう

二階から中学校のにぎやかなテニスの試合見ゆがんばる姿

長男が枝切りをした椿の木さっぱりとしてそよ風通る

専修寺参拝しようとして修理前の門の前まで車で来たり

専修寺門前のけやき八〇〇年大木見上ぐ県の記念木

参拝をしようと孫と手をつなぎ風つよき昼安全願う  
 みかも山の静かな公園に鉢植えのパンジー並ぶ入口ちかく  
 びっしりと四色のパンジー見事なれど草むしる人もう植え替えと  
 爽やかな河津桜がそよ風に揺れてひらひら舞い散りてくる  
 小鳥来て桜の中をあちこちと何してるのか楽しそうだな  
 池の中緋鯉真鯉が寄ってくるエサ欲しそうに口をぱくぱく  
 連休だどこか行くかと長男がよい天気だぞ家族で行こう  
 ばあちゃん歩けるかいと車椅子これに乗ってと長男と孫  
 ゆっくりと花咲く中を回りゆく日差しをうけた真赤なつつじ  
 こんなにも優しい長男孫たちと楽しい花見うれしかったな  
 夕食をすませドライブしようかと月がとつても爽やかな晩  
 道をよく知る孫運転の夜の町田沼の方へ行って見るかと  
 みちの駅のイルミネーション鮮やかに足湯あったり楽しそうだな  
 何時の間にミカンの花が咲いたのか青葉の中に生り芽が見える  
 爽やかな朝キンカンの白い花香りを放つ青葉の中に

ミカンの実青葉の中に丸丸とピンポン玉の大きさになる  
 少しずつ菜園の草むしりする心地よき風通りすぎゆく  
 買物をすませて帰る渡良瀬の菜の花見つつ爽やかな土手  
 買物に行こうと長男足利へお盆になるよしつかりとして  
 買い忘れないようにしてしつかりと思いつつ品物選ぶ  
 出流原まで行ってみるかと息子言い弁天池に緋鯉真鯉見る  
 爽やかな朝日にゆれるキンカンは大豆位の大きさになる  
 夕食をすませ二階の窓開く真ん丸の月の明るい夜空  
 爽やかな月の明りに手を合せ静かな夜に事無きを願う  
 菜園に伸びたる雑草除草剤まいてもらってほっと安心す  
 キンカンが朝日に映えて青葉の中ビー玉位の大きさとなる  
 出かけよう今日は静かな天気だよどこにしようか定休日の孫  
 センターの入口にある売店が今日は休みだ買物できぬ  
 鉢植えの小花が並ぶ入口の林に咲いた彼岸花映ゆ  
 温室のサボテン展示とげとげの丸や長いの平たいのあり

## 荻窪不案内人

手花火のけむにまかれて死に際の蛾の散らしたる卵わすれず  
 神田川細き流れの小暗さに鯉まぎれ来る月見橋まで  
 泊りたる家の朝日が思はざる方角なるに感覚合はず  
 ひそひそとちさき毛物の動けるやそれとも風か小笹の斜面  
 馬鹿な音たてはじめたる洗濯機からだをのせて共共ふるふ  
 掘りたての人参もらひ馬の気になりてかじれば兎のごとし  
 語呂の良き久留米籃胎漆器を拭きながら声いだしみるクルメランタイシッキ  
 大とろの紅白縞模様つややかに年の最後をしめくりたり  
 声たてず明けの鳥がひとつ行きもうひとつ行く雲重きなか  
 まつさをの朝来る兆し明星の二倍三倍光るファイナーレ  
 シャンプーを流すに60ほど数ふ歩いてポストまで行ける数  
 ころぶひとあらば助くと思ひつつうつ伏す人形直してをりぬ  
 カーボン紙いまの世にまだ売りをれば使ひてよろしコピー機よりも  
 「あなたの本国会図書館にて拝見電子書籍にしては」といふセールス  
 窪地ある街に住みゐるときは谷底めけるあたりに迷ふ

さとうやすこ  
 佐藤靖子 (東京都)

近隣の道のむづかし方角に迷ひてあはれわれストレンジヤー  
 みだれたる風にたわみて雪柳その白妙の炎にぞ見ゆ  
 ひとの国欲しがる者に天のばちあたるほかなしあたりてくれよ  
 朝鮮に出兵せしかの秀吉を厭ひをりにきいままた憎む  
 いつにても笑へる笑ひの種を持つこよひの不安それにまぎらす  
 街ゆかず物を見るなく捨て目とふ目を利かすなくつまらなくな  
 パンジーの黄がひとつのみ入りゐるベビリーフを迷はずに買ふ  
 侵さるる国より民のふりしぼる悲しみの声まぬる吹き替へ  
 かの寺の菩提樹かしこのえごの花おしへて人は萩叢にねむる  
 長女次女孫たち猫たち犬のほかすべての名言ひ最後が本命  
 おどかすはおどろかすの何なのさなど思ひつつ目覚むるあした  
 ハンカチにアイロンかけをり鯛富士山城に鳥居に交通標識  
 見えぬゆゑ見ぬ月新月この五月二度目の新月透視してみむ  
 食すすむ幼をみなご顔に椀かぶせて汁を飲みほしてをり  
 けふの胃は「しば漬け食べたい」気分にてしば漬け食べて腑を収めたり

他界にゐる猫の毛並は茶トラ白うつつに三毛とキジトラがゐる  
 こぼしたる水が撥水生地のうへ尺とるやうにすすみゆきたり  
 パルチザンの戦の歌と知らずゐて「さらば恋人」よく聴きたりき  
 原爆の実験場由来とは知らずビキニビキニと浮かれてをりつ  
 あれあれは娘のむすめ地蔵様にランドセルの身折りて祈るよ  
 霊柩車送ると集ふ列のなか声あり「アベノマスクつけてます」  
 禍事の終はらぬ地球に雨降れば毒持ち生るる朱の火炎茸  
 ふりかけの「ひろし」を芸人ヒロシとし無くならぬうち買ひたしておく  
 校庭によくあるあれがいまの世に「にのきん」と呼ばれぼつねんとゐる  
 ともどちのみな声ひくくなりまさり受話器にいつも男とまがふ  
 青梅道「江戸向き地蔵」の横に立ち見えざる東の江戸を見てをり  
 かもめかもめ羽田のかもめもうすぐ飛ぶよ機械の鳥が  
 見よやよや夜明けの色をらふそくの内炎のいろ嵐の切れ間  
 シリカゲル尻翳るのは蒙古斑乾燥剤にそのつどおもふ  
 魔法瓶のゴムパッキング洗ふつどこに進歩の遅れありとす

秋の日の曇りがちな静けさに夜をとほして咲ける朝顔  
 さのふまで土ばかりなる植木鉢きのこ一本けさ現はるる  
 秋映あきえいといふ名のりんご紅深し「秋映」と読む姉の改名  
 過去帳に知ることなども広がり兄の語れる祖の祖の祖を聞く  
 来た来たと友むかふるに馬鹿踊りして見せをればよく似たる  
 ひと  
 滑らなくなる兆しあるフライパン使ひつつ思ふ病後の兄を  
 猫の忌にピフテキ湯気を立つる夢その食欲のうつつにつづく  
 孤高のかけ遣せる猫をかしこみてきのふの花にねこやなぎ足す  
 花模様水玉なかに鯛焼の柄ある端切れつなぎで敷布  
 グミ呉るる子の手はさつき大まかに洗ひたるのみとわれは知  
 りをり  
 よく落とす蓋おとす上向きなればそのまま使ふ幸ひとして  
 富士山の冠雪浄き写真撮りし関口正道さん偲びます  
 薄切りの霜降肉のやうな雲ひろげひろげて寒のあした来  
 大寒のいまごろ見にし露の花のちに雌株の花と知れるも  
 青梗菜の茎のうちがは次の葉が仏のやうに収まりてゐる  
 容れものに受くる結露をバイナツブルの鉢に垂らすもあした  
 あしたに  
 窓の露なめめる猫よすこしだけ野良になりたる来し方ありて  
 紅梅のひらけるあした大家言ふいつでも伐つて飾りなさいよ  
 透くやうな紅の大根買ひきたり口紅差したき心いだきて  
 「半殺し?」「みな殺し?」甘味の店にぼたもち買ふと確かめ  
 てゐる  
 高校の畑の余地に立つ厩まはりすくすくうまごやし生ふ

茎のみの露のまへにて迷ひをり葉のつきをれば即買ふものを  
 神のまへ仏壇のまへいま墓に頭の中は真つ白のわれ  
 お祖母さんに向かずと言はるおほらかに包む器にわれは非ざり  
 上京せし八歳のころ初めての餃子をぎょうさんと聞き違へにき  
 皮膚はさみみるみる集まりきたる血よ観音扉閉めたるときに  
 家いへのかなたに山並あるやうな藍色のくも日の出づるまへ  
 ムーンフェイス名こそうつくし副作用のまんまる顔になぜと  
 皆聞く  
 今は昔わかれし夫の弟と街に出会ひて姉さんと呼はる  
 まつくろの蜘蛛が郵便受けにゐてそこを何とか戦ひて勝つ  
 パルチザン暗躍すらしウクライナに今に実在する驚き  
 ビキニ着て炎熱の砂あるくとき全身浄化の心地したりき  
 建物に繋るかづらに花の咲く思ひどほりの山芋ならし  
 わが家のごみが一番きれいな夕のあとの山芋ならし  
 畑一枚ごとにおほへる草の名のかなた踊り子こなたゑのころ  
 えびの殻むく指の血は水仕事してゐる水に流して済ます  
 言ひました聞いてませんとふ押問答いつ何時何分?にてうや  
 むやとなる  
 ぬばたまの黒き右肢もつ三毛のすんなり立てるうしろ姿よ  
 これ以上のびないほどに伸びてゐる猫の安心あさひ浴びをり  
 気心のかよひあふよな猫とみて食べ方やはり動物なるも  
 目を洗ひ花さす瓶に氷水入れかへてゐる朝のはじまり

## 子の感染

颱風の近づく雨にまじる風半開きの傘ななめに差しゆく  
 太陽のぬくもり吸ひたる肌掛けに包まれ眠るああ幸せと  
 くるくると同じ高さに宙を舞ふ落葉に蜘蛛の糸の光れり  
 事故の子の命願ひて百八巻般若心経書きにし日びよ  
 マスクにて座席に眠りある人の閉ぢたる瞼の濃きつけ睫  
 見るいとま無き医療者を励ますと言ひて飛びたりブルーインパルスは  
 夢にては幼のままと言ひし母ははの夢のわれに会ひたし  
 気配にて一瞬とまる足もとを蜥蜴がよぎる街中の道  
 覗きにし水たまりの空ただ深く吸ひ込まれる気にして怖かりき  
 積もりたる落葉音たて蹴りてゆく故なく楽しただそれだけが  
 くもりある空の色に同化して見えずなりたり飛びゆく鷺は  
 三角形の二辺の和など思ひつつ歩きに良き日は和の道をゆく  
 付きてくる影が前に伸びわれを導く歩きの帰りの道に  
 わが背丈はるかに越ゆるふる里の積雪いへり今朝のラヂオが  
 川底の乾きある石しめらせて心うるほす程の雨欲し

すずき かずこ  
 鈴木計子 (東京都)

三楹の花を知りしは秩父にて始めて間なき歌に詠みにき  
 大切に抱つこバンドに抱かるはあらら犬なり近づき見れば  
 親と子のキャッチボールの軽やかな音が川越え聞こゆる道ゆく  
 堀ぎはに這ふごと白き花咲けり光の春といふ日の中に  
 賜ひたる取りたてわかめが鍋の湯に瞬時あざやぐさみどり色に  
 子の事故に中断せしより四十年筆の稽古の半紙いで来つ  
 土手に咲くムラサキハナナの映りある川面さくらの花びら流る  
 牽引の終はる知らせは三拍子をどりたくなるワルツの調べ  
 父乗りし昭和の自転車に乗るわれがその都度なほしにゆきたる店閉づ  
 子どもの日すなはち夫の誕生日百五の母が御骨になりし日  
 「高嶺」の祖早川幾忠葬ひに寂聴あぐる経を聞きにき  
 友二人モンブラン吾シュークリーム頼むは学生時代と同じ  
 かつこちやんかつこと吾を呼びくれし人ら今なし育ちし家も  
 苗場山信濃川また清津川校歌に歌ひしふる里思はる  
 遠くなるほどに思はるふる里の変はらぬままあり心のうちに

塀に沿ひつばき散り敷く赤き上ふうはり桜の花びらがのる  
 野の花に似合ふ小さき器買ひまづ姫女苑みじかく挿しぬ  
 枝や根を切られ切られてその形たもち愛でらる盆栽といふは  
 信号のカツコウカカポとなくこゑの何やら楽し真似つつ渡る  
 窓過ぐる山の向かうの山にまだ雪残りゐて日に輝けり  
 窓過ぐる水張り田に目を凝らしをりか細き苗の有り無し見むと  
 鎌もちて新幹線にて来たる墓まづ腰ほどの草を刈りたり  
 コロナにて来ざりしを詫び手をあはず夫の父母の他は知らざり  
 鼻の辺の尖るマスクをおキツネのマスクと呼びて買ひてみたり  
 隣席が絹の扇子であふぐ風そよと届きぬほのかな匂ひと  
 追ひ越してゆける日傘がわれの二歩三歩のあゆみに離れてゆけり  
 をさまらぬ暑さに続く子の感染やせゐるわれの肩また尖る  
 本日の感染者数の一人にて子は統計の数字となれり  
 感染の子との自粛時届きたるいつもの友の梨あ嬉し  
 限りなき解放感あり自粛時の過ぎて使ひにゆくだけなのに

去年の実にまじり落ちるどんぐりの踏みつぶされてその上  
 あるく

笑ふしかなき繕ひも手を貸さず一人で生きねばならぬ子ゆゑに  
 驚はうぐひす色をしてをらず父が飼ひにしゆゑ知る一つ  
 笑ふこゑ聞こえ友らと料理する後姿の母に覚めたり  
 もみちせる低き並木の花水木むし食ひなきを一枚もらふ  
 大方は葉を落としたる花水木あかく小き実いくつか残せり  
 幾度かの転居に紛失せしものと思へる子らの母子手帳出づ  
 野火止の水に煌めく木もれ日の眩しきさまを神さぶと見つ  
 伴奏の微妙に遅きは新しき人と知りたりラヂオ駄操  
 手を伸ばす吊革隣る男性のごくさりげなく手首のせをり  
 詣でたるのちに回れる川べりにはせみを見つ一月一日  
 細き脚痛めはしないか白鷺が水なき川の石を歩めり  
 川縁に白鷺かしらと思ひゐる動きは揺れるビニルの袋  
 母生れし頃と知りたるスペイン風邪はるか昔と思はずなりぬ  
 七五三の孫と撮りしが葬場に飾られし姉けふの義兄も  
 その時の写真なきこと思ひたり友と義兄の葬儀続きて  
 枝にまだ固くつばみてゐる梅が紅みせはじむ恥ぢらふほどに  
 眺めゐる窓に区間限定の富士見ゆけふは白妙著し  
 野火止の流れの斜面に去年より数増すジユズダマ刈られてし  
 まひぬ

年年の誘ひ待ちちめて菜の花を野に摘みたりし姉のいまなし  
 松園の美人画好むわれのなほ惹かれつ「焔」「花がたみ」には  
 仲間との言葉も多く持つといふ四十雀が鳴きつつ付き来る  
 きんらんの咲ける林に囲はるるクチナシ草にちさく屈みぬ

五十年の感謝を貼りて店閉づる自転車店が壊されてをり  
 年寄りに見えるからいや百越えてなほ義母言ひて杖もたざりき  
 久に会ふ友との約束まよふことなき通学の駅に決めたり  
 豫報になき雨となりたる夕つ方傘もたずゆく和服三人  
 房となり匂ひを放つ栗の花盛る畑をあしばやに過ぐ  
 風強き雨に傘もつ手におこるばね指起こし起こして帰る  
 カツコウと鳴くこゑ親しかつこちやんかつこと呼ばれてをり  
 にし吾に

犬の散歩の他やることなしと言ふお隣りは去年妻を亡くしき  
 山のへに白き観音像みえて高崎駅は止まらず過ぎつ  
 富山すぎ雪の残れる山みえずなりて終点金沢近し  
 今日ゆける「金沢くらしの博物館」義父の学びし校舎と知りぬ  
 取り分けるビニルの手袋持ちて入るビュッフエ式の宿の食事は  
 発つあした買ひたる加賀の太胡瓜夕餉の菜のあんかけとなる  
 ふる里の家の巡りに蟬の殻みつけて遊びきはるかな記憶  
 ポストへの帰りの道の蟬の殻こはれぬやうに手にのせ帰る  
 捨てられぬままの蟬の抜け殻を時に向き変へ玄関に置く  
 色かたち機能とみに進化せり口鼻おほふだけのマスクが  
 感染の子とゐる家に開く本こころは活字読みてはをらず  
 感染の熱のをさまる子よりまだ陰性われの戻らぬ食欲  
 買ひ置き常より多きを幸ひと思ふこととす息子の感染

## 健やかなれ

存分に遊びて戻る老犬は息切らしやがて寢息立てをり  
 夕闇の訪れ早く啼く鹿の声は夜毎に高まりてくる  
 一・五度気温上がれば国沈むモルディブに地球の未来重ねよ  
 野は枯れて畑の緑は育ち来るすつくと立てる葱も色濃く  
 手伝つてくれると言ひて持ちくるる畑作る人の採りたて野菜  
 日の当たる平屋に沿ひて立つ櫛枯葉は屋根に絶え間なく降る  
 老犬の寢息とともに上下せる腹に手を触れ時を惜しめり  
 北国に雪の降るらし快晴の関東平野に痛き風吹く  
 緑濃き葉はそのままに松の木の太きが割られ薪となりゆく  
 徒長枝と呼ばれる枝も枝なるを切り捨てらるる庭木とふもの  
 今日もまた子等集まりて遊ぶらむスケートボードの待つこの広場  
 年嵩が幼に教へ歳なりに上達しくるスケートボード  
 家外に白き明かりはさし渡る雲の止みて月出でたれば  
 谷川の水の面に動きなく凍りたるらし春まだ浅き  
 思ふさま伸び上がり立つ大根はその白き身に春風纏ふ

すとうのりこ  
 須藤紀子 (埼玉県)

梅の花やうやく五分に咲きたるを強き風吹き花びら舞ひ散る  
 家を継ぐ弟に会はず過ぎをれば露の臺出づと電話呉れたり  
 杉花粉乗せて吹き来る風の中犬眠りをり日差し温めり  
 強風に煽られ鳥の羽ばたける今日ウクライナに戦起こると  
 若者を人殺しにする戦争を始むる者の罪の深さよ  
 やはらかく湿り帯びたる春の宵どの家も明かり灯されてあり  
 ベランダに小さき衣類干されたる若き家族の健やかにあれ  
 姫こぶし雪柳の白も清からず鬱鬱として今日も曇天  
 病院の窓に広がる春の空その彼方に今も砲撃止まず  
 雨の降る如くに爆弾の降ることのわけも知らざる子等も死にたり  
 守らねば奪ひ去られる平安を守らむがために武器とると言ふ  
 ひと冬を枝に保ちて春の日を迎へて落つる一個の蜜柑  
 谷川の淀にひとり蹲る長くつがひでありし軽鴨  
 野鳥にも寿命のあらばやむなしと思へど一羽の姿侘しき  
 案じつつ行けば一羽の軽鴨は何啄むか健やかに見ゆ

口々にわが老犬に声かけて若者たちの自転車がゆく  
つばくらは地を這ふほどに低く飛ぶ梅雨の止み間に獲物漁りて

長き首ゆらりゆらりと揺らしつつ青鷺は雨後の瀬を遡る

真夜中の道に一頭また一頭大き影ゆく猪ならむ

田の面にさざ波光る五月晴れ手植ゑの早苗はつか揺れをり

雷雲は前触れもなく空にあり霞混じりの雨は地を打つ

大雨の止みたる朝初咲きの凌霄花落ちて華やか

蝉取りに夢中なりしは去年まで老犬は狩りを忘れたるらし

色とりどりの花を選びて買ふ娘祖母に持ちゆく今日七回忌

家を継ぐ弟の手に清められ母の墓所に夏の陽は降る

人間の心に宿る残虐を見せつけらるる戦続きて

誰一人見捨てられざる社会こそ政治の仕事ただそれだけが

少しづつ世界は変はり悪しきことばかりではないと中秋の月

待ちかねて今日晴れ渡る秋空に夏の敷布を高々と干す

氷雨降る駅で手を振り別れ来て友の手料理心に温し

飼主も共に遊べと誘ふらし時折駆け寄り駆け抜ける犬

緩やかな上昇気流に羽広げどこまで昇る青空の鳶

コロナ感染収まりゆくか土曜日の午後の空地に子らの歓声

今日だけは新聞を見まい総選挙終へたる朝の空白々し

結石の検査結果の良き犬と歩めば冬の風心地よし

この秋に新米届けてくださりし小川照子さんの急逝知らざる

亡き母の歌友にして我が先達の小川さん突然逝きてしまひぬ

小川さん本山さんと連れ立ちて冬雷大会に行きし日遠し

山際の霜は一日融けぬまま三時三分陽は山に入る

日の落ちて参拝の人まばらなり焚き上げの火に暫し温もる

草の間にラピスラズリの青き玉竜の鬚の実真冬の庭に

竜の鬚をハタクサと呼びし幼き日ハタクサ鉄砲作り遊びき

集落に薪ストーブを使ふ家増えて煙の香の暖かし

飲み込む時つと横向けと母言ひし服用の極意今に確かむ

微かなるメロディーを時に感じる脳のパグならむ耳鳴りに似て

この我にも得意料理のあることを生きた証と一人思へり

すたすたと道の真中を行く雉に見惚れてをれば羽ばたきて消ゆ

煩い事少し離れて息せむと小麦粉を捏ねスコーンを焼く

雇用契約更新されざる子と二人スコーンを食む啓蟄の午後

いつも行く道沿ひの塀にいつも居る猫よおまへは何を見てゐる

知る人と思へど声はかけずをり大病院待合室に

生まれ来て生きの限りを生きたべき人の一人がまた死者となる

春ごとに気づけば枝に若葉なく虫に好かれる紫式部

隣人に差し芽貫ひて冬越せる白花ゼラニウムに蕾出そろふ

坂道を自転車漕ぎて登りくる大学生か雑談しつつも

フクロフとホトトギス鳴く夜の道を子と犬がゆく幻めきて

梅漬けをせむと五キロの梅洗ひ我が干支の年半ばとなりぬ

早すぎる梅雨明けなれば時違へ法師蟬鳴く六月にして

根切り虫の害にてミモザ哀ふもその実埋めたる鉢に芽の出づ

この日ごろ老いの兆せるわが犬は慣れたる坂を踏みしめ登る

目も口もそのままの皮脱ぎ捨てて一メートル半の蛇は何処へ

蟬のかをりと書かれたる歌読みたれば蟬の匂ひの蘇りくる

独り身のをとこ口数少なければ庭に数多の花咲かせをり

年金事務所のフロアに怒号響きたり止むにやまれぬ思ひなるべし

株を分け譲りたる人の庭先に浜木綿咲くが通りより見ゆ

へアンリーブルーその名に惹かれ求め来て植ゑたる朝顔いまだ咲かざる

「閃輝暗点」ストレスによるとも書かれをりもうひと頑張りし

たら休まむ

自閉症スペクトラムの診断を受けたる娘納得の笑み

周りにも親にも理解されぬまま生き来し日々は余りに長し

この予定全部こなせるだらうかと思ひてをりぬ夏の陽はげし

四十度の熱ある地上に解熱剤欲しと願へど空に雲なし

捕り逃がし部屋のどこかに居るはずの百足の気配に気の休まらず

シルバーに専念すると言ひし弟請はれて再び設計士となる

灼熱の陽の衰へを知りたるか紫陽花はまた色づき始む

秋茜くさ原の上に夥し今日を定めて飛び立ちたるか

大口を開けて笑へる様にして木通は鳥を食事に誘ふ

親しみて頼りてをりし人去りぬ配達員さん獣医師さんも

揺れの来る数秒前に感知する地震計の如し娘と雉は

めつきりと蜂減りたると憂ふ兄軒の巢さへも無下には取らず



たか た か ず こ  
高田和子 (東京都)

## がらんとした気持

がらんとした気持のけふは思ひ出づ稚児なるわれの袴の緋色  
杖をつく夫たびたび歩み止めベンチなければ石に腰掛く  
遠隔のエレベーター検査はじまりつ作動の音を湯船に聞けり  
最後まで使ひ切らざるタバスコの細口瓶をむせつつ洗ふ  
お孫さんぬますかハイと貰ひたる緑の風船なにやらのし  
蚊がゐると息子が言へりカレンダーの十一月は半分をはる  
枝枝にわづかに残る桜の葉こがねの色の小判が揺れつ  
夏に陰ひろくつくりし大櫂伐られて暮れの電飾を着ず  
不透明の瓶を振りたりまだ残る薬かすかに音をたてたり  
二十歳より自ら掛くる籠たがのあり酔ふほど飲むな酌をするな  
左手の手袋の穴ふたつあり生きてゐるわが体が見えつ  
朝に鳴く鳥一つあり古里の信濃は鳥の合唱に目覚めき  
花柄のビニール長靴とプラスチックの赤きスコップ使ひ掻く雪  
電線に丸まる鳩が三羽ゐるどれもこれも朝日に向きて  
故里に父母と家さへなき今は信州味噌に執着あらず

ちちははを困らすぐらゐる大声に泣きたかりきや幼きときに  
昼寝すと夫に言へば何時までといつも言はるるしばしの午睡  
右よりも左の冷たき手足にて家事する体あと幾つまで  
関口さん野村さんの訃報知りそののちしばらく歌を作れず  
雪かぶるもろもろのもの静かにて車輪の音さへ遠くに聞こゆ  
音もなく積む雪みれば思ひ出づ常に本読む寡黙な友を  
ミニトマト鮮度良ければ水に浮くへタも元気な海星のかたち  
寝ねてゐる夫が指にて打つアンカ太鼓の如きメロディーのあり  
隣家が鬼に撒きたる豆を掃き違和感ありつ春立つ朝に  
二〇二二年二月二日道のべに二輪のつつじそののみ咲けり  
とびきりに晴れても寒き二月なり白とピンクをこきまぜた空  
バイオレットのギターケース背負ふをとこ老人でありて青年であらず  
夕つかた犬歯のとなりの差し歯抜け歯つ欠け婆にマスクがあるさ  
歌作りしてゐる吾にウクライナの情勢おもくて思考が止まる  
花びらはエレヴェーターに舞ひ込みてドアの溝にも詰まりてゐたり

忙しく花びら掃けば舞ひあがり車とほれば舞ひ戻りたり  
 童謡を覚えた孫が電話にて十曲うたふその清きこゑ  
 絵に描きし桜はかれずちちははがありてクレパス買ひてくれにき  
 物干すと日毎に見たる山吹の黄に映えし斜面はや草のいろ  
 毛蟲かと掃きたるものは付けまつげ桜は密に青葉を広く  
 地下鉄を出でたる街に白妙のその一色の花水木咲く  
 風の来て回りつづくよ風車青葉の道を孫かへりゆく  
 楊枝立に残り一本となりたれば追加を立てて今日の家事をはる  
 ちりどりの芥の中の蛾か蝶かいま空へ飛ぶけふより六月  
 このひごろ包丁はさみ使ふをり右や左に口を曲げゐる  
 このわれがポケット付けて作りたるワントピース着て孫かへりたり  
 ポケットはいかなる物にふくらむや孫は三歳ポケット喜ぶ  
 黒革のカバン持ちたる紳士ゆくすれ違ふとき仁丹にほふ  
 落胆に慣れるひたすら待てと言ふ人の言葉に同感同感  
 亡き母はたうもろこしを実らせてわれの子ふたり待ちてゐたりき

五枚着てまだ寒きゆゑ重ね着す赤きセーターに緑のベスト  
 寒いねと言へば眠いと言ひたる子麦茶を飲み居間に戻りぬ  
 目覚むればすぐに探しぬプーチンの戦争をはるニュースあら  
 むかと  
 桜いろの並木をゆけり犬連れと杖つく人とベビーカーの人  
 八重桜つづく街路を病院へ抜糸するため行き戻りぬ  
 この春のこれが最初の紋黄蝶もんしろはまだ姿を見せず  
 買ひ物にペイペイポインタアプリなどどれも持たざるポイント  
 カード

## 桑の実

「半田めん」夫と一人かかせぬとせめての贅沢国産小麦の  
 さつま芋おもひのほかには収穫ありつるは煮付けに追はる一日  
 草取りをしつつその名を知らぬまま「ご免ね」言ひてけふも抜く  
 歌ごゑの胸にせまりぬ暫くをマリアカラスのためたふ面影  
 スムーズに駅の階段のぼりきて思ひがけなく膝をなでをり  
 蟋蟀の一際たかく鳴くこゑにたちまち地蟲の唱和となりぬ  
 チューリップ球根うめて春を待つ大学受験の孫の記念に  
 病む婿のけふは五七歳誕生日あかるく祝ふ希望のままに  
 其の苗の根本に糲殻を置きて見直す冷えこむ夕べ  
 この年も無事に玉葱うゑ終へて先づは安らふ暮れの習ひの  
 料理店営みし頃おもひつつ今宵しみじみ夫と話せり  
 唐突にチャイナマーブル七色の芯に宿せるアメ思ひをり  
 鯛のこゑをききたくなりてきてまなこ瞑る記憶の奥の  
 けふわれの八十一歳誕生日やはり冷え込む母の言ひをりし  
 今宵聴く大村能章の数々の曲のすべてにあふるる情緒

とべた  
戸部田とくえ (福岡県)

童謡をききつついつしら口遊むけふまた無邪気に晴れ晴れと  
 ビンに挿す侘助根を出し二輪咲くそののち鉢に繁る枝木の  
 金柑を甘露煮にしてと千切りくる夫の小まめさ感心してをり  
 金柑の黄金に輝く甘露煮を上手に仕上げてビンに詰めたり  
 新米を人より頂きその美味の礼に持ちゆく煮付け二品  
 このところ鳥の声せぬ庭に立ちお待ち申すと天を仰ぎぬ  
 金盞花咲きつぐ庭のあたたかさ恩ある伯母を見るたび偲ぶ  
 古里の野に咲くなでしこ思ふたび胸にせまりぬたをやかな花  
 思ひ出すたびに撫子女郎花つみて巡りし野の風そよぐ  
 火吹き竹せまる煙のもろもろを思ひ出しつつ厨に立てり  
 窓に見しかつての森の舗装路を歩きつつ戻らぬ自然の息吹き  
 希望せる大学合格叶ひたる孫の背にふれ言葉にならず  
 参道に二匹の猫の出迎へてくる偶然かがみて礼を  
 娘よりクマとウサギのぬひぐるみ貰ひて癒す孫の自立を  
 駄菓子屋にビガーといふ名その他に雑多な品の並ぶ棚わすれず

滑らかな毛並の兎のぬひぐるみその名をモモと呼びて親しむ  
 母うゑし柚の古木この年は驚くほどの花咲かせたり  
 初めての桑の実ジャムに仕上げつつ指にも染まる紅べにに驚く  
 両親に連れられ幼の靴選び売場に居合せ仄へらとせり  
 隣の古い施設に入り明かりなき夕べ寂しむ窓に立つたび  
 神護寺の登りの階段手をそへてくれし少女の名を聞かぬまま  
 京都にて学べる孫に会ひたくて朝と夕べの散歩はじめる  
 娘から似合ひさうだとブラウスをみやげに貰ふ思はぬ色の  
 庭に生る山椒うれしやこの年もちりめん買ひて佃煮にせり  
 漸くに読み書き出来る幼より手紙もらひぬプレゼントの礼  
 万歩計はケシゴム程にてコンパクト一日の歩み納めてくれる  
 飼犬の熱中症にて死の知らせ息子の電話につづかぬ言葉  
 澄み渡る庭より聞こゆる蟲のこゑ共に命を励まし合へり  
 をさな児のバス降車に礼を言ふそのこゑに思はず頭を下げつ  
 上の子の秋の箱根に招待と書留とどく至れり尽くせり

朝朝の支度には追はるる忙しさも登校せる孫の背に安堵す  
 数珠玉の一本庭に育ちあて不思議に思へて嬉しく見つむ  
 敵かに輝く朝の月を見て清められをり至極たふとく  
 ローズマリー絶えて再び地植ゑせりその香と花への思ひの深く  
 白い雲灰色あはひに青い空こころ模様と思へてならず  
 指先の冷たくなりて急激な寒波に戸惑ふ年を重ねて  
 繁る葉につつましやかな蒼見ゆ枇杷への思ひ一入ふかく  
 読書して優しさもどる本をとお抱きたるままに動けずなれり  
 お隣の七五三の写真いただいて部屋に飾りぬ見るたび和み  
 侘助のそばの椿のくれなゐに改めて思ふ赤と白の美  
 しみじみと見つめる鏡のわが顔のいやはや自信なくしてしまふ  
 込み合へる電車に席をゆづられていたく恐縮人のやさしさ  
 街に出て行き交ふ人の変はりなく何より安堵社会の流れ  
 古里の友の電話今年こそさくら観にこよ声つまらせて  
 豌豆の花の咲く日を待ちこがれ支柱に蔓を気長くむすぶ  
 けふわれ八十一歳誕生日しづかな思ひに回想してをり  
 見頃となる桜の並木を窓に観て一人の旅をバスに揺れつつ  
 山桜母と観し日の遠き日の思ひ重ねて見上ぐる八重ざくら  
 数々の花の見頃の公園に一際まぶしむミモザのこがね色  
 白妙のつつじ眩しみがしきの身に染み渡る卯月の庭に  
 抱く度こころ安まるぬひぐるみ無言にあれど見つめ合ひたり  
 苗物を買ひすぎ難儀する帰り見かねた人の付き添ひくれぬ  
 黄金色つづく小麦の輝きに原田泰治の世界を重ねて  
 かるやかな音するまでの陰干しに梅雨入前のどくだみ茶作り  
 いつしかに気持ちの晴れて陽気さの戻り読みたき本の数々

行き詰まる短歌にけふは師の言葉「うたは針に糸通すごと」と  
 愛しさの増しくる老いてゆくこの身しみじみとして手を合はす  
 十葉の花のすがしき見るたびに清められをり庭を巡りて  
 酸漿の程のトマト房となり下がる畑にいくたび憩ふ  
 こまごまと育てた野菜この度も送りくれたり律儀な友の  
 ガンダム巨大なロボット見上げつつラポトと言ふ店に  
 入りぬ  
 届けたる何方も美味と喜べるちりめん山椒作り甲斐のあり  
 突然に「暑いですね」と青年のこゑかけくるる商店街に  
 若くして亡くなり残したる数々のガーシユウインの楽ラジオ  
 に聴けり  
 このあたり心なのかと胸に手を当てて優しく撫でつつ思ふ  
 すれ違ふときに幼の声のして思はずいとしくふりかへりたり  
 道の端にゆるる草々に日の出前こゑをかけた朝のあいさつ  
 雨風のせまる予報に落ちつかず発芽まもなき畑の大根  
 おぼつかぬ歩みとなりてせひ杖を夫にせかされ納得したり  
 やぶ蘭の花ことば「忍耐」といふうすむらさきに淡きあこがれ  
 年々に旬の野菜を欠かさずに育て来て抄らず今年の秋は

とよ だ しんいち  
 豊田伸 一☆ (茨城県)

病む我をはげましくるる子等の絵を

こおろぎが夏の終わりを惜しむがに秋の夜長を鳴き続けいる  
 病む我をはげましくるる子等の絵を部屋に飾りぬ希望のひまわり  
 秋深く水面に光反射して浮子を揺らして魚とびはねる  
 手折りきて壇に挿したるコスモスの夜中の卓につんと咲きたり  
 大輪の美しきバラ風に揺れ微笑みくれる見とれるわれに  
 小春日にうたた寝したる暖かさ妻の買物車内に待ちて  
 枝をはなれひらり落ちくる公孫樹の葉秋の陽うけて黄に光りおり  
 蛙鳴くこえ弱々し春夏を過ぎて最後の鳴き声ならん  
 柔らかな風に吹かれて空をとぶ種は何処の地に落ちるらん  
 桜の木年輪かさねやつれくるそれでも花を咲かす準備す  
 ことごとく葉を落としたる車庫のそばの柿に陽の照り食思誘わる  
 水仙に芽が出て春に咲くを待ち冬至の寒気おしのけ育つ  
 北風に誘われるように踊る葉が渦巻きながらすみっこに溜まる  
 霜の庭歩けばザクザク音のして今朝の寒さに身がしまりくる  
 身にしみる寒さに今日はとじこもり散歩はせずに暖をとりたり

手作りの干し柿やれば隣りの子等甘くうましと喜ぶ笑顔  
 歩く度持病の右足痛み増し師走の寒さ身にこたえたり  
 男の孫の大学合格の連絡あり家族みんなで祝いの言葉を  
 休眠より目覚めたバラの茎立ちてつぼみ持ちくる陽の温もりに  
 散歩道に年輪みせる切株の太さたくましさなぜかなつかし  
 春の陽をあびて出て来るバラの葉がニョキニョキ伸びる花咲く前に  
 サクラソウ可憐な花の庭に咲く春爛漫のにぎわい成りて  
 清々しき奥久慈川にカジカ鳴くこえ聞きながら散策をする  
 久慈川の静かに流るる水の辺に菜の花盛る午後のひと時  
 うぐいすの鳴くこえのする川岸に奥久慈道の高台望む  
 のんびりと川のほとりで茶を飲みぬパラソルの陰に涼みながらに  
 時待ちて一輪早く咲くあやめ色あざやかな快晴の朝  
 ぐんぐんと伸びるアヤメのいきおいに咲くは近しと心待ちする  
 食卓に深紅のバラを飾りたり見れば見る程あでやかな花  
 散歩する我に微笑みいるように麦撫子の小さな花咲く

早朝に雨戸開ければさわやかな風に揺れてる紅のバラ  
 公園で音響させる草刈り機草の匂いが辺りにただよう  
 きゆうりの蔓互いにからみあいながら高く伸びゆき実を生らしたり  
 猛暑日のホースの中の水熱く庭に放てば葉の生き返る  
 暑すぎて蝉も鳴かずに耐え居るに冷房つけて部屋にこもりぬ  
 汗だくの宅配業者に水やりで感謝の言葉に妻は笑顔す  
 夏草を抜きいる妻は蚊に食われ汗だくのなか手で払いたり  
 目を細め扇子であおぐ涼しくて心地良い風頬に受けつつ  
 病みあがり庭のみようがを見つけたり暑さの中にそっと芽を出す  
 ただ座り何もせずとも汗が出る猛暑の続く異常な季節  
 夕ぐれに鳴くはコオロギ静かなり夏の猛暑の遠くに去りて  
 癌転移薬の効果低下して小さき内に放射線治療す  
 猛暑過ぎこおろぎ鳴くは寂しかり秋深まりて木々の葉落ちる  
 秋晴れの清々しき空澄みわたる病院より帰り一段落す  
 庭の端にかすれた声で鳴くかわず秋の深まり急に感じて

蛙のこえ庭の隅より響きくる秋の夕暮れほどよい温さ  
 皇帝ダリアの天に向かいてひらく花見上げておれば威厳を感じず  
 風吹きて一葉落ちくる紅葉あり冬至の前の寒さ厳しく  
 大輪の美しきバラ花開く日向の椅子に眺むる喜び  
 街路樹に木枯し吹きて葉を散らす寒さ一段厳しくなりて  
 霜柱立ちて寒さが身にしみる凍てつくような風吹きつけて  
 関東に雪降り積り陽が照りぬ子等はソリ引き喜びており  
 たくましく咲く水仙の花つんと伸びてひらきぬ寒さを越えて  
 風吹きて舞い散る雪の渦巻きて庭木に積もり銀世界成る  
 バラの葉がいつせいで出て咲く花を思いつつ水を丁寧にする  
 春風に誘われて見るバラの芽の咲くはまもなくと思ひ眺むる  
 種類多く色とりどりのチューリップあざやかな花に長く佇む  
 うぐいすの鳴く晴天の墓参り牡丹見上げて義父母を思う  
 雨あがり庭に咲きたる深紅のバラ日が差しくれば更に輝く  
 蝉が鳴く林の側の大木に今日の暑さを喜ぶように  
 夜が明けて朝食までの長き事二時間堪え気をまぎらわす  
 放射線治療始めて食欲無し必死に食べるがまんのだどころ

ながのまさこ  
永野雅子☆ (東京都)

## 良きことも悪しきことも

体調の優れぬ友の入院を忘れて会いに行こうとする母  
 特養の入居候補に父の名があると希望の是非を問われる  
 今すぐに父の入居が正しいのか自問自答を繰り返す夜  
 入居願いの電話する朝ラジオから流れている曲「レット・イット・ビー」  
 検診で父の腎臓悪いからと検査の為の紹介状貰う  
 血液の検査結果はすぐに分かり父は来週検査入院  
 透析が必要などは露思わず健診結果の数値を睨む  
 認知症八十七の父なれば透析はせず緩和ケアに  
 担当医に透析しないと伝えれば投薬治療へ方針決まる  
 特養より腎臓悪く受け入れは不可と言われて愕然となる  
 二ヶ月も入居の準備を進めたが白紙となりて日常戻る  
 撮影で店借りたしと電話来て下見日決まる久方ぶりに  
 エキストラは演技指導に従いてラーメン食す何度も何度も  
 何回も麺を食する若者は美味しさ伝えるカメラに向かいて  
 三密を避けているとは思えない撮影スタッフの数に驚く

親友が置きてゆきたる冷蔵庫製氷出来ぬ状態続く  
 サービス員はクレーン搬入が最適と更なる下見の予約させらる  
 軽々と吊り上げられた冷蔵庫入れ替え作業は三十分で終る  
 ワクチンの副反応を案じつつ会場へ向かう足重くして  
 注射した腕に違和感増してきて帰宅後すぐに冷湿布貼る  
 補助金の申請通り洋式へのトイレ改修念願叶う  
 期日まで二か月余りの日程を業者と調整工事日決まる  
 弁当の委託販売誘いのありて是非と答える見知らぬ相手に  
 契約時必要書類の数点あり急ぎ各所に行きて揃える  
 錦糸町オリナスまでの搬入にバイク購入は必須事項  
 週に二回の出店となり弁当のバイク搬入は弟に決む  
 一昨年癌患いたるフミ先生は教室を通信に切り替えると言う  
 いつもなら数日後に届くはずの返送待てど今日も届かず  
 先生の息子より突如教室は閉めると連絡ありて戸惑う  
 二日後にフミ先生の訃報知り頭は真白に心は憂う

フミ先生の遺骨を前に手を合わせ書道続ける約束をする  
 初めての手本届きて朱筆の文字眺めて思う師の人柄を  
 前の師と違う書風に怯みつつ目を奪われる流麗な行書体  
 難解な行書体のくずし文字運筆考え頭に入れる  
 商店街の登記申請手続きに地図を見ながら法務局探す  
 七日後に不足書類を提出せよと法務局より電話の入る  
 追加の書類携え法務局へ来れば更なる訂正を言う  
 盆前に登記手続き完了せず数十年振りの夏季課題なり  
 盆前に執行部LINEで相談す「お月見マルシェ」の重要課題  
 出店の参加メンバー十五となり売り易さ第一に配置を決める  
 大道芸に出演料は払えねど是非参加すと有り難き返事  
 開始から客足絶えることが無く準備した品はバンバン売れる  
 福岡の叔母の訃報を伝えたれど両親はさして関心示さず  
 写真見せ父に葬儀を告げたれど事の次第を理解出来ぬらし  
 父よりも若き叔母が亡くなりて両親の事に思い巡らす

特養の入居について相談員から電話来たれど訳のわからず

従姉から葬儀終わりで集合の写真が届き嬉しく思う

昼休みに施設に行きて改めて相談員に話を聞きぬ

特養の入居は保留となりたれど後は全てを神に委ねん

退院後心配していた階段も何とかが上れてほっと一息

外来の受診の要領よく分からず父の車椅子押しあちこち歩く

血管の細い父の採血は二人掛かりで何とか終える

数日後撮影話は流れたり臨時収入消えてしまいぬ

来客の少ない土曜を休みにし祝日含め三連休とす

偶然に他の会社から撮影の依頼のありて交渉纏まる

量販店に同じ仕様の冷蔵庫ありてサイズを確認したり

搬入迄の長きひと月振り返り冷蔵庫眺め溜息一つ

定刻を十五分も遅刻して注射されたりコロナワクチン

二日目は筋肉痛のみ発熱無く仕事と介護の日常に戻る

工期中トイレ使えず不自由な八日を過ぎて取り付け完了

帰り道大混雑の錦糸公園「子連れ」の多さに愕然とする

教室で書いてぬ代わりに自宅にて課題書き上げ郵送したり

漢文の訳読みながら手本見て字の配列を確認しおり

何回も指で手本をなぞりたれど筆で書く字の流れバラバラ

五枚目を書き終えた所で時間切れ天を仰ぎて溜息をつく

書き上げた中から二枚選び出す作業は初めて慣れずに迷う

窓口の係は通常七日後に登記完了と受領印押す

受領印貰いたる吾は安心し家路に向かう足取り軽く

廃業したる電器店は乾電池等倉庫の在庫を息子が売るらし

会場での飲酒可能と判断しアルコール類のグラス売りを許可す

葬儀へは参列出来ず朝一番弔電送る久方ぶりの



なかむらてつや  
中村哲也 (宮城県)

### 納期遅延製造中止に値上げのメール

故郷は今頃初雪うつすらと積る記憶は昔の話  
 青空に燦たる朝の通り沿ひ楓の黄葉は後光の如し  
 出社してパソコン開けば納期遅延製造中止に値上げのメール  
 タイムカードの有りたる場所に来てしまふ勤怠管理電子化なるに  
 一日中強風吹ける仙台に故郷秋田は吹雪と聞けり  
 日をまたぐ将棋のA級順位戦ライブの聴衆一万を超す  
 新幹線乗るも降りるも二年振り号車違へて慌てて移る  
 指定席満席なれば我が坐せる席のみ空きて探すは易し  
 盛岡を出でて走れるローカル線車窓の景色はほどなく吹雪  
 二年振りに降りたる駅は火の気無し民間委託が無人となりて  
 階段を踏み外したる父入院し実家に独り母が迎へる  
 大晦日大雪なれば日に四度の雪掻きこなして足のふらつく  
 入院の父の身元の保証人急なれば吾が名を母代筆す  
 テレワーク中の暖房節約と布団を身に巻く人有りと聞く  
 リハビリの効果は己の努力かな杖突きつつも父退院す

夜更けてそろそろ寝ねむと思ふ頃小刻みのち激しく揺れる  
 東日本大震災には及ばねど独り揺られて泣きたくもなる  
 辛うじてリモコン手に取りエアコンを消したり次の揺れに備へて  
 転げ落ちたる薄型テレビ持ち上げて電源入れれば映りて嬉し  
 揺れののち寝られずをれば遠くには消防自動車サイレンの鳴る  
 三度目のワクチン接種はこれまでの腕は痛まず高熱続く  
 乗り換への故郷行きのローカル線帰宅の生徒で少し賑はふ  
 車窓よりかつて眺めし茅葺の屋根持つ家屋一つも見えず  
 土曜日の朝の電車はまばらにてドアの閉まるに少し間のある  
 大学に近きアパート六月に部屋のいくつか埋まらぬといふ  
 衣替へしたる生徒の白きシャツ雨降る朝は寒々と見る  
 まとまりて雨降る日々のであらずしてするすると梅雨明けしたり  
 年々に暑さ増しきて通学に日傘を差せる学生の増ゆ  
 県内に候補者五人の選挙にて会社の周囲は極めて静か  
 七月に梅雨の戻りか県内に大雨洪水警報の出づ

突然にスマホに響く警告は土砂災害とぞ地震にあらず  
 したたかに床に突きたる中指の直ぐには立たず「く」の字に曲がる  
 曲がりたる指に痛みはあらねども力入らず先は動かず  
 三カ月余りの指の固定との話に思はず大声を上ぐ  
 病院へ向かふ真夏の暑き日に今年初めての蜻蛉を見たり  
 九月から十月からと電子部品値上げの連絡留まり知らず  
 日に数度受け取る値上げの通知ありその度毎に社内に伝ふ  
 改定の価格表見て驚きぬ従来価格の二倍とあれば  
 この納期無理と思へど営業の要望通りに注文したり  
 パソコンの動画に見たる中秋の月を見たしと真夜に出掛くる  
 土曜朝起きて視界に黒き輪のぼんやり見えて驚きみたり  
 目を擦り擦り擦るも吾の視界黒き輪一つ漂ひて見ゆ  
 決算の業務の疲れと思ひみて午睡すれども黒き輪消えず  
 診察の点眼麻酔の故なるか歩道の信号かすみで見えず  
 受診後に数時間ほどして受くる網膜剥離癒着の手術

道沿ひの僅かの土地に均等に植ゑらるる玉菜は整然と立つ  
 溢れ来るメール概ね広告にて中身読まずに纏めて消しぬ  
 十二月初の日曜暖かく薄手のコートに寒さ覚えす  
 向かうまで続く陸自の駐屯地その柵沿ひを道なりに歩む  
 強風に遅延の連絡メール無く向かへば普通に電車着きたり  
 ウェブでははや一月号の掲載あり二月の歌稿出せずにをれば  
 乗り換へは発車間際の五分前二両の車内はすでに満席  
 時刻表見れば往復十二本二年前より二本減りたり  
 広げたる歩道に雪は堆し除く人無く車道を歩む  
 仙骨の骨折癒えて車椅子に乗りたる父を母は喜ぶ  
 もう父は乗れぬと思ひ自動車の処分を言へば母反対す  
 父の居ぬ秋田の実家の雪囲ひ誰が外すか今から悩む  
 在宅中の女性の電話受け取れば娘や孫や犬の声する  
 感染者市内に増えて半数の社員が再びテレワークなる  
 出入りせる生保レディに昼休み江崎グリコのポッキー貰ふ  
 口下手な女性と思へばパソコンで保険の説明しつかりとする  
 孫感染の連絡あれば隣席にはかに濃厚接触者なり  
 濃厚接触者になりて帰宅する隣席の机や電話を取り敢へず拭く  
 「絶対に父さん帰つて来るから」と電話の母は叫ぶがに言ふ  
 道路から家まで手摺りを付けたくも降雪ありて未だに付かず  
 地震後のニュースに見たる零時過ぎ駅にたむろする人多く居り  
 完全に電車地下鉄運転を見合はせ歩きで会社へ向かふ  
 一時間半を歩いて出社して疲れてひと日仕事にならず  
 高熱の続く接種の副反応食欲あれば三度食事す  
 レトルトの牛丼の具の有難しレンジで温めすぎさま食ぶる

平日の五月二日の昼のバス仙台駅行き高齢者多し  
 どつかりと頂に雪を被りたる岩手富士山車窓に眺む  
 マンションは大学に近し学生の頃に住みたるアパートよりも  
 ジャージ着て行く学生の姿無くみな小綺麗に装ひ歩く  
 風呂共同廊下の床板割れてみし下宿に住みし先輩いづこ  
 顔写真載するポスター多くなり参院選挙の近きを感じず  
 身支度の最後はシャツのポケットにスマホ差し入れ脇に扇子を  
 三十度越ゆる日々なり出社してまづ為すべきは冷房入れる  
 公示日に掲示の写真まづ三枚翌日一枚後日一枚  
 立ちぬるままに靴下脱がむとしよろめき中指床に突きたり  
 よろめける体一つを中指で床に支へれば大きく撓ふ  
 骨折は無く安堵も症名は右手中指腱の断裂  
 即納を当然とする製品もこの頃半年先も危ふく  
 五月の納期とありて怪しめば納入年は来年とある  
 値上げせぬメーカーあらばこの時勢値下げに値すると思へり  
 雲間より現るる月を期待して暫し待つ夜の外気涼しく  
 仕事中消えぬ視界の黒き輪に明日は眼科の受診と決むる  
 医師の告ぐる診断結果は飛蚊症さらに網膜穴空きたりと  
 今日の後網膜剥離を回避せるレーザー治療の必要と告ぐ  
 向うより来る人見えてかすみ目に横断歩道を急ぎ渡る

## 池の堤

葉の間から生まれるやうに筆蘭の花穂が見ゆる光に向きて  
 踏切りの警報機なる間そばに咲く弾けるカンナの種を手に受く  
 母の友九十四歳母に似る弾める声にふる里近く  
 しづもれる山里の墓の背に聞く落つる実の音母かと振り向く  
 バス降りて松ぼつくりを蹴りながら家路に向かふ人影気にして  
 蛇口から漏るる雫に耳澄ます休符もありてリズム刻みつ  
 木製のサンタクロースは音のして最初は気づかぬマトリョーシカ  
 空仰ぎ舞ふ初雪を手に受くるわれにも届きたるクリスマスプレゼント  
 子らを待ついつもと違ふ準備しつ感染者数気になる年末  
 二年ぶりに会ひたる孫はわが背丈越さぬを言はず並びて歩く  
 キャンバスに昔のままの生家あり二十歳のころのサインも残りて  
 堤から描きし生家の全景に声聞こえて家族ら見ゆる  
 キャンバスの真中に糸杉屋根越ゆる幼き叔父が植ゑしと聞きをり  
 夜明けまへ畦道を行くとんど焼祖母の横顔炎にゆらぐ  
 瞬く間炎の中に形なく煙立ちゆく社のとんど

にしむらくにこ  
 西村邦子 (兵庫県)

対岸のカルガモ寄り来る輪を広げゆつくり春が近づく如し  
 靴底に優しい松葉踏みながら池の形に続く道ゆく  
 山麓の芽吹きを運ぶ風に乗せ寒の戻れば降る雪淡し  
 女孫は薬剤師への道選ぶ夫と吾の歳数へをり  
 鵬雛が鵬になりて羽ばたきゆく恩師の言葉孫から聞きをり  
 手の届くほどにホームに寄る桜特急通過に揺れる花びら  
 立金花温もる土を這ふやうに艶やかな葉の間に黄の色灯る  
 街路樹のわずかな土に花ひらく犬のふぐりは今日の空色  
 糺の森風にそよげる青もみぢ下鴨神社に続く玉砂利  
 遊歩道ひと駆歩きて洛南へ鴨川沿ひの葉桜の下  
 鴨川の飛び石渡る賑はひに近づきしばらく川原に眺む  
 仁和寺に父母と見し御室桜花の終はりて若葉の茂る  
 流れくる閉門まぢかの境内に修行僧らの真言読経  
 対岸の平等院鳳凰堂弁柄色が楓に映ゆる  
 本店の開店前に列をなす京都市出町のふたばの豆餅

青い瞳物言ひたげに見つめくるモジリアーニのおさげ髪の少女  
溜池の工事の終はり役目終へ堤に戻らぬ半鐘台は

急ぎみて転けたる時の痛みより己の反省人の優しさ

下校時の児童の背のランドセル軽やかカラフル我が子らよりも

ふつとした仕草が母に似て来つと八歳違ひの吾に似る妹

母の友九十五歳ふる里に迎へくれたる母なるやうに

「歌読めばあんたの様子がよく分かる」九十五歳媪の言へり

兄妹で腕組む写真ハセピア色叔母のそばへと一枚はがしぬ

お別れも出来ぬままなる初盆に叔父の歌載る七月号を

ふる里に会へぬ父ははの送り火に淡墨なぞりぬ般若心経

「千日紅生家の庭に咲いてゐた」手に触れ母は何度も言ひし

幼孫われの似顔絵口元が描けないといふマスクの下の

嫁入りの絞りの羽織を仕立て直し孫の初着に七五三にと

畳紙に見なれし母の草書文字絞りの羽織活用のよろこび

誕生の娘を抱きて家路へと木屋にほひき車の窓に

百日紅咲く境内はしづもりて閉づる臉に幼が走る

筆蘭の鉢植を木陰で夏を越し葉の色つややか秋日に立ちぬ

茜いろ背に受けつつ炭熾す夏のなごりのパラソルの下

色褪せず咲き継ぐ庭の百日草季節移りて百日過ぎて

貰ひたる瓢箪型の南瓜をしばらく飾りて包丁入れぬ

キャンバスに一枝つつを盛るやうに野山の草花重なりあひて

ピロイドの風合に残る花びらのあぢさゝ手折りぬ冬枯れの中

夕暮れの池面を渡る寒風にずらせるマスクを元に戻せり

白壁の洒落たる家の扉に沿ひどこか懐かしカンナの朱赤

まつ黒な大きな丸葉思はせるカンナの種を手に乗せ転がす

白壁が夕日の色に変はるころ屋根高くに見ゆほのかに照る月

野辺の実を真中に重ねるスワッグの束を逆さにバランス見ながら

愛用の湯飲みの片を拾ひつつ貰ひたる人浮かべてをりぬ

標縄と袋の中に文いくつ揺れる炎に煙となりゆく

早朝の長き影追ひ坂を行く方向変へて日は背押しくるる

三回目接種を終はりて街並の春めく景色駅までの道

雛まつり一日遅れの週末に彩りちらし受験終はりて

いつもとはひと筋違ふ道をゆく角に華やぐビオラに誘われ

店頭に玉筋魚並ぶ久びさに夫はレシピをフアイルに取り出す

末孫の入学準備の袋物残布で作る小さなポシェット

髪切りてスーツを着たる入学の十八歳は成人年齢

母の日の宛名は子の字でアレンジの彩りを見る嫁の気遣ひ

乗り遅れバス待つベンチの屋下り緑の風に木洩れ日ゆるる

去年の燕建築中の向かひ家に人住みたれば今年戻らず

雨上がり近づく夏の風にのり十葉の香の庭にうごきぬ

つややかな朝採り茄子を頂きてまづは焼茄子火加減ほどよく

母の待つ夏の食卓大皿にいつも並びき茄子の山椒和へ

妹に手作りの服を褒められて引き受けたれど作るは難き

四年生その色の名を覚えたる遠き山並に群青の色

校庭を画板首からわくわくと白い画用紙に風景さがす

茶の稽古休みの続きで夏が来ぬ師への絵葉書ほほづきの朱

空高くベンチに仰ぐ茜雲旅の国ぐに遠くなりゆく

神戸から六甲山を渡り来る火花が届ける夏の始まり

旅したる礼文島でのドキュメント父と子で継ぐ離島の医療

武田様お名前親しむ作品二叙勲の喜びあふるる歌うた

訪ね来る息子は小さく右手上ぐ背を押しつつ「おかえりなさい」

コロナ禍にも六年生は成長期声変りして姉の背を越す

メッセージ添へたる動画のストーリー孫から届く敬老の日に

バドミントン従兄の孫が載る雑誌目元に残る伯母の面影

駆除されて帰る巣のなく働き蜂は風に吹かれて行つたり来たり

はやさか ふ み こ  
早坂富美子 (山形県)

あつけらかんの春の訪れ

最上川に懸かる大きな虹ひとつ覆ふ黒雲にたちまち消ゆる  
峠路に摘みたる野菊携へて姉の墓前に寄りて行かむか  
空家なる姉の婚家の庭に咲く花魁草は今を盛りに  
摘み来たる野菊を供へ独り言つ無沙汰を詫びて手を合はせめつ  
銀杏並木に夕日とどきて金色に染まりつつ行く園児らの列  
むせかへり咳込む夫の傍へにて何なすことも出来ず狼狽ふ  
西の空茜に染めて山の端に入日刻々顔を隠せり  
等間隔に打ち上げらるる尺玉の花火つぎつぎ夜空に開く  
棧俵に腰をおろして最上川みつむる茂吉の背中が淋し  
西空に今し沈まむ夕つ日に染まる蔵王を飽かず見てをり  
術後半年夫の話す片言の言葉一つもおろそかならず  
自づから受話器を取りて話しみる夫にエールの拍手送らむ  
コロナ禍に昼を灯して老い二人何為すにあらず一日暮れたり  
ざわざわと櫛の古葉を騒がせて月山嵐の未だも止まず  
仁清の国宝「藤花文茶壺」展示すと聞けば観たさに訪ひし遠き日

長い長いエスカレーターに運ばれて丘の上なる美術館に着く  
仁清の藤花文茶壺を観むと来て「MOA」美術館に心躍らす  
美術館の展示室なる真ん中に藤花文茶壺は展示されるき  
鷗外の本名は森林太郎共箱に似たるサインもありぬ  
雛の絵を描きたりしは鷗外か胸に温む夢のひとつを  
鷗外の出身地なる島根県津和野の町を訪ひし遠き日  
屋根上の雪をおろせる人ら皆雪の多さを挨拶となし  
晴天日続きたちまち雪の消えあつけらかんの春の訪れ  
雪囲ひ解かれて並ぶ草花の鉢に次ぎ次ぎ花芽ふくらむ  
雲一つなき青空に負けまじと言はむばかりに咲くいぬふぐり  
剪定の終へたる畑に水色のいぬふぐり咲く畑のあかるさ  
蹲踞に水を満たさむ青竹の懸樋設へ春を迎へん  
満々と水たたへたる蹲踞に映る三日月しばし見てをり  
二階建ての屋根より高く枝を張り今を盛りに咲く山法師  
庭に遊ぶ椋鳥一羽つくばひの水に潜りて余念のあらず

太陽も月も見ること叶はずに「ウクライナ人民」避難所に籠る  
 襪深き葉山の雪も解け始め一日一日の景色が変る

信楽の器に活けたるカサブランカ九個の花の白のまばゆさ  
 幾百の鉢の草花に水をやる日課の夫の生き生きとして

桃の花咲く畑中を悠然と雉のめぐりぬ鶏冠振りつつ

ケンケンと雉鳴く声の高らかにひねもす桃の畑より聞こゆ

幼な日に螢狩りせし故里の畦田に鉦泉湧きて賑はふ

「ごろびつ」と呼びし弁当箱背に負ひて山に出で行く父のまぼろし

腰痛のわれにと孫より届きたる花柄模様の洒落たステッキ

酷暑なる氣候異変かこの夏のみんみん蟬の鳴く声聞かず

秋晴れの一日夫と連れ立ちて鮎祭りなる築場に向かふ

炭火もて塩焼さるる子持鮎香しきかをり風に乗り来る

名物の蕎麦処なる大石田何時訪ひ来ても大入り満員

大石田に向かふ道々両側の畑に真白き蕎麦の花咲く

蕎麦の花群れ咲く畑を借景に遠く聳える月山の見ゆ

返り咲く赤き躑躅の冴え冴えと花の終へたる庭を彩る  
 赤き雷あまた付きたる山茶花の花を携へ友の訪ひ来ぬ  
 術後まだ日浅き夫よ何故にかくも急かさる冬の仕度  
 手術日と重なりコロナワクチンの接種を共に受けず過ぎたり  
 ワクチンの接種を共に受けず来て罪めく想ひひたひたと湧く  
 旧九左衛門家の雛のまつり昨年今年コロナ禍ゆゑに中止となりぬ  
 来年の雛の祭りのセレモニー三月五日しかと決まりぬ  
 舌癌の手術後五月経たる夫もたつく言葉に苛つ時あり  
 道の辺に未枯れる野菊猫じやらし霜の凍て付き銀に輝く  
 「蔵王連山うす紫に染まつてる」友の誘ひに慌て出で来ぬ  
 雪多き今年の冬と報じられ夫と揃ひの長靴求む  
 言語障害の後遺症を恐れ舌癌の手術を躊躇ひたる夫よ  
 月一度馴染みの床屋に予約して夫はその日を曆に記す  
 正月の花とし活くる鉢植糸の万年青は凜と赤き実を抱く  
 霞城公園の桜まつりに求めたる雛の掛軸大切に持つ  
 掛軸の古き共箱に書かれある「雛」「林太郎」それに「落款」  
 囲ひより出せる鉢のクロッカス晴れたる空を仰ぎ咲きぬ  
 降雪の多い冬日と予報され萎みてあたる胸膨らみぬ  
 冬期間居間にて培ふ鉢植糸の「ポトス」を今日は戸外に移す  
 梅の花に似たる小さな「白雪芥子」今日母の日を祝ぐがに咲きぬ  
 術後診察の予約入れたるをつい忘れ連絡受けて慌てふためく  
 ありし日の打田先生と登りにき雪まだ残る早春の季  
 百万ドルの看板掲げ満天星の古木は葉山の頂近く  
 ふさぎある心開かむ昨日今日カサブランカの花少し汚るる  
 八重咲きの叢草の花五つ六つ庭に咲かせて満悦の夫

野鼠に喰ひ荒らされたるオーレンの芽吹かぬ鉢を歎き見つむる  
 ダムの面をすれすれに飛ぶ大鷲の何を狙ふや羽音鋭し  
 良き色に漬かりたる茄子を白志野の器に盛りて夫と茶を汲む  
 庭に咲く夾竹桃を盂蘭盆に捧げ供へむ先祖の墓に  
 八十歳越さば解ると常言ひし姉を偲ぶむ今日盂蘭盆会  
 ありし日の母植糸くれし白桔梗手折り供へむ今日盂蘭盆会  
 コロナウイルスに感染したる横浜の次男の家族帰郷かなはず  
 家族三人感染したるに息子のみ咳と高熱未だ続くと  
 小児喘息に苦しむたりし息子「宏明」全快したると信じてゐたに  
 長岡の花火大会を放映すテレビ観てゐるここ山形に  
 忙しさに追はるる日々続きみてわが詠む歌の自づと狭し  
 三つ折りに畳めるステッキ明りまで施されみて有り難きかな  
 仲秋の月を見むとて庭に置く椅子に凭れて月の出を待つ  
 仲秋の月に供へむ糸世秋明菊に枝豆添へて  
 野紺菊水引き草に猫じやらし朝の庭より摘みて飾らな  
 塩焼の鮎大好きと言ふ友に土産の鮎を三包み買ひぬ  
 兩岸の木々の紅葉映しつづ流れ豊かな最上川望む  
 好物の蕎麦を目当てに誘はれて夫と訪ぬる今日のドライブ

## 夢に来て

夢に来て物言わんとする亡き兄に私の声は絞りても出ず  
 紫のいろ鮮やかな紅芋を餅に搗きたり報恩講の  
 ラーメンにカボチャの花を煮込みいて進路を話す孫との昼餉  
 ゆったりとひとりの時間過ごせると息子の勧めスマートフォンは  
 落つる花今日も拾いて明日咲くつぼみを見上ぐ琉球朝顔  
 縹色の琉球あさがお熊蜂の羽音は低し小春日和に  
 七十歳ひとりで生きる技もなく嫁ぎたる家に主の顔する  
 柔らかな師走の日差しに豆漕ぎの絶え間なき音少しの緊張  
 機械より吐き出る豆殻掃き払いしゃがむと立つの五時間余り  
 箕を手に揺らして煽る風に飛ぶ豆殻とチリに残る黒豆  
 筋トレの少しすぎたる翌日に痛みは出たかと友からLINE  
 昨日まで働かし義兄の死化粧に目を逸らしいる姉に添いたり  
 フェリーより島にあがればようこそと赤い帽子の地蔵の並ぶ  
 手に取れるデコポン軽し空洞はメジロの啄めり海辺の畑  
 登る木に手足伸ばせど高枝に残る蜜柑は若きに任す

ふじ た なつ み  
 藤田夏見 ☆ (広島県)

蜜柑摘む畑に五人の留学生歌声に似るインドネシア語  
 庭に炊く二つの羽釜黒豆のかまどの火の番児を守ること  
 黒豆を指に潰して「煮えたよ」と孫の渡すを口に確かむ  
 孫の操るミンサーに豆注ぐ夫綻ぶ顔にたちまち五キロ  
 黒豆と塩と糶のまるめるを若きが収む二つの桶に  
 活きのよい瀬戸内の海老と庭に干す細魚も熾火に焼きつつ昼餉  
 玉葱は五百グラムの乳白色地球の水をたっぶり含む  
 ばあちゃんにあげると小さき孫の手に消しゴムひとつ真新しきを  
 冬越しの西洋あさがお鉢ならべ夫は始める今年のカーテン  
 百日草コスモスひまわり種々の零れたるもの庭に芽吹きぬ  
 母と植えしラビットテールは道の駅に見つけたるもの二十年咲く  
 柔らかなまろき蕾の柚子白く粃種を蒔く五月となりぬ  
 笹の葉に似たる笹百合そよそよと木漏れ日の中ホトトギスの声  
 笹百合のこぼれ育つを数えつつ笹かき分ける銚を支えに  
 あおぎ見るふもとの人に呼びかける来年に咲く笹百合ここと

稜線の残光ありて草むらに螢のひかり灯り始める  
闇となり光の軌跡しるくなる立ちいる橋のずつと先まで  
橋により佇む人の掌にそつと載せたり源氏螢を

三キロの下流の生まれ家すでになく半世紀目のこの地の螢  
間引きたるビタミンカラーの人参は手指ほどなり肉じゃがに入る  
完熟のヘタのみどりは瑞みずし旨しと齧る畑のトマト

共襟も袖も解きて布団縫い母は幼きわれを眠らす

若き医師の手術直前の説明に従兄夫婦と並びて聞きぬ

ひとつずつ手術の不安消さんとす動脈瘤執刀の医師の解説

肋骨の切断のち開きゆく動脈瘤の心臓目がけ

最後まで見届けられるや落ち着かぬ手術の進むモニター見つ

淀みなく手術する手の四本は従兄の命を救わんとする

医師の掌に慈しむごとと乗せられて従兄の心臓もとに戻さる

七時間目を逸らさずにモニターの医師の手を見る従兄の妻と

新しき動脈馴染めよ丁寧な四つの手に縫う従兄の心臓

剪定もグラウンドゴルフもユーチューブ「ええおもちゃじゃ」とこの頃の夫

J Aの脱粒機据え古い二軒の助っ人となり黒豆こなす  
農業の師と仰ぎいるわが友に今日も従う男性達は

落花生ささげ黒豆栗も入る紅芋ご飯のむすび差し入れす

「久しぶりお布団の中」とはずむごといつもの声に電話のきみは  
こんなにも痩せいる友の今日も又「医者嫌いな」にただ笑まうのみ

医者嫌い貫き通す友なりき痛みにやがて薬を受ける

絵本の会、PTAより四十年ママ友酒好き同年生まれ

茶も花も文月までと気丈さに涙のこぼる霜月初冬

生前に生けたる花のアルバムにひとり見入り弔問の間に  
玄関の迎春の花きみを師に大壺の中華やかにあり

告げられし余命三月を魚売りし義兄を讀える医師も僧侶も

道沿いのデコポンの木に喰いちぎる皮の残り猪通る跡  
黒豆の膨らまんとす二晩を水足しやれば尚も含みて

寒空の味噌の仕込みに駆けつける孫を迎えて勢う夫

軛の津の産土神に並び建つ菩提寺に入る義兄の七七忌

同郷の集いの後の別れざわ呼び止め渡さる鱒二の冊子

「黒い雨」読んだかと問いし高校教師鱒二の甥は風貌も似る  
読まざると小声に答えし「黒い雨」図書館職員重松の姪に

塩、醤油に堂々優る調味料は戦時下の味噌とシゲ子の手記あり

「良いことは何ひとつ生まぬ戦争」と岩竹博氏夫妻の記録

「耳鳴りは原爆禁止の警鐘」と岩竹博氏片耳にして

三度目を読みつつ居りて「黒い雨」読み聞かせたしウラジー  
ミル・プーチン

物騒な言葉飛び交う北の国 生物兵器 核のボタンと

畑仕事終えて午後より冷え性の足を炬燵に歌と真向かう

百箇日終えたる事を告げながら姉の摘みいる赤き撫子

昼長く返り花咲く紫木蓮挿木に枝を持ちゆける人

収穫の少し遅れた茄子太し昼餉にひとりニンニクと焼く

切り刻むネバネバみどりは酢の物にオクラ料理はそれのみの母  
洗濯機に回して竿に広げ干す母を思えり母の着物に

衣桁掛けの母の着物は問仕切りとアートを兼ねるベッドの側に

柵の生垣に這う南京の太りて沈む葉叢の中に

柵の刈り揃えたる生垣にコルク色する南京の帯

僅かなる通り雨ゆき裏山にかなかなの声一匹の声

黒雲は遠くにありて遠雷も聞きつつ水遣る畑に今日も

早朝に車走らせ入院の従兄に付きゆく九十キロを

持ち来たる薬を従兄はわれに見す入院手続き長く待ちつつ  
入院と手術の不安あるものを従兄は芳う付きいるわれを

缶ビールのつまみに買い来る竹輪など今日は夫が労いて呉る  
大いなる瘤の出来たる動脈の画面に映る従兄の心臓

夏休み練りに練りたる計画と三重の孫らは勇み来たりぬ

賑やかに集い戯る孫達に風邪の症状ふたりの感染

十日間ふたつの家族触れあえず三重の孫らの籠るわが家  
生まれ家の庭に二人子遊ばせるコロナ禍中に帰省の娘

トウモロコシ大玉スイカ茄子トマト夫の笑顔は孫との食事

好物の南京を煮て網戸越しに届ける先は咽喉あかき孫  
感染をせぬ末子守りて二週間三人子の母は猛暑を籠る



ほんま しづこ  
本間志津子 (山形県)

## 戦禍と四季と

家々の屋根を照らして冷え冷えと空渡りゆく後の月なり  
 抜き放つ刃さながらざらりとし雷鳴どしや降り来たる暁  
 通院の道に散り敷く街路樹の黄なる落ち葉に細き雨降る  
 亡き友と語るがごとく読み耽る若かりし日の友の歌集を  
 白みゆく窓に朝明け起き出でむ未来へ続く一歩のために  
 冬の木々空に広がり宿すもの梢の先に精気漂ふ  
 雪深き青森の街切り変はる朝のニュースは南の街へと  
 兵糧の乏しきままに籠城の兵士ら思ふ雪に籠れば  
 雪道に白く大きな秋田犬曳きある人と道譲り合ふ  
 人と犬直ぐに立ち去る雪道に一期一会を思ふたまゆら  
 雪繁き空を仰げば万華鏡吾が身も雪の一片となる  
 タクシーに帰る夜道の雪明り見知らぬ遠き街行くごとし  
 屋根の雪なだれ落ち来る軒端より雫滴る寒中の晴れ  
 北風は身に冷たくも日脚伸びひかり溢るる如月の空  
 大人しく繋がれて待つ秋田犬スーパ―出口雪堆し

ロシア軍のウクライナへの侵攻を伝ふるニュース世界をめぐる  
 幼子の死さへ恐れぬプーチンの究極のエゴ許してならず  
 数へきれぬいのちと暮らし奪ふのか戦よ終れプーチンよ去れ  
 ウクライナの戦禍のさまに怖えつつ幼き日遭ひし空襲思ふ  
 壕に満つる団扇太鼓と御題目唱和し耐へき低空飛行に  
 無条件降伏の声ラジオより流れたちまち終戦となる  
 少しづつ変わりゆきたる吾がめぐり非戦の願ひ変らず今も  
 東京に染井吉野は開花とか千鳥ヶ淵に人ら群れゐて  
 ウクライナロシアにコロナ出口なき閉塞感よ桜ほぐるる  
 ひねもすの雨に山椒の葉は伸びて孟宗汁に香りを添ふる  
 たわわなる姫ライラック隣家に紫匂ふ桜散る朝  
 鈴蘭の固く閉ぢたる葉がほぐれ米粒ほどの蒼現る  
 そのかみのスターリンよりプーチンへ続く系譜を今更思ふ  
 シベリアにわが同胞ら酷使され死者六万余とふ戦後思へり  
 遠くより祭り囃子の太鼓の音聞こえるなり若葉の中を

寒さより暑さへ変るに間は要らず梅雨入り三日じわりと暑し  
 濃き淡き薔薇に囲まれ洋館の一際白し梅雨の晴れ間は  
 梅雨なるも晴るる日続く夜明け前驟雨た走る音に目覚めぬ  
 澄み渡る今日夏至の空暮れなづみやがて寄せる闇に順まっらふ  
 里近く紅淡き合歓の花群れ咲くを見つつ山路を下る  
 黄なる空オレンジ色に染まりゆき水平線に日没迫る  
 氾濫に塗れ来たるか最上川濁れる水は河口へ向かふ  
 晴れ渡る一日の終り最上川豊かに水の澄みて流るも  
 昼過ぎの雲より淡き白き月西の雲居に紛れてしまふ  
 お辞儀するゑのころ草に芒の穂会釈を返す涼風の道  
 さるすべり來竹桃は赤々と日盛り暑きかの夏の日も  
 帰らざる戦没者三百万名七十七回目の八月が来る  
 一つの世も兵士らを死地に立たしめて心痛まぬか戦争主導者よ  
 台風の去りたる朝の肌寒さセーター二枚重ね着したり  
 秋彼岸供花の竜胆藍深み墓地に涼風渡りゆくなり

中腹は紅葉の色に迫り寄る晴れ渡りたる今日の鳥海  
 かつてわれ鳥海山の峯に立ち太平洋の日の出を待ちき  
 飛鳥と鳥海山はユネスコのジオパークとなり五年を経たり  
 文化祭のゲストの夫妻は新婚とか「革命」に「トスカ」演奏したり  
 結婚を予感させつつ朝ドラの二人も去れり今朝を限りに  
 道に散る紅き楓を拾ひ上げ葉とせむかノートに挿む  
 吾が袋積み上げ呉る若人の心根嬉しゴミ収集日に  
 過去よりの贈り物とてクイーンズのライブの放映夜更けまで観る  
 信号と手押し車を頼みとす運転免許返納の身は  
 弟の送り呉れたる九州の南国の光宿すみかんよ  
 数年に一度レベルの寒波とか水道管の凍るが怖し  
 四日間降り続きたる雪の嵩出口を塞ぎ堆くなる  
 クリスマス寒波のあとは二日凪ぎ急ぎ買ひたり当座の食材を  
 小康の後に年越し寒波来る視界を閉ざす地吹雪激し  
 しんしんと雪降りしきる静けさに身を沈めては遠き日思ふ  
 吹雪く夜のむかしむかしのサルとカニ祖母の語りを只なつかしむ  
 バイトへと急ぎ出でゆく孫の背に日差し明るみ卒業近し  
 猫が好き犬もバンドもみんな好き幼き頃の孫なつかしむ  
 戦争に反対のデモ声を挙ぐ自国ロシアの国内にさへ  
 白鳥の北帰果せぬ餓死あまた田の面を被ふ雪深きゆゑ  
 北国へ白鳥の群降りゆく死を乗り越えて命をつなげ  
 悪名は戦禍とともに世界史に語り継がれてゆくのだらうか  
 この空のかなたに遠きウクライナ平和もどらずもどかしき春  
 波高く水温低き知床の沖に消えたる遊覧船は  
 荒波へ投げ出されたる瞬間の客らの思ひいかにばかりなる

保安庁地元漁船から自衛隊総出の救助難航しをり  
 次々と救助されたる十四名意識不明は死者へと変はる  
 マリウポリ実効支配始まるかロシアの国旗高々とあり  
 瑞賢の西廻り航路開設の基点は酒田二百五十年前  
 町衆の富の所産か東北の三大祭り<sup>と山王祭り</sup>は  
 風に散る松の枯葉を袋詰めゴミに出さむか朝明け涼し  
 風に揺るる木々の緑に思ひ出づ昨日のバスの窓の景色を  
 おお寒と身震ひしたる水無月の半ば東北梅雨入りとなる  
 曳く女性ことばの意味が分かると記す調査結果は  
 犬猫と侮る勿れ名や言葉分かると記す調査結果は  
 一日降りなほ小止みなき夕つ方羽生結弦のプロ入り報ず  
 降れば晴れを晴れば雨を望むのか二度目の梅雨明け心もとなし  
 眠りつつママの洋服握りしめ三か月児は診察室へ  
 才能の開花をたどる特集はショパンコンクール二位反田恭平氏なり  
 反田氏のピアノ演奏ポロネーズ晴れ晴れと聞く朝のテレビに  
 二車線へ橋梁工事進みをり川面煌めき西日を返す  
 夏祭り二度中止後の三年目設へ忙し今朝の公園  
 温暖化に偏西風の蛇行こそ異常気象を生むもときく  
 中秋の名月今し昇りくる街灯明るき路地の真上に  
 列島を横断しゆく台風と交々映る女王の葬列  
 エジンバラの石畳踏み通り過ぐ女王の葬列見守る人垣  
 あなうらに石畳今もありありとホームステイにありしかの頃  
 もてなしと導きを呉れしアイリーンと過ぐしし夏を偲ぶ秋の夜  
 紅の薔薇ただ一つ咲きあたりエジンバラを発つ朝の庭に  
 冷やし中華そろそろ終りか秋彼岸北海道は紅葉ときく

## 寒満月

季を待ちて咲き初めたる金木犀夜来の雨に小花零るる  
 紅葉は山に見るべし庭畑の落葉始末に難儀してをり  
 晩秋の脊梁歩く平家山鹿<sup>からく</sup>みてカモシカ走る林道  
 霜柱踏みつつ進む<sup>からく</sup>韓<sup>からく</sup>国<sup>からく</sup>岳<sup>からく</sup>の樹々に霧氷の輝きてをり  
 風強く凍てつく山の岩石に数多付きたり海老の尻尾の  
 五時起きの幸を受けたる今朝の空流星ふたつシリウスの上(ふたご座)  
(しぶんぎ座)  
 角度良き滑り台あり寝ころびて朝六時の空を見上ぐる  
 若さとは老いて知るもの八人の孫子の如く熱くはなれず  
 恒例の<sup>だご</sup>汁会は自肅など関はりなきか冬の頂  
 静かなる寒満月を友として励む朝のラヂオ躰操  
 頂の遠景に見る天草の海原青し冬陽に映えて  
 雪山の誘ひを受くるをとつひの九重の山とけふの阿蘇山  
 雪の積む頂に見ゆる雲海の広がる上に青き祖母山  
 大阿蘇の外輪山の断崖に氷柱ふたすぢ男滝と女滝  
 二日後に会ふ約束の友の言ふコロナウイルス陽性なりと

ますさかよりこ  
 益坂順子 (福岡県)

コロナ禍の日常なれば道の辺にマスクを落とす人ありけふも  
 誘はるるままに参加をしたる山その都度最後と思うたりして  
 漸くに春となりしか孫の声笑顔の浮かぶ十年を経て  
 防寒を兼ねたるマスク季移り何時しか世間体<sup>せけんたい</sup>に付けをり  
 群れて咲く薩摩稲森ながめつつ樹林の中の空気の旨し  
 緑濃き市房山の中腹に垣間見えたりダム湖の光  
 山頂の見え隠れする九合目足の運びの早くなりたり  
 球磨牛と鹿肉山菜並びをり水上村の素朴なる宿  
 岩峰に曙躑躅の色添ふる彼の日と同じ大崩山の  
 祝子川に架かりし丸太の橋のなく吸はれるごとき岩間の流れ  
 意を決し裾を捲りて靴を脱ぎ一步踏み出す冷たき川に  
 徒渉終へ感覚乏しき両足を包みてゐたり綿のタオルに  
 この夏も遠征登山する予定気力あるのみ齢重ねて  
 ワクチンの三回目接種証明の必要といふ山小屋予約す  
 引返す足取り重く幌尻岳の登山断たるる川の増水

アイゼンの装着整へ雪溪に一步踏み出す氣を引き締めて  
雪溪と緑と岩と姫小百合はればれと映ゆ大朝日岳

疲労より満足感の勝りたる尾根に咲きある花を愛でつつ

苗場山の湿原広がる頂の池塘の中にハートの形

蝦夷鹿と蝦夷栗鼠の住む領域に踏み込みたるかアポイ岳登山

大雨の映像見つつ恐れをりその石川県に明日発つ予定

忘却となりたる白山再びの登山に挑む折れぬ心の

思ひ出の美ヶ原を訪ふひと日四つ葉を探す牧場辺り

七と四の数字蠟燭立つケーキ山にて祝ふ友の誕生日

飛驒牛と信州牛を日替はりに下山の後の胃の腑を満たす

一人居にこの頃慣れたる夫なれど饒舌となる晩酌のとき

峰々は群青色に染まりゐて心身満たす荒島岳山頂

十一峰のピークを越ゆるといふ山の遙か彼方に頂あるや

一日に四万六千歩を刻む友と言問ふことも閉ざせり

鎖場とロープ階段緊張の続きて米梅林に憩ふ

若き頃さほど気にせず登りたる扇ヶ鼻の長き道のり

公園に銀木犀の甘き香の漂ひてをり雨上がる朝

頂に聳えるごとき夜又五倍子の木木を行き交ふ数羽の真鶴

もみぢばの紅の眩しき花水木雨降らぬやう風吹かぬやう

作庭ののちの手入れは暇暇に二人の為事けふ古葉とり

白鳥山の初雪を踏む八合目葉のなきブナの拡がる林

あちこちに湯けむり上ぐる霧島の見え隠れする下山の途中

霧島の高原宿の夕ぐれに宿跨ぎたる虹の彩り

懐かしき高千穂峰変はりなく天の逆鋒突き立ちてをり

近隣のをさな育ちてはや二年ママを呼ぶ声響く夕べに

新築の夢のひとつのジェットバス二十六年前の決断

冬の夜の湯船に浸る時長くバブの泡立つ気流に乗りて

温泉に行きたるつもり入浴剤昨夜の草津けふの白骨

二年ぶり顔を合はせる子や孫の笑顔とともに御節の並ぶ

日の差せる梅の小枝に止まりたる尉鶺の動き軽やか

朝より隣の家に来るユニボ草取り止めて見入るひととき

解体か問へばさうではないといふ笑みて作業の手休みなし

鳥鳴かず車通らずお隣の金属音なきけふ日曜日

基山より天拝山の縦走の行程楽し山城跡ゆく

日差しなき谷の明るみ白き実のいづ千両か寒に耐へをり

瀑布よりほとりほとりと滝つぼに滴あつめてエメラルド色

三叉の蕾ふくらむ滝の辺に歩みすすむる残雪さけて

中世の藪城跡たどるコロナの戦ひ中断をして（天津山阿蘇神社）

ほろ苦き露の臺の届く日の迷ふことなき夜の献立

二年振り男孫の訪ふといふ便り然も紹介したき人もと

十二年欠席なしといふ孫の笑み柔らかし春の一日

親は子へ子は孫へと繋ぎたる欠席なしの健康バトン

蕾付く木香薷薇のたをやかに日差しの中の風を受けをり

若き頃岩稜の山樂しみし其を求めをり年月を経て

大雨の爪あと残る山の道市房杉に背を押されて

朽ち果てたる数多の樞の木囲むがに梅恵草の緑広がる

さながらに黄金の日々過ぎたり老いたる足に刻む八万歩

足のみこの冷たきに知床の海を思へり胸の痛みて

岩山の故に連続する梯子ひたすら登りひたすら下る

庭畑に草の目立ちて腰下ろす吾待ちたるか蚊の打ち集ふ

馬鈴薯と玉葱トマト友よりの差し入れ桃の二つを添へて

移動日のひと日訪ひたる観光に襟裳岬とアイヌ文化博物館

本場所の閑取衆に容赦なく襲ひ来るかコロナウイルス

懐かしき色付け元素の周期表思ひ出しをりけふの紙面に

「ただいま」久々孫の訪ひ来たり「初めまして」と傍らの

彼氏

旅先の白樺湖畔午後八時花火上がりて束の間の幸

蓼科山の優しき名前と裏腹に緊張はしる岩の続きで

池の面に雪溪映す乗鞍岳の遙かかなたに剣ヶ峰見ゆ

誘はるる時は行くこと勧めたる夫に感謝の楽しい登山

訪ひ来たる孫のフィアンセ爽やかな笑顔残して去る亮太君

百日紅百日草は夏の花さかりの上に赤とんぼ舞ふ

境内に数多落ちたる銀杏を拾ふ人なく氣になりてをり

ロープウェイ使へるけふの筑波山百人といふ児等と行き交ふ

三時起床四時出発の皇海山歩き歩きてひとつのピーク

戸隠の神社を訪ひて聳え立つ杉のパワー降り注ぐ午後  
夕ぐれの機窓に雲の沸き上がり茜に染まる琵琶湖上空

## コロナ禍の賜りもの

まつ い みつ こ  
松居光子 (三重県)

電子辞書とタブレットを傍に置きクロスワードを解く日曜日  
ひとりでは全解答の難しく虫食ひだらけのクロスワード  
クロスワードのマス目埋むるに躓きて夫とふたりで考へあぐむ  
空白のマスの残れば意地となり言葉探して時の過ぎゆく  
もう使ふことは無きかと思ひきり取り置きし端切れ処分せんとす  
この布はわれのスカートこれは子のワンピースだつたと懐かしくなる  
余りたる小さき布にも思ひ出のありて少しは残し置きたり  
うす味に作りたる七種の節料理と買ひたる五品を重箱に詰む  
黒豆に田作り昆布巻まづまづの味に仕上がり新年を祝ぐ  
届きたる賀状の端の添へ書きにコロナの終息ねがふもの多し  
もらひたる干支の根付を幸あれとスマホに付けぬ歳女のわれ  
補聴器の閉塞音が気になりて幾度も調整してもらひたり  
己が耳より勝るものなく補聴器を通す声には違和感のあり  
「ばあばの服をかしいよ」と小一の孫テレビ電話に映るわれ見て  
二十年ほど前に編みたるセーターはラメの入りたるローズ色のもの

捨つるほど傷みてをらず派手過ぎと思ひながらも着続けて来し  
 女の孫のひと言に心動きたり躊躇ひてゐし断捨離のひとつ  
 和箆筒の抽斗あけて永年を眠りてゐたる帯を手にとる  
 若き日にお茶の稽古に幾たびか締めた記憶あるウールの帯は  
 この帯なら我にもリメイクできさうと思ひ切つてバッグに仕立てぬ  
 世界でたつた一つのバッグ提げ何か私も新しくなる  
 ゆつたりと針持ちバッグを作りたる時間はコロナ禍の贈りもの  
 わが町の広報四月号が届きたり表紙の文字をリニューアルして  
 「KUWANA」より「くわな」の方がしつくりと歴史ある町に相応しかりき  
 頁繰ればQRコードの数多あり時代の流れの著けき広報誌  
 横書きの記事の増えたる広報はカタカナ文字の多くなりをり  
 朝市に買ひたる筍あざけし切り口しろく皮はつややか  
 筍を茹でむと穂先を包丁で切り落とすにも力及ばず  
 今までは難なくできたのにと嘆きつつ夫の手を借り筍ゆでぬ  
 夕飯のメニューは決まりぬ朝ドラのおいしさうなるフーチャンプルー

車麩とニラもやし卵を用意して厨に立てば「ちむどんどん」  
 われと息子娘も弾きしアップライトピアノ亡父に詫びつつ手放すこととす  
 処分する古きピアノを運びゆくトラック走るを見送りてをり  
 新しく電子ピアノを贖ひぬ省スペースですつきりとする  
 音量を調節できてヘッドフォンを使へばめぐりに気兼ねの要らぬ  
 ミニトマトのたくさん採れて試みに作りたるジャムのとろみ程よく  
 ちよつぴりとトマトの香り残りみてヨーグルトによしトーストによし  
 透きとほる葡萄のゼリー目にすずし食めばつるりと喉にやさし  
 発芽した甘藷を切り取り水につけ日ごとに葉つばの伸ぶるを樂しむ  
 ビー玉を底に敷きたるガラス器に伸びた芋の葉のよくマッチして  
 食用の甘藷を観葉植物に育ててお洒落なインテリアとなる  
 塩対応 神対応とふ新語知る首を捻りたるクロスワードに  
 部品もなく修理のできぬ古きミシンけふ不燃物のゴミに出したり  
 使ふこともなき戴き物のナフキンをつなぎてサロンエプロン縫ひぬ  
 ありあはせのチロリアンテープを紐にして手縫ひのエプロンできあがりたり

事務的な印刷物あまた届く中郵便受けに自筆の葉書  
 五年まり会はぬ友の面うかべつつ繰り返し繰り返し読みたり  
 風強き師走朔日とどきたる葉書一葉にあたたまりある  
 ル・レクチェをスーパードで見つけ購ひぬラ・フランスより黄  
 色く華やか

濃厚な甘みと豊かな香りしてル・レクチェ味はふ初冬のデ  
 ザート

心なしか陽ざし明るみ鉢植ゑの梅の蕾の膨らみ確かむ

掌をコーヒークップに暖めつつ雪化粧せる木木眺めゆる

少しでも牛乳の消費に協力せんとクリームシチューをメ  
 ニューに加へぬ

飾りたる五月人形を喜びて「心が暖かくなるね」と小二の男孫

鮮らけき朝焼けの空あふぎ見つつ心みたされ今日の始まる

散歩道に群れ咲く栗の花房は風に揺れをり梅雨入り間近

予期もせぬ早さの今年の梅雨明けに慌てて真夏の服を熨しをり  
 コロナウイルスの「BA・5」勢ひきて感染者数の気になる日

にち

三年振りに時間短縮で催さるる花火大会を居間より楽しむ

窓越しにスターマインを写しながら離り住む孫とテレビ電話

せり

孫たちの宿題は如何にと思ひつつ縮切り近き歌に對ひある

お歳暮と年賀状のカタログの届きて見をりふた月も早く

早割りとふ特典つけて消費者を煽る商ひにつられゆくなり

まつもとひでお  
 松本英夫 (東京都)

## 春紫苑

その楽の潮流の行き重星逝く天つ空には星のかがやき

みづかきは水面をたたき駆けにかけ大空得たる二羽の白鳥

パソコンの部屋に流るる三拍子ジュ・トゥ・ヴにのり今日の走り出す

マスクして「お元気ですか」とすれ違ふ一目で知れる優しき眼差し

縋りくる家族を救ひしビザの褪せ「杉原千畝」のはつかに残る

杉原を辞職に追ひし大臣は法を楯とす大戦終はるも

面打てば体をかはされ空を切る試合にならぬ国会答弁

ぶちぶちと引き千切らるる鉄筋に住みにし人のしるし消えゆく

平塚をカメラと出でて薬研坂上る路面に朝日の白し

酸素負ひ笑みに送られ大会を去りし姿の永遠に消えたり

助動詞の表を渡して見返ればいつまでも立ち送りくれたり

通るたびにマンション群を見上げては何処に住まふと思ひたりしに

世を経ればもはや見ることなかりけり試験を前に真つ白な夢

免許返し息子らも来ず高速の渋滞情報見ることもなし

朝焼けの遠くに見えてこの街へ朝のリレーの海越え来る

面倒だもういいやと思ひつつ最後は吸ひ取る隅つこの塵  
 七夕のメロデー流れ発車する旅のホームに逝きし人思ふ  
 光さし雲影ゆらりと過ぎゆけば梅花のひとしほ色めきにけり  
 山裾は風なほ寒くゆらぎるしだれ梅には花の二つ三つ  
 阿蘇山の草野に解かれ牛たちはピンコシャンコと飛びはね駆ける  
 階段を二段飛ばしに春が来るさくら膨らむ三月十日  
 和泉橋より見下ろせばかもめ飛び花びらあやなす雨の神田川  
 授業終へ息子は友と並びしや初めて入る生協食堂  
 蒲公英は二百個ほどのいのち抱き茎を伸ばして風を待ちをり  
 桃色のつぼみに囲まれすらり立ち日輪のごと春紫苑咲く  
 赤提灯点れる下に野牡丹の一夜の色香にほふむらさき  
 赤白の浜木綿の咲き日輪は海に落つるを急きはじめてたり  
 つよき香の風に乗り来てそれと知るああこの道は金木犀の季  
 家々のともしび消えてこぼる吾を迎へくれしは大三角形  
 サイパンの渺たる海の果つる辺に今生一度の南十字星見き

共に連れ商談の場に光りぬし黒き鞆の捨てがたきを棄つ  
 「八の日は割引」に釣られ入りたる豚骨ラーメンのえび味うまし  
 雨あがり光る銀座の敷石に外国人の声ひびきぬき  
 五階建て四号棟にをさな見ゆ祖父母の待ちにし夏休みらし  
 うち振る浴衣の娘の向かうにはバスもゆらげり三十八度に  
 無影灯のあまねき光につつまれてすべてを委ね世界のしづまる  
 改札前人が走れば吾も走る先を急かるる用あるごとく  
 問診票「男女に○」に手の止まる覚え印しし四半世紀を  
 東京に人の流れの籬はづれ「ステイホーム」の死語となりゆく  
 遠目にも裸木ほんのり緑もえ大島桜の咲き初めむとす  
 空青くパラソルとりどり立ち並び糸を垂れある釣り人の午後  
 公園を行けばけやきの紅葉よりちららきらり夕光ふり来  
 時雨打つ池面に丸き輪のあまた五匹の鯉の緋色のあはし  
 うち並ぶ高きけやきの影ゆけばキッチンカーの小さく見えにけり  
 木漏れ日の光る数多のテーブルはランチを食める人に満ちたり



柿むけば運動会の子らの声元気に聞こゆ換気扇より  
四時半のチャイムの冷ゆる帰りみち電線に群るるむくどり黒し  
イグニッションコイルを繋げばエンジンの音高らかにスバルの  
SPのレコード求むる人見れば兄と聴きにしベサメムーチョ思ふ  
見も知らぬカードの重要メール入る絨毯爆撃のフィッシング詐欺  
やよい軒ボタンを押せばおかはりを並盛大盛自在にふつくら  
一晚を悩みたる杉原千畝は職より人の命を思へり  
志ん生や小さんの語りまなうらに座布団むなしき三越劇場  
関口氏求道と歌に一途なる想ひ溢るる「相生坂」は

「億劫」の文字のブログに赤く見ゆ予測したるや極まるるときを  
一回り歳の差みせず野村氏はいつも謙虚なメールをくれき  
スケボーの歌の所以に力入る秋のメールが終になるとは  
引つ越しにテレビを塵と捨つる人矜持投げうち如何に生くらむ  
洗面所廊下の電灯すぐに消しテレビは消せぬ我が家の省エネ  
大量のフィッシングメールを消すうちに大事なものもすいと  
捨てたり

車窓には富士の嶺白くかがやけり札幌駅は終日連休と  
坂道を行けばかなたの山裾に赤白ピンクの梅のもや湧く  
山裾の梅の花々見下ろして柱状節理の岩壁立てり  
湯を上がりどたりと倒れ眠りけり湯河原梅園坂長かりき  
上野駅列車に座せば東北の訛りゆたかに矢板へ向かひき  
荒川に春のさざなみ光りみて竿を振る人、菜の花撮る人  
学生に生協食堂問ひたればアップダウンなき道を推されぬ  
花みつるりんご農家の労苦思ふみつばちの選るは蒲公英の花  
春空に入道雲の湧きたつはなんぢやもんぢやの花の泡立ち

雲高しメタセコイアの極枝には十指を超ゆる青き実揺れる  
ポラロイドフィルムをめぐればぬつくりと誰が撮りしや竹内課長  
始業前ラジオ体操しつつ朝礼に話す言葉を反芻しにき  
パソコンの入力休むことのなし血潮のたぎる四十代はも  
夜遅くまで仕事する夢を見ついつまで続く現役の夢  
園児らはこぶし突き出し「エイエイオー」散歩へ出づる砂町銀座  
みどりなす木立は初夏の風に揺れ紫陽花かをる三越の屋上  
オリパラのエンブレム入りて金色のポスト輝く国立競技場  
「掃部関」の名を負ふ看護師の来し方と行く末推す間に血を  
抜かれたり

鮮血の採血管へほどばしり「行ける」と思ふ喜寿の年明け  
血を採られ計られ診られて七年余三年後なる放免を待つ  
二十年待みし病院に別れつげ電話に聞きたる受付①へ  
もの言はず鮫鮎の針抜き取りてさらりと戻す赤銅の人  
氷雨降る児童公園子ら見えず信号機の青赤に変はれり  
木漏れ日に曼珠沙華咲く公園のベンチの人に時は緩ゆる  
東京駅ラームン街の消え失せぬ大屋根仰ぎしばし動けず  
キッチンカー六台並びランチ出す支度に店主の動きのやまず  
屋となりキッチンカーに白シャツのサラリーマンの列の増えゆく  
食材をトングで素早くつかみ取りトレイに詰めるキッチン  
カーの主  
風そよぐ昼限定のテーブルにタイカレー食む東京国際フォー  
ラム前

## 三好規子 (神奈川県)

### 留学生

朝の道に初冠雪の富士の見ゆ今日子の入院われショートステイへ  
手術すみ七時間のち娘より「生きてゐるよ」とメールの届く  
日の当たる緑の丘の施設にて渡り廊下の長きを行き来す  
木犀の再び香る道ゆけば部屋に聞こえぬ虫の音たかし

上の段に生花が詰まり下の箱に洋菓子セットの届く誕辰  
七十周年の「高嶺」ひらけば木島師の歌が父の前に載りてゐたりぬ  
古き歌誌に川又師と父のうた十首歌の世界は広くて狭し

わが歌集に多くの方が時間さき批評し呉れし感謝の十二月号  
青空に皇帝ダリアが高く咲くピンクの花びら道に敷きつつ  
久びさの教会にての礼拝は心に響くオンラインより

上旬に手紙の遣り取りせし友が熱中症に逝きき七月下旬に  
新年の初外出の病院に十二回目なるMRI豫約

レシートを見せてサイコロ振れば六の目いでて貰ふ六個の林檎  
霜のみち滑らぬやうに落葉ふみ顔を上ぐれば白き富士の嶺  
雪かづく富士のくつきり見ゆる朝スマホに撮れば小さく薄く

中学の部活紹介の動画にてアーチェリー射る孫の大写し  
 頭より大きな熊本の晩白柚の厚きわたにて砂糖漬け作る  
 乞食すると言はれても夫に従ふべきと姑は言ひき嫁ぎてすぐに  
 明治生まれの三回りの上の姑は厳しく優しく働き者なりき  
 額づきて口籠りつつ主に祈る義母の姿のとき折り浮かぶ  
 食卓の真向かひの山に幾箇所か白く霞むは山桜ならむ  
 停留所の横の土手にてつくし摘み春を味はふ味噌汁に入れて  
 はらからと父に連れられ須磨の野に摘みし日おもふ今朝の土筆に  
 公園の裸の櫛の高き枝に大き巢のこる鳥だらうか  
 伊豆山の保養所の窓に海と空の境目きゆる雨に烟りて  
 家具そろへ夫はアパートを提供しき鞆一つに來し留学生に  
 デブラインは茶道を学ぶオランダ人論文に家元とわが名を載せき  
 オーストリアとチェコの学生の結婚に三三九度の準備し立会ひき  
 茶会のち素麺料理と巻き鮓にて留学生等を持て成したりき  
 帰国後に日本を思ひ出すらむと夫は留学生の世話に励みき

飛ぶことの出来ぬてふてふ掌に乗りて吸ひたりスポーツドリンク  
 久びさにレース系にて花瓶敷を編む贈らむ人の顔うかべつつ  
 横浜市のアーチェリー大会に銅メダルを貰へる孫は照れ臭げにて  
 十三日の金曜のけふ頼りある娘の診断悪性と告げらる  
 新たなる病みつきかりこの年も手術うくる子よ代りてやりたし  
 手術まへ娘は長き髪を切る今朝あぢさみの藍ひらきたり  
 合歡の花あまく薫りてはんなりと散りつつ咲きぬ早や梅雨あけて  
 穴いくつ土に残りて公園の木立に響く蟬の諸声  
 百桁餘の円周率を覚えたり何の役にも立たぬと思へど  
 十二桁のマイナンバーを諳ずるいつか何かの役に立つかもと  
 修善寺のせせらぎの音と青楓の心地よき道を孫と歩みぬ  
 世話になるオーストラリアの奥さんより孫への写メール「君の乗る馬よ」  
 馬羊牛犬の居る酪農の家庭に孫はホームステイする  
 無事帰国の孫は「コロナになつてでももつとオーストラリアに居たかつた」と言ふ  
 望月に小芋と団子を盛り合はせ供へし母を月見つつ思ふ

ショートステイに読書やテレビに飽きたれば運動代はりに廊下を歩く  
 施設にて散歩できずに本棚の本を選び読む六日に七冊  
 鉢より長き尻尾を電線に打ちて音たつる栗鼠を見上げつ  
 鉢植ゑのシクラメン夏を咲き十月もなほ花盛る蕾もちつつ  
 珍しき白の振摺さきし鉢ことしも待てど秋となりたり  
 毎年の恒例のごと背を痛めコルセット付けて注射に通ふ  
 わが国の無駄に食品を排棄する量は世界に六番目とふ  
 「売り家」と看板あがる扉際のランタナの黒の実を貰ひ来ぬ  
 よべ見にし月蝕の月が西空に低くまあるく光る早朝  
 霸王樹はサボテンと知る百周年記念号の歌誌「霸王樹」を貰ひて  
 フォッサマグナとふ溝に土砂や噴火土の埋まりわれが住むこ横浜も  
 手袋とマフラー巻きて歩みたり初霜おくとふ今朝の横浜  
 福岡より大阪のホームに面会の子のスマホにて夫と話せり  
 寝た切りの夫にいま何をしてゐるか問へば「仕事」と元気な声に  
 義父の故郷香川の鮎もち申し込めばおまけに付き来る寛永通宝  
 この年は舅の故郷の雑煮にて白みそ汁に鮎餅はひる  
 公園の紅梅いくつ咲き初めて傍の白梅つぼみの固し  
 桐箱に入り板の上に乗じてゐる羊羹シヨコラをじつくり噛みしむ  
 百円の店のスクラッチアートシートとふを娘に貰ひ試しぬ  
 竹ペンにシートの下絵を時忘れ削りぬ指の運動になると  
 現代版ぬり絵か削れば表はる金や銀またカラーの模様  
 ワクチンの三度目接種はモデルナにて熱の出で臥すみぞれ降る午後  
 理不尽な侵攻はやく止めて欲し連日ふゆる難民かなし  
 夫を残し故国のがる親子みて普通の暮らしが何よりと知る

晩白柚のわたの甘煮の上品なゼリーのやうな食感たのしむ  
 満開の枝垂れ梅に寄りマスクとり深く息吸ふ顎うはむけて  
 去年よりも散歩の道の三極の花数とぼし節分草ふえて  
 雲すこし薄くなりつつ眼の前に初島あらはれ船が向かひぬ  
 風にのり桜はなびら落つる道に満天星の咲き初めて揺る  
 インドよりスリニバーサンは妻子つれ原子力研究に来日したりき  
 メキシコのベンファミンの子と海遊館や民俗学博物館に案内したりき  
 オランダとインド人への持て成しは献立に困りき採食主義にて  
 末つ子にて弱かりし子がいま四人の家族を支へわれも頼りぬ  
 入院を控へ娘は幾種ものおかずを作り留守に備へつ  
 再手術四人に一人がなるといふ部分摘出の子の結果を待てり  
 浸潤性の癌なれど初期にて放射線治療とホルモン療法となる子は  
 この年の梅雨は最速最短にて六月末に真夏のごとし  
 枝先に薄桃色の花の咲く合歓の木みむと遠く廻りぬ  
 常の道を逆に廻れば見慣れたる景色ことなり心はづみぬ  
 幾回も映像ながれてその度に涙の滲む唐突の惨事  
 孫達の祖父母に会はむと遠出する高速道に揚がる初夏の風  
 金魚形ちんあなご形の凧みえて忽ち消ゆる高速道に  
 修善寺のホテルのロビーに鯉あまた口あげ寄り来ガラス戸へだてて  
 桂川に渡月橋ありて竹林の小径を行けば京に紛ふ修善寺  
 中三の孫は学校より夏休みにオーストラリアへ行く語学研修に  
 オーストラリアの何処にいま孫は居るのかとスマホの「探す  
 アプリ」にて知る  
 母の日に子より貰ひたるカーネーション九月の鉢にまた咲く二輪

やまもとのりこ  
 山本述子 (埼玉県)

## 鳴の親子

弟によく似た人に街角ではつとした後涙込みあぐ  
 老母の魚の煮付け「最高」と嫁にかまはず弟完食 (帰省時)  
 坪庭に播きて二ヶ月小松菜の雨後の晴れ間に香り仄かに  
 摘みたての菜のお浸しのこんなにも美味しかつたか手前味噌なり

年賀状年年数は減りたれど変らぬ筆跡嬉しく拝見

正月の準備簡略唱へつつ飾り料理に縁起物あれこれ追加す

体力の維持目的のストレッチ約十五分今日もチャレンジ

ストレッチ前半少し苦しくても最後は温もり気分爽快

コロナ禍のオリンピックの開催に苦労多しと思ひを馳せる

盆栽の梅・桜とも凜として小振り乍らも逞しさあり (盆栽展)

空青く河津桜の根元には菜花満開桜引き立つ

青空に緑の森と桜並木菜の花畑手前に広く

公園の池に桜と柳あり逆さの木々のかすかに揺るる

逆さまに桜の映る池の面鴨の親子の八の字描く

手作りの塩麴を漬物に混ぜて味はふ春の香りを

塩麴子持ち練に塗りて焼く旨味増しくる一日置きて  
 引越しの忙しさの中金魚死す詫びつつ埋める金魚草の根元  
 金魚草一斉に咲き軒先に春の気だるさ拭ひ呉れをり  
 八重咲きのピンクの薔薇のやさしさは幼き頃の妹の笑顔  
 池の面の青葉繁れる逆さ木木消すが如くに鴨泳ぎをり  
 我が国の子らの心の満足度世界順位はかなり低いと  
 入院の留守役さぞかし自由かと思ひたりしが疲れのどつと  
 コロナ禍で面会叶はずそはそはと常の介護のリズムの恋し  
 花菖蒲青紫に光浴び梅雨の晴れ間に気高さ覚ゆ  
 新緑の川の流れの勢ひにテンポ合はせて競ふがに歩む  
 色の濃き青の紫陽花に引かれしが白良し紅良しどの色も良し  
 挽ぎたての香り漂ふ梅の実に塩を塗して上下を返す(梅干作り)  
 初めての盆栽紅葉葉の枯れて諦めかけた直後に新葉  
 此の頃は姫紅葉鉢いとほしく朝な夕なの水やり忘れず  
 急激な暑さに野菜良く育ち茄子など早くも旬の味はひ

久々に目にする青田どこまでもはるか昔のふる里凌ぐ  
 三千年眠りてあたる蓮の種目を覚まされて開花なしたり  
 ミーンミーンとリズム正しく鳴くこゑは猛暑の夏にひとときの「涼」  
 広島や長崎の惨事どれくらひ世界の人々に伝はりをらむ  
 盆くれど介護にわが手奪はれて墓参りせず手を合はすのみ  
 百日紅一夏ずつと咲き続けやうやく色の渋さ増しをり  
 久々に友を誘ひて夏木立ゆるり廻りて喋りは尽きず  
 毎日の息子の介護の難易度は他人ではないだけ低いのかもと  
 五分咲きの萩のかすかに揺るる道そぞろ歩きで心静もる  
 お月見と称し雲なき満月に芒飾りて手を合はせをり  
 春は花秋は月をと楽しめり今から紅葉も心待ちして  
 金木犀夕暮れ時に香の高く花の在り処を示し呉れたり  
 軽鴨の十羽の雛の巣立ちたる池に目高の学校あらん(高林寺)  
 庭先の栗拾ひから皮剥きを子等も手伝ひ栗飯作りき  
 秋なれば秋刀魚にかぼすたらしをり旨しと言ひつつ細身を嘆く

故里に恐竜化石発見と得意顔にて案内しくれき  
 朝日差す緑の木の間紅混ざり高き大木黄色に光る  
 寒風の舞ふ中マスク有難くコロナの「おかげ」と苦笑してをり  
 いつまでも寒さの続く冬もなく何時かは終はるコロナ禍の世も  
 春間近終日の雪に籠りて時折り外に目を向けるのみ  
 ワクチンの三回目打ち体調のやや崩れたり雪の降る日に  
 平野歩夢スノーボードに誰よりも空中高く回転したり  
 友からの庭の甘夏一箱届く有難き香りとほど良き甘さ  
 白梅と八重咲き梅の薄紅と濃き紅色の紅梅満開  
 久々に遠くの友と電話する懐かしき声に話の尽きず  
 ウクライナこれ以上に苦しまぬ世界の知恵は無いものかしら  
 綺麗と言ふひまはなし一日も早く平和の戻りきて欲し  
 棘あれど浪花野いばら清楚なり白の花びら黄色の花芯  
 地下壕に生き延びたる人もまた飲み水求め荒地をゆくと  
 里芋の葉に溜まりたる露をもて墨磨り綴りし願ひごと(短冊作り)  
 飾るのは切り出した竹に短冊や星に網など色紙細工  
 笹飾り二本立てたる縁側で素麺吸りレクレーションも  
 初夏にして三日続きの猛暑なり老いの身持つか心配しをり  
 秋空に近くなりたる夜の空燦然として満月のあり(八月十二日)  
 品の良き赤紫の萩の花地面に垂れて暖簾のごとし  
 参拝の有難み増す宮司にて清清しかる祝詞奏上(護国神社)

## 生きるということ

逆戻りペーパーレスから筆持ちて短歌を作る生きる灯に  
 点滴を十本つけて死の淵にいるわれを助けくれたり医師の二人は  
 明けの月眺めるわれに「朝だよね」看護師の眼がうるんで動く  
 哀しみは遠くに去りて生きたいと歩み始める八十二歳の老女  
 帰る日を願ひて励むりハビリで語る言葉は幼児以下だ  
 退院の不安の中でヨダレ拭き呂律回らぬ声で礼言う  
 孫娘大学生となる朝に祖母の贈った真珠が光る  
 咲く桜今年も見られて生きている両手を挙げて涙を拭う  
 口ごもり廻らぬ言葉を笑う人嫌味を残し大股で去る  
 病みて帰り命を思い持つ筆は千箇に乱れて心が揺れる  
 不自由な言葉と体の母のために次男が介護で包丁握る  
 俯きて黙して語らぬ子の顔の目だけが母に縋りて哀れ  
 介護終え肩そびやかし去る人の車の音の闇に消え行く  
 ロシア語を捨てると言う若者の半泣き顔に夕陽が当たる  
 七十六年前夜空一面の飛行機のB 29の下は猛火と煙

よこたはるみ  
 横田晴美☆ (埼玉県)

五歳の夏戦争終りて焼け野原ひもじさにセミを焼きて食べたり  
 若き日に料理講習受けたくて友等と通いしYWC A  
 先思い夢見て作りし一番目コロツケ揚げてポテトサラダで  
 六十年前コロツケもサラダも洋食にてテールブルマナーの指導も受ける  
 母の作るポテトサラダに子等二人五十過ぎても頬膨らます  
 コロツケとポテトサラダが並ぶ皿に孫の口許クスリと笑う  
 暑き日に在宅仕事に精を出す息子の声がいつもと違う  
 重度の子少しの油断が怪我になる足指挟んで骨折となる  
 車椅子のほんの少しの操作ミス痛みも言わず足が腫れ出す  
 わが言葉呂律が回らずよだれあり足はヨチヨチ部屋を歩きぬ  
 生あるを心に刻み眠る子の顔を見つめて涙を拭う  
 朝早くまだ月がある庭に出て微かな風にわが身をさらす  
 ほんのりと明るくなりだす庭の隅パジャマのままで椅子に坐りぬ  
 猿滑りのピンクの花がゆらゆらと風に吹かれて涼しさ一入  
 もう少し生きてみようかと空仰ぎ往く月送り朝日を迎える

在宅の仕事の増えた家族等に食事の支度で母は忙し  
 老人に分からぬ会話の若者等賑やかに語りコーヒー進む  
 若人がカメラを片手に声上げて「見て見て虹よ！」わが手を掴む  
 空仰ぎ霞の中に虹を見るかすれてかすれて消えるまで  
 子のために必死に生きるを願いつつ一年経ちて朝虹を見る  
 生きるとうれしいなあと手を合わせ虹を仰いで感謝しており  
 日曜日幼子二人と妻残し介護の人の死の知らせあり  
 朝早く連絡ありて仰天す事故があったか解剖するらし  
 土曜日の運動会に家族等と弁当囲みいたる人死す  
 驚きで涙さえ無く呆然と足が震えて倒れそうなり  
 十五年わが家へ通いくれし人明るく楽しく思い出一杯

よしむらまさこ  
吉村昌子 (千葉県)

## われのこの頃

家裏のキャベツ畑に紋白が纏れつつ舞ふ今日三組が  
友よりのマスクが届く花模様手縫ひの二枚われ好きな色  
わが頭上からすが羽音たてて行く両足揃へぴんと伸ばして  
駱駝にてシルクロードを行きたるは二十年前もうふた昔  
テレビにてシルクロードのものがたり石坂浩二と喜多郎の楽  
元旦に娘家族の集まりて今年も重箱あけて歓声  
孫と婿ばあばの雑煮食べたいと伊予風の味おかはりしたり  
ボランティアで昔の遊びしてをりつ綾取り折りがみ子の指柔し  
庭にまく米に雀や鳩の来ず外出禁止言はれてゐるのか  
ストーブをつけて洗濯物を干すシャツとパンツとわれ乾きゆく  
友の庭うす紅の薔薇ほめたるがそれならと言ひ一輪くれつ  
家前の公園に子ら作りたる雪だるまに乗るまあるい耳が  
正月に孫が仏へ供へ物してゐる時に過去帳見せたり  
過去帳を開きて僕は吉村の十三代目だと自分に言ひをり  
寢床より見ゆる出窓の電線に烏われ見て朝だよと言ふ

武豊オグリキャップとの最後とふレースをテレビに近づきて見る  
時どきに置きやる米粒覚えめて雀来てをり友を誘ひて  
この年の初めてといふ満月を友が電話で知らせてくれつ  
万両を食べ尽したるひよ鳥が電線に行きまだ庭見をり  
仏壇に坐りて今日の一日を話してをりぬコロナの事も  
門の脇クロッカスひとつ見つけたり朝刊落とし拾ひたる時  
雀猫子どもの声さへ無かりしに外出解除の今日の賑はひ  
チューリップすみれ水仙満開の庭めぐりをり紋白ひとつ  
五十個のチューリップ今日満開となりわれの庭ふくらみて見ゆ  
ぼんやりと見てゐる窓のちぎれ雲そらには外出禁止は無いの  
庭に置く飯粒に来る雀鳩けふは烏が電線で待つ  
友よりの海老と野菜の天婦羅は旦那得意の一品と言ふ  
初物のきぬさや友に持ちて行き庭に咲くばら一輪もらふ  
久し振り長男夫婦揃ひ来てビーフシチューを煮てくるる嫁  
隣りよりメロン半分もらひたりきのふの煮物おいしかつたと

回覧を渡し驚ききたるを言ひて一緒に近くを歩く  
 孫が来てぢいぢばあばに見せたいと臨月の腹撫でながら言ふ  
 臨月に入った孫が仏前に母と並びて手を合はせをり  
 露を煮て持ち来てくれたるその皿に肉じやが入れて友と交換す  
 紋白に視力あるのかわれ庭に出るとまもなく空より飛び来  
 曲がりたる胡瓜を麒麟の首と言ひ畑帰りの友がくれたり  
 盆をどり踊るわがうへ三日月も太鼓に合はせ靡きてをりぬ  
 コロナにて外出禁止のこの頃は夫と漢字ドリルしてをり  
 夫との漢字ドリルのそのあひだ互に辞書と虫めがね持つ  
 娘来て元気なうちに処分よと布団座布団スーツ捨て行く  
 大き腹撫でてもらつてありがたう嬉しかったと孫からメール  
 揚羽来てひとつひとつの花めぐりゆるりと風に乗りて空ゆく  
 にはか雨久し振りなる雨のおと車庫の屋根はね滴がけむる  
 わが庭にひと日遊びてゐたる蝶からすと一緒の歌鳴り帰る  
 わが庭をひと廻りしてゐる揚羽まどにゐるわれ気になるらしも

スマホ買ひ孫に昼食つきにして教へてもらふがああ難しや  
 かつて無き降雪と言ふ九州の画面に思ふ鹿兒島の友  
 ごみ出しに行くとき歩く五軒さき歩幅大きく背筋を伸ばす  
 このところわが空をゆく自衛隊機あさと夕刻頻繁となる  
 南へと旅客機高く行く下を自衛隊機がいも虫のごと  
 わが空をへリコプターが三機並び廻りてをりぬ前頭に習ひ  
 山ぼふし満月を見たそのあした散りてしまへり残る三枚  
 雪の降る朝に夫が物差しを持ちて庭へと急ぎ出て行く  
 ハセンチ積もつてゐるよと夫言ひ首をすくめて部屋へもどりに  
 車にて総合公園まで行きて桜道歩くまだまだ蒼  
 このあした初めて通る野の道に仏の座咲く絨毯のごと  
 木の下に繁りて赤き万両にむく鳥朝より二度三度来る  
 京都より持ち帰りたるすずらんの一株の増え花壇占めゆく  
 花水木この年はじめて荅から散るまで見たりコロナ家居で  
 回覧を持ちて行く道うぐひすの声きこえ来てあたり見廻す  
 揚羽来て木の芽に止まるを見たる夫すぐ庭に出てその葉摘み来る  
 公園に遊ぶ子みちを行く子みなマスクしてゐて会話無く行く  
 右手首に貼りたる湿布がそのあした敷布に貼りつき背中の下に  
 輪になりて盆の踊りをするわれら大人も子供もコロナのマスク  
 吉村さん花より野菜も作ればと道ゆく友が花ほめて行く  
 友からの天ぶらもらひすぐ浮かぶさあ昼食は冷やしさうめん  
 わが頭脳認知症になりたるか買物のメモまたも忘るる  
 三十度越ゆる暑さをしつかりと百日草咲く濃き赤ピンク  
 うす雲のひとへふたへのその上に太陽光る虹色の輪に  
 わが空を飛行機雲が西へ行く白く続くを消ゆるまで見る

台風の後のわが家の前の道ごみの袋に六個の落葉  
 四時過ぎに西へと向かひ行く鳥の群ありいつも一羽遅れて



冬雷二〇二二 作品年鑑・合同歌集  
〈作品三〉

## 文殊堂

オリンピアン之眼をみて名付くといふダリヤ「真紅の瞳」青空に咲く  
 稲刈りは終はりたるらし舗装路に黒く点々田の土落ちぬ  
 われの名に因むと義母の植ゑくれし鈴蘭はみな黄土色に立つ  
 秋更けて庭の花々みな失せり最後に残る義母の名の「小菊」  
 寢室のガラス戸の外板をはめ雪を迎へる最後の仕事  
 二日間どれだけの風雪受けたるか飯豊連峰真白く近し  
 吹雪く夜のどんがら汁の二回目は母の真似して酒粕入れる  
 冬雷誌の柿の表紙が胸に沁む古里の色ちちははの色  
 文殊堂の扁額にある松原八景降りつづく雪参道覆ふ  
 キルト地にモンステラの葉のステッチしコロナと雪に籠る日つづく  
 君と見し十二の滝は萌黄色今年の冬は氷りてをらむ  
 海に降る雪のつぎつぎ消ゆるさま君とみてみき三崎の歩道  
 雪下ろしの屋根に上れば夫はまづ雪庇の位置にスコップ立てる  
 ベランダより屋根に上りて夫は雪を四角に切りて投げる塊  
 冬の晴れ隣家へつづく雪壁に雪虫がゐてやがて飛びたり

いのうえすずこ  
 井上鈴子 (山形県)

真つ白なとろろに卵の黄味を乗す万作の花疾く咲き初めよ  
 引越しの助太刀たのむとふぐセツト子より届きて内示を聞きぬ  
 高速道は松の林のなか伸びて不意に現る雪の鳥海山  
 仏壇に異動の知らせする息子線香ゆれてストック香る  
 兄からの母校の桜甥からの霞城の桜写メに満開  
 新しき注連縄かつぐ男らのりりしき様よ桜咲き初む  
 雪代に川幅広く現るる水没林の木に新芽出づ  
 道の駅の道にまたがり鯉幟子のお下がりも並びて泳ぐ  
 鳥の声に目覚める日々の幸せよ日夜砲弾受ける国あり  
 辛きとき子を遊ばせて過ぎしたる文珠堂前は黒き焦げ跡  
 雪消えに猩猩袴咲き出でてぜんまい採りの体の軽し  
 代掻きの始まりたるらし浴室に蛙の声のしきりに聞こゆ  
 台湾のパイナップルは子の職場とつながりあるらし数多届きぬ  
 母の日のカーネーションを地植ゑする去年植ゑしは黄の荅持つ  
 飯豊牛のブロンズ像の台座には伸びたる蔓が巻き付いてをり

玉川橋を渡りて上る道沿ひに蕨畑の広がりてをり  
 梅花皮荘の広き窓より迫りくる岩肌に低き木の生ひさがる  
 玉川の川瀬の石はことごとく丸くなりたり水音高し  
 われ植ゑしヒペリカムの実赤くなり義母は何度も花の名尋ねき  
 天の川仕様の青と白の菓子義母の法事に子は供へをり  
 姑の法事の直会息子らは頻りに話すばあちやんのこと  
 経文の「娑婆何・娑婆何」と子ら唱へ文殊祭りの幟はためく  
 一昼夜つづく雷雨のすさまじさテレビ報ずる地元の被害  
 八月三日の大雨による災害に暮らしが変はる景色が変はる  
 裏庭の鬼灯の赤日々増してひとつひとつが先祖に見ゆ  
 露草は青色増して雄蕊の黄が目玉に見ゆるも庭なれば抜く  
 水害の工事を避けて遠回りの青空の下真つ赤なカンナ  
 西隣りの老いて草引きせぬままの庭の花々季節知らしむ  
 夜半覚めて満月真上に上りたり白々と冴え木の葉を照らす  
 稲刈りは霧の上がるを友は待つ乾燥の燃料抑へむとして

新聞紙に包み抱へて持ちくるるダリヤは友の「町の花」らし  
 太陽のコロナのごとき花卉のダリヤを置きぬ玄関の柵  
 居間飾るダリヤがブーケに見ゆるときまたも思ひぬ息子の結婚  
 紙飛行機を二階より飛ばし遊びしが今はSMSで兄にとばせり  
 日々柿の色づき進みことさらに柿農家なりし父母が浮かび来  
 石畳の長き参道に菊並び熊野大社の菊展開く  
 曇り日は三羽の兎見え隠れ本殿に戻り拝礼をする  
 些かの手伝ひをして礼に貰ふ友手作りの葡萄のジャムを  
 濃紫の色と香りに惹かれ食む葡萄ジャム載せトーストとアイス  
 西山に新雪小さく見ゆる日は枯れ枯れの草道端につづく  
 貰ひたる旅行券にて夫と来ぬ鶴舞ふ山の天童温泉  
 天童の将棋のアマチュア名人戦明日開催とロビー賑はふ  
 自社農園の葡萄のワイン「陽だまり」を小さき音に乾杯をする  
 バイキングの朝食あとのテレビにて新たなコロナオミクロン株  
 荒波のやうやく鎮まり届く箱に兄の釣りたる雄の寒鱈  
 退職時兄は仲間と船を買ひ折り折り届く魚あれこれ  
 北朝鮮のミサイルの被害なしといふ時化ゆゑ漁に出られぬものを  
 村なかの消雪の自動故障して二年になるも予算なしとふ  
 風の鳴る昼は小僧を雪降り之夜は雪女思ふ冬の日  
 わが村に明治時代に詠まれたる松原八景あると聞きたり  
 朝々に雪の始末の夫は今日チューリップの芽でたと告げたり  
 転勤前の子に最後だと手渡さる走りの鱒はふるさとの味  
 引越しの朝に木の枝始末する兄は指差すばんけの苔  
 三千坊谷地の斜りより最上川見えて日を受け海と溶けあふ  
 レクチャアを受けてカヌーにめぐりゆく水没林にオール漕ぐ音

松原八景の五湖禿下りごみ摘みぬ誰も採らずに岸にほけある  
 バーベキューの火が枯草に移つたと消防車走るつぎつぎ山へ  
 焼け跡は二十日ほどして一面に若草伸びぬ文殊堂前  
 己守る苦味のわらびの灰汁ぬぎの湯を沸かしつつ先人思ふ  
 紫の濃き菖蒲咲く友の庭凜と立ちゐて友に重なる  
 十余年乗りたる車手放す前梅花皮荘に行かうと夫は  
 去年の秋友に貰ひたる半夏生白き粒なる小さき花芽  
 水盤に剣山ふたつ離し入れ菖蒲を飾る玄関の夏  
 娑婆何とは幸あれといふ意味と知り講にて九年唱へる子なり  
 子らの背を軽く越えたる向日葵の写メール届く雨の土曜日  
 午前九時デイズニーシーの地球儀前ピースサインの子らの写  
 メール  
 一段と雨の激しくなる夜に神奈川の子のメール「雨、大丈  
 夫？」  
 用水路詰まり土管の土砂を掃き夫は全身泥塗れなる  
 ぜんまいを年々採りたる沢崩れ線状降水帯の恐れ  
 雨降りの墓参の帰り長男は提灯の灯を消さぬやう手にす  
 家の北のペンキ塗らむとする角に空蟬ひとつ残りてあたり  
 筒咲きの朝顔愛でてをりたれど今年引かるるサルビア・カンナ  
 黄蘗色の満月上り神々し隣家の人と眺めてゐたり

## 母のちまた

籠りみて四方の紅葉を感じをりもう一度見たし高雄の山を  
 診察を待ちつつ笑ひ語りあふをみなは持病を楽しむごとく  
 最上川築に打ちよす白波の鮎飛び交ひて飛沫の光る  
 白帝城先頭に立ち九百段登りし階段はダムに沈めり  
 あたたかき秋の日のさす窓近く墨摺りをれば心安らぐ  
 「つや姫」に色紙を添へて妹の八十路越えたる祝ひに送る  
 書を習ひ短歌を作り恙無く厨に立ちて年暮れむとす  
 建立には赤の詩人と疎まれし山中腹に啄木碑みき（盛岡市天神山中腹）  
 住む人の絶えたる旧家の奥座敷今日開店の蕎麦を食みたり  
 高窓と欄間の彫りの奥床し蕎麦屋に変わる元町長の家  
 西山の秋はせはしも色づくと忽ち紫紺を覆ふ雪ふる  
 枝先にガラスのごとき玉つらね零下四度の我家の庭辺  
 年ごとに賀状かかさず来し友の洋子さん今年は夫君より来ぬ  
 大寒に感染者数最多とふ軒端の雪も過去最多なり  
 ほのぼのと流るる銀河窓あけてしばらく観たり温き床より

おくやまきよこ  
 奥山清子（山形県）

四肢付きの貂の襟巻着けてみむ栃窪山の春の形見の  
 栃窪は町村合併に伴ひて集団移転廃村となる（昭和四十六年）  
 廃村後も狩を業とし渋谷さん山を愛でつつ蔵に住みにき  
 除雪車の掻き棄て残す雪の塊下を水ゆく音の春めく  
 町村合併の会議続くなか父逝きぬ時は流れて六十九年  
 校庭を歩みたかりき母の母校母を育てしその巖かさ（山形師範学校）  
 筆持ちて立て膝の上を書く文字の水茎美しかりきたらちめの母  
 たたなはる残雪の峰西方に一際白き頭眩眩し  
 一分間の片足立ちとスクワット検査にわれ一人成功す  
 大仰に百点満点と褒められたり掛り付け医院の血液検査  
 更新の免許証手にこころ込め読み返しをり「ドライバーのしおり」  
 声合はせロシア民謡うたひにき友はプーチンを知らずに逝きて  
 つくづくと夏の緑はこころよし栃の葉に降る雨を仰ぎぬ  
 濃淡が命と言はるる仮名書道締切り間近漸く仕上ぐ  
 書道展に決めたる題はいろはうた『いろはうたの謎』読み取りながら

帰国せる子が背負ひ来しコンピューター往時偲びつつ今日断捨離す  
師の言葉習作為しつつ偲ばるる「一夜休めば三日の後退」

会ふことも適はぬ師なり文箱に溜りたる文字は秘蔵の宝

ネヴァア川や玉葱屋根の教会群麗しき国持ちて足りぬかプーチン

夫曰く真白き飯に油味噌白鷹納豆至福の朝餉

耳慣れぬ教育入院勧めらる八年前の海の日なりき

二十代にはじめて二人で見し映画六十年経て今日観る「破戒」

出汗に乗す取りたて茗荷の白き花猛暑の夏は朝昼夕餉

優勝旗終に白河の関を越ゆ日本一為す仙台育英高

ズワイ蟹息子祝ひに送り呉る夫満ち足りて米寿を迎ふ

焼秋刀魚の匂ひ残れる食卓を拭きて日課の墨磨り始む

新築の県民ホール大きくて秋川氏のテノール響く天井

鳴り止まぬアンコールに応ふ秋川氏「翼をください」大手広げて

示さるる「変形性脊椎症」十五歳にて体操選手たりし私が

病みてより伸びに任せる草の間に涼しさ待たず杜鵑草咲く

菜の畑間引きせん手に赤トンボ止りてわれの目を見詰める  
雨に打たれ一氣に散りたる秋明菊に動きの鈍きみつばち止まる  
折々を癒してくれた庭の花われに刈られて秋草終る

声合はせ「恋した噂のない私」ペーターヴェンの恋友と語りぬ

最上川の気流浴びたるりんごの実抱へ持ち呉る高岡の友

寒天の出来褒められて心足る爽やかに令和四年の元旦

故郷の深山にも似てスズダリのクローバーの小道の足裏の感じ(\*ロシアの地名)

うこぎ垣に蔓垂れ下がる烏瓜飴色に枯れ寒の風吹く

裏口の引戸のガラス落雪に割れて入り来る夜半の寒風

予定なき日の続きあるカレンダー待ちたる椿歌会吹雪に休止

幼さの未だ残れる藤井聡太若き王将の勝利の笑顔

桜草の鉢に萌えたる繫蔓にも水をたつぷり緑育む

籤に当りごむ長靴を買ひ得たる嬉しさを忘れじ小学一年生(昭和十七年)

日曜を夫と寛ぎみたる時突然隣家の引越し始む

幕取れてOHBANの赤字現るる開店間近の街静かなり

早咲きの紅梅の下に初音聞き姿を捜す今年のうちぐひす

紅と白ならべる梅の咲きそろひわれの健康寿ぐがごと

それぞれの子からの贈り物カーネーションの盛花、鉢植、花

束さまさま

次の帰省約して息子発ち行けり今年も去りぬゴールデンウ

イーク

県駅伝町内の覇者此処走る声出せずにて諸手の応援

白内障術後の目に注す目薬の悲涙のごとく頬つたはりぬ

柳萌え澄みゆく空を水映す水没林の白川湖上に

雨上り草引く先に胡瓜の花五センチ程の実をつけてをり

胚芽つき無蛋白米求めたり形よけれど舌には苦し

食改と運動励み予防せむいや努めたり流るる二年

弱音吐く夫には答へず厨にてカリウム含有表手作りす

渡菟草朝餉に深き緑添ふ一夜浸してカリウム抜き

日本の医療制度に救はれて腎病む夫の達者に謝す日日

離れ住む孫の笑顔を見ることが朝夕愛づる眞赤なポピー

花魁草長き項を競ふがに日暮れの庭に泡のごと咲く

一抱への姫檜扇と菊を供ふ密かに聞こゆる秋の足音

虫の音に誘はれ出でて見上ぐれば南東の空に冴える満月

西日差す軒に掛け居る温度計四十度差す七月三日

籠り居て窓開けたれば丈高き紫苑靡きて涼風入り来

かさおかふみこ  
笠岡文子☆ (広島県)

## 平安の空

紫の玉実寄り添うコムラサキ日の光に照る秋空の下  
二年たちバオバブの樹は根付きたり茂る葉叢に白き花開く  
口の中麻酔薬の作用受け眠りの内に胃カメラ進む  
胃カメラは逆流箇所を示しつつ再度の検査うながしている  
怖がりの己恥じつつ医学での進歩の恩恵ありがたき時  
つわぶきは花をかかげてひっそりと風の冷たき夕暮れにあり  
寂聴さんの訃報を受けてあらためて西行モデルの『白道』を読む  
広島に來し寂聴の講演は花のさかりの二十年前  
にぎやかに新佐方大橋の開通式集まる子らは歌って跳ねる  
渡り初めの獅子舞神輿入りみだれ喜びの声ひびく冬空  
変化せよ吠えて暴れて寅年はねむれる脳に刺激あたえよ  
寅年の正月気分を打ちくだきデルタ株からオミクロン株  
冬に生れキンキン冷えた冬が好き北風よ來よ歩みを止めず  
北京五輪のビッグジャンプに目をみはる小林陵侑の「金」「銀」メダル  
ストーンを自在にあやつるか泣き笑い「銀」メダル得たロコ・ソラーレは

ウクライナに軍事侵攻ロシア軍特殊作戦を正当化する  
被爆したしだれ柳に花がつく川風うけて枝はゆりかご  
春の日に赤実びっしりのクロガネモチ鶉二羽はつかずはなれず  
玄関の春のきざしはヒイラギナンテン黄色の花房香りの届く  
殺戮を映像で知るプーチン大統領の聞く耳もたぬ非情の侵攻  
コート着て子供の手を引き荷物持ち国境までの遠き道のり  
日本から八千キロをへだててもウクライナ想うひまわり咲く日  
観音神社の垂れ桜の満開の日地域が映る朝のテレビに  
ひさしぶりに試験をうける緊張あり介護認定みょうにはりきる  
息つめてこわごわあがる椅子の上切れたる電球みずから替える  
あおぎ見る平和公園のセンドンの木花の息吹夏日に照りて  
友の庭バラ園のように色たたせ昂ぶる大輪の香りにむせる  
空豆は莢の中からすすみどりかたくほっこり飛び出しはねる  
仲良しと黙食すれば早くすみ味わう間なくすばやくマスク  
歳重ね体の故障かかえ來て男女共ども機器できたえる

スプリングは上半身をなめらかにゆるめて肺のうごき助ける  
好きだった旅行の誘い断りて共に歩めずパンフレット見る

銃規制きびしい日本でなぜなぜだ安倍元首相の銃撃嘆く

宮島の大聖院の霊火堂千二百年以上消えずの火あり

弥山みせんにはロープウェイと岩道あり五三五メートルの神やどる島

原爆忌一分間の黙祷す被爆七十七年目平安の空

元安川に灯籠浮かびねがうことウクライナと重ね核廃絶を

無心にてエアロバイクのペダルこぐ脈拍速く鼓動波うつ

炎帝に言葉をかわす死者のもと墓をきよめて記憶の戻る

ドラマ見て図録取り出す「無言館」今日の生きざま見なおす時間

一時の夢の世界へ人形浄瑠璃義太夫節と三味線ひびく

人形の動きなめらか華そなえ字幕目で追い楽しみ深まる

白蟻が軒の柱を食いながらペンキぼろぼろ落して進む

朝日さし生きかえりたる彼岸花土手の傾りに赤い静寂

柿の木にとまる鴉は熟し柿羽を広げて足でかかえて

柿の木の下草刈り込み肥料やるもみじ葉はらり春までねむる

岸田首相とべないハトと椰揄されても実行力でくらしを守れ

立ちどまり花の名前を問うた人石路みつめ「品があります」

家古りて障りあちこちなだめてもいふことかぬ疫病のよう

落しもの行方不明の物いずこ記憶がとんで思い出せない

健康と体操教室に参加せざリズムが早くついてゆけない

思い出もひろがりゆかず空白に冬至方ボチャとゆず湯で暮れる

毛糸帽靴下二枚に手袋す冷やさぬようにねむりの前は

一息をつくひまもなく第六波まん延防止等重点措置に

おそれたる体操会食また中止気力減退体力縮む

公園をゆつくり走る周回の中年夫婦に樹々もふくらむ

北条の政子さんだけ知っていた鎌倉幕府は「大河ドラマ」に

スノーボードは己と戦う空中技怒りを胸に平野歩夢「金」

ノルディック複合の渡部暁斗は探求者の如くにありてやり  
きった「銅」  
プーチン大統領は野望のために力で進む核兵器による威嚇の  
ことば  
意識して青と黄色のマスクする友は平和な空をと願う  
介護保険は彼方のことと思ひ来てうれし又さびし介護保険証  
連日のテレビの映像こわごわ見て二ヶ月すぎたるウクライナ  
の戦火  
友達がコロナ患い春なのにどこに行くにも気のはれぬまま  
六月の新緑ひらき二本ずつ実生の柿はもらわれてゆく  
玉葱を引きぬくはずみに尻をつき空が近づくと笑いとばしぬ  
友のいた「創生」終刊号梅雨に咲き散らず朽ちゆくあじさい

のよう

くねくねと曲った山道その先にデイサーピスの建物そびえる

胸やけの薬をのめば副作用シブもデンキも拒否する身体

連日の真夏日に弱りたる体筋肉おとろえ血流悪く

胸やけに便秘も続き六種類薬を飲んで身体をたもつ

第七波に備える四回目のワクチンは倦怠感にモヤモヤ気分

正常と異常のはざま行ききするデイサーピスの仲間さまさま

## つつみの桜

野の匂ひ風の匂ひを思ひ切り胸に吸ひ込むマスク外して  
 橋すでに架かるを知らぬカーナビは迂回せよとふ幾度も幾度も  
 救急車避ければ有難うございますの声を残して走り行きたり  
 山峡の秋の取り入れ田の畔にりんどう咲きぬし濃き紫の  
 次の代へ命つながむと草の種わが衣に確と付きて運ばる  
 腕力でかなはぬ兄に弟の腹立ちまぎれの落書き残る  
 冷凍のシジミ湯に入れ味噌を溶く宍道湖の夕日思ひ浮かべて  
 病室を二、三步出づるに看護師はマスクをつけよと飛び出して来る  
 遠景は淡く画くべしと郵便局に貼る趣味の絵に客の蘊蓄  
 弱りゆくもの踏台に藻屑蟹の逃れむとして鍋を掻く音  
 定刻に通るバイクの音を聞く朝は寢床に夜は湯船に  
 受診後に見る冬の眩しさよ取り敢へず無事に三月の過ぎぬみつき  
 迷はずに今年も長き旅をして鴨は来にけり小野の鴨池  
 いただきし丹波篠山黒豆をストーブに煮る風花の舞ふ日  
 夕時雨止みたるのちの田の面に地霧湧き出でわれを包みぬ

かじ お えい こ  
 梶尾栄子 (兵庫県)

少量の便出でしのみにうれしくて朝一番に看護師に告ぐ  
 家事をせぬ十日余りの入院にわが手に戻るうるほひ少し  
 取り留めのなき長電話を耳に当て屈伸運動軽くしてゐる  
 エアコンにストーブ点けて入る炬燵この贅沢を許されよ老女に  
 溝川の小さき流れを堰き止めて水草繁る寒さの中に  
 病院の桜咲けども仰ぐなくしほたれ歩くみなうつむきて  
 病室に小さく手を振り別れたり残る夫と帰るわれとが  
 ファンファアレ筍みごとに掠めたる猪に鳴らさむ悔しさ越えて  
 桜咲く村の神社にわれ一人心ゆくまで手を合はせたり  
 飛び上がり地に這ひコートにポール追ふ孫ゴム毬の弾むがごとく  
 古家の長き廊下の天窓より五月明るき光は入り来  
 病室にお粥半分今日は食ぶ夫を褒めぬうれしさにわれは  
 退院の夫を乗せて窓に見す残り少なき土堤の桜を  
 放棄田に群れ咲く白き姫女苑好き放題に伸びて揺れるる  
 濁りたる雨後の溝川のぼり来る鯰幾匹水面揺らして



きらきらと半年ぶりに光りつつ迸り来る苗代水は  
 嫁ぎ来てはじめて田植したる年縦も横もが曲がりてをりし  
 たつぷりと野菜を撰れる有難さ農家を疎む若き日ありき  
 母の日に送りくれたる霜降りの肉を噛みつつ老いの胃重し  
 四人の子連れて子が来る日曜日カルガモのごとく車より出で来  
 暑いねと言へば暑いねと返す娘も汗塗れなりウォーキングに会ふ  
 イナバウアーの仕種に仰ぐヒマラヤ杉の空を覆ひて天辺見えず  
 若き日にはヒールの音をカッカツと響かせぬし人杖にたよりぬ  
 頬張れる夫の顔を思ひつつ食べてもらへぬミニトマト摘む  
 電柱に日々こつこつと攀ぢ上る突貫忍冬の小花揺れるる  
 何処見て通るわれなる道の辺に実の熟れ初めて枇杷と気づきぬ  
 「私のこと守つてくれました」との言葉やさしかりしを思ひ胸打つ  
 がんセンターの向ひは広き葬祭場偶然ならむも意図あるごとく  
 残しては勿体無いと言ひつつもワインは残る姉のグラスに  
 台風ののち一足飛びの秋は来ぬもの思ふ秋亡夫想ふ秋

新築の隣はをさな子あるらしも防音装置のあるごと静か  
 短歌には縁なき人と思ひきや投稿欄の歌褒めくるる  
 加古川の土堤を風切り走る娘は日本一の記録持つなり  
 入院のベッドに取組みすべて見て千秋楽には相撲通なり  
 休耕の田は枯れ草に覆はれて乱れ乱るるわがころとも  
 日に三度二人の食器を洗ふをり機械に任す嫁を思へり  
 副作用抑へる幾種の薬飲む医学の進歩に感謝をしつつ  
 炎のごとき落羽松の並木道両手広げて走り行きたし  
 久々の老人大学出席日梅の古木につぼみふくらむ  
 良薬は口に苦しと宥めつつ顔背ける夫の手に載す  
 電柱の防犯灯は今し点るスポットライトのごとく頭上に  
 朝日さすりピングは四度北隅のトイレ二度五分古家の今朝  
 玄関の格天井は夫好み見上ぐる余裕なきまま老いぬ  
 バーコードかざして会計済ませよと病院けふよりシステム変  
 はる  
 化粧せぬ友の素顔を見てしまふマスクをはづすその一瞬に  
 寒きけふマスクに帽子追加して歩けば温し凍水出でず  
 裸木に去年の鳥の巣残りをり手抜きをせず作りしならむ  
 悉く剪定されて花のなし寒き風吹く冬のばら園  
 覚めぬこと無きにしもあらず易々と麻酔打たれぬ丸めたる背に  
 ロッカーの開け閉めの音手術後のわれに響きぬ耳栓の欲し  
 病室を仕切るカーテンゆつくりと揺るれば共に揺るる心地す  
 花のなき庭に目立ちぬつはぶきの穂絮は白き小花咲くごと  
 山崩し建つ病院に桜咲き近くの山よりうぐひすの声  
 竹の子の顔出す頃と見に行けば猪の掘りたる穴ばかりなり

冬越してここで死ぬぬといふごとくわが鉄先に飛び出す蛙は  
 枯萱の紗のカーテンのごと揺れて田の面のみどり透けて見え  
 るる  
 盛りあがる木々の若芽の先に見ゆ夫入院して居し病院  
 この草にこの花咲きて暫しのちこの種となるを畔に教はる  
 すれ違ふ軽トラックの窓を開け農道に話す男二人は  
 白鷺の姿に似合はぬ太き声残し飛び立つ向かうの田へと  
 ウイルスに籠る日々にもウポポイとふ祭りのうたを心に灯す  
 ウクライナへ心ばかりの奇金をす明日はわが身とならぬを願ひ  
 義父義母に遅れてならじと懸命に田植をしたる五十年前  
 目蓋腫れ痙攣起る眼にても見たし読みたし閉ぢたくは無し  
 この頃はをとも為なる肌のケア手を窪めわれも乳液零す  
 くきやかに東西貫く平行の飛行機雲は山の端に消ゆ  
 宗教を信ずる人の一途なり選挙の度に電話をかける  
 自らにノルマを課して五千歩を夕さり来れば汗して歩く  
 松の葉を摘みてゐたるに差し出だす鳩の卵の白きを二つ  
 ふと見上ぐる山の彼方に気球浮くふるさと納税の返礼といふ  
 跡取りは遠く離れて住むとなり崩るる塀を気にせず九十  
 ためらはず接種を受けよと示しある市長腕出す写真の載りぬ  
 雨道に打ち捨てられたる蛙のごと疲れ切りたる身を投げ出だす  
 大箱にりんご届きぬ長野より上段大きく下段小ぶりの  
 夕さりに草生に集く虫の声聞き分くる耳を持たぬ悔しき  
 農道に車の座席を深く倒し眠る男あり日はかげりつつ  
 「花は咲く」ピアノ弾かるる安倍元総理私的な楽しみありし  
 を知りぬ

幼子の声より親の甲高く注意する声二階より降る  
 デジタルに疎きに加へ筆不精音信不通をコロナ禍ゆゑにす  
 点検終へ警備会社員外に出でて頭を下ぐる姿のうつる  
 いぢましきわが性にして決めてゐるシャインマスカット一日  
 十粒と

## 菫の花咲く

黒きソファアの窪みは妣の坐り皺曾孫を抱きて笑ひし日あり  
 街道に自慢の新蕎麦それぞれの幟はためく季節となりぬ  
 夜仕事に石臼回し蕎麦の実を母の挽きしは冬の糧ゆゑ  
 ふらふらと迷へる一ひらの白き蝶十一月の夜の灯りに  
 砂糖水などを小皿に置いて見む天井辺りをさ迷ふ蝶に  
 冬帽子深く被れば朝の道向かひ来る風丸く抜け行く  
 屋根の雪窓を揺るがし崩れ落ち残る静けさ澄み渡る空  
 踏み分けて進む他なし新雪の雪踏む音は昭和の記憶  
 山形の古里の味「おみづけ」は近江商人のつたへたるもの  
 ヌーは「ヌー」と鳴きつつ進む百万の声が大地より湧き出るやうに  
 雨の匂ひ草場の匂ひに導かれヌーは進みぬ三千キロを  
 隙間風の冷たき古刹の本堂に読経始まる響きらうらう  
 経文の意味は思はず抑揚の流れの中に義姉を偲びぬ  
 街道の車道と歩道の間には身の丈ほどの雪塀長し  
 雪映えの姿に坐する頭殿山山形名山の七十五番目

さとうよしこ  
 佐藤幸子 (山形県)

富士山の頂に似る頭殿の山の懐に嫁ぎ来し吾  
 四年前嫌ひし写真の吾の顔いま受け入れる顎の弛みも  
 五つ六つ壁に暮らしのバッグ下ぐ短歌のバッグがその中にある  
 沢庵を噛む音聞きつつ茶を飲めば「ああしあはせ」と脳が呟く  
 隣り家の老犬の喉を撫でやれば白内障の眼で見上ぐ  
 病む友に土鍋に炊きたる白粥を鍋ごと届ける隣同士に  
 町内会の会計帳簿纏まりて今宵のワインのかをり軽やか  
 貝生川の流れ清すがし鶯の鳴くを聞きつつ山桜見る  
 溪流の雪解けの水張る沼に番の鴨は8の字を描く  
 フロントガラスに花びら三枚貼り付けてしばらく走る病院を出て  
 人道的に諫めてをるといふプーチン氏その表情筋が引きつり動く  
 正教の教へを掲げ民衆の心操るは過ちにあらざや  
 伸びてゆく三千の大蒜の中に潜む二本立ちの異分子その手を挙げよ  
 送りたる蕨はその夜の居酒屋に「春雨とワラビの中華風冷製」となる  
 「そもそも俺の友達は」などと切り出せる小一の男孫は耳朶紅く

けふ夫の採り来たる蕨を厨にて塩漬にする冬に備へて  
 ひとむらのスギナの中より立ち上がり烏柄杓ぶきみに長き舌出す  
 ぬるりぬるり葉叢の下より現るるミミズよお前も空を見たいか  
 残りある最後の林檎に皮も入れジャムを炊きたり鼈甲色に  
 部屋ごとの時計の分針が僅かづつ違ふを考慮し今朝も家を出る  
 男子八名女子十八名で校庭に雪の大きな熊作りにき  
 同級生の成功せしもせざりしも語れば和みて小六の顔  
 繰り返す海の波音心地よく由良の湯宿の夜の籐椅子  
 人間と獣の領域重なりて山裾の畑に丸き足跡  
 繋がらぬ歌を思ひて寝付かれぬ闇夜に蛙の合唱を聞く  
 クーラーを止めて僅かに窓開ける夜更けの風に牛小屋のにはひ  
 生卵好まぬ夫が半熟は大丈夫と言ふ結婚四十九年目  
 朝朝の散歩は小さな一人旅なだり一面葎の花咲く  
 苦瓜を二本貫ひて繰り返す言を聞けば媼に戻る和らぎ  
 子に送る胡瓜ピーマン茄子オクラ蕃茄をそつと載せて箱閉づ

コミュニティの広場彩るサルビアの真紅の花も今年も静か朝日の中を息弾ませるランナーは動かぬ右腕抱へ走りぬ待ち合はせに遅るる友に連絡の取れず気になる救急車の音敵しき顔の男が「おはやう」と声掛け呉る朝の散歩に残り飯をそば粉に捏ねし水団の鍋に煮えゆく香り懐かし育つほど白菜となる一列に濃紫なる一株のあり濃紫なる菜の固まるを珍しく日々眺めあるその成り行きを風吹けば背負ひの籠に詰め放題の葉拾ひし幼き日あり杉落ち葉で石炭ストーブ焚き付ける煙に満ちき朝の教室幼き日共に遊びし又従兄の妻より届く喪中のハガキ漬菜に「大根」「人參」「蕪」「茗荷」今年も刻む吾のおみづけ待ち伏せて潜むライオンに立ち向かふヌーの若き雄群を守りぬ桜の枝の固き冬の芽霜柱踏みつつ義姉の墓へ参りぬ積雪七センチ鳥の足跡ついたよと京都の人のSNSに雪下ろしの三日遅れの筋肉痛這つてやうやく布団に入る雪塀の所所の窪みある歩道に子等の見えて癒さる雪に籠る深夜の家家照らし来て車一台ひそと過ぎゆく白飯に沢庵三切塩引き鮭最後に湯飲む籠りの朝も黒き土に黄のクロッカス七つ八つ蕾をかかげ春の陽を吸ふ春の雨に寒さやはらぎ今朝の雪踏みて歩けば黒く滲みぬ干し上げし林檎の皮を煮出したる湯を注ぎ入れ朝の緑茶をのんびり行かう気楽に行かうと夕焼けの中でメールし君の声待つ母の愛でし姫辛夷の花盛りすぎ青空のもと散り始めたり病院の五階の窓に置賜の桜満開のジオラマを見る満開のソメキヨシノに風通り桜堤のはらはらとせり

芽の出るを待ち続けたる二週間西洋朝顔が土を擡ぐる茄子畑の畝立て作業の大汗は甘夏三房にてさつぱりとせり「旬の蔵送る」と吾のライン連絡にたちまち「待つてます」の返信次々  
天井に入りてばたつく鶴鴿一羽スマホのカメラに二三枚撮る電気柵に守られ色付く「紅ほっぺ」昨夜も謎の足跡付くも武力にて他国を攻める先導者の陣取り合戦繰り返す愚かさ二年前つひの住まひと帰省せし同級生逝き悔みに向かふ通学路のでこぼこ道の足触り駆けて帰りし友達の顔草引く手止めて冷たきアイス食ぶ汗を拭きつつ夫と並びて熊避けにカーラジオ音量最大の車内に侵入す「コシジロ」五匹炎天下熊鈴鳴らしプールへと駆けゆく子らに降る蟬時雨秋採りの人參を蒔く朝の畑汗迸り地面を濡らす傘を差し生ごみを出す夫の背の少し丸きを気に掛かり見る散歩路の筆のやうなる薄の穂朝露ふくみ肩に触れくる白き腹玻璃戸に見せて青蛙二日も貼り付き今夜まだ居る向ひ風に自転車漕ぎて行く夫のシャツ膨らみて背中丸き夏の果て動きたがらぬわが農機吹けぬエンジン只空回り

たかふじあけみ  
高藤朱美 ☆ (茨城県)

## 誕生

筑波嶺を左に眺めふる里へ向かえる道はいま四車線  
二人で乗り五人となりて今はひとり古里への道も五十年経つ

「サンキュウ・フォー・ザ・ミュージック」のフレーズを聴けば気持もアバと共有す  
落ち葉舞う風つよきなか届きたる喪中葉書に友の死を知る

ドラマでは娘の名前が「るい」という我家のルイは顔見りゃ吠える  
来日の映像今も忘れえずアバの熱唱胸打つ明るさ

もみの木やハートに星と型抜きす待ち居る子らへのクッキー作り  
新種なるカカオに興味持ちおれば娘より届くルビーチョコ食す

大そうじの後に特集見て過ごす大滝詠一さんの曲は爽やか  
炬燵だと和室に駆け込む孫達の笑顔がうれし久しぶりにて

録画なる『クリスマススの約束』をひとり見る麵すすりつつ雪降る夜に  
ターシャさん五十五歳で来日と旅行記知れば憧れしきり

若き日の自転車伴走に追いつかず夫の姿は遙か先なる  
ラジオ言う広き心の持ちようと「キャンサーギフト」は身に沁み入りて

駆け込むはウクライナの地の防空壕現実のこと昨日の事なり

寢床なきウクライナ国の人々の列は隣国へ赤子を抱きて  
 円空の木像の顔はみな同じ苦行を越えてのほほ笑みを知る  
 真夜中に流るる曲の「サムデイ」は穏やかなる眠りへ誘いくれつ  
 天候の変化に戸惑う我が身体炬燵に入りて台風を待つ  
 若き日に奏でしロシアの民謡も今は重たきマンドリンの音  
 朝刊の時事川柳で知る世界鋭い目線にわれ目覚めたり  
 産院に貰いしタオルを洗濯す娘の誕生は半世紀前  
 恩義ある師に頼まれて幼児を我が子と共に育てしかの日  
 教職の共働きせし両親の代わりとなりぬ六年ほどを  
 親代わりに育てたる児も結婚して京都から届く賀状胸うつ  
 二年振りに妊婦健診終えた嫁に思わずかけ寄りそつとハグする  
 予定日を過ぎて入院四日目に六番目となる孫の誕生  
 初なりの胡瓜で酢のもの食べたいと蛸を求めて収穫を待つ  
 誕生後九日目にして対面す親になりたる息子の笑顔  
 ぽつり言う「孫を見せられて良かった」と息子の小声キャッチするわれ

久々に赤子を抱きてミルクやる飲み干す迄の優しい時間  
 腰骨がずれて歩けぬ四日間背伸びした後痛み消えたる  
 頻繁に響くサイレンに胸騒ぐ日々更新の感染者数  
 茅葺きの実家の板の間広々と幼き夏の昼寝懐かし  
 二ヶ月を迎えたる孫のあどけなき笑顔の写真に心弾みぬ  
 真夏にも「さくらさくら」が花盛り杉井明美作ペチュニア楽しむ  
 父親のスマホに写る乳のみ児は口とがらせて手足動かす  
 食事どき「いただきますね」と笑み交わす十八日目の孫の写真に  
 ホテルでのちぎり絵展示の潮来道色付く稲穂に古米の浮かぶ  
 深夜便聞きてCD三枚買う染み入る歌声サラ・ブライトマン  
 揚げナスと鮭におろしと青菜汁米粒光りておかわりをする  
 「麦」の歌流るる夜中に大雨の気象警報地震の報も  
 男の孫のお食い初め祝いて卓囲む古希の我にはちゃんちゃんこあり  
 古漬けと茗荷と生姜とタカの爪たまり漬けにとしその実も扱く  
 夕暮に蜂が飛び交う庭に出て共存共栄言いて水やる

笠間産桜川産と美浦産を試す新米ブランドでも炊きぬ  
まん丸く白くふくらみはじけ咲く黄花芯包む茶花を手折りぬ  
並び居て小選挙区はこの紙とあさぎ色なるを知りて名を記す  
コロナ禍の落ち着きみえてのびのびと菊や山茶花庭を賑わす  
鍵盤を叩いて跳ねてラブソデイ山本光さんの手さばきに酔う  
テキストを求めたのみで身につかず朝ドラ見つつ英語を学ぶ  
笑い追うテレビ番組チャンネルをさんまさんに合わせ頼みませぬ  
夕刻に懐かしい曲思い出し「ナイアガラトライアングル」を聴く  
帰国後にホテルに缶詰状態の息子を思ういかばかりかと  
時間かけ化粧続くる孫二人素顔が好きとは言えず見ている  
風邪ぎみの身体ながらも凍結を恐れて家の前の雪かく  
久々の会計の仕事時忘れ昼食無しも学ぶこと多し  
真青なる空に向かいて回転す冬の競技は命がけなり  
マラソンの中継夫と見し日あり今日も一人で女子を応援  
興味もち大豆ミートを食材にきのこと合わせた優しいスープ  
世界フィギュアのスケート競技で男女共切磋琢磨し金メダル取る  
いらだつは連勝止めたる力士なり高安の壁は正代にあり  
夏野菜の苗選びつつの雑談に育てるヒント貰い喜ぶ  
開店後三年経たるアウトレット人混みの中で活気を感じず  
連休のアウトレットでひとり祝う永年欲りたる誕生日石を  
梅雨に見る古民家村の冬日より雪国暮しの涼しき映像  
台風が熱帯低気圧にかわりたる今宵は涼し二十七度に  
幾度も塩ふりかけて漬け込みぬ秋には完成胡瓜の古漬け  
友からのハルメク届きて七冊目初注文は「大豆レンチン」  
日本を避けてゆきたる台風が北の大地に向かいて進む

古米は寿司飯に良しと聞いており手巻き太巻きちらしも良しと  
湯を沸かし緑茶飲み干す涼しき日届いた八女茶の出番となりぬ  
国葬にマスク有り無しの違いあり反対デモなき英国をおもう

たていしせつこ  
立石節子☆ (東京都)

## 災い多し

コロナ禍の後の夢など語りたる友にステージ四の肺癌告知  
さっぱりとしたる笑顔に自らの死後の始末を語る友の目  
車椅子慣れぬ押し手に乗る友は不安もあらむブレーキ握る  
信州の夫の生家に土石流母屋を貫き離れも住めず  
姪からの電話にて知る土石流九十三の母には内緒と  
自動車に乗るまま流され消防団に救われしとぞ甥の話は  
気忙しく足早になり躓きぬ齢を思いて一歩を確かむ  
土石流後三ヶ月経ち恐れつつ位牌・写真を運び出したり  
中学でフォッサマグナを学びしが諏訪湖へ注ぐ川とも知りぬ  
降水帯の線ふとぶとと掛かりたる扇状地形の家の危うさ  
甥っ子の避難所暮らしに期限あり一年後には新たな土地へ  
新たな年を迎えて第一歩甥の生活応援したし  
庭の雪かき集めては雪だるまやと作るもすぐとけゆけり  
三回目ワクチンを打ち医師と我慣れたる手順不安もあらず  
仲人し三十年経ち急逝すその母八十六歳笑顔に振舞う

何よりもうれしき賞品頂戴す旧姓土屋の我にとりては  
ぬくぬくと画面に見入るわが目には雪道逃げる婆と助け手  
日常の小さなことが大切とコロナ禍に思い戦火に思う  
卒園の孫の未来に戦火なき事を祈りて一日終える  
終息後の夢を語りし友は逝き新たな変種衰えみせず  
ここ数年親しき人の訃報多しわが命への黄信号とも  
小一日機械幾つか操作して庭木の刈り込みこともなげにす  
梅雨に入り蚊取線香けぶらせて香りのなかに幼児期思う  
髪カット早々済みて降る雨の中へ踏み出す足の危うく  
何らかの緊急事態発生か事情つかめずただ祈るのみ  
紙皿とウエッジウッドの皿のうえ載するメロンに違いなけれど  
玄関に小一の孫ずぶ濡れで立ち尽くしおり傘を忘れて  
コロナ禍に友との食事久しぶりバラライカ聴き青春回顧  
満洲にて筍生活したる日々焼き芋ねだり母に叱らる  
幼き日の小学校の給食に油身肉が喉を通らず

義姉のため認知症の書読みながら我れにも思いあたることあり  
坂道に腐れるトマト落ちており近づき見れば蟻の群れ居る  
医師曰く健康優良婆なれど年相応に心身厭え  
十分に孝行もせず母逝けば母の念願の墓建て直す  
敗戦を早く覚りし父かなし妻子を残し満洲に死す  
父祖母と逝きし人のみ思い出さず暑く不穏なる終戦記念日  
核兵器使用の恐怖迫りくる神の御心何処にありや  
昼顔は国道沿いにゆらりゆら薄桃色にひっそりと咲く  
十五夜の兎団子は愛らしく黒ゴマの目に枸杞の実の耳  
コロナ禍で箱入り婆になりたりと友は笑えど会うに任せず  
国葬に反対するのも自由なりこの自由こそこの世の宝  
傘寿過ぎ鍛えられたるソプラノの友の声たのし銀座のホール  
全力で走り来れるこの世には新たに作歌の日々ひらけおり  
ああ感謝洗礼受けて六十年苦しみ超えて喜びに満つ  
久し振り旧知の友と語り合い改めて知る企業の厳しさ

市役所の報告は線状降水帯災害が今後も起こると言えり  
 新幹線に乗れば座席は駒の如く規律正しく並びていたり  
 還暦過ぎ大動脈の剥離にて二人の後輩相継ぎ逝けり  
 枯れ庭にすっかり馴染む昼寝猫耳のみ動く吾が足音に  
 平和とはたつた一人に破られる脆弱なものだが大切なもの  
 神曰く独裁者をも愛せとは我には出来ぬ教えなりけり  
 ふさぎ込むこと多けれど今朝より天気晴朗洗いもの干す  
 私にまで電話をよこす義姉なれば訪ねて認知症の初期を疑う  
 認知症思い悩みて解説書読み耽り新たな世界の開く  
 走り梅雨腰痛の友思いつつ自由に歩くわが足嬉し  
 息子より「ありがとう」の言葉絶えず聞き幸せ思ふ共に暮らして  
 年金の振り込み日には税金の振り込み票もしっかり届く  
 ウイルスと人の知恵との戦いか勝負はいずれ人が勝つべし  
 山谷の街もビジネスホテルの多く立ちゴミの無き道われ通り行く  
 警報の一夜明くれば台風後黒雲垂れて蒸し暑くなりぬ  
 物干場の壁にぶつかり仰向けに落ちたる蝉はそのまま終る  
 久しぶりに音楽会の案内が来たるより次々われに舞い込む  
 青年のいのちの犠牲惜しむべし半世紀前の「塩狩峠」  
 三年ぶり同好会の誘いあり筆を持たずに話し尽きせず

## 畑にいどむ

自信なく足どり重く山道を落葉ふみしめ息きらしのぼる  
 バラが好き花も香りもよけれども草むしるたびトゲに悩みぬ  
 広すぎて掃除も行き届かぬ家を蜘蛛の巣敷と我は呼ぶなり  
 銀杏散る廃校の庭のクリケットテントに人の賑わいのあり  
 残菊の枯れたる茎をひと束ね燃やす煙の香りやさしき  
 鳥達の餌箱作りする季節猫の届かぬ場所を選びつ  
 十五キロの堆肥を運びつるバラの植え場所探し腰を痛める  
 例年のカカア天下と空っ風わが住む栃木の庭まで荒るる  
 空っ風赤城おろしの吹く庭にレモンの木植う春を待てよと  
 大寒に戸外の鉢にうす氷小鳥のために湯をくみ溶かす  
 成人になったばかりの孫娘毎日父の弁当作り  
 アンジェラを去年のごとく咲かせたく寒肥すっかり土に埋めつつ  
 バラの名を忘れぬように札たてて訪ねて来たる友に教える  
 亡き嫁の厚手のコート温かし寝起きの朝に思いを馳せて  
 そのうちに花屋敷と人が呼ぶようなそんな花壇をと手入れしている

たに だりつこ  
 谷田律子 ☆ (栃木県)



コロナ禍に東京女子医大病院へ向かう高速バス乗客七人のみ  
 元気かと問われて除草の話です都会の医師のおどろきの顔  
 花持ちて水桶持ちてサクサクと彼岸の墓の霜柱ふむ  
 からし菜の花咲く渡良瀬の土手の上吹きくる風のまだ寒くして  
 七時前の工事現場の片隅に忘れられたるパンジーの列  
 捨てるつもりで放置をしたる植木鉢ペンキで絵を描きリニューアルする  
 全開の窓のまま走る初夏の道花粉気にしつつ風心地よし  
 夕ぐれに夕顔の花ひらく音母と聞きたることの懐し  
 何事も素直に受け取る性格に育てくれたる母らに感謝す  
 八十を越えんとする日若き娘と歩む銀座も足取り重し  
 友二人訪ねくれたる我が庭にいま咲く花の名はわすれなぐさ  
 雨あがりの銀座の歩道を闊歩して着物の裾持ち宝くじ買う  
 雨降りてする事のなき日曜日昔を思い『たけくらべ』読む  
 茶花摘む手に虫達の食いちらす葉っぱ恐れずに取り捨てる  
 いつも雨東照宮の梅雨時期はきものの上に二部式雨コート

大やかん水屋の仕事の持ち運び大寄せの客への茶事仕事  
 あつさゆえ花も植木も水不足水やりすらも躊躇する日々  
 息子孫土木の仕事にこの猛暑熱中症を今日も案じる  
 冷蔵庫開けてアンキモ食べてみる息子の心うれしくおいしい  
 正座して茶の湯いただくおいしさは膝の痛みに替えがたくして  
 畳替え蘭草の香り盆送り遠い思い出心の痛み  
 真夏日の部活帰りの高校生日やけの顔のたくましく見ゆ  
 我が庭の前の市営のバス停はコロナのために乗る人もなく  
 方丈記読もうと本屋に走りきてあまりの厚みに買う手の鈍る  
 鼻眼鏡まねる幼子笑いつつ口とがらせて落さぬように  
 子猫の死悲しく思う胸の内涙なくして親ねこの鳴く  
 連れ合いを亡くした叔母を訪ねれば認知症進みて我を知らずと  
 満月を夜更けの空に見上げつつ仕合せだなあと何度も呟く  
 病む友の体調を気にかげながら手元にスマホいつも忘れず  
 駅中のキリンの模様のグランドピアノ弾く人のありラ・カンパネラ

我が庭はへじもかえるも猫もいる虫と草にもいどむ日々なり  
 寒つばき今年早く咲きはじめ霜の被害もなく楽しんで  
 体力をつけるつもりで歩く日々畑と花の楽しみのため  
 草対策のヘアリーベッチ伸び放題土地改良に良いと種まく  
 古タンスの傷の数々の思い出をよびおこし来て今も新品  
 三龜山落葉散る道登りつつ赤トンボの羽に晩秋を見る  
 寄せ植えの花選びする小春日和ヒューケラの葉の彩り添える  
 寄せ植えの花選びする晩秋にヒューケラの葉の色どり添える  
 寒風にさらされバラの剪定する厚着の手足ぎこちなく動く  
 バラの名を沢山覚えて我が庭を花ざかりにするイメージ重ね  
 昨年の御礼集める稲荷様穴ほり燃やし役おとしする  
 ふり返り有難き事多々ありて過去の思いは何も無駄なし  
 メジロ来る大山蓮華の太枝にザルをつるしてみかんをのせる  
 西風に耐えて残れるボタンの蕾そえ木を立てて少し安堵す  
 チューリップ早めに花摘み仏壇に来年大きく咲く事願う  
 ウリバエが気になる時期にナスきゅうりの苗を植えんと耕す畑  
 殺虫剤使わずバラを育てたし活力源に肥料を足して  
 初雪草はもてあますほど伸びる花私もほしいと友は言うなり  
 家元の見知りの顔が献茶席コロナ禍の今も席取り合いぬ  
 大木の桜の木陰有難し草むしりの手休みて涼む  
 葉桜の木陰セミ鳴き風涼し草むしりの手休めて潤う  
 盆までにせめて庭草きれいに草取りに追われる昨日も今日も  
 ワレモコウ茶花に一枝いただきて秋明菊と合わせて床に  
 胸の羽毛オレンジ色の美しさ桜の小枝に尉鶴居て  
 午前五時スマホに天気確認し涼しい間に畑の仕事

夕ぐれが早くなりたり十五夜の月の出を待ち友と眺める

つかもとせつこ  
 塚本節子 ☆ (茨城県)

ゆきあいの空

今日からは夫の通院はじまりて雨の上がれる陽差し眩しき  
 ハート形のカツラの落ち葉踏みしめて甘い香りの風に誘われる  
 年に一度の氏神祭りに栗おこわ炊き供えたり氏神様に  
 我が氏の祀る元社は筑波嶺の飯名神社と謂れありたり  
 神官の唱う祝詞のさなかなり親指啣え孫の眠りぬ  
 花八ツ手数多の鞠の弾けたる花火の如く庭を灯せり  
 手入れせぬキウイの枝の伸び放題に実のつきており嬉しさつる  
 キウイの実枝元に生る小さきもの八個を鳥にと残しておきぬ  
 朝あさにバナナにリンゴ人参と小松菜加え夫のジュースに  
 手づくりの生ジュース作る朝餉まえそのひと口の喉に沁み入る  
 二十五年稲刈りしたるコンバイン別れにあたり酒供えたり  
 病院の裏玄関のキッチンカーに白衣の客の並びて五人  
 病院の診察最後の十二月通いて今日で百日過ぎたり  
 初詣での人疎らなる御社の狛犬がマスク斜めにかける  
 北京五輪ジャンプの小林金メダル「空は友達」とV字に飛びたり

検査日まで二十日に迫りウォーキング今日は五千歩少し汗ばむ  
 全四巻山崎豊子の『運命の人』読みふけりたり霽降る日に  
 沖縄の返還されて五十年「密約ありし」を改めて識る  
 ハーモニカの音色に惹かれ十五年集めたる楽譜五十曲なり  
 童謡に映画音楽子守唄好きな楽譜のあまたあつまる  
 願わくは楽譜を見ずに吹けること「さくらのワルツ」に和音入れたり  
 手でハートの形をつくる少女の記事の大きな瞳に釘づけになる  
 皇居よりつがい賜り五十九年いま白鳥は三十五羽に  
 牛久沼に昭和・平成・令和へと生きる白鳥の家族三十五羽なり  
 新品種と誘われ求め五年過ぐ黄の牡丹咲く花心は紅く  
 気に入りの眼鏡を失くし三日過ぐ渋々取り出す五年前のもの  
 コンビニの入り口近くの燕の巣指さし通る母と兎二人  
 畑土にたっぷり水を含ませて種十粒蒔く「ど根性ひまわり」  
 うす紫のじゃがいもの花風に揺れうぶ毛の白く匂いかすかに  
 メモに書く今日やることと行くところ昨日のメモと二つ重なる

朝七時スイカの雄花咲きたれば受粉をしたり雌花に三個  
 夫の癌の転移の無くて安堵する内科医の語る「奇跡な事例」と  
 手に探るじゃがいもゴロゴロ顔出して大小選り分け畑に転がす  
 抱き心地良き大玉の西瓜採る六十三センチ六キロありたり  
 姿見せぬ西瓜泥棒半分を食べ残さずにそっくり食べよ  
 わが街の夏の伝統行事撞舞つぐまいの今年催さる三年振りに  
 雨蛙の面と衣装の舞男撞柱上から四方に矢を射る  
 七十センチの五本の苗木植え十二年ブルーベリーの今盛りなり  
 新しき枝それぞれに実をつけるブルーベリーの律儀さうれし  
 ブルーベリーの葉陰に寄り合う実を摘めば風渡り来るゆきあいの空  
 リサイクル当番のあさの蝉しぐれ中にときどき鳴き止むひとつ  
 誘われて寂庵に行きしは五年前「寂」と彫られたる庭石温し  
 オリンピックの年毎ありたるクラス会今年催さる六年振りに  
 このごろはワンプレートに盛る副菜の色カラフルにする赤黄緑  
 一枚の皿に盛りつける副菜の黄色の足りず卵焼作る

車にて三十二キロ一時間余毎日通う夫の治療に  
夫掛かる放射線科医師八人の顔写真みな笑顔をつくる  
米保冷库に保存をしたる利平栗今年最後の渋皮煮作る  
丁寧な鬼皮を剥き炭酸に一晩漬けて一時間茹でむ  
渋皮を洗い砂糖と少しの醤油一時間かけ弱火で煮たり  
我が氏神の元社の縁日初巳の日出店の数多に賑わいたりき  
二男の娘の三歳祝い産土の神社に詣でる小春日和に  
「木花咲耶姫命」の祀らるる神社に詣でる三歳のまごは  
キウイの実リングと共にタッパーに入れ「甘くなあれ」と言  
葉をかける

末の息子の住むロンドンのコロナ記事読み返しのち切り抜き  
おりぬ

今年また箱根駅伝観ておれど息子の母校はシードを逃す  
瀬古監督の率いる箱根駅伝に息子の入学時優勝飾りき

福来たれと紅白の餅境内に撒くたび花火の三発上がりぬ

コロナ禍ゆえ先送りしたる人間ドック二年ぶりなり友と予約す  
ウォーキングに取り組む初日スマホにて歩数のグラフ入力済ます

メロディを奥深くする技のあり大小ベースに分散和音と

ただひとりの権力者何を得んとする核の脅しも公然と語る  
たぐさんのおみな子供の避難する劇場の空爆ニュースに見入る

「子どもたち」と地面に描かれたる文字近くの病院までも破  
壊さる

我が街の水辺公園牛久沼に皇居より賜る白鳥遊ぶ

珍しきフランス産の改良種黄の色牡丹の蕾ふくらむ

ちよいと置き愛用の眼鏡見つからず諦めきれぬ日がない

震災後石巻から繋ぎたる「ど根性ひまわり」十一世の種蒔く  
スイカの苗大玉小玉二本ずつ初めて植える五月半ばに  
受粉して四十日後の収穫を曆に記す七月十五日と  
夫の癌術後一年の検査する転移の無きを日々念じつつ  
男爵の種芋五キロ植えたれば八十キロになる梅雨の晴れ間に  
食べ頃を鳥に食われたる小玉の西瓜葉かけ隠すも見つけられたり  
舞男の撞柱上に立ちたれば四方に矢を射る豊作祈願して  
石巻忘れてならじとわが庭にど根性向日葵十本咲かす  
五日ごとに一時間ほどザルに摘むブルーベリー一キロ叔母に  
届ける

寂聴のお別れの会に参加する激しき雨風いつしか止みて  
五人はや同級生の訃報あり会食前に黙祷捧ぐ

高校のクラス会参加二十四人多治見市の友笑顔にて来る

上の奥歯続けて二本欠けたれば躊躇しつとも歯科医院予約す  
右左下奥歯四本インプラントに半年治療せり三年前に

つだみちこ  
津田美知子 (岩手県)

## 母と義母

花びらの縁のみ紅きコスモスの来年如何に咲くか楽しみ

夫婦して障子張り替へに挑みをり素人仕事のまあまあの出来

障子張り夫婦の掛け合ひ賑やかに少しの歪みは笑ひてすます

久々に弘前の街歩きをり彼処は夫と蕎麦食べし店

降りさうで急ぎて配る市の広報終へ来れば一転日の差す秋空

膝抜けのズボンにサンダル履くままに友に誘はれちよつと海まで

凍結道人の力の及ばぬも冬日の熱は徐々に溶かしゆく

久々に会へたる孫の成長の二年のブランク吾の丈越す

温もれる東北弁に癒されて絶やさぬやうに使ひ続けたし

わが娘の眠る静かな墓地の丘津波避けむと新道通る

聞こえ来るクリスマスソングに囃されて早足となり気ばかり焦る

シチュンシチュンさへづる声のみ聞こえ来し津波警報下の無気味な静寂

鏡餅をひとり黙々と丸めをり粉振り呉れし孫居ぬ厨に

前澤氏の「政治家は特に宇宙から地球を見るべき」は心に響く

地下壕に怯える幼児見よプーチン「ぼく死にたくない」の声聞けプーチン

震災を思ひ起こさず早春の風冷たくも春めく気配  
 七時まへ出勤する夫見送れば霜柱にて靴先埋まる  
 夫と義母ワクチン接種後変はり無し吾の発熱は若き証拠とか  
 青信号になりても渡りきれぬことぼそりと言ひき母卒寿の頃  
 北国に花芽見つけて水仙の次は桜か待ち焦がれる  
 生たまごポトンと小鉢に割りおけばこんもりの黄身に箸刺しがたし  
 古稀となり免許返納後の田舎暮らし想像すれば不安募りぬ  
 古稀となり一年更新の夫の職来年もまた雇ひくると  
 向かふ山の険しき傾斜に咲く桜今年も吾に力をくれたり  
 桜散りツツジの蕾膨らみて春の花々順番待ちをり  
 熱中する母のぬり絵のセンス良く九十八歳少し自慢気  
 力なく素早く動けぬ母の手の半日費やし絵の四半分塗る  
 水色の布団カバーに替へたれば五月の風のすがすがしきよ  
 三人が手を伸べたれば吾の手を選びて握り立ち上がる義母  
 「ぴゃっこ」から「とびゃっこ」となり更に「ちんちんぴゃっこ」の微妙な方言

戦場に我が子を送る母親をテレビに観をり吾には出来ぬ  
 雷の嫌ひな犬は二寸ほど戸を開け覗き足を震はす  
 手を貸すは容易いけれど見ぬ振りをしつっ見てゐる吾は鬼嫁  
 小六の選手宣誓聞きながら心素直に伸びよと願ふ  
 クーラー無し自然任せの家なれど全開の窓は海風の道  
 台所に聞こえる歌義母のこゑ昭和の曲はやや大きめに  
 母と会ひ「白寿になるね」と顔見れば「私そんなに歳とつたの」と  
 白寿の母平成令和の記憶うすく昭和の思ひ出のみ次々と  
 指ハート白寿の母に教へればもう覚える事止めたと言ひぬ  
 三人が茶の間にもいつも寄りゐるは温もり求め会話欲して  
 夫話す今日の些細な出来事をひねもすのたりの吾は聞きある  
 池の端に傾きつつも何十年桜咲かせて遂に倒れたり  
 あと二年元気で居てねと義母に言ふめでたき百歳皆で祝ひたし  
 鬼嫁の吾かもしれず手を貸さず義母のやる気を見守りてをり  
 義母の足ぱんぱんに浮腫みてしまひたり締め付けぬやうな靴下を買ふ

手帳には「何処にも出掛けず」ばかり書く老いたる日々を樂しみたきぞ  
 岩手県感染者無しの日二十日余は県民性に一因有りなむ  
 ゆらゆらと歪みて見ゆる貨物船沖は凧ぐのか北は雪降り  
 義母の世話しつつ不安のよぎりたる数年先の我等を誰が  
 給付金貰ひて今夜はレストランと誘ひ来たるに祝日休店  
 大事ごと忘れてゐるを気づきをり冷汗のツツと背を流れたる  
 「めちやくちや」と若者の話す昨今は「どうにも成らず台なし」  
 に非ず

朝と夕二度雪をかき汗流す夫の帰宅時滑らぬやうに  
 数枚となりたる日めくり破く朝今年の始めの重たさ思ふ  
 沖の船津波の潮は川のごと激しくて沖へ向かひ動かず  
 屋根の雪氷となりて落ちはじめ凹まぬやうに車移動す  
 温泉の湯船に偶然美江ちゃん顔見合はせて幾度も笑ふ  
 正月の日の出の時刻七時なりき三月末は吾の起き出づる五時  
 震災後未だ現役の夫の言ふ生き甲斐として十年勤む  
 そちこちに蔵たらの芽ニヨキニヨキと待ちに待ちたり山菜の春  
 鮮やかなる五色セットの箸出せば黄色取りたり九十七の義母  
 敵しき冬過ぎてやうやう来たる春桜は散りて八十八夜に  
 初物のメロンにカツヲの初夏の味蚊取り線香の出番も間近  
 砲弾に怯ゆる人等の日々思ふせめて募金にと吾は応じて  
 ライトつけ走る事なし震災後孫の迎へもない老夫婦暮らし  
 黒き雲真昼の空を占領し稲妻走り止む気配なし  
 今日夏至暮れて明日から夜が伸びる盆の過ぎぬに冬を思ひぬ  
 長竿を軽トラックに結び付けウニ口開けへ鉢巻の漁夫

突然に鹿一頭が横切りて斜面の草にじつと隠れをり  
 驚きて吾を見てゐる鹿の目のまんまるにして息荒く立つ  
 留守番の褒美と言ひて義母と吾アイスキャンデーかじりて涼む  
 猛烈に降る雨音に目覚めれば微かに聞こゆ蝸の声  
 九人の大家族なりし日のありき老人三人たつた三人  
 今日からはボタンで上下する椅子にひとり立てると義母満足げ  
 枇杷の木に花の咲きたり一冬を越えて実れる初夏が樂しみ

ふじ た えい すけ  
 藤田英輔 ☆ (高知県)

## 令和四年の歌

今年の秋も終わりと云う農夫眼細めて刈田を見つむ  
 丸きもの金木犀の枝に有り児等が撃ちたる輪ゴム鉄砲  
 夫逝きて一と月となる人のいて言葉交わさず頷きて過ぐ  
 立冬に父の筆筒のベスト着て上着は持ちて病室に入る  
 病床のカーテン開くる午後三時熟睡する母起こさず帰る  
 霧の中零下3度の町を出てみかん畑へバイトに向かう  
 移住者のそれぞれの縁聞きながらアルバイトへと向かう車中に  
 グータッチする気に見ゆる雲の上煌めいて飛ぶ飛行機の有り  
 初めての英語単語を覚えしは西部劇にて方角の西  
 妻からの父母散髪をしたメールさっぱりとしてはにかみ写る  
 張り詰めて重き熟柿に刃を入れる寒の夜を越え渋は抜けたり  
 重いから軽くせねばとカフェに日に二度来る友は小銭入れ持つ  
 正月の祝いを囲む四世代義母の詠む歌穏やかに染む  
 安心の笑顔くれたる若き女医父搬送の午前三時に  
 朝ドラにルイの楽曲かかる度指はリモコン音量高へ

門口に「二月いっぱい休みます。」蔓延防止の一週間前に  
 紅き実をつけたるアオキ風を避け集まるメジロを葉に抱きおり  
 猫は眼をそらさず気配を消している土塊のごと白き田に居て  
 ひと処虫喰い穴が在ると言うひと冬着たるセーターの背に  
 梅花落ち桜散り初め道の辺の水路淀みて花びら集う  
 考えておいてください。医師からの胃瘻の提案父の容態  
 鎧無く刃も持たぬ猫なれど空飛ぶ鳥を見据えて居たり  
 新しき制服の折り目際立ちてドンキホーテの鎧のごとく  
 田植どき待ち遠しかり水田はさぎ波立てて夏をいざなう  
 身の回り代替可能のものばかりそう思うわれにも身代りありや  
 白秋の「青い髭」は五月の詩午前十時の空は清しき  
 撫子のかたまりて咲く駐車場花踏まぬように自動車二台  
 六月の雨ベランダに吹き付けるエケベリアから子株は立ちて  
 朝七時甘とう穫りのアルバイトドームのごときビニールハウスへ  
 甘とうは葉を繁らせて木のごとし分け入れた手で一つずつもぐ

何事も注意し進めと朝穫れのパプリカの色は黄色と緑  
 パプリカは色艶際立て主張するごとく袋に出荷待ちおり  
 黒雲が頭上に広がる散歩道雷鳴あると犬は教える  
 炎天下ハウス作業は飼猫の餌代のためと笑う人の在り  
 担当の医師より呼ばれ父母の現状を聞く妹と聞く  
 父は今褥瘡の痛みひどくして車椅子には乗るを叶わず  
 母は今コロナ罹患と伝えらる台風のごとを揺るがす  
 古き家壊すと母より連絡のありて大急ぎわれ駆けつける  
 手際よく大工の従兄弟は壁を剥ぎ骨組みあらわに祖父母の家は  
 空や雲かえでの影は新しき季節を迎える気配滲ます  
 Tシャツに長袖シャツを着た上にジャケット羽織る十月六日  
 十月に入ると夕暮れ早くなり道行く人も速足に見ゆ  
 極端な政府の発表信じずに犬との散歩もマスク外さず  
 信号待ちの隣りの車の青年が笑顔をつくるわれの犬見て  
 包丁で指を切ったと低い声厨房のカフェのマダムの妻か

マリンバで「エンターテイナー」弾く時間映画の中の吾も共演者  
わがカフェのガーデンパソルと鉄製の台もろともに風吹き  
飛ばす

面会が制限されると父母に告げて別れる外の寒風  
穏やかな一日になるとテレビ言う狭き日本の予報は広く  
年齢を一つ重ねた今日もなお一つ捨てては一つ買い足す  
庭に出てパソル立ててアイスでも思いもよらぬ昨日までの日  
キヤッシュデイスペンサーは鍵盤を持ちコンパクトディスク  
はピアノ弾く

九十を半ば過ぎたる父の日々価値は何処にコロナ禍のなか  
梅雨に入り昨日の雨でぬかるみてブルーシートに並ぶマリンバ  
木でできたアフリカ起源の楽器マリンバ四台で奏でる「小さ  
な世界」

甘とうを優しく撫でたるこの指で勢いあふるる音立ててもぐ  
両の手で大きな丸を作りつつ全部が丸ではないとつぶやく  
雷鳴の聞こえいるのか飼犬は息を荒げて震え始める

炎天下の陽射し枝葉に護られて艶光りする甘とうの実は

甘とうは九月以降が盛りなり爪先立ちて穫り後しやがみ穫る

昨夜まで半袖のみで過ごして今朝厚物のケースを探る

ストーブの灯油は有るか？この四月の使い残しでタンクは重し

五つ目の水槽にもメダカ増え飼う友の声優しく聞こゆ

まき  
牧  
じゅんこ  
恂子 (神奈川県)

## 自選四十五首

色褪せて川原に残るすすきの穂老いたるわが身を見たるがごとく

秋ふけて日ごとに草の色薄れ残れる緑葉求めて歩く

蓼科に買ひし白き花居間に置きそのままドライにみごと変りぬ

修善寺の湯にあたたまり痛みたる腰のことなどひととき忘る

紫の蘭の花びら開きたり亡き弟への思ひ新たに

秋篠の静けき道に佇めば微かに聞ゆる鹿の鳴き声

川わたる木枯しの音聞こえ来るたまる思ひを吐き出すがごと

青空にふはりと浮かぶ白い雲思ひ出すのは祭りのわた飴

獅子舞に頭かまれて厄払ひこころ膨らむ年の初めに

日当たりの良き部屋なればうとうととソファでまどろむ昨日も今日も

かな書道特選の賞手に持ちてカメラに向かふ若き日のわれ

静岡の友より来る大粒の苺味はふ三つに切りて

冬の陽が遠く落ちゆく橋の上渡る人かげ車もまばら

クリスマス訪ね来る客なけれども点滅止めぬもみの木の灯り

コロナ禍は破壊されたる環境の復讐なりと夫つぶやく



路の臺うるいたらの芽店で見て山菜摘みし若き日偲ぶ  
 木枯しの音も冷たき寒の入り見渡す河岸はすべて灰色  
 河岸の並木の桜花開きうす紅色に霞みて見ゆる

古びたる本にはさみし押し花の葉出でて過ぎて過ぎし日思ふ  
 ヘルパーの素顔見ぬまま二年過ぐ思ひ巡らすマスクなき顔  
 屋上の手摺つかんで夕焼けの空を見てをり暮れてゆくまで  
 街中で電動カートに乗る人を見る度思ふあれも良いかと  
 ハナミヅキ近くを探せど見あたらずぬ我が住む街のシンボルなれど  
 葉桜の枝葉すかして見ゆる空澄みたる青に初夏を感じる  
 伊勢路にて夫が買ひたる手土産の松阪牛の駅弁開く  
 道端に五月の雨に濡れて咲く紫陽花の青はや深まれり  
 筆まめの友の返信いまだ来ずあれこれ思ひ熟睡出来ず  
 新しきボトルのキャップ開けられず溜息漏らす指先を見て  
 暑き日にシャキシヤキと噛むかき氷汗は止まれど頭痺れる  
 百日紅その名のごとく咲きつぎて夏の日差しに輝きて立つ

真夏日に花咲き続く百日紅その逞しさに力を貰ふ

会ふごとに堪らないわと言ひ交はす今年の暑さは脅威より恐怖  
 コロナ禍前歌会のために求めしも今は戸棚に眠る補聴器  
 遠き空に上がる花火を眺めつつ思ひ馳せたるあの夜の煌めき  
 この春に米寿になりたる吾がもとに紅包<sup>アンパオ</sup>届く異国の友より  
 従妹からコロナになつたと電話ありでも元気よと明るい声で  
 誰しもが暑さに喘ぐこの夏は蟬も鳴かずに葉陰で休む  
 うち続く日々の暑さが身にこたへ会話するさへ物憂く覚ゆ  
 遠花火音に惹かれて目をやるもビルに隠れて見えぬが口惜し  
 チカチカと火花はじける手火花に照らさるる腕の皺目立ちたり  
 大玉が売りの浜なし豊水を八つに切りて夫と食す  
 青空に薄く広がるいわし雲夏過ぎたるかと胸なで下ろす  
 遠くより微かに聞ゆる蝉の音を耳鳴りだよと夫は笑ふ  
 彼岸入り母が好みしりんだうを竹筒に挿し線香を焚く  
 金木犀の花弁散り敷く散歩道はや深みゆく秋と思ひて

秋ふけて川原の黄葉もくすみゆき白きすすきの穂のみ目につく  
 氣が付けば秋は深まり川沿ひに並ぶ紅葉の色くすみたり  
 移り来たる老人ホームの窓の外流るる川の水細く細く  
 中広き川なれどいま水細くみどりの草の川面を覆ふ  
 川越しに形さまま立ち並ぶオフィスビル群灯りに映える  
 空を背に梢に残る赤き柿鳥も突かず冬を迎ふる  
 そびえ立つ公孫樹並木の黄葉見上げ車道に坐る若者の群れ  
 糖尿病は歩行が一番夕飯後防犯ベルを首より下げて  
 散歩道垣根を越えて大ぶりのみかんが実り日ごと色づく  
 木枯しに黄のじゆうたんを作りたる銀杏の梢くろろと立つ  
 雲ひとつなき空暮れて金星のそばに小さき星見つけたり  
 境内に蠟梅の香り漂ひて気持ち温もる冬寒の日  
 ワクチンに検査薬さへ不足してコロナ対策マスクだけとは  
 石仏を見て歩み行く道すがら林の奥には浄瑠璃寺あり  
 日が暮れて人影伸びる古都の道東大寺の鐘くぐもり聴こゆ  
 黄昏時生駒の山が陽を受けて峰が輝くダイヤのごとく  
 寒き朝白の花弁を開きたる梅の蕾を頬で温める  
 松明で照らしいださる二月堂お水取り済めば春遠からず  
 満開の桜に來りて蜜を吸ひ花弁を千切る雀を憎む  
 鎌倉の親しき叔母が逝きたるも葬儀にも行けぬコロナ禍の今  
 河原にて若者が吹くサックスが金色に光る夕日を受けて  
 九十を超えていまだにパソコンを操る夫疲れもみせず  
 仏壇に供へし萩の餅はやばやと下ろして味はふ糖尿なれど  
 カラカラと焼夷弾連なり落ちる音ウクライナ空爆を見て蘇る  
 静岡の友に貰ひし新茶の香五月の若葉見つつ楽しむ

夏日でもいまだ冷たき川風が部屋を吹き抜けエアコン要らず  
 叔母逝きて荒れたる庭の草引くも古き家屋の手入れ難し  
 短冊に記す願ひはただ一つ平穩無事であつて欲しいと  
 七夕に従弟より来る宅配便箱を開く手弾みて滑る  
 川岸の石にカハセミ来て止まる青き背中に涼しさ覚ゆ  
 スマホ手に外国の友とラインする九十歳代半ばの夫  
 川土手に黄の花びらをふるはせて一夜にしぼむ宵待草は  
 闇の中に夫の横顔浮かびいづ手持ち花火の明かりを受けて  
 宵闇に蟋蟀の音を耳にして夏過ぎたるかと氣持安らぐ  
 穂すすきのなびく河原に手をつなぎ遊ぶ子たちを飽きず眺める  
 四年ぶり夕餉の会に集ひたる友と語りて力湧きたり  
 十月の初めに來たる真冬日に急ぎ毛布を納戸より出す  
 目の前の濁れる川で姪孫がすぎを釣るも誰も食せず

## 平和な日常

コロナ禍にめげず成りたる秋野菜洗ひつつ思ふ自然の精氣  
 肥料まき土を耕し冬野菜育てんとしてハウスいと楽しむ  
 いただける通草を炒め思ひをり生垣に摘みし紫の花  
 東京にて昨年産める児を初めての顔見せに來る明日はわが家に  
 野草園に狸々袴の蜜を吸ふアサギマダラの懸命なる姿  
 初霜に大き葉ひろげ虫這はすキャベツ見るのがわれの役割  
 薩摩琵琶の響きに合はせ朗詠の茂吉のひと世会館に聴けり  
 尺八の音にしつとりと朗詠の茂吉のうたを目つむりて聴く  
 写真集『白き山と最上川』に茂吉と家子夫のやり取り温し  
 小平氏のカメラ捕へし最上川の朝たちのぼるうす紅の靄  
 未発表の寂聴の原稿は展示され徳島文学館に非戦を訴ふ  
 二十四回の寒梅忌來たれど未だわれ名作あまた読み終らざる  
 裸木の並木に霧氷のひかれるを眺めつつ行く成人の日の朝  
 スズカケの街路樹の枝は碧空に華やぎあたりモンテ・ディオ通り  
 雉の跡雪につづけるハウスより青あを育つレタス摘みたり

みずさわ  
 水澤タカ子 (山形県)

(県総合運動公園前の通り)

あの世にて語りてをらん寂聴の『老春も愉し』を讀みて愉しむ  
 でこぼこの雪道重き本背負ひバスにて帰る夕灯を見つつ  
 遊び惚けし友等おほよそ旅立てば戦争否とわれは伝へむ  
 山形新聞介し若者に歌つなぐ小島ゆかりの受賞よろこぶ（大岡信賞）  
 山形大の階段教室に居並びてわれら聞きたり歌の添削  
 教壇の小島先生のスカートを若わかしく見き今も目蓋に  
 雪畑に黒土をまき春を待つ川のほとりに霞立つ見え  
 池の端に座禅草咲くしづけさにウクライナ人と悲しみ共に  
 青き空にすつくと立ちあがる連翹に早戻りこよ平和な日常  
 人間将棋ののぼりはためく天童の駅に街路に客を呼びをり  
 武装せる人間の駒は動くなり対局報ずる一手一手に  
 この年の対局者なる藤井聡太に観戦希望者二百倍なり  
 ウクライナの惨状見れば思ひ出づ学校の上への敵機襲来  
 小一の児をつれて帰る畦道に敵機現れ田に伏したりき  
 投函に行くたび匂ふ柵の黄の花まばらいま実をつけて

幼なわれも手伝ひをりし戦時の田植ゑきな粉餅うまし早苗饗さなぶりの味

『もったいない ばあさん』の本幾冊も借りて読み合ふ曾孫とふれあひ

北杜夫の保管の遺骨は今年こそ故郷の寺に納骨したりと（茂吉生誕百四十年記念の年に）

茂吉の遺骨を長く保管の北杜夫の仏壇寄付され記念館に拝す

森敦の「月山の碑」の建つ注連寺にもくもくとして花植うる人  
 即身仏を眼前に拝み聴きをりぬ真如海上人の苦行の一世を

慈恩寺のあまたの仏像拝観し外に出づれば沙羅双樹の花

閉門の慈恩寺の院々しづもりて薬師堂前 空木たわわに  
 戦争に供出させられ梵鐘も燭台もすべて代用品となれり

「平和をつたえる会」の会長九十歳長く語るる命の尊さ

サイパン島に慰霊に行きたる会長の話を聴けば骨身にしむる

舞鶴にて母との面会最後なり長兄はサイパンに二十歳に散りぬ

小中高みな休校となる台風に落果もなくて安堵の朝明け

すぐ近くに地産ワインの醸造所開店なれば早速見に行く

見る目には外国風の室内に地産ワインは特別の味

寒き夜を粘りの強き甚五右エ門の芋煮食べつつ酒酌みかはす  
板長の心こめたる紅葉懐石山里の景浮かべ味はふ  
連れ合ひを亡くしし友の語り聴き静かなる宿に夜は更けゆく  
秋の日にアサギマダラの次つぎに飛び立つを見る南へ南へ  
夏遅くに弱る揚羽を見送ったりその幼虫かころころバセリに  
映像に「スパイの妻」を見てをれば涙こぼるる戦争のむごさ  
最後の作『漆の実のみのる国』を六枚の遺稿に締めくくられき  
集まるを厭ふ此の頃借り来たる『流れる』読み終ふ幸田文氏の  
三度めのワクチン接種にまづ安堵受験を控ふる孫を思ひて

公開の短歌講座を学生と共に受けにき小島先生なつかし

この度の歌集『雪麻呂』歌友より借りきて宵をじつくりと読む

新しき歌集『雪麻呂』に色いろの付箋加はり味はひ深まる

桜まつりの舞鶴山の頂に人間将棋は二年ぶりになる

抽選にもれたる中より五百人が大型テレビに山頂観戦

菓子代はりの桑の実を食べ口染めし子供時代を仲間と語る

沖縄戦をくぐり抜け来し義妹は五十年前をなまなましく語る

父は戦死母と子四人逃げまどひ砂糖黍かじり生きのびたりきと

人の死体を踏み越え踏み越え逃れし日を永遠に忘れじ戦争は

いやと

日中戦争の映像を観て悼みつつ歌に残せる『寒雲』を熟読す

九十七の岡野弘彦もろ手にて茂吉短歌文学賞受けふる

帰宅して小説『月山』読みて思ふ雪山に出遇ふ幽明の世界

漆なめ木食修行を三年余 土中より掘られたる上人のミイラ

奉冠の大日如来の光背に迦陵頻伽を見るは嬉しき

信濃町称名寺に観る「石の鐘」今も吊りあり老任職の意地よ（映画で見た）

原爆展の開会式に孫と来ぬ市長・会長らの手にテープは截らる  
終戦後七十七年の今にしてかの穀倉地帯に爆撃の惨を観る  
ミニ動物園に行きたる曾孫は頬赤く鹿の鳴き声「ピー」と真似る  
公園ゆ曾孫持ち来たる宝物柝の実ひとつ櫟の実あまた  
子どもにも老人にも欲しアドボカシー九十のわれは子に還る  
ごとし  
埼玉より移住しワイナリーを営める一家あり地元の農家の助  
けに

みむらゆきお  
三村幸男 ☆ (埼玉県)

## 穏やか

幼子が足とられたる小ぬか雨先行く母が手を差し伸べて

パソコンの映像見過ぎ霞目に脱力感は身体の不調

風強く顔を打ちたる雨あがり日差し戻りぬ駅前通り

洗顔の水が冷たく目の覚めて庭の菊の花仏壇に供う

遊歩道の風を避けつつウォーキング湖岸の落ち葉踏みしめながら

午前二時パソコンに向かいぼんやりとキーを叩きて考えている

冬タイヤの準備早めにせよと言う自動車整備士空を見上げて

朝日浴び新年迎え読むはがきコロナの文字が今年も消えず

雪降ればオヤジと飲みし雪見酒束の間思い出でて消えたり

雪降りにはしゃぎ声する窓の外可愛くできた目のないダルマ

加湿器は二十四時間フル稼働のどや肌いやす我が家の主役

診察後の感染怖く処方箋宅配に頼み直ちに帰宅す

節分は小さな声で福は内豆拾わずに恵方巻食う

豆まきて季節の変わり目鬼は外今宵もどかし静かな近所

ビルの間のイルミネーションかすみたる雨に打たるる石道歩む

寒空に黄色の帽子列なして半ズボンだよ小学生は  
 コロナ禍に花粉症もありこわごとと外出の不安いつまで続く  
 テレビから高校野球応援の観客の声大きな拍手  
 満開の桜の下に車止め弁当開き優雅に花見  
 震度4夜中の揺れに起き出でてテレビニュースで先ず確認す  
 白ピンク今年のツツジ鮮やかに庭を彩り手入れも楽し  
 電話にて旅立ちしたと涙声聞きて持ち出す友の写真を  
 高齢者運転免許更新時認知反射の検査増えたる  
 試験場に制限速度守りたるわれは帰宅時も法令遵守  
 てんとう虫が藤棚の花に飛び交うを横目に見つつ墓参りする  
 桜散りフロントガラスに花びらが四葉の模様えがき貼りつく  
 雨後の草むら深く雀二羽風に吹かれて飛び出していく  
 焼きそばに青のりまぶしシヨウガなしソースの味で舌をだまらず  
 新築に掛かる表札外国名挨拶なしの三か月過ぐ  
 ステーキにデザート付きの食事にて姪の話は弾む笑みつつ

猛暑日にホットコーヒー客にだすエアコンを強にして冷たい水も  
 自宅用ボトルで冷やすコーヒーにのべつ冷蔵庫へ行って飲む日々  
 猛暑の日洋服布団の乾きよく急ぎて済ませ病院へ行く  
 猛暑日は図書館の椅子に空きは無しマスクの児童スマホでゲーム  
 携帯が振り分けている詐欺メール電話に出るなど消費者センター言う  
 ゲリラ豪雨に傘持たず来てスーパールの駐車場へ走る足を濡らして  
 ガラス戸の外は暑くて簾かけ雲の流れに涼しさ願う  
 庭に出て見るひまわりの蕾三つ葉と葉のあいだ朝日が抜ける  
 蕎麦食べに来たるに定食の寿司選ぶ暖簾くぐりて気まぐれな今日  
 病院は面会できかず着替えもち今日の容態看護師に訊く  
 カラス二羽柿の実残る木へ向かい夕陽遮り飛び立ちてゆく  
 庭囲う塀には蟬の脱け殻が横並びして鳴く声はなし  
 ベランダに這いずり回る九月の蟬暑さのすぎて夕べ穏やか  
 通販の番組見つつ増えるメモ暑さ寒さの変わり目特に  
 庭先の花のしづくを払いのけ蜜吸う蝶々暑さが緩む

やすかわとしこ  
安川敏子☆ (埼玉県)

## 感謝の日々

春以来の改札口に待ち合わせ今日は浮き浮きはすむ足どり  
手を振って笑顔で歩む喜多院へ三密避けて裏道えらび  
江戸の庭枯山水の写真撮りたいこ橋にてゆったり過ごす  
菊科展友は毎年賞を獲る晴れやかな顔八十超えても  
コカリナは木をくりぬいて吹く楽器両指を使い優しくつよく  
コカリナの音色を聞くと里山や幼い頃の景色が浮かぶ  
東御苑広大な地を散策す都会の中に異空間あり  
大手門百人番屋に天守台往時のトップの権威を感じず  
今朝も晴れよいしよよいしよの掛け声に階段上り洗濯物干す  
正月は海鮮山盛り上機嫌好きなのワインに雑煮は少し  
今日も無事変化がないと安堵する新種のコロナに油断は禁物  
今日初日リハビリスタート粉雪に新規の場所は寒いか温いか  
ベッドには信じられない光景が目目を閉じ静かに眠る人居て  
三回目のワクチン終り美容院予約を取って立春うれし  
予測超えコロナ患者は急増すりハビリ通いも欠席にする

この冬は訃報相継ぎ寒さ倍増ひたすら春の陽差し待つ日々  
イベントに初参加して名を知ってわずか五年でその人は逝く  
今日の空に寄せては返す波模様海辺の町にドライブしたい  
口なおし気分なおしと甘い菓子糖質気にして白湯を飲む  
最近身体の不調に気が滅入り医療番組さがしてメモる  
退院し八年通うりハビリに現状維持が目標となる  
隅田川友と二人でさくら観て水上バスにて昔を思う  
散るさくら何故か今年はいとおしいやさしい声も笑顔もありて  
戦時中赤子を背負い小さな手左右に握り逃げ延びき母は  
ここ数年ゴールデンウイークは若者の行楽の様テレビで観るだけ  
股関節病んで知ること痛いこと半歩進むに歯をくいしばる  
現実には戦争内紛何故つづく権力の前に無力な庶民  
コロナ禍にやっと実現コンサートメンバーの熱気ホールにあふる  
感動の拍手は止まずアンコール奏者と聴衆共鳴したり  
全身にオーケストラの楽を浴び生きてる実感五月の空に

むくげ咲く数百の花見事なりピンクとグリーン青空に映え  
『80の壁』ベストセラー長生きの秘けつは気楽に我儘通すこと

季節来ても外出できずしかたなく旅番組を録画に残す

スタッフに陽性者出てリハビリは一週間のお休みになる

若者は猛暑の中に汗まみれ天然水を軽々配達す

麺好きは幼い頃の母の味ちゃぶ台で伸す手打ちのうどん

マスカット両手にあふれ得意顔今日の収穫と次々見せる娘

五年振り共に学んだ友に出合うマスクしてもやさしい眼と声

虫食いの落葉踏みしめゆつくりと自分の足で歩ける幸せ

橋に立ち川をのぞけば寄って来るとどこで見てるか鯉たち多数

十五夜の光あまねく美しく満足する人悩み愁う人

散歩中若い人から声届く「気持ち良いですね」に気分爽やか

細い道通りゆくとき暖かなみそ汁の香に朝餉を思う

「じゅん散歩」昔住んでた日本橋その変貌をテレビで見せらる

おみやげの名物の栗大きすぎどの鍋使うか思案の夕べ

人混みをさけてデパートへ直行しブランドリュックをお揃いにする

今は秋春から夏と手間をかけみごとに揃う懸崖の菊

お出掛けにカイロをはってダウン着て帽子に手袋携帯持つて

ぬくぬくのベッドで思うこのままで長い夜から抜けたくない

クリスマス町の肉屋も今日だけはチキンに追われて一日終る

何故跳ねぬ正月疲れか川の鯉餌に近より静かにバクリ

検診の朝は気合入れ水のみ良き結果を期待しバス停へ急ぐ

霜枯れて悲しい鉢花晴れた日につぼみがポチッとひかえめに出る

寒い夜はおでんかシチューか鍋ものか食材求めスーパーめぐる

少しづつ木々に小さな芽吹きあり観光スポットは若者の列

十七年振りに替えたる冷蔵庫サイズが変わり終日片付け

塗るでなく塗り込むようにと美顔術に挑む今さら無理と思わず

ゆったりと私と同じ足はこび校見上げる仲良し親子

いつの世も戦争犠牲者は一般人家を失い家族との別離

難民と言われ身ひとつ逃れ行く悲しみ怒り何処へ向くか

けたたましつがいの雀巢を守り敵を牽制激しい鳴き声

いっせいに脱皮の如く若葉出て山の古葉の中に映え照る

連休が終れば沖繩は梅雨に入り本土も雨多く春は短い

長身の指揮者の熱演伝わりてメンデルスゾーンの切れ目なき

「作品56」

梅雨晴れに塩辛トンボ柵の上ムギワラトンボは水辺の草に

身長が縮んだ分だけ踏み台を頼って今日はカーテン取替う

朝夕の水やり足らずに菊葉枯れ小さなつぼみもドライフラ

ワーに

寝汗かくいつもの季節めぐり来て寝不足たまり大空眩しい

戦いはいつ迄つづく菌増えてコロナ警報第七波来る

リハビリは夢中にならない頑張らない競争せずに楽しく長く

暑くても若者達はやって来る縁むすび社借着の浴衣で

世界中コロナに脅えその上に戦争つづき生活の危機

夏場所は客席みんな風求め扇パタパタ声援送る

伸びた髪ショートカットして街行けば葦簀張りの中にスイカ

が並ぶ

川に沿うサイクリング道に風切りて若さにまかせ走った遠い日

三月にさくらと浅草一万歩関節痛め「だるまさん」の夏

早朝にゆつたり歩む河岸の道彼岸花咲く仲よく赤白

突然に夏は消え去り寒い朝重ね着をして湯に手を浸す

昨日迄アイスコーヒー美味しくて今日はホットで器を暖める

やまざき たけし  
山崎 猛☆ (埼玉県)

## デジタルの世に

リモートの授業を受ける孫のそばクラスの雰囲気懐かしく聞く  
 朝露に輝く野菊の美しく百舌鳥の鳴き声静けさを裂く  
 飼犬のエミと散歩の十四年共に老いたる躰撫でやる  
 本年も恙なくして順を待つインフルエンザの予防注射に  
 吾が齢で好きな設計する時のCADで作図のマウス軽やか (CAD製図ソフト)  
 霏降り朝の寒気に身を屈めポストへ向かう師走の半ば  
 緊急の電話に慌ててマスクせず行けば周りは全員マスク  
 冬至湯に体の芯まで温む頃睡魔が突然襲い来るなり  
 パソコンの古きデータ見つけ出し当時を偲ぶ思い出数多  
 同級の友の電話はありがたしベッドに臥して当時を偲ぶ  
 早朝に行けば同じく高齢のジロは尾を振り吾を迎える  
 小二の子いつになつたらマスクせず学校に行けるかと吾に問いくる  
 感染者一人出たよと学級が閉鎖になりてリモート授業に  
 幾年かわれの憂いを引きつれて前から後へ続く玉砂利  
 北風に向かいてビルの階段を登りつめたら帽子が飛びぬ

「たけちゃん」と同窓会の挨拶に呼ばれて嬉し少し恥ずかし  
 三人の友失いたる師のもとへ知らずに歌評の返信問いたり  
 かつて父と「大角豆」を通りしとき地名の由来教えられたり  
 年老いて二年開けぬ再開を健常なうちに皆で会いたし  
 戦争とは人と人との殺し合い一刻も早く中止を願う  
 戦争はもうこりこりと言う間にも家族の幸せ引き裂かれゆく  
 南海の地震は百年に一度来るといふテレビの画面に二人釘付け  
 花筏のたりのたりの水面には二羽の家鴨が円を描きぬ  
 呼び捨てで東大卒の官僚とも昔ばなしが出来る場所かな  
 ほっとする連休中のテレビには水難事故の海底の船  
 DNA一致したると言うを聞く同じ悲しみもつ親として  
 朝ごとの犬の散歩に見る家の戸の開かずしてゴウヤは屋根に  
 階段で唇切りてマスクして何食わぬ顔で会に出席  
 庭先の一口トマト紅くしてしばらく見えず主の人影  
 外灯のあわき光に照らされて汗ながし歩み来ぬ赤き自販機に



真夜覚めて浮かぶ言葉をメモるときわが手の震え隠しようなく  
誕生の祝に貰う胡蝶蘭傘寿の吾は歲月偲ぶ

神宮の杜で習いし裏千家若き日のこと今も忘れず

娘より熱中症予防にと貰いたる空調服を犬の散歩に使う

終戦の食糧難に生きしわれ思い出数多焼き芋の味

中秋の名月なりと見上げれば輝く月が大きく浮かぶ

沖縄の友より会いに寄りたいと連絡あれど場所に迷いぬ

竹馬の友わが顔覗き色白になったね都会は水が違うかと言う

銀座にて贅沢に寿司を食べたといいし友はこの世にあらざ

新築の時に植えたるオリブの幹は太くなり実は数多なり

母逝きて同居になりし父の乞うテレビを買ってあげればよかつた

あの頃は父の気持を理解する余裕など無き仕事人間

若くして離れ離れの兄弟のメモが財布の中に見つかる

死ぬ前に一度だけでも会いたいと父の願ひも聞いてやれざり

同窓会を八十過ぎててももう一度開いてほしいと友から電話

一国の長が変わりて株下がり物価上がりて所得上がらざ

今は無き「塩」や「たばこ」の看板は生活苦しき頃の思い出

初積雪降りたてのうちに掻かねばと腰痛の身は少し焦りぬ

パソコンの古き写真の整理には時間の掛かり削除進まず

娘婿社内感染一人出てリモートワークでパソコンの前

同病と言いいいし関口正道氏急逝されてさびしさつもの

コロナ禍に娘の帰省にすぐ来いと言った直後に時期を延期す

プーチンも人の子ゆえに追い詰められネズミの如くなると怖いぞ

一人のみの指導者による作戦に自国の民の民意も聞かず

絵画展の案内今年も届けられ中止でなければ行くと返事す

昨今の寒暖の差は激しくて昨日はコート今日はYシャツ

幾人の同窓生に促され幹事の吾は開催思案す

人智にて宇宙旅行も夢でなくその技術など平和に向けよ

連休が続きくつろぎの間にも他国は命の奪い合いなり

一國が世界を巻き込みこの地球壊すことなど無きこと願う

休日の寝息かすかな娘孫子守り頼まれパソコンを打つ

買い物に休日のスーパーに行きたれば知人の顔もマスクで知れず

誤配達の郵便物を届ければ世間話に時間忘れる

凶弾に倒れし安倍氏その時の無念を思い言う言葉なし

再会の友等と語る会話には君なきことは誰も話さず

師の教え再び三たび思い出で吾を戒め寝返りを打つ

昨今の日記は老の始まりか反省しつつまた繰り返し返す

盆規制今年はかけぬが感染で医療崩壊吾は危惧する

原爆はわが誕生日の翌日に広島、四日後長崎に落つ

広島の世界平和の式典あり他局を見ればプーチンの顔

誕生日来れば翌日総理出て世界平和の式典始まる

ラインにて友の写真の届きたり眼鏡を変えてその写真みる

久しぶり竹馬の友を訪ぬれば三年前に逝きたるといふ

涼風が吹いて過ごせる昨日今日すかさず台風続けて発生

幼稚園の運動会に二人の孫はソーラン節を踊ったという

セピア色の古き写真の祖父を見てわれに似てると孫は言うなり

## 作品から観る「冬雷」の一年

桜井美保子

冬雷の源流は戦前の「現実短歌」でその主宰は田口白汀。私達が毎月手にする「冬雷」の題字は田口白汀の書。

寝付けずに古き冬雷読みおれば時を忘れて朝の鳥鳴く 永光徳子☆  
壁に貼る吉井勇の祇園のうた白川と知る「冬雷」誌上に 大塚照美  
暮れる陽の温もりのあり冬雷の表紙を飾る柿の実みつ

ブレイクあざさ☆

冬雷誌の柿の表紙が胸に沁む古里の色  
色たちははの色 井上鈴子

様々な掲載作品を読むことで小さな発見もあり心の世界が広がる。嶋田画伯の表紙絵は多くの会員に親しまれている。

わが歌集に多くの方が時間さき批評し呉れし感謝の十二月号 三好規子  
前年作者は歌集『蝸牛居』を上梓。その年の十二月号に批評特集が組まれた。

## ■誌上第60回冬雷大会

冬雷の大会特集取つて置き飛び交ふ評に歌の生き来る 黒田江美子

に夫を失いし友 江波戸愛子☆

この歌にある「合同歌集」は『作品年鑑』を指す。冬雷以外の人にも読まれていることを嬉しく思った。

年鑑の完成迄の工程を少しも知らず  
短歌読みある 大野 茜

年鑑の進捗状況は編集長のブログで時々報告がある。作者による作品の自選、原稿の確認なども制作工程の一つ。

月づきに届く冬雷と月刊誌読むを  
しみひと月早し 青木初子

大山編集長は会員のための「冬雷」でありたいと折々に言う。楽しく読んで頂けるよう編集委員一同、頑張っている。

行書体で「冬雷」と書かる田口先生  
の一点一画に筆力こもる 兼目 久

コロナ禍は収まらず三年目に入り、年明けはこれまでより感染力の強い変異株が広がり脅威が表面化した。冬雷では引き続き本部例会を休会。大会も二度目の誌上大会に切り替えた。編集委員の会合もできない状況のなか、毎月充実した「冬雷」を順調に発行。またホームページ上でも地道に「ネット歌会」を続けた。

この年の二月、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まった。その戦いは終結せず長期にわたっている。

『二〇二二作品年鑑合同歌集』の作品に触れつつ冬雷の一年を振り返りたい。

## ■「作品年鑑」・月刊「冬雷」

合同歌集を読んだと言いて涙ぐむ病

ホテルでの開催が無理なので二月号で二度目の誌上大会の特集を組む。前回と同じく全員参加型の大会である。「詠草と相互評」は担当の分担批評、互選による寸評で、その氏名も掲載されているので読み応えのある誌面となった。

## ■戦禍のウクライナ

二月二十四日ロシア軍がウクライナに全面侵攻を開始した。世界を揺るがす新たな問題が生じる。短歌総合誌にも五月号あたりからウクライナ詠が見られるが、冬雷でもこうした作品が目につく。

悪夢の如きキエフの映像流るれば娘は  
辛いとテレビを消しぬ 飯嶋久子☆  
爆撃の瓦礫の映像切り替はりパッと  
現るいつものCM 鈴木やよい

爆撃を受けて破壊された街の姿は悲惨で見るだけで辛い。そうした映像が流されたかと思うと画面はいつもの広告に。大国の暴挙に怒りを憶えてもこの戦争は誰にも止められない。

ウクライナの惨状見れば思ひ出づ

校の上への敵機襲来 水澤タカ子

ウクライナの戦禍のさまに怖えつつ  
幼き日遭ひし空襲思ふ 本間志津子

戦禍の街を報道で知る度に子供の頃、体験した先の大戦の記憶が甦る。

再び「ひまわり」を観る上映会戦さ  
の悲惨さ今と重なる 小嶋知葉☆

太陽も月も見ること叶はずに「ウクライナ人民」避難所に籠る 早坂富美子  
寝床なきウクライナ国の人々の列は  
隣国へ赤子を抱きて 高藤朱美☆

原発を攻撃したるロシア軍まさかありえぬこれが戦争か 中村晴美

戦闘の意識の高さは祖国愛ウクライナはコサツクの国 浜田はるみ☆  
ロシア語からウクライナ語の発音に  
改むるとぞ「キエフ」は「キーウ」

戦争の現実に関心を痛めながら、その思いを歌に込めた作品群である。ロシアとウクライナの戦争を作者それぞれの視点で詠んだ作品をもう少しあげてみたい。

矛先に家族の顔の浮かばぬや戦争進

めるプーチンの心 櫻井一江

独裁の愚に侵されし焼け原に悲しみを  
込めひまはりよ咲け 嶋田正之

平和とは勝ち取るものかウクライナ  
軍事侵攻に知るその脆さ 橘美千代  
独善の正義仕込まるロケット弾ひま  
はり畑を徐々に焼きゆく 山口 嵩

ネヴァ川や玉葱屋根の教会群麗しき国  
持ちて足りぬかプーチン 奥山清子  
日本にて藁人形に呪詛さることなど  
プーチンはつゆ思はざらむ 大山敏夫

## ■祝百歳

会員の山崎英子氏が百歳を迎えられたので七月号で「山崎英子さんのこの一首」を特集した。多くのお祝いの原稿が集まった。作品欄にも関連の歌が見られる。

山崎様七月二十三日百歳の電話のお  
祝ひ告げるも楽し 橋本文子

百歳なる山崎さんの短歌には常に気  
力と情熱のあり 吉田綾子☆  
そして百歳の作者の素晴らしい歌。

久方振りの体操もまだ手も伸びる足

も上がる頑張れと云ふ 山崎英子

### ■コロナ禍の中で

変異株への不安もあるが、自分なりに積極的な一歩を踏み出し、前向きに行動する作品が見え始めた。

定例の公募展開催の通知来て三年ぶりに応募してみる 赤間洋子  
茶の稽古再開したる稽古場に弾む声 聞くと久方ぶりに 大塚亮子  
曾孫らの七五三祝ひテーマにと九月下旬に作品制作 飯塚澄子  
改札口に手を上げ笑まふ友のみゆ馳け寄り握手コロナ忘れて 有泉泰子  
留守をする三日分の線香燻らせて鈴も三回旅が始まる 高橋説子  
新しき四月始まりの手帳買う今年も一年仕事をせむと 高松美智子☆  
トマト茄子の収穫に着る空調服涼しい風が服の中吹く 正田フミエ☆  
これらの作品の明るさと力強さに読者も励まされる。

友の絵を見に浅草へ二年振りにバスに

乗り行く杖を手にして 樗木紀子☆

さだまさし久しぶりのコンサートや梅雨が明けアクアマリンの涼しげなピアスに替えて七月になる 川俣美治子☆

新しく電子ピアノを贖ひぬ省スペースですつきりとする 松居光子  
傘寿過ぎ鍛えられたるソプラノの友の声たのし銀座のホール 立石節子☆  
おしゃれや音楽など生活を楽しむ心の余裕が徐々に生まれてきた。

会へばすぐ話のはづむ仲間なり互ひの健康まづ確かめて 森藤ふみ  
三年ぶり祭り囃子がきこえて赤飯用意す来る孫達に 倉浪ゆみ  
わが街の夏の伝統行事撞舞の今年催さる三年振りに 塚本節子☆  
ワクチン接種などの感染対策が進展し活動再開。祭りなどの行事が復活した。出店の参加メンバー十五となり売り易さ第一に配置を決める 永野雅子☆  
出版社でパソコン開けば納期遅延製

造中止に値上げのメール 中村哲也

商店街のイベント準備で精力的に活動する様子が頼もしい。コロナ禍では仕事の取引先の状況にも厳しい変化がある。仲良しと黙食すれば早くすみ味わう間なくすばやくマスク 笠岡文字子☆

幼孫われの似顔絵口元が描けないといふマスクの下の 西村邦子  
口紅は乾いてしまいいぬ二年間マスクの下は素っぴんのまま 本郷歌子☆  
マスクにて座席に眠りゐる人の閉ぢたる瞼の濃きつけ睫 鈴木計子  
自粛生活から幾分解放されたが、依然としてマスク着用は続く。そのために起こる不向き。化粧をしなくなることもあり、逆に目の化粧を意識する人もある。五年振り共に学んだ友に出合うマスクしててもやさしい眼と声 安川敏子☆

友よりのマスクが届く花模様手縫ひの二枚われ好きな色 吉村昌子  
友の優しい人柄が感じられる二首。

### ■追悼の歌

前年暮れに相次いで亡くなられた小川照子・増澤幸子・野村昭一郎・関口正道の四氏の追悼特集を十二月号に組む。故人を偲ぶ作品の一部を引く。

みまかりし関口正道今いづこ君に見せたやわが故郷を 天野克彦  
生年月日まるで同じと関口さんに大会の度言わるも懐かし 林美智子☆  
亡き母の歌友にして我が先達の小川さん突然逝きてしまひぬ 須藤紀子  
酸素負ひ笑みに送られ大会を去りし姿の永遠に消えたり 松本英夫

### ■家族の歌

毎年の展望記事で「家族詠」という項目でまとめたことはないが、生活の中で一番身近な存在でもある家族を詠んだ作品をあげてみたい。

年末に娘の運転で熱海まで崖縁通り三時間ほど 故池亀節子  
夜更け尚眠れず梅の庭に出づ花を見られぬ娘思いて 糸賀浩子☆

床に就くわが枕もと深夜便にチューナー合はせ息子置き呉る 村上美江

病室に小さく手を振り別れたり残る夫と帰るわれとが 梶尾栄子  
通販の草刈る道具使ふ子の帽子のうごく窓暗くなる 神津早智子  
ポケットはいかなる物にふくらむや孫は三歳ポケット喜ぶ 高田和子  
孫娘大学生となる朝に祖母の贈った真珠が光る 横田晴美☆  
生卵好まぬ夫が半熟は大丈夫と言ふ結婚四十九年目 佐藤幸子  
夕ぐれに夕顔の花ひらく音母と聞きたることの懐し 谷田律子☆  
念願の一時帰宅が許されて車椅子の父仏壇へ向かう 石渡静夫☆

三人が手を伸べたれば吾の手を選びて握り立ち上がる義母 津田美知子  
病床のカートン開くる午後三時熟睡する母起こさず帰る 藤田英輔☆  
あらためて読んでみると胸が熱くなってくる。家族への思いがますますすぐに伝わる愛情いっぱい作品群である。

### ■植物・動物・自然の歌

共に過ごした家族の記憶は心から消えることはない。作者の歩んだ長い歲月。

川浅瀬に水浴びをする棕鳥の群れをつつめるしぶき七色 高橋耀子☆  
蓮の葉の緑ゆたかに立ちあがり花の咲き初む不忍池に 長尾弘子☆  
綿菓子のようにふわりと丸まりてスモークツリーの花は朱鷺色 伊澤直子☆

三者三様の対象の捉え方が実に生き生きとして素晴らしい。さらに個性の感じられる作品をあげてみたい。

吾亦紅振摺月見草この年も種のごぼ  
れて花さく庭に 稲津孝子

鳳仙花の爆ぜて飛び出す黒き種次々

つまむ膨らんだ実を 川上美智子☆

吠ゆるがに冬風狂ふ浜行けば棘あら

あらと浜茄子の這ふ 小林貞子

爽やかな朝キンカンの白い花香りを

放つ青葉の中に 早乙女イチ☆

桜の木年輪かさねやつれくるそれで

も花を咲かす準備す 豊田伸一☆

道端に五月の雨に濡れて咲く紫陽花

の青はや深まれり 牧 恂子

植物に寄せる思いと観察眼の豊かさ。

そして植物の持てる逞しさ。

手水鉢の水のむ雀をカーテンの隙間

より音を立てず見てをり 井上法子

参道に二匹の猫の出迎へてくる偶

然かがみて礼を 戸部田とくえ

稜線の残光ありて草むらに螢のひか

り灯り始める 藤田夏見☆

逆さまに桜の映る池の面鴨の親子の  
八の字描く 山本述子

雨後の草むら深く雀二羽風に吹かれ

て飛び出していく 三村幸男☆

身近に見かける鳥や虫、猫などの動き

を捉えた。ここに作者の心の世界がある。

一枚の田の面は広く水かがみ山陰う

つし月を浮かべる 松中賀代☆

細波に蔵王の御釜は輝きてエメラルド

グリーンの寶石の如 斎藤トミ子☆

海に沿ふ道を走れば富士のやま裾ま

で白き気迫を持てり 齋鹿ミヤコ

大阿蘇の外輪山の断崖に氷柱ふたす

ぢ男滝と女滝 益坂順子

自然の風景に接した時の驚きと感動。

### ■自在な表現・多彩な作品群

これまであげてきた作品の他にも印象

深いものが多くある。冬雷は「自分の歌」

を作ること常々目指している。独自の

表現、世界観を大事にしたい。

好奇心が先づ先に来て苦しまず経鼻

内視鏡受け清清し 赤羽佳年

穂の先を少しひらきて並ぶ筆さばさ  
ばと元の白さを戻す 小林芳枝

地下駅の階を上れば黄色の耀きひと

いる公孫樹の並木 水谷慶一朗

冬鳥師にもらひし種のごぼれつぎモ

ミチ葵の一本の紅 姉川素枝子

たまたまに開くる瓶詰表示せる賞味

期限は父の誕生日 稲田正康

洋服の採寸をしてもらふときメジャ

ーに計れぬ心の窪み 井上菅子

風のきて落葉の動く道を行くおなじ

く吾も風に押されて 古嶋せい子

庭に出ればカラスの威嚇絶え間なし

わが家の主はわれか鴉か 町田勝男

墓群に寄り合ふ小さき石仏は杉の落

葉に温もる如し 井上楨子

かもめかもめ羽田のかもめもうすぐ

飛ぶよ機械の鳥が 佐藤靖子

作品を通して冬雷の一年を記したが、

この他「特別作品」「写真一葉・短歌二首」

も収録されている。本集の一人一人の歌

に輝きを感じた。来年も頑張ろう。

## 《特別作品》

思ひ出に生きて

山崎 英子



何としても百歳までは生きようと思はず永らへました本当に生き過ぎましたと思ひつつ娘との穏やかな日よ今少しとも生きてゐる限りはしつかりしなければ自分に言ひて励ます日々をこんなにも生きられるなんて御一緒に生きたかつた川又様佐藤愛子氏の云ふ「人生はたのしい思ひ出だけ憶えていればいい」と川又様私は今年も花に会へましたさくらは上野と決めてよりあなたとの思ひ出持ちて千鳥ヶ淵よりやはり上野にバスに揺れ湯島天神前を過ぐ浮ぶ「水谷、花柳の婦系図」の場を一人では淋しいとあなたの写真ポケットに歩いてあます咲く花も人の流れも変りはせぬが人混みのなかの一人となりて見上げたるさくらがこんなに白かつたなんて思ひながらにあなたと歩いた同じ道一重山吹なつかしくしばし佇みました噴水を遠く眺めて帰ります疲れは休む傍の石にさくらの山降り来たりて御馳走になつた鰻の美味だつたこと来年は私が御馳走します約束破りあなたは遠くに旅行お芝居音楽会絵画鑑賞といつも御一緒に楽しみました

藤山寛美のお芝居は泣かされ笑はされ本当に面白かつたです沢山の楽しい思ひ出持つ幸せを味はひながらひと日ひと日を大切に何ごとも億劫となり籠り居にこれが老といふものと老も老百歳なんて思へずに生きてをります暢気者は私

## 《特別作品・今月の30首》

上信越の山旅

益坂 順子



七人の友等と目指すこのたびの遠征登山五峰と決めて発ちてより乗り継ぎ多く辛うじて那須町の宿「いこい」に着けり検温と手洗ひマスク会話なく時間厳しきコロナ禍の中ゴンドラの駅よりザラ場その後岩場の続く茶臼岳ちやうすに挑む  
\*四首〜七首は那須岳  
山頂の祠に感謝の手を合はせ硫黄の臭ひさへも嬉しく幾つものピーク続きて目的の朝日岳に紅葉の濃し快晴の峰の茶屋にてひと休み学童過ぎゆく引率されて覚悟して早立ちしたるけふの山会津の名峰駒ヶ岳めざす  
\*八首〜十二首は会津駒ヶ岳  
喘ぎゆく急攀終はり木道の延びゆく辺り草もみぢせり頂の標柱に触れ称へあひ重ねて笑めり富士山見ゆと

駒ヶ岳池に逆さに映りて美しと思ふ小屋のベンチに奥只見ダム湖を巡る遊覧船見つつ宿への長き道のり三日目の今宵の宿はログハウス温泉付きの山菜尽し

\*十三首〜十八首は越後駒ヶ岳

三時起き四時出発の計画に登ると決めし越後駒ヶ岳朝より雨降りしきる宿を発ちヘッドランプに頼る枝折峠岩に付く黄のペンキの目印を辿り行く先駒ノ小屋見ゆ標柱の煙る越後駒ヶ岳ひたすら歩く十時間あまり下山時の僅かなゆとり青き実の数多付きをり沢蓋木さはやたぎには湿原に彩り添ふる草もみぢ整備されたる木道つづく

\*十九首〜二十四首は平ヶ岳

平ヶ岳の名所を見よと勧めらる先づたまご石つぎに光蘇美味さうな匂ひの満ちる下山口足早となる疲れなきごと下山後のテントの中に招かる興味津津熊肉の汁初めて熊汁の味しみじみと男の料理味はひてをりあの熊の肉と思へぬ柔らかさ口中満たす感觸優しとりあへず四峰踏破終へたるを「ホテル湯元」に祝杯かはす移動日と決めたるひと日酒蔵を巡り試飲す越後ゆきくら紅き実の御前橋ナナカマド紅葉の中のとりのりの紅

\*二十七首〜二十八首は巻機山

草もみぢ広がる丘へ至る道ニセ巻機山まきはたから本峰までの奥深き上信越の山歩き紅葉三味の日び思ひをり遠征の最後の夜は其ぞれに一人寛ぐビジネスホテル

行つたり来たり

早坂富美子



冷え著き朝の家々軒先に並び連なる氷柱あまた庭木々の雪を蹴散らし雀らの何啄むや動きの忙し二月十日東京二十三区に大雪の警報出づる予報もありぬ東京に雪は降らずと信じぬし少女のころの一途さを恋ふ父逝きし昭和二十年十二月想ひ出ださせ雪しまく降る雨戸練り障子戸越しにしばし聞く夜半に雪降るかそかなる音食後歯を磨き終へたる夫の言ふ舌の擦り傷じくじく疼くを治療にて削られたる歯の舌に触れその傷なかなか癒えざる夫よ処方箋にて出されたる軟膏日に三度患部に塗れとふ医師の指示受く一月余精密検査受くる夫酷暑の続き疲れはせぬか  
「悪性の舌癌です」と告知され夫は黙して視線を逸らす  
「家系には癌の患者はみないのに」夫の言葉に主治医苦笑ひす入院日七月五日に決まりたる日用品など急ぎ準備す一人居の淋しさなどは言ふまじき今日入院の夫を見送る一度だに入院歴のなき夫は慌てず騒がず言葉少なに病院に夫を送りて戻りたる厨に立てど何も手付かず看護婦の経験持つ友手術日をわれに付き添ひくると約す七月七日夫の手術日常よりも早目に行かむ夫が待つて

病院の心遣ひの有り難や休憩室を準備しくるる  
車椅子に乗りて小さく手を振りて八時間余の手術室に入る  
手術室に入りて五時間予定まで残り三時間夫よ頑張れ  
八時間予定の時は過ぎたるにまだ連絡なにも入らず  
友と二人休憩室にこもりみてあと幾時間もう日が暮れる  
コロナ禍にて面会ならず病院の受付けあたりを行ったり来たり  
予定時間二時間オーバーなりし時集中治療室へと連絡のあり  
二時間の遅れを言ひて終了を知らず主治医に深く御辞儀す  
麻酔いまだきれず深々眠りある夫よゆつくり「おやすみなさい」  
軒先に並び連なる氷柱の朝日に染まりまばゆく光る  
茂吉記念館に向かふ峠のをちこちに春を告ぐるや万作の花  
雪囲ひ解かれたる鉢のクリスマスローズ花芽を凜と抱き立ちあつ

### 日々の断片

川上美智子☆



薄紅のカワラナデシコ数本が草地に咲いてほんのり明し  
かかと挙げ顔出すごとく茅の間に膝丈に咲くカワラナデシコ  
訪ね来るメジロのつがいに安らぐも梅の満開早も過ぎたり  
来春の朝ドラモデルにバイカオウレンをこよなく愛でし牧野富太郎  
県民に牧野博士のドラマ化はコロナ禍凌ぐ早春の吉報

恒例の盆梅展に誘われて料亭得月楼に友と集いぬ

得月楼の赤い大のれん潜り来て明治三年創業の歴史を偲ぶ  
育てたる二百余鉢の盆梅は樹齢二百年から三百年とぞ  
いくそたび剪定の跡ぼこぼこ幹に盛り上がる梅の老木

「陽暉楼」の舞台となりし得月楼の座敷に食ぶる梅見弁当  
凜として寒中に咲く水仙に我の背筋もスツと伸びたり

年毎に越冬燕の数増えて不安の過る気候変動  
運転手はバックミラーを見つつ待つ杖付き走る乗客一人

息切らし乗車の媪は礼を言い電車は出発車内の和む  
庭草はひと雨ごとに生え茂り草引く我は追われるばかり

草引きの作業は何時も蚊に刺され私の仕事も堂々巡り  
公園に子等の声無き春休みコロナに怯え静まる真昼

さつま芋の収穫終えたる山畑は赤土頭に季節は変わる  
置き去りにされたる如く山畑に待ちくたびれて赤い耕耘機

低木に絡み可憐に咲きたるセンニンソウは有毒植物  
窓の辺を燕は頻りに行き来する発つ日近いか家族を連れて

青森の観光リング園と名乗りたる電話は旅に立ち寄りし店  
コロナ禍に激減したる観光客リングが売れぬと店主の電話

ひとしきり眠れぬ辛さ訴えて咳くような友の電話は  
築きたるはずの繋がり危うくて募るさみしさ雨降り止まず

わだかまり引かず我を鎮めんとヨーガの瞑想しばし続ける  
老いたるも独り身通す人生を楽しかったと媪は語る

独身の気楽さ語り苦勞は言わず媪淡々と八十二歳

次の世もあらば迷わず独身とためらわず言いくすつと笑う  
カーテンを開ければ夜明けの雨上がり大き虹立ち我を待ちたる

### 残りたるもの

西村 邦子



畦道を夏草ゆらす歓声が川まで駆け行く一直線に

彼岸花摘まぬやうにと教へられ大人になりて知る本当のわけ

セーターのひつつき蟲を取りくれし屈める祖母が記憶にとどまる

ルックチョコ祖母が筆筒に買ひくれしレトロな店内

宿題の自由課題に裏庭のカンナのちぎり絵夏色かさぬ

五年生の文集作りに熱心なる転任され来し担任との出会い

冷凍庫の瓶に残れる山椒は母の佃煮春の味する

何気ない叔父の仕草と横顔に記憶の中の父を探しぬ

最後なる三年前の叔父の筆ちちの写真の横に並べぬ

筆立ての父の刻字の「明鏡止水」指でなぞりき意味も分からず

教はりし「明鏡止水」の四文字はまだ難しき中学生に

旅先で寺社の扁額いつまでも一人眺めぬし父の後姿

瓶にさす固き蕾の寒椿くれなゐゆるむおちよぼ口にと

窓に寄る木瓜の蕾が膨らみて色あらはれぬ昨日より今日

梯子立て薔薇のアーチにペンキ塗る夫を見れば風通りぬく

六甲山夫に続く七曲り熊笹抜ければ頂近し  
近くにて遠くになりぬ六人の孫らそれぞれ個性持ちきて  
この進路反対したる日も遠く夫と吾の時はゆつくり  
習ひ事一つづつ増え一つづつ七十代に残りたるもの

### 夏座布団

梶尾 栄子



いちどきに喜び弾ける如くにて庭に咲きたる花のいろいろ  
花びらを散らす雨中を悠々と男の子楽しむごとく歩ける

束の間のにぎはひ見せし加古川の長きつつみの今は葉桜  
 ひたひたと足音迫りポニーテールを揺らして我を追ひ越し行きぬ  
 早朝に畑仕事を終へしのち微睡むことあり新聞読みぬて  
 仕事にて留守の娘の物置きにトマトピーマン置きて帰り来  
 見慣れたるアインシュタインの写真あり彼が弾きにしピアノの上  
 庭園のナンデヤモンデヤの花咲くを心に写す暫しのあひだ  
 多羅葉に角張る文字の書ける見ゆ葉書としても可なりとガイドは  
 うす紅の蓮の花消ゆため池にパネルの並ぶ埋め立てられて  
 飛行機のごとき両翼ある農機肥料撒き終ふ田を往復し  
 直線に整地されたる水張田に小さく映る田毎の月は  
 贅肉無し筋肉隆々指導者の身体は老いの目にも眩し  
 継続は力と知るも体幹を鍛へる運動意気込み窄む  
 自転車の前と後に子に乗せて渋滞のなか泳ぐがに母は  
 ジーパンの足を開きて眠りある電車の女子まきかく無防備に  
 吾を呼べる香りに幾度出る庭に闇の中なる夕顔の白  
 人知れず夜に開ける夕顔のゆかしさわれもかくありたしと  
 フォレタの歌謡コーラス聞くゆふべ何の涙かこみ上げ来たる  
 物臭になりゆく故か暑さ故か髪をきつぱり切りたり爽快  
 真つ二つに日本列島別れる今日の天気図雨と晴とに  
 候補者の声裏返るまでの熱弁も暑き路上に反応少なし  
 家族にも言葉に氣をつけ愚痴言はず他人のごときと思ふさみしき  
 腰痛を和らげる記事切り抜きて嫁にと思ふも会へずに捨てぬ  
 法要に使ひし夏の座布団を雲無き下に並べ干しるる

すずやかな夏座布団の青褪せず半世紀前の嫁入道具  
 信号に停まりてうれし街路樹の陰に息つくほんの暫しを  
 休日のおしたの空を散歩するごとく浮かべる熱気球ひとつ  
 この厚き雲を抜ければ青空のあるを信じて雲雀とわれと  
 水中にゆらゆら揺れてみし早苗根づきて日毎遅しくなる

繋がり

川俣美治子☆



梅雨明けてなお梅雨めける雨続くトマトの花が小刻みに揺る  
 何しても気の晴れぬ日々雨のせい日がない日外ばかり眺む  
 猛暑日の父の命日墓参りあの日と同じねと話しかけてみる  
 孫が持つ小さな提灯迎え盆そつとそつと歩く神妙な顔  
 孫たちが来るとの知らせに買物に出でてあれこれとかごは山盛り  
 二年ぶりの家族写真の孫たちはピースサインで大きな笑顔  
 久々に顔を合わせて孫たちと話せる嬉しさじつと目を見る  
 盆終り夫が庭で草取りすまた二人だけの静かな生活  
 エアコンのききたる部屋にラーメンを啜れば熱い涼しいの屋  
 くるくると氷入れたるグラス回すすずしさ一瞬真夏日の午後  
 妹と幼き頃の話するなぜか記憶が違っておかし  
 庭に咲く千日紅は鮮やかで丸く紅き花揺れて愛らし

スーパーの入口に緑の足止めてバツタが動かず猛暑日の屋  
 弓を持ち練習に行く後姿日ざしは強く今日も真夏日  
 中国語ドラマの中に二つ三つ単語聞きとり得たる喜び  
 世の中の異常な変化見聞きしてただ漠然と行く末憂う  
 十八歳あの頃いつも一緒に居てただ楽しくてその友と今も  
 氣がつけば結婚式が来年にてしみじみ横にいる夫の顔見る  
 サングラス日ざし眩しくかけてみる別人のようで自撮もしてみる  
 取りこみて洗濯物をたたむ時夏の暑さの手に伝わりぬ  
 庭に立つ紫蘇の葉雨に濡れはじめさらに青々大きく揺れる  
 プランターの枝豆五つ膨らみてせつせと水をやり収穫間近  
 氣をつけていたのに腕に日焼け痕なかなか消えず夏の名ごりが  
 初めての花柄シャツ着て友と会う似合ってるわの言葉に笑みぬ  
 ありがとうと今日は何回言えたかと寝る時思う最近の私  
 夜になり北の窓から入る風日中とは違うすずしさ運ぶ  
 結婚式の母と私の写真見る緊張の顔がとても似通う  
 母からの譲り物なるネックレス三年経ちてもまだ使い得ず  
 洗濯物を干しつつ雲を見上げれば青空高くなりたる氣のす  
 空高くとんぼ飛び交う夕暮れに暑さは残り八月終る

《スマホの写真一葉・短歌二首》

大附みかん山

大山 敏夫

さきたまを北限として大附のみかん山に照る正月のひかり  
ときどきの物を実らせ福来みかんカボスが盛りの一月三日



薪

須藤 紀子

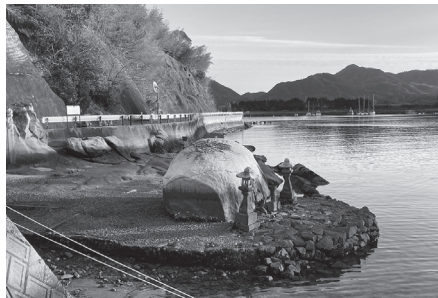
倒されてやがて焚き木となる榎の小枝はなほも天を指しをり  
薪となり焚かれる時にそれぞれの香り立つらむ松檜梅枇杷



鷺島磨崖和霊石地藏

藤田 夏見☆

七百年波打ち際に坐し賜う殺生  
すなと磨崖和霊石地藏  
塩田の跡に広がる蜜柑園漁せぬ  
島を聞きつつ摘めり



大野 茜

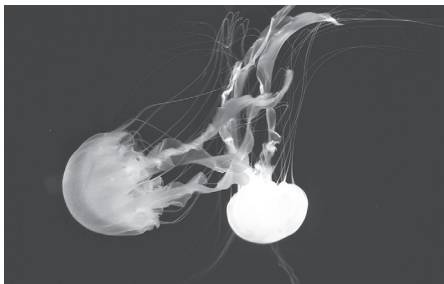
デルタ株幸ひ去りて冬花火熱海の海の闇も明るむ  
朝の陽の輝く海は波たちて彼方に霞む火の山大島



クラゲ

鈴木やよい

糸のごとたゆたふ触手が絡めども  
二匹のクラゲはするすると離る  
暗闇でクラゲ見つめて時過ごせば  
ゆるき拍動わが身に残る



大観音

町田 勝男

天気予報の仙台画面に遠白く観音在せりわが家の守護神  
早朝のさんぽ還りの観音坂 朝のひかりにかんばせは笑む



山口 高

薄むら分け吹く風は強まりて  
雲千切れとぶ蒼き空背に  
移ろへる雲影うつす草のはら  
猛暑日なれど秋の漂ふ



通学路

赤羽 佳年

家の前通学路にて男子女子共に漕ぎ下るエネルギー羨し  
自転車に坂下りくる通学生始業時間に間に合ふのだらうか





〈今後の為に参加された皆様のご意見を、このアンケートに〉

■この一冊を読まれて、強く印象に残った作者・作品はございましたか？ ありましたら、その作者名・そしてその作品を一首あげて下さい。スペースの事情もありますので、作者名お二人まで。また、作品の後の余白に感想も短くお書き下さい。\*但し「選者」は除外願います。

(ここで切り取って下さい)

●作者名【  
【作品】

●作者名【  
【作品】

■この一冊の中に「今月の30首」の一年分が掲載されていますが、この特別作品をご覧になり、最も印象に残った作者を教えてください。その作品一首をあげて、感想などお書き下さい。

●作者名

】

【作品

■アンケートにお応え戴いた貴方様のお名前を下にお願いします。

\*このアンケートの締切りは九月十日。左記へ

〒23350022 横浜市磯子区汐見台二・二・二六〇八

桜井美保子 宛

有難うございました。〈作品年鑑 刊行委員会〉

あとがき

会員の皆様の全作品を年ごとに整理して纏め、簡易保存するのも目的の一つだったが、作者自選も含め、その全作品掲載の合同歌集を制作したことは、さらに大きな成果であると考えている。今年はその六冊目となる。

作り方は昨年版を基本的に引き継ぎながら、自選作品欄の充実を目指し、30首から45首を増やした。そして自選から漏れた他の作品を9ポイント活字に組んで繋げた。これで完全なる年間全作品掲載の合同歌集が出来あがる事になる。

昨年同様に、一年間出詠皆勤でありながらこの一月に逝去された池亀節子さんの作品を編集室にて選歌して掲載させて頂いた。という事で今年の参加者は一〇一名+故人一名の一〇二である。参加者が百名を下回ったときにこの企画を終了させようという申し合わせもあるので、この参加者数は、来年七冊目の継続刊行への可能性を残した。編集室では、来年度のデータ整理を毎月積み上げて、すでに半年分を終えている。

今年もまた初めて参加してくださった方もあれば、入れ替わりに見合わせる方もあった。この一巻に寄せる思いは、それぞれであるが、どうにか予定通り刊行にこぎつけたことを喜びたい。参加者より回収予定のアンケートも組み入れたが、この企画は本年版をもってほぼ完成の姿に達したので、今後へ向けての希望などのご意見の欄を除いた。題名も「自選」を削除してシンプルに「合同歌集」とした。

今年も小林芳枝、桜井美保子両氏と綿密に連携して制作に当った。主の役割分担は事務・会計全体を小林。校正関係を桜井。企画・テキスト制作・組版関係を大山が担当し、若い編集委員の方の知恵もお借りした。

来年はどんな姿になっているだろうか。日日年年激動の「冬雷」である。

〈大山敏夫〉

## 冬雷 二〇二二 作品年鑑・合同歌集

2023年7月23日印刷発行

編集発行人 大山敏夫

データ制作 冬雷編集室

印刷・製本 (株) ローヤル企画

発行所 冬雷短歌会

350-1142 川越市藤間 540-2-207

事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409

電話 03-3604-3655

振替 00140-8-92027

ホームページ <http://www.tourai.jp>

頒価 1000円